Welcome to Anotherworld

プラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ａｎｏｔｈｅｒｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ０２２８Ｎ

【作者名】
プラム

【あらすじ】
トラックに撥ねられそうになった子供を庇った男（イケメン）を俺が庇った！
そのせいで神を怒らせた俺は罰を受けることに！？
「えっ？転生？マジ？」
ひょんなことから異世界に送られた俺が頑張る話。

※この物語は作者の妄想から生まれたものです。

プロローグ「お前誰？」　「神だ」　「……マジ？」（前書き）

どうも。

他の作品がうまくいかず、息抜きとして投稿しました。

この物語は作者の妄想です。

進め方も無理やりなところがあるのでお気をつけてください。

プロローグ「お前誰？」　「神だ」　「……マジ？」

「やべぇ！遅刻する！」

俺の名前は桜井（さくらい）　悠斗（ゆうと）

現在二十歳。大学生だ。

高校3年の時、将来の夢もなく、やりたいことがない俺は

「大学行けば、やりたいこと見つかるんじゃね？」

と思い、なんとなく入った大学は、早くも2年の月日が過ぎようとしていた。

二十歳になった今でも、将来の夢どころか、やりたいことすらみつけていない。

強いて言うなら一日中部屋でゲームをして過ごしたいが…

とにかく！

今は先のことを考えるよりも、今現在をどうするか考えないと。

この時間じゃ歩いてたら間に合わない。

走らないと…

そう思い、俺が交差点を渡ろうとすると…

「キャァァァ！」

目の前にトラックにひかれそうな子供が…。

…嫌なフラグが発生した気がする。

でも見過ごすわけにはいかない。

そう思い、俺は子供に向かって駆け出す。

―間に合うか！？

だが…

「どりゃゃゃあ！！」

「……は？」

俺と同じぐらいの歳の男（イケメン）が俺を追い抜き、子供を車道の外へと押し出した。

あれー？

俺、むしかして無駄骨？

まぁ子供が助かったんだからいいか。

俺は安心し、思わず気を緩めた。

しかし、

「あっ…」

―ププゥゥゥ

おぉい！？

今度は俺がピンチ！！

さっきの男（イケメン）は！？

あ…、俺の横で倒れていらっしゃる。

図にすると…

イケメン

俺　→

トラック

（「□」；）！！

俺死ぬ！！

早く逃げないと！

「あっ…」

だが、現実は甘くないらしい。

次の瞬間、俺の身体は宙を舞っていた。

これは…、死んだな…。

母よ、父よ。

先立つ息子の親不孝をどうかお許しください。

天国で待ってます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

どのくらい経っただろう?そう思っていると

「―い、起きろ。
聞こ―?　おい―」

ん?

誰かが俺に話しかけている。

とりあえず目を開けてみると…

「おっ!どうやら気がついたみてぇだな。」

……。

!!!

「ぬわぁぁぁぁぁ!?」

「ぐべらぁっ！？」

ハァハァ…、誰だかわからないが、思わず顔面を殴り飛ばしてしまった。

でも仕方ないだろう？

目が覚めたら目の前に知らない男の顔があるんだぜ？

しかし、あんなのがいるってことは、ここは天国じゃなく地獄か？

そんな悪いことした覚えないんだけどなぁ？

周りを見回すと、辺りは一面真っ白。

壁がまったく見えない。

「本当に…どこだ此処？」

「知りたいか？」

「うわっ！？」

「ったく…、目ぇ覚ましたらと思ったら、いきなり殴り飛ばしやがって。

お前の世界じゃ出会い頭に人の顔面を殴るのが挨拶なのか？」

「いや、そういうわけじゃ―って！

誰だ！？お前！？」

「神。」

「……は？」

「神。」

「…すまん、もう一回。」

「だから神。」

「…髪？」

「だ　か　ら！神だって言ってんだろ？
神。英語でＧＯＤ。」

……。

「うわぁぁぁぁ！？
変態だぁぁぁぁ！！」

そういい俺は全力でその場から逃げ出す。

「あっ！こら！待ちやがれ！！」

そういい神（自称）が追い掛けてくる。

「来るんじゃねぇぇ！！」

「テメェーが逃げっからだろうが！！」

「ギャァァァ！！」

「だから、逃げんなぁ！」

・～・～・～・～・～

「ったく手間どらせやがって…」

「ハァハァ…、お前…どんな…体力…してんだ…」

「神舐めんな。」

どこまでも広がるこの場所を逃げ回って３０分。

俺の体力は限界を越え、この通り力尽きたというのに、目の前の男は息ひとつ乱していない。

「さて、悪ガキも捕まえたことだし、本題に入るか。」

「誰が悪ガキだ。」

「出会い頭に人殴る奴がいい子なわけねぇだろ。」

む…。反論できない。

「とりあえず、今のお前の状況を説明してやる。」

そうだ。

俺は確かにトラックに撥ねられたはずだ。

だが、俺はこうして…

「結論から言えば、お前は死んだ。」

やっぱり…。

じゃあ此処は天国か？

「違う。此処はお前のいた世界でもなく、天国でもない。まぁ天国ってのは近いかもしんねぇがな。」

「……？」

「此処は天界。
時間とも空間とも世界から切り離れた世界。」

つまり…

「精神と時の部屋的なもんか？」

「そういう解釈でも構わねぇよ。」

へぇ、そんな世界想像だけかと思ってた。

まさか本当にあるとは。

「そして俺はこの世界を統べる者。つまり神だ。」

それだけは信じらんないんだけど…

こんな見た目チャラチャラして適当そうな奴が神だなんて…

「ん？なんだ？その疑いの眼差しは？
いいぜ。だったら見せてやるよ。」

「なにをだよ？」

「神の力ってのをよ。」

「はぁ？いったいなにするつもり『喋るな』―！？」

な…！？

「―――――――！！」

「喋れねぇだろ？
俺の言霊でお前の行動に制限をかけた。
こんなのは力の一部だ。
まだまだ凄いのもあるが、とりあえずこんなもんでいいだろ？」

「――――――！！」

「っと、忘れてた。
わりぃわりぃ。」

そう言い神が指を鳴らす。
すると

「しゃ、喋れる！」

「どうだぁ？これで信じただろ？」

「ああ、信じるよ。
ただ…」

「ただ？」

「なんで俺が逃げたとき、言霊(それ)使わなかったんだ？」

「……あっ。」

「もしかして…忘れてた？」

「……。」

「図星か！？」

「コホン、それじゃ次の話だが…」

スルーされた！？

何もなかったように話をもどしやがった！

「お前、余計なことしてくれたな。」

いきなり声のトーンが変わった。

声には怒りも混じっている。

「な、なんのことだよ。」

その急激な変化に俺は戸惑いつつも会話を続ける。

「お前、どうやって死んだんだ？」

「どうしてって、だからトラックに撥ねられて…」

「なんで撥ねられたんだ?」

「なんで?えっと、子供を助けようとして…」

「それで?」

「代わりにイケメンが子供助けて、逃げようとしたら間に合わなかった…?」

「その通りだ。」

「これがどこが余計なことなんだよ?」

「…お前の隣にいた男、どう思った?」

「いや、凄いイケメンだなぁって…」

「そう、そうなんだよ。
あの男はお前と違い、
ルックスよし、性格よし、勉強もスポーツも完璧な男なんだ。」

「うるせぇよ!」

ええ、確かにそうですよ!俺のルックスはよくて中の下。

勉強もスポーツも下手ということもないが上手くもない。
つまりは普通だってこと。いいんだよ、普通で！
普通が一番だ！

「本来なら死ぬのはあの男のはずだった。」

は……？

「いやいやいや、実際死んでんの俺だし。」

「本来ならって言ってんだろ。
あの時死ぬのはお前じゃなく、あいつだった。
此処に呼ばれるのもあいつだった。」

「じゃあ、どうして俺は死んだんだよ！？」

「お前のせいだよ。」

「なっ！？」

「本当はあの時お前はあの事故に関わらないで、いつも通りの日常を過ごすはずだった。
だが、お前は事故に介入してしまった。
そのせいで本来死ぬはずだった男が生き、死ぬはずのないお前が死んだ。」

「だ、だったら別に余計なことなんかしてねぇじゃねぇか！？
俺の命であの男が救われたんだろ！？

人助けたんだから、むしろ褒められるべきだろ！！」

「確かにお前はあの男を救った。
だがそのせいで俺の計画が狂ったんだよ。」

「計画……？」

「ああ。お前、転生トラックって知ってっか？」

転生トラック？

確か二次創作とかでよくあるやつだった気が…

「あの男にはそれをしてもらうために死んでもらう予定だった。」

なっ！？

「ど、どういうことだよ！？」

「言葉の通りだよ。
あの男には俺の暇潰しのために転生して異世界に行ってもらうつもりだった。

ついでに言うと、あの状況を用意したのは俺だ。」

「お前！？

じゃあなにか!?お前は自分の暇潰しだけで人を殺そうとしたのか!?

俺が死んだのも結局はお前が原因なのか!?」

今まで出したことのないような声が出た。

腹の中は今にも怒りで爆発しそうだ。

「ああ。」

「そんなことが許されると思ってんのか!?」

「ああ。」

俺の中で何かが切れる音がした。

次の瞬間には俺は拳を振り返っていた。

「てめぇぇぇぇ!!」

だが

「『動くな』」

「くっ!?」

言霊が俺を縛り、動くことができない。

「少しは落ち着け。

結局あの男は死んでねぇだろ。」

「代わりに俺が死んでんじゃねぇか！！」

「うるせぇなぁ…。
『黙れ』」

「―！」

くそ、今度は口も動かせなくなった。

「悪いがそのままで聞いてもらう。
…お前にはあの男の代わりに異世界に転生してもらう。」

！？
俺が…異世界に？

「ああ。だが、ただでは行かせねぇ。
俺の計画を狂わした罰だ。お前の大切なもんをいくつか貰っていく。
」

なっ！？

ふざけんじゃねぇ！？
なんで殺されたのに罰まで受けないといけないんだ！？

「嫌みてぇだな。」

当たり前だ！

「でも考えてみろ。
違う世界とはいえ、生き返れるんだぞ？
少々罰があっても、普通は嬉しいだろ？」

それは……

「まぁ異論があっても、これは決定事項なんだけどな。」

そう言い、神は俺の前に右手をかざす。

すると俺の身体は光に包まれていく。

待て！
いったいどんな世界に送られんだ！？

「それは行ってからのお楽しみだ。

そろそろ時間か…」

神は両手を広げる。

そしてその顔に笑みを浮かべて

「さぁ青年よ！

異世界への扉は開かれた。

新たなる生をどう過ごすかはお前の自由だ！

だが簡単に死ぬのだけは止めてくれ。

せいぜい俺を楽しませてくれ！！」

「――――！！」

「ん？最後だ。お前の言葉、聞いてやるぜ？」

先ほどと同じように指を鳴らす。

そして…

「待ってろ！

てめぇだけは、俺が！

俺がぶっ殺してやる！！」

「…はは、ははは、はーはっはっは！

神を殺すか！

いいぜ。待っててやる！

いつか力を付けて俺に挑んで来い！」

「俺を生き返えさせたこと、いつか後悔させて――」

言い終わる前に、俺の視界はすべて光で包まれた。

ｓｉｄｅ　神？

行ったか…

最初あいつが来た時は、俺の計画がすべて台無しになったと思ったが…

あの男（イケメン）よりいい人材かもしんねぇ。

まぁどんな奴であろうと俺を楽しませてくれればかまわない。

あいつには転生ったけど、憑依った方が正しいかもしれない。

罰にしたって、そっちの方が楽しめそうだったからやっただけだし。

まぁあいつからしたら少々重すぎたかもしんねぇけどな。

それに

「俺を殺すか…」

まさか神に喧嘩売るとわな。

あの男がどうなるか俄然興味が出てきた。

「楽しみだ。」

そう言い神を名乗る男は笑う。

その笑顔はまるで新しい玩具を貰った子供のように…

ｓｉｄｅ　神　ｅｎｄ

～・～・～・～・～・～・

……俺はいったい…。

そうだ…確か神の野郎に…

じゃあここが異世界…？

「おっ！目が覚めたか？」

……。

！？

「またかぁぁぁぁ！？」

「ぐべらぁっ！？」

こうして俺の異世界での新たな人生は幕を開けた。

to be continue?

プロローグ「お前誰？」　「神だ」　「……マジ？」（後書き）

どうでしたでしょうか？

こんな感じで行きたいと思います。

次回の更新は早いと思うのでよろしくお願いします。

評価・感想など面倒でなければぜひお願いします。

第1話「展開早くね？」　「……気のせいだ。」（前書き）

調子がいいので第1話投稿しました。

この話だけで数ヶ月時が進みます。

展開へたくそですが、気にしないという方はそのままお進みください。

第1話「展開早くね？」　「……気のせいだ。」

「で？
俺はどうしてこんな所で眠ってたんだ？」

「お前…、人殴っといて最初に言うことがそれかよ…？」

「不可抗力だ。」

俺が目覚めた後、今の状況を確認するため、目の前の赤毛の男に聞いてみることにした。

「知るかよ。

俺が歩いてたらいきなり目の前が光って、気がついたらお前がいたんだ。
お前こそいったいなんでこんな所に転移してきたんだ？」

ん～？

やっぱり神の仕業か？

でも転生っていったら、赤ん坊からやり直すもんだと思ってたんだけどな…

「おい、どうした？
いきなり黙り込んで？」

「ああ、スマン。
ちょっと考え事を。

悪い、俺にもどうしてここにいるかはよくわからないんだ。」

まさか「神のせいで異世界からやって来ちゃいました～。」とか言えるはずがない。

「そっか…。
お前、これから帰るあてはあんのか？」

あるはずがない。
今この世界に来たばかりの俺に家は用意されているわけがないし、神がそんな気の利くことをするはずがない。

「その様子じゃねぇみたいだな。

なら俺と一緒に来るか？」

は？

「…いいのか？
自分で言うのもなんだが、こんな素性の知らないどころか、怪しさ満点の男を助けるなんて？」

「構わねぇよ。
それにお前みたいなガキを一人で置いてくって方が無理な話だぜ。」

「ガキ？」

そういえば転生したんだっけ？

だとしたら…

自分の身体を確認する。

腕……短い。

足……短い。

肌……ぷにぷにでツルツル。

視線もなんだか低い。

待て待て待て、まずは落ち着け。
まだ終わったわけじゃない。
最後まで確かめないと…

「なんか鏡あるか…？」

「ん？鏡？鏡はねぇけど、ほら、そこに。」

男は近くにあった湖を指差す。
俺は急いで湖に駆け出す。
その水面に映るのは…

まだ幼い柔らかい顔。

日本人じゃまずあり得ない綺麗な金髪。

宝石のような翡翠の眼。

年はだいたい八歳ぐらいか？

それでこれは俺なわけで…

導きだされる結果…

「誰だ!?
このプリティーフェイスは!?」

「自分で何言ってんだ…」

だって!!
目覚めたら、微妙な顔から、お姉様受けしそうな綺麗な小顔の男の子になってんだぞ!

これでテンション上がらないわけないだろ!?

「お前、変な奴だな…」

「ほっとけ!」

「まぁとりあえず近くの村にでも向かうか。
もしかしたらお前のこと知っている奴がいるかもしんねぇし。」

あり得ないと思うけどな…
いや、でもこの身体を知っている奴はいるのか?

神の野郎…、転生ったのにこれじゃあ憑依みたいなもんじゃねぇか。

いったい誰の身体なんだよこれ？

「あっ！」

「っと。

いきなりどうした？」

「アンタ、名前は？」

「あ～、そういや自己紹介がまだだったな。」

男は一息いれて。

「俺はナギ。

ナギ・スプリングフィールドだ！」

えっと…、

どっかで聞いたことがあるような…？

「『紅き翼』の『千の呪文の男』ったらわかるか？」

紅き翼に…

千の呪文の男…？

それってつまり…

・・・

しかもいきなり英雄って呼ばれてる主人公の父親と出会うなんて、なんつぅーご都合主義！

でも！

力を付けるには文句のない世界。

この世界ならいつかあの男（神）に届くぐらい鍛えられるかもしれない！

「お前は？」

「……は？」

「は？じゃねぇよ。

名前だよ、名前。

俺の名前教えたんだから、次はお前の名前教えろよ。」

ああ、そういうことか。

思わず考え事に没頭しちまった。

「俺の名前は……」

「名前は？」

二十年間ずっと使っていた名前。

いい名前とは思わないが、それとなく愛着はある俺の名前。

その名前を言おうとするが……

「……何だっけ？」

「はぁ！？」

えっ！？えっ！？

どういうこと！？

自分の名前がわからない！

転生したときにどっか頭でもぶつけたか？

それで一部だけ記憶喪失とか…

それとも、神がミスしたとか…

…神？

そういやあん時…

『ああ。だが、ただでは行かせねぇ。
俺の計画を狂わせた罰だ。お前の大切なもんいくつか貰っていくぜ。
』

『大切なもんいくつか貰っていくぜ。』

あ・ん・のぉ・野郎!!!

俺の名前持っていきやがった!!

たいしたもんは持ってないから平気と思ってたが、
まさか名前を持っていかれるとは思わなかった。

…どうすんだよ?俺。

「まさか…名前もわかんねぇのか?」

俺は無言で頷く。

「ったく。まいったな…。まさか名無しのごんべとは…。」

「名前、どうしよ…」

「そうだな…。

……ん？」

「なんか思いついたのか！？」

俺が尋ねるとナギはナイスアイディアといわんばかりの顔で…

「ああ！

ナナシっつうのはどうだ？

名が無いからナナシ。

どうだ？」

ナナシか……。

ネーミングセンスはどうかと思うが…

「うん。今の俺にはピッタリかもな。」

「だろ！じゃあナナシで決定だな！」

「ああ。俺は今日からナナシだ。」

「よし。名前も決まったことだし、行くとするか！」

「おう！」

これからの生活は前途多難だが、新しい名前。
ナナシとして頑張って行こう。
そう決意する俺であった。

・〜・〜・〜・〜・〜

ナギと出会ってから早数ヶ月が経過しようとしていた。
やはりどの村でも俺のことを知っている奴はいなかった。
そんなわけで行くあてのない俺は、そのままナギの旅について行くことにした。
ナギは『偉大な魔法使い』として各地を周り、人命救助をしていた。

性格だけみたら偉大なんて思わないんだけどな…

俺はそんなナギのサポートをしていた。

サポートっても、やっているのは料理とか家事関係だけなんだけどな。

こう見えて家事とか得意なんだぜ、俺？

前の世界では両親とも家事が壊滅的だったので、覚えなければ死ぬだけだった。

どのぐらい酷いかというと

料理をすればレンジを爆発させるわ、

洗濯をすれば洗濯機を爆発させる。

…よく生きてこれたな、俺。

他にも色々危険なことはあったが、そこは省略させてもらう。

話を戻そう。

後は時間のある時にナギに稽古して貰っている。

稽古っても、教えて貰っているのは魔法じゃなく格闘の方なんだけどな。

ナギは魔法を教えるのは下手で（本人も本を見ながら呪文を唱えているし…）、俺自身も魔法はまったくわからないので教えて貰えるのがそれしかなかったからだ。

そんな俺は今日も飯を作るために罠を仕掛けていた場所から獲物を持って帰って来たところだ。

今日はウサギか…。

初めてウサギを調理するときは大変だった。

なにが大変だったかというと、まともに生き物を殺したことのない俺は、ウサギをなかなか殺すことができなかった。

今では生きるためだと割り切れるようになったが、やはり気持ちのいいもんではない。

「ごめんな…。そしてありがとう。」

俺はウサギに謝罪と感謝をしつつも調理を始める。

そろそろナギが戻って来る頃だ。

急がないと…

-一時間後-

「遅い…」

料理が完成してから結構時間が経ってしまった。

自慢の料理もすっかり冷めてしまっている。

仕方ない、温め直すか…。

俺が温め直そうとすると、背後からナギの声が聞こえてきた。

「わりぃ、わりぃ。
遅くなっちまった。」

「遅すぎだ。
料理冷めちまっ――――」

俺が振り返ると、ナギの後ろには…

「オイ、誰だ、こいつは?」

十歳ぐらいの金髪の幼女がいた。

「ナギぃいい！？
お前！？いくら飢えているからって、そんな幼女に手を出すなんて！？」

「んなわけあるか！！」

「じゃあどっから拾って来たんだ！？
すぐ戻してきなさい！！」

「貴様！？私を犬みたいに言うな！」

「うっせぇ！
今俺はナギと話してんだ！黙ってろ！」

「なっ！？
貴様、私を誰だと思ってるんだ！？」

「知るかっ！ただのガキじゃねぇか！」

「お前の方がガキじゃないか！？」

「なんだと！？」

- 十分後 -

「ハァ…で、結局…誰なんだ…こいつは？」

「大丈夫かよ…？」

「よ、余裕だボケェ…」

「全然余裕じゃねぇだろ…。

こいつはさっき崖から落ちてるのを助けただけだ。」

「ふーん、そうだったか。ナギが誘拐したわけではなかったんだな。」

「だから違うって言ってんだろ！」

「とにかく。

疲れたから、腹が減った。飯にしようぜ。」

「おっ！

今日はウサギの肉か。」

「お前も食うだろ？」

「別に腹なぞ減っては「ぐぅぅぅぅ」……」

「体は正直みたいだな。
…ほら、食べな。」

「……ちっ。」

「舌打ち!?」

料理を振る舞って舌打ちされるとは予想外。

どんな教育受けたんだ!?

すると彼女は不機嫌そうな顔で

「お前らは誰だ?なぜ助けた?」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るもんだぜ。」

俺は決まり文句を言ってみる。
だが彼女の口から発せられる名前は

「…エヴァンジェリン。」

「ぶふぅぅぅぅぅ!!」

「うわっ!?汚ぇ!?」

『闇の福音』じゃん！？

なんで気がつかなかったんだ！？

馬鹿だ俺！

…そういえばこいつ、ナギに助けられたんだっけ？

まさかそれが今だとは…

だとしたら今は原作開始の十年前ぐらいか？

「お前、『闇の福音』か？」

「ああ。」

「へぇ、噂の正体がガキだったとはな。」

「ふん。」

「まぁ今は飯食べようぜ。お前も好きなだけ食いな。遠慮はいらないぜ？」

「作った俺のセリフだよね！？それ！」

まぁナギがいるかぎり心配はない……はず。

確かエヴァンジェリンも女、子供には手は出さないはずだったはず。

「…何をジロジロ見ているんだ？」

「い、いえ。なんでもないです！」

怖ぇーよ、あの幼女！！

早くどっか行かねぇかな…

だが、俺はまたしても忘れていた。

彼女はこれからナギにつきまとうということを…

・～・～・～・～・～

エヴァンジェリンと出会ってから一ヶ月が過ぎた。

だが彼女は今だに俺たちと一緒にいた。

「…なぁナギ。」

「…どうした？」

「あいつ、いつまでついて来るんだ？」

「俺が聞きてぇよ…」

「「はぁ…」」

「オイ、何をコソコソと話している？」

「なんでもないです！はい！」

「…ふん。」

とまぁ、一ヶ月間ずっとこんな感じで過ごしている。
おかげで俺の気が休まらない。

「おい貴様。」

エヴァンジェリンがナギに話掛ける。
正しくは今俺の頭の上にいる人形だが…

この人形はチャチャゼロ。エヴァンジェリンの…まぁ使い魔的存在だと思ってくれてかまわない。

はっきり言ってエヴァンジェリンよりチャチャゼロの方が俺は仲が良い。

「ん？」

「貴様、私のモノにならんか？」

「うわ…」

「もう一ヶ月になるぜ？
俺について来たって何もイイこたねーぞ？
どっか行けって。」

「やだ。
お前がうんと言うまで、たとえ逃げても地の果てまで追ってやるぞ。
」

もはやストーカーじゃん、それ…

「ケケケ、ヨホド気ニイッタンダナ御主人。」

「ああ、ナギも大変だな。…てゆうか、ゼロさん。
なんで俺の頭の上にいるんですか？」

「ケケ、気ニスンナ。」

はぁ……

・〜・〜・〜・〜・〜

あれからまた数ヶ月が経った。

俺たちは今極東の島国にいる。

そして俺はナギ達とは少し離れた場所にいる。

ナギはそろそろ決着をつけると言っていた。

おそらく原作通り、今日がエヴァンジェリンに登校地獄の呪いをかける日なのだろう。

「ついに追い詰めたぞ。
『千の呪文の男』。
この極東の島国でな。」

エヴァもいつになく真剣だ。

幻術まで使ってるし…。

「今日こそ貴様を打ち倒し……、その血肉　我がモノとしてくれる。」

「『人形使い』『闇の福音』『不死の魔法使い』エヴァンジェリン……。

恐るべき吸血鬼よ。

己が力と美貌の糧に何百人を毒牙にかけた？

その上俺を狙い、何を企むかは知らぬが…

……あきらめろ。何度挑んでも俺には勝てんぞ。」

このシーンだけ見たらメチャクチャかっこいいんだろう。

普段のナギとは思えないかっこよさだ。

「パートナーもいない魔法使いに何ができる！？

行くぞチャチャゼロ！！」

「アイサー御主人。」

エヴァが動いた。

それにあわせてナギは数歩下がる。

「えーと、この辺だっけ……」

「フ…、遅いわ若造！私の勝ちだ！」

…残念ながらエヴァの負けだ。

だって…

「うわあっ！？」

アレ（落とし穴）だもんなぁ…

魔法使いが落とし穴って…

「なっ……これは！？」

「落トシ穴ダ御主人。」

「見りゃわかるッ！」

「ふはははは！！」

「ひっ…ひぃぃーー！？

私の嫌いなニンニクやネギ～～～！？」

ナギが袋に大量に入った食材を穴に投入する。

「いっ…いやぁ～っ！
や、やめろぉ～っ！」

あっ、棒でよく混ぜてる…

「フフ…お前の苦手なものはすでに調査済みよ。」

調べたの俺ですけどね。

ついでにいうと食材を集めたのも俺だし。

まさかこんなことに使うなんて思わなかったけどな…

「あッああッ、ダメー！」

「オチツケ御主人！」

「あぅぅっ。」

「アアッ御主人ノ幻術解ケタ！！」

「わははは。噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったらみんな、
なんと言うかな？」

「やめろー！バカーッ！」

ナギはさらに大量の食材を投入する。

うわあ…

アレは苦手じゃなくてもキツい…。

ナギさん…マジ鬼畜ッス。

そろそろ止めるか…。

「…ナギ。」

「おっ。ナナシ！どうだ？お前もやるか？」

「やるかっ！！

お前少しやりすぎだろ！」

「仕方がねぇだろ。

コイツがなかなかあきらめねぇんだから。」

確かに…

「お、おいサウザンドマスター！！

私の何がイヤなんだ！？」

「だから俺ガキには興味ないってば。」

あったら問題だけどな。

「歳なのか!?歳なら百歳超えてるぞ、私!!」

「「オバサンじゃん。」」

「オバサン言うなーっ!」

いや、充分オバサンだって。

「なぁ、そろそろ俺を追うのはあきらめて、悪事からも足を洗ったらどうだ?」

「やだっ!」

子供かよ…

「そーかそーか。それじゃ仕方がない。
変な呪いをかけて二度と悪さのできない体にしてやるぜ。」

「うっ…、何だこの強大な魔力は。
ば…バカやめろ!!
そんな力でテキトーな呪文を使うな!」

「確か麻帆良のじじいが警備員欲しがってたんだよな。
えーと、マンマンテロテロ……長いなこの呪文。」

「ナナシ！お前見ていないで助けろっ！」

「ゴメン、無理。」

「なっーーーッ！？」

この状況で俺が何かできるわけないだろう。

うん、だから俺は悪くない。

悪いのは全部ナギだ。

「あっ、やめッ…。

ひどいぞサウザンドマスター！」

「御主人ピーンチー。」

「あッ、いやッ！」

御愁傷様です。

恨むなら俺じゃなくナギを恨め。

「登校地獄！！」

「いやーん！好きなのにーー！

うわぁぁあああー！！」

あーあ気絶しちゃったよ。

「これからどうすんだよナギ？」

まぁ答えは聞かなくてもわかってるんだけどな。

「ん？俺の知り合いのじじいに会いに行く。」

「そこが麻帆良か？」

「よくわかったじゃねぇか。
ならさっそく行こうぜ。」

「りょーかい。」

麻帆良か…。原作の舞台だし一度行ってみたかったんだよな。
ぬらりひょんにも会ってみたいし。

・〜・〜・〜・〜・〜

「～～～～～っ。」

「「あっはっはっは！」」

「似合う！素晴らしく似合ってるぜ。エヴァンジェリン。」

「あはははは！！」

「ホントじゃのう。
６００万ドルの賞金首にはとても見えんわい。」

「はっはっはははは！」

「貴様！いつまで笑っている！？」

無事日本の麻帆良に着いた俺たちは、力を封印されたエヴァを学園に預けに来ていた。
原作でこうなるとわかってはいたが、実際にこの目で見ると笑いが止まらない。

「あ、あの『闇の福音』が！賞金６００万ドルの魔法使いが！くっくっくっく！」

「……殺す。肉塊も残さず……。」

「まあまあそんな怒んなって。学校生活も楽しいもんだって。
経験ないんだろう？」

「そうじゃな。小学生ではちと可哀そうじゃし…。
中等部に編入してみるかの？」
「まあ、心配すんなって。お前が卒業する頃にはまた帰って来てやるからさ。」

そう言い、ナギがエヴァの頭を撫でる。

「光に生きてみろ。
そしたらその時お前の呪いも解いてやる。」

「……本当だな？」

「ああ。約束だ。」

俺は知っている。

この約束が果たされることはないということを。

「よし、じゃあ行くか。」

「およ、もう行くんか？」

「あんまり長居しても仕方ねぇからな。」

「そうか、残念じゃの…」

「わりぃなじじい。」

まだ居たいが、ナギが言うなら仕方ない。

少し名残惜しいが行くとするか。

「何言ってんだ？
お前もここに残んだぜ？」

「……はぁっ！？」

「構わないだろじじい？」

「ウム、ワシは別に構わんが…」

「ま、待てよナギ！」

これはさすがに予想外。
なんで俺が麻帆良に残らないといけないんだ！？

「お前も本来なら学校に行ってる歳だろ。いい機会じゃねぇか。」

「でも！！」

「大丈夫だって。
ちょいちょい様子も見に来てやるからよ。」

それは無理だ。

多分ここで別れたらナギとまた会うのは難しいだろう。
原作を知っているからわかる。

ナギが行方不明になるのは原作開始の十年前。つまりその間になにかナギの身に何か起きるということだ。だがここで俺がついていったら足手まといになるに決まっている。ナギは俺がこの世界に来て初めて会った人で、俺を助けてくれ、名前をくれた人だ。
そんなナギに迷惑はかけたくない。

だから俺は…

「……わかった。ここに残るよ。」

不本意ながらナギの申し出を受けることにした。

「よし！そんじゃ決定だな！」

「ナギ。」

「ん？どうした？」

「元気でな。」

「……ああ！お前もな。」

こうしてナギは一人で麻帆良を出ることになり、俺はエヴァとともに残ることになった。

これからどうなるかは俺にはわからない。

原作通り進むことはないだろう。
なんせ俺というイレギュラーを抱えているんだから。
でも頑張っていきたいと思う。

この世界で力をつけ、アイツに再会するまで

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第1話「展開早くね？」　「……気のせいだ。」（後書き）

次回は1週間以内に更新していきたいと思います。

ではまた次回。

第2話「じ、慈悲を…」　「ありません。」（前書き）

相変わらず展開が無理やりです。

全力で見逃せ！

第2話「じ、慈悲を…」　「ありません。」

ここは埼玉県麻帆良市麻帆良学園敷地内にある、とある教会。
その教会の礼拝堂に長身の金髪の男が箒を持って立っていた。

「終わらねぇ……。」

神父の服に身を包みながらも、男からは神聖さが微塵も感じられない。
そもそも本当にこの男は神父なのだろうか？

「こんな広い場所、一人で掃除するってのが無理なんだよ。
ったく…、美空かココネがいたら手伝わせたのによぉ。」

そう言うと男は箒を投げ捨て、その場に座り込む。

「一人でやらせるとかマジありえねぇ。最悪だ、あの性悪シスター。」

「誰が性悪ですって…？」

「ぬわぁ!?シ、シスター!?
い、いつから居たんですか…?」

「あなたが愚痴を言って、箒を投げ捨ててる時からですね。」

「み、見てたんスか?」

「ええ、バッチリと。」

「は、ははは。」

男と話している修道服に身を包んでいる褐色肌の美人な女性。
彼女はシスターシャークティ。
麻帆良学園の教師でもあり、この教会の責任者の一人でもある。

「いいですか?普段あなたが真面目に仕事をすればこんなことさせません。なのに、あなたときたら仕事をサボってばかり…って、聞いているのですか!?」

「あっ?何?」

「ふんっ!」

「ぐふぅ!?」

シスターの肘打ちが綺麗に男の体に決まる。

「…いきなり…何しやがる…？」

「人の話を聞かないからです。」

「だからって…、みぞに肘打ちはないだろ…。」

どうやら二人の上下関係は言うまでもないようだ。

「ところで、いったい何しに来たんスか？忘れ物？」

「…相変わらず立ち直りが早いですね。
コホン…、あなたに学園長が話があるそうで、学園長室まで来てほしいそうです。」

「学園長が？俺に？」

「ええ。私も内容は知りませんが。…またあなたが何かしたんじゃないですか？」

「いや、特には…。
まあ、とにかく行って来ますよ。」

「学園長には時間がかかると伝えていますので、しっかり掃除してから「じゃあ行って来ます！」って！ちゃんと掃除してから行きなさい！」

「後頼んだ！」

「待ちなさい！またサボる気ですか！？
戻りなさい！ナナシ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「…なんとか逃げられたか。」

俺こと、ナナシ・クラートがこの世界に来てから１５年以上の月日が経った。

月日が経つのは早いもので、俺は今年で２３歳になる。

ちなみにクラートという名前は、俺が麻帆良に来て間もないとき、名前がわからない（記憶喪失ということにしている）上に、まだ子供だということもあって、麻帆良学園内で引き取り手を探していた。そんなとき、俺を養子として引き取ってくれた人の名がクラートであり、当時のシスター。つまりはシャークティの前任の方である。年輩の方だったが、見ず知らずの俺を実の子供のように接してくれた優しい人だった。

そして俺はそんなシスターの優しさに答えたくて、よく教会の仕事を手伝っていた。

神に祈るのは癪だったが、シスターを手伝えることは嬉しかった。

だが、そんなシスターも５年前に他界。

ちょうど高校卒業した俺は、シスターの願いもあって、見習いとして教会に入ることにした。

現在では俺も立派な（？）神父として教会で日々過ごしている。

とまあ、俺の話はこれぐらいでいいだろう。

今は学園長との話が先だ。

シスターシャークティには心当たりはないと言ったが、ぶっちゃけある。

おそらくネギが麻帆良に来るのだろう。それで、ナギと知り合いの俺に面倒を見てほしいとかそんなんだろう。

とりあえず学園長室に行けばわかることだ。

「失礼しまーす。」

俺はようやく着いた学園長室の扉を開ける。

「ふぉふぉふぉ、よく来てくれたのう。」

扉を開けると、後頭部が異様に発達した化け物と、
『デスメガネ』ことタカミチ・T・高畑がいた。

「…なにか失礼なこと考えとらんじゃろうな?」

ちっ、流石化け物。
妙に鋭い。

「…まあよい。」

「久しぶりだね。ナナシ君。」

「おおタカミチ、いつ帰って来たんだ?」

この学園で広域指導員やら教師を勤めているタカミチ。
麻帆良で知り合ってから、酒を飲みに行ったりとなにかと仲良くしている。

「ほんの数日前に帰って来たばかりだよ。」

「へぇ、今度は何してきたんだ？」

「悪の組織とちょっとね。」

「……マジ？」

「ふふ、どうかな？」

俺とタカミチがそんな話をしていると―

「さて、世間話はそのぐらいにして、本題に入っていいかのう？」

悪の組織が出てくる世間話ってどんだけだよ…

とりあえず話を聞くためにソファーに腰掛ける。

「君を呼んだのは他でもない。君に頼みたいことがあるんじゃ。」

「…続きを。」

「ウム、実はの、近いうちにこの学園に教育実習生が来るんじゃ。」

「実はその実習生はお子様とか？」

「…よくわかったのう。

確か１０歳になるはずの男の子じゃ。

お主もよく知っとる奴の子供じゃよ。」

わかってたけど、大丈夫かよこの学園。
労働基準法に真っ正面から喧嘩売ってんじゃねぇか。

「ナギの子か？」

「…本当に鋭いのお主。」

まあ知ってますしね。
この時期に来る実習生なんてネギしかいないし。

「それでの、お主にネギ君…ナギの子供の名前な。その子のサポートをしてほしいんじゃよ。」

予想通りの展開
でも―

「何で俺なんスか？」

そう、これが一番気になった。
魔法先生たちではなく、俺に頼む理由。
いくら俺がナギと知り合いだとしてもオカシイ気がする。何か俺じゃなければいけない理由があるんではないだろうか。
そういった意味も込めて、学園長に聞いてみるが―

「…なんとなく？」

「ふんっ！」

「ぐふぅ！？」

「学園長！？」

そこら辺にあった物を適当に投げた。顔面に直撃したが、化け物なら問題ないだろう。

「なんとなくって何だ！？わざわざ人呼び出して頼み事と思ったら、理由がなんとなく！？」

「ぬぉぉぉぉ……」

「だ、大丈夫ですか学園長？」

―学園長が回復するまで、しばしお待ちください――

「…まったく。少しは老人を大切にせんかい。」

「あんたがふざけるからだろ。」

しばらくして学園長が回復した。
鼻にティッシュが入ってるが、自業自得だろう。

「それで、本当は？」

「お主が麻帆良で一番暇そうな大人じゃったから。」

「二撃目用～意。」

「ま、待たんか。
わかった、わかったから落ちついてくれ。
流石に机はシャレにならん！」

ったく、学習しねぇジジイだな。
その頭は飾りかよ？

「わし…学園長じゃよ？

この学園で一番偉いんじゃよ？それなのに、何この扱い？」

「いいから説明しろよ。」

「イエッサー！！」

「が、学園長…。」

タカミチが何とも言えない顔になっている。
自分の上司のあんな姿を見せられたらそうもなるだろう。

「お主がナギと知り合いというのもあるが、今学園は人手不足での～。ネギ君のサポートに回せる人がおらんのじゃよ。」

「だから何で俺なんだよ？」

「言ったじゃろ？
麻帆良で暇そうな大人がお主しかおらんかったのじゃよ。」

「あんた…さっきから喧嘩売ってんのか？」

「仕事サボっとるぐらいなんじゃから、暇に違いないじゃろ。」

「ぐっ…！」

さ、サボってなんかない！ただ仕事中に少し休んでいるだけだ！

「人はそれをサボりと言うんじゃがのう。」

うるさいやい！

「それで、受けてくれるかの？」

「いいぜ、やってやるよ！ガキの面倒の1つや2つぐらい見てやるよ！」

「ふぉふぉふぉ、やってくれるか。ありがたい。
さっそく手続きしよう。
お主、得意なのは社会科じゃったかの？」

ん？
手続き？

「何の話だ？」

「何って、お主の担当する教科の話に決まっておろう。」

「は…？担当？何が？」

「じゃからお主が教師として教える教科の話じゃよ。」

教師…？

教師ってあれか？
教室で生徒に授業を教えるあれか？

んで、それを俺が…って―

「えぇぇぇぇぇ!?
教師!?俺が!?」

「おや?説明しとらんかったかの?」

「一言も聞いてねぇよジジイ!!」

「あ、ついにわし、ジジイ呼ばわれ…」

「いいから説明しろ!」

「いや、あれじゃろ?
サポートするなら近い立場のほうがいいじゃろ?
じゃからお主にはその子と一緒に教師をやってもらおうと…」

「教員免許とかどうすんだよ!?」

「そんなもの、どうとにもなるわい。」

「乱用か!?職権乱用なのか!?」

「ふぉふぉふぉふぉ。」

とぼけやがった!

ダメだ!

学園がダメならそこを治めてる人間もダメだ！

「俺、教会で神父やってるし！
さすがに神父やりながら教師は無理だろ！」

「シスターシャークティがおればなんとかなるじゃろ。
神父はお主以外にもおるし、仕事サボっとるお主一人がいなくなっても問題なかろう？」

「その通りだよチクショウ！！」

くそっ、こんなことなら真面目に掃除しとけば……いや、やっぱそれは嫌だわ。

教師かぁ～。

でも教師になってネギと接点が増えれば、今以上に強くなれるかもしれないし、うまくいけば原作キャラと仲良く…？

「やりましょう。」

「ふぉ？急にどうしたんじゃ？」

「なに、教師生活も悪くないと思ってな。」

「……本心は別にあるようじゃが、まあいいじゃろ。

ついでじゃし、お主には女子寮の管理職にも就いてもらおうかの。」

このジジイ…。

この機会に空いている仕事全部俺に押しつけようとしてねぇか？

「まあいい。この際だ。

教師も女子寮の仕事も全部やってやるよ。」

「ふぉふぉふぉ、ありがたいの。

オホン、それではナナシ

クラート君。これから女子中等部２－Ａの副担任と女子寮管理人と

してよろしく頼むの。」

「ああ。」

「よろしくナナシ君。

これからは同僚として。」

「こちらこそよろしく頼むぜ。」

side　学園長

「詳しい日程やらはおって連絡する。わからないことがあれば、わしかタカミチ君にでも聞くがよい。」

「了ー解。
…はあ、よく考えるとかなり面倒だよな。」

彼は文句を言いつつもなんやかんやで引き受けてくれた。
昔から頼めば断れない性格しとったからのう。

「まあまあ、教師だって楽しいものだよ?」
「それはそうかもしんねぇけど……。
あっ、タカミチ火くれ。」

「…聖職者が吸っていいのかい?」

「…キニスンナ。」

…まあ、こんなところも昔から変わらないがの。

「…学園長。」

ナナシ君が出て行くとタカミチ君が話しかけてきた。

「どうしたかのう?」

「ナナシ君を選んだ理由…、本当は違い理由があったんじゃないですか?」

ふぉふぉふぉ、本当わしの周りの人間は鋭いのばっかじゃの。

「ウム、もちろんさっき言ったのも本当じゃが、タカミチ君の言う通り、他の理由もあるのう。」

「お聞きしても?」

「構わんよ。
わしもよくわからんのじゃが、彼には不思議な力がある気がしてのう。」

「不思議な…力ですか?」

「彼をネギ君と近づけることで、何か大切なモノを得てくれる気がしてのう。

…まあ、ただの老い先短いジジイの妄言じゃ。
気にせんといてくれ。」

「ご冗談を。
…そうですね、僕としてもそうなることを願ってますよ。」

フム、この選択が吉と出るか凶と出るかはわからんが、願わくは彼らに平穏があることを。

ｓｉｄｅ　学園長　ｅｎｄ

おまけ

「たっだいま～」

俺は教会の中に入る。

ここに戻るのもあと少しと考えると少し切ない。

そう俺が感傷に浸っていると―

「…随分ごゆっくりとしたご帰宅ですね？」

「し、シスター？」

「掃除をサボって逃げたと思ったら、呑気にタバコなんか吸って戻って来るとは余裕ですね？」

マズい…。

かなり怒っている。

なんとか話を変えないと…

「あっ！

シスター！そういえば俺、今度から教師になるんスよ！」

「教師ですか…？」

「はい！

だからこれからもよろしく「フフフフフ。」って、シスター？」

「逃げるだけでは飽き足らず、まさか神の前で嘘をつくとは…」

「嘘じゃねぇ！？

ってシスター…、なぜ杖なんかかまえて…？」

「天・誅！！」

「ギャアアア！！」

「ミソラ……あれ……」

「あ～、またナッシーがなんかやらかしたんじゃない？懲りないなぁあの人も。」

「ミソラも…よくやられてる。」

「うっ！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第2話「じ、慈悲を…」　「ありません。」（後書き）

はい、ということで第2話終了です。

いやー、筆がなかなか進まないもんですね。

ちなみにサブタイトルは本文の内容からではなく、おまけから考えました。

タイトル考えるのも難しい…

次回も1週間以内に投稿したいと思います。

ではまた次回！

第3話「…もう…ダメかも…」　「が、頑張って？」（前書き）

お久しぶりです。

まず言い訳をします。
夏休みの宿題やら、部活の大会をやっていたら、投稿予定日をかなり過ぎてしまいました。
期待していてくれた方がいましたら大変失礼しました。
次回はこんなことがないよう気をつけたいと思います。

それでは本文をどうぞ。

第3話「…もう…ダメかも…」　「が、頑張って？」

「…なぁタカミチ？」

「ん？どうかしたかい？」

どうも、ナナシです。

俺が教師になると決まって数日。
ついにネギが今日麻帆良にやって来る。
すなわち原作が開始されるということだ。

長かったなぁ…。
原作の開始までまさか１０年以上も待たされるとは思ってもいなかった。

おかげで原作も断片的にしか覚えてないし。

とにかく俺は学園長からの頼みがあるし、ネギが一人前になるまでは陰ながら面倒見よう。

そう思っていたのに―

「なんで俺が朝早くから出迎えなきゃいけないんだよ？」

「副担だからね。」

「何その理由！？」

とまあ、なぜか俺が理不尽な理由で、このクソ寒い空の下ネギが来るのを待っているんだが、いまだに来る気配はない。

「…来ねぇな。」

「来ないね。

…ナナシ君、少し駅の方まで様子を見て来てくれないか？」

「…一応理由を聞くが、どうして俺が？」

「副担だからね。」

「予想通りだよチクショウ！！」

しょうがない、行くか。

てゆーか俺よく考えたらパシられてね？
２０歳過ぎてもパシられてる男って…

「じゃあねボク！！」

っと、いきなり何だ！？

あれは…

「どうやら駅に行く必要はなかったようだね。」

ってことは…

「タカミチ、あの子が？」

「そうだよって、僕の生徒も一緒みたいだね。
ちょっと待っててくれ。

いやー、いいんだよ。
アスナ君！」

「えっ…」

「あ！」

「お久しぶりでーす！！

ネギ君！」

「た、高畑先生！？
お、おはよーございま…！」

「おはよーございまーす。」

「久しぶりタカミチーッ！」

じゃあやっぱりあの二人がアスナとこのかか。

しっかし可愛いなぁ…。
あんな可愛い子たちがいづれはネギの女になるんだもんなぁ。

ちっ！
これだから主人公は！！

えっ？嫉妬？

はっははは、何をおっしゃいますかお兄さん。

相手は中学生ですよ？

いくら可愛いからって、俺の守備範囲じゃない。

それこそしずな先生レベルになればいつでもばっちこいだが。

まあ、そうなったらむしろ俺から行くがな。

俺が言いたいのはアレだ。
その…、

ハーレムって、一度は憧れるもんだよね？
男のロマンだし。

世界中の男たちの夢と言っても過言ではないはずだ。
それを叶えてるネギを羨まし…もとい、恨めしく思うのは当然だろ。

そういえば俺、前の世界から数えると約４０年近く彼女が……、止めよう。
考えていても辛いだけだ。
と俺が一人悩んでいると―

「はくちんっ！！」

「なっ……！？」

「「あ……」」

毛糸のくまパン…初めて見たな。

「キャーーッ！！
何よコレーーーッ！！」

・～・～・～・～・～・～

ｓｉｄｅ　ネギ

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。
ダメだったら故郷に帰らねばならん。
二度とチャンスはないが、その覚悟はあるのじゃな？」

「は、はい。やります。
やらせてくださいっ。」

ちょっとしたトラブルもあったが、無事（？）に学園長室に着いた
僕は学園長からの説明を受けていた。

「……うむわかった！
では今日から早速やってもらおうかの。
副担任のナナシ先生と、指導教員のしずな先生を紹介しよう。

…ナナシ君、しずな君。」

・・・・・・・・・・・・・

あれ？

誰も出てこない？

「あの…」

「…おかしいの？

確かに呼んだハズなんじゃが？」

「――――――。」

ん？

扉の先から声が聞こえる。

なんだろう？

そう思い、扉を開けてみると―

「いや、本当にいい店なんですって。
そこをぜひ、しずな先生に紹介したいなと思いまして。
ですから今晩にでもどうスか？」

「あらあら、困ったわね。」

「……。」

なんだろう…。
背の高い金髪の男の人が女の人を口説いてる？
此処学校だよね？

「退屈はさせませんって……ん？
なんだよガキ。
何見てんだよ？」

「え！？あ、あの、そこで何を…。」

「見ればわかんだろ？
お誘いしてんだよお誘い。ガキには少し早いかな？」

お誘いって…

「何しとるんじゃお主は……。」

「なに、しずな先生に甘い時間をプレゼンしようと。」

「彼女いない＝年齢の童貞男がなにほざいとるか。」

「ぐはぁ！？」

あ…倒れた。

「ほれ、馬鹿やっとらんで、さっさと自己紹介せんかい。」

「指導教員のしずなです。よろしくね。」

「あ、ハイ……」

綺麗な人だなぁ。なにかイイ匂いもするし…。

「わからないことがあったら彼女に聞くといい。
そして…」

「副担任のナナシ　クラートだ。」

こ、この人が副担任…。

「…学園長、こいつ顔めっちゃひきつってんだけど？」

「当然の反応じゃな。」

「あんた今日さっきから容赦ねぇな！！」

「ふぉふぉふぉ。」

…大丈夫なのかなこの人？

「そうそうもう一つ。

実はの、まだネギ君の住むとこが決まっとらんのじゃよ。

それでしばらく誰かの部屋に泊めてほしいんじゃが……、このか、アスナちゃん、お願いできんかの？」

「げ。」

「えっ…」

「ええよ。」

僕が…この女の人の部屋に？

「オイ、なんで俺見た後目を逸らした？」

「もうっ！

そんな何から何まで、学園長ーっ！」

「ふぉふぉ、仲良くの。」

「無視か！？無視なのか！？」

…ダメかも僕。

side　ネギ　end

・～・～・～・～・～・～

時間も時間なので、ネギの住居はとりあえず保留ということになった。

まぁ最終的にはアスナたちの部屋になるだろうから問題はないだろう。

そしてついに、ネギと俺にとっての初めての授業の時間がやってきた。

今日は軽く自己紹介した後に授業をする予定。

今回は初授業ということで俺も授業に同伴することになった。

…緊急するなぁ。

こんなことなら２－Ａにもっと知り合い作っとけばよかった。

「ほら、ここがあなた達のクラスよ。」

言われて、教室を覗いてみる。

わかってたけど、実際に見てみると、本当個性的な奴らばっかだな。

「そうだ、クラス名簿！
…げっ…い、いっぱい…」

君はいづれ、そのほとんどの人とチュパチュパするんだけどな。

「早くみんなの顔と名前覚えられるといいわね。」

というより、何か忘れてる気がするんだよね。

覚えてないってことは、大したことないんだろうけど。

「失礼しま……」

―ボフ

「あらあら。」

「ゲホゲホ、いやー、あはは。
なるほど、ゲホ。ひっかかっちゃったなぁ、ゴホ。」

ああ、そういえばあったなそんなトラップ。

確かこの後にもまだ―

「へぶっ!?
あぼ!
あぁぁああ、ぎゃふん!」

「「「あははははは!」」」
「あらあら。」

今のは酷い…。

「えっ…」

「あ…、あれ……?」

「えーっ!?子供!?」

「君、大丈夫!?」

いや、入ってきた時に気づけよ。

つーか、クラスの大半がグルだったのか。

「ゴメン、てっきり新任の先生かと思って。」

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ。さ、自己紹介してもらおうかしら。ネギ君。」

「は、はい。

今日からこの学校でまほ…、英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。
3学期の間だけですけど、よろしくお願いします。」

「「「……。」」」

耳栓用～意。

「「「キャアアアア！
かわいいぃ～～！！」」」

「何歳なの!?」

「どっから来たの!?」

「何人!?」

生徒たちに囲まれて、ネギの姿が見えなくなった。

…しまった。

完全に教室に入るタイミングを逃した。

誰か俺に気付け！

頼む！

「はいはい、質問はまた後で。
その前にあなた達紹介する人がもう一人いるわ。」

しずな先生ぇ！！

あなたやっぱり最高だ！

「誰ですか？」

「新しい副担任の方よ。
入ってきて。」

よし、行くか！

「今日からこのクラスの副担任になったナナシ　クラートです。
よろしくお願いします。」

「「ブッ！？」」

誰だ！？
俺見て吹き出した奴は！？

「ちょっ！あんた何やってんスか！？」

なんだ美空か…。

じゃあ後一人は？

「……！」

…エヴァか。

こっち見て口パクパクしてる。

何か変なことしたか俺？

「何してるって、仕事してんだけど…」

「じゃなくて！

なんでナッシーが教師になってんの！？」

「ナッシー言うな！！」

「…美空知り合いなの？」

「ああ、うん。一応ウチの教会の神父。」

一応ってなんだ、一応って。

「じゃあ…」

「あの人が…」

「例の…」

どうやら俺のことを知ってる奴は結構いるらしい。

えっ？何？
俺もしかして有名人？

「「「麻帆良の不良神父！！」」」

……は？

「ナンデスカ、ソレ？」

「あれ、ナッシー知らなかった？」

「だからナッシー言うな！…で、なにがだよ？」

「ウチの教会の神父、まぁナッシーのことだけど、麻帆良じゃ有名だよ？」

「マジで！？」

「うん。見た目が目立つのもあるけど、聖職者のくせに酒は飲むは、タバコは吸うし、仕事はサボる。
他にも教会付近にいた不良グループを一人で全滅させたとか、彼女いない＝年齢の童貞男とかで。」

「いろいろツッコミたいけど最後の何？
なんで知ってんの？
つーか、彼女いない＝年齢の童貞男って完璧不良とは関係ないよね？
それただ馬鹿にしてるだけだよね？」

「そんなことどうでもいいから、そろそろ授業しますよ。
ネギ先生、お願いします。」

「は、はい。」

「そんなこと!?」

し、しずな先生…
あなただけは信じていたのに…。

・〜・〜・〜・〜・〜

「と……、届かない〜」

俺は今窓際の一番前で、ネギの授業を見ている。

なにやら困ってるみたいだがどうでもいい。
アスナがなんとかしてくれるだろう。

俺はさっきの出来事でやる気がでない。
なので今は生徒の顔を見渡すぐらいで…

「ん?」

俺の目の前の席。

一人制服が違う。

誰だっけこの子？

なんかあった気が…

「「あ…」」

つい目があってしまった。

「「……。」」

な、なんだ？

なかなか目を逸らさない。

俺の顔に何かついてるのか？

「あ…あの…？」

小言で俺に話かけてきた。なんだ？

「何？質問なら俺じゃなく、ネギ先生にしな。」

俺も小言で返す。

「あ！や、やっぱり！

あの！私のこと見えてるんですよね！？」

いきなり席を立って、俺に問いかけてきた。

というよりー

「授業中に何意味不明のこと言ってんの!?」

「はい?ええと、ボク、何かおかしな説明してましたか?」

「お前じゃねぇ!
彼女のことだよ!」

なんでみんな普通に無視してんの?

彼女、結構大きな声出してたよ。

「えっと…彼女って誰のことですか?」

「いや、だからこいつ。」

そう言い指を差す。

てか、一人だけ席立ってんだから気づけよ。

「?、誰もいませんが?」

「……は?」

何この子?

メガネだけど、そんなに視力悪いの?

「あの…」

彼女がまた声をかけてきた。

「ほら、お前も言ってやれよ。
私はここにいますって。」

「いえ…、私幽霊なので、みんな見えないんです。」

「そうそう、幽霊だからネギ先生が見えないから、しっかり自己主張……、え、幽霊？」

「はい。」

「夕礼？」

「いえ、そっちじゃなく、ゴーストの方の…」

「足は…？」

「ありません。」

……。

え？

「嘘ぉぉぉ！？
ゆ、幽霊ぃぃ！？」

ちょっ、ちょっと！？

なんでクラスに幽霊が！？

「な、ナナシ先生！？
どうしたんですか！？」

「どうしたもこうしたもねぇ！！
足！足がねぇ！！」

「足？しっかりありますけど？」

「だからお前じゃねぇ！！」

「お、落ち着いてくださ～い！」

「ぬわぁぁぁ！？
話かけんじゃねぇ！！
誰か！ゴーストスイーパーを！！
美神的な人を連れてこい！！」

「や、やめてくださ～い！」

「ギャアアア！！」

・〜・〜・〜・〜・〜

今日の授業が全て終わった後、俺と幽霊は近くのコンビニの前にいた。

「で、お前は地縛霊でもう何十年も此処に一人でいると。」

「そういうことです。」

幽霊…もとい相坂さよ。

すっかり忘れていたが、彼女は原作では友達がいなくて、ずっと一人だった。けど、文化祭準備の時に一悶着あってネギ達、特に朝倉と仲良くなるはずだ。

まさかその前に俺が最初に知り合うとは思わなかったが。

「でも先生凄いですよ。

私、存在感なくてどんなお払い師や霊能者に見えなかったのに…。

先生、幽霊見る目ありますよ！」

「いや、嬉しくねぇよ。」

しかしなんで俺に見えてんだ？

前の世界では別に霊感あったわけでもないんだかな。

転生したからかな？

「それで…その、」

「うん？どうした？」

「私と友達になってほしいんです。」

「友達？」

「はい…。私、さっき言った通り幽霊で存在感がないので誰にも気付いてもらえなくて、もう何年も一人ぼっちで…」

そっか…。そりゃそうだよな。
幽霊でもやっぱり一人は寂しいんだよな。
俺にはそういう経験はないけど、何十年も一人でいるのは相当辛いんだろう。
なら―

「…いいぜ。」

「え？」

「俺でよければ相坂の友達になってやる。」

「あ…ありがとうございます…」

すると相坂の眼から涙がこぼれる。

ちょっ！？

「な、泣くなよ！
俺が泣かせたみたいに見えんだろ！？」

「だ、大丈夫です…。私、見えませんから。」

「…それもそうだな。
…って違う！！
ほら、せっかく可愛い顔してんだから泣くなよ。」

「えっ…、あの、私可愛いですか？」

「普通に可愛いだろ？
顔は整ってるし、肌は白くて綺麗だし。」

「あう…、真面目な顔して褒められると、恥ずかしいんですけど。」

「まあ、胸が貧相なのはマイナスだけどな。」

「うっ！？
……いいんです。これからの成長に期待を…。」

「成長しないだろお前。」

「うっ！？」

幽霊が成長したら怖いわ。

「う～、先生酷いです。」

「睨むな呪われる。」

「〜〜〜！！！」

「冗談、冗談だから！
だからポルターガイストを起こすな！！」

び、びっくりした。

ポルターガイスト起こすとかこいつ、人を驚かす以外幽霊の才能高いんじゃねぇか？

「あっ、いたいたナッシー。こんな所にいたんだ。」

「美空？どうかしたのか？」

「ナッシーを探してたんだよ。」

「俺を？」

「うん。ほら、早く行くよ。」

「お、オイ。腕引っ張んじゃねぇよ。
行くって何処にだよ！？」

「それは着くまでの秘密に決まってんじゃん。」

ほ、本当何処に行くんだ？
つーかー

「…相坂！」

俺は美空にばれないように話かける。

「あ、私のことはさよでいいですよ。」

「ん？そうか。じゃあさよ、お前つっ立ってないで一緒に来い。」

「え…いいんですか？」

「いいもなにも一人じゃつまんねぇだろ？
なら、一緒に行こうぜ。」

「は、はい！」

俺の言葉に元気よく返事をする。

「ん？ナッシーに何か言った？」
「いいや、なんでもない。な？」

「はぁ。」

「はい！」

・〜・〜・〜・〜・〜

で―

「ああ、なるほど。」

「あ、気付いちゃった？」

「まあな。」

気付いたっていうか、知っていただけなんだけどな。

「あ、ネギ先生達も来たみたい。」

「あれ、美空ちゃんどうしたの？」

「何言ってんのアスナ？
――するって言ったじゃん。」

「あ……忘れてた。」

忘れてたんかい。
さすがバカレンジャー。

「あの…何かあるんですか？」

「アンタは知らなくていいから。
ほら、さっさと入りなさいよ。」

「え、えっ？」

「ほら、ナッシーも！」

「はいよ。」

俺もネギに続いて教室に入る。

そこには―

「「「ようこそ！！
ネギ先生ーっ！！！」」」

「「「アーンド！」」」

「「「ナッシー！！」」」

２－Ａの皆がいた。

ていうか、俺の呼び方はナッシーで決定なのね…

「おっ、タカミチも来てたのか？」

「皆が誘ってくれたし、せっかくだからね。」

「そっか。」

「どうだったかい？初めての授業は？」

「全然だ。慣れないことはするもんじゃねぇな。」

「ハハ、すぐ慣れるさ。」

「そうだといいがな。」

しっかし、騒がしいな。
いくら歓迎会といっても、騒ぎすぎだろ。

「は～、皆さん元気ですね。」

「おお、なんださよ、いたのか。」

「いましたよ！さっきからずっと隣にいましたから！」

「冗談だよ。」

と、なにやら向こうでネギとアスナがこそこそしてたと思ったらタカミチに近づいてった。

あ～、確か読心術するんだっけ？

まあほっといても平気だろ。

とりあえず今は―

「ねぇナッシー！今何歳なのー？」

「趣味はー？」

「彼女いない＝年齢の童貞男って本当？」

こっちをなんとかしよう…

こうして俺の初の教師としての1日は終わろうとしていた。

これから面倒なことになりそうと思いつつも、なんやかんやで楽しんでいる俺がいた。

「チェリィー！！」

「チェリー言うな！！！！」

やっぱ楽しくないかも…

to be continue ?

第3話「…もう…ダメかも…」　「が、頑張って？」（後書き）

なにやら終わり方に違和感が…

とにかく第3話終了です。
さよ、登場させてみました。
予定では登場させる気なかったんだけどなぁ…
書いてたらいつの間にか登場していました。
まあ、好きなキャラだからいいんですけどね。

次回は木曜ぐらいを予定しております。
相変わらず更新が遅いですが、どうかお付き合いください。
では、ばっはぁはーい！

第４話「ハッピーエンドなんて、そうそうあるもんじゃないと思う。」（前書き

中途半端な時間に投稿するのは嫌いなんで、０時ちょうどに投稿しました。

さて、今回ギャグオンリーです。（あれ、今までもギャグだけの気が…）

相変わらず自分の文才のなさに嫌気がさしますが、どうかご付き合いください。

それではどうぞ。

第４話「ハッピーエンドなんて、そうそうあるもんじゃないと思う。」

ｓｉｄｅ　ネギ

こんにちは。

つい先日、この学園に来たネギスプリングフィールドです。

おじいちゃんみたいな『立派な魔法使い』になるために、３月までの間だけど立派に先生の仕事を頑張ろう。

そう思っていたのに、初日から生徒―

アスナさんに魔法はばれたりと失敗ばかり。

アスナさんには部屋に泊めてもらったり、色々迷惑ばかりかけているのに、さっきもまた迷惑をかけてしまった。

それでお詫びというのも変だけど、ホレ薬を作ってプレゼントしようとしました。

けど、何を間違ったか、作った僕が飲んでしまって…

それで現在―

「「「ネギ先生ーッ！」」」

「わーーん！！」

な、なんでこんなことにー！？

すると曲がり角から―

「ネギッ！！」

「な、ナナシ先生ッ！？」

な、なんだか怒ってるみたいだけど…

「逃げ回んじゃねぇよ！イライラさせやがって！！」

「ちょっ！？なんで怒ってるんですか！？

僕、何かしました！？」

「当たり前だろうがッ！」

な、何しちゃったんだ僕？

「勝手にいなくなりやがって…。

お前の姿が見えなくて不安だったんだぞ！

会いたかった、バカーッ！！」

「バカはそっちじゃないですかッ！？」

まさか、男にもホレ薬が効くだなんて。

しかもよりによってナナシ先生に…

ここは早く逃げないと！

「待て！何故逃げる！？」

「逃げるに決まってるじゃないですか！」

「待ってくれ！俺はもう我慢できないんだ！！」

「何が！？」

「この熱い想いを、お前に受け止めてほしい。

頼む！俺と一緒に保健室に行こう！！」

「よくわからないですけど、嫌です！」

「俺も最初は戸惑ったさ。…でもな、気付いたんだ。この気持ち、紛い物なんかじゃないんだ！！」

「紛い物です！！」

とにかく捕まる訳には！

ダッシュして、逃げようとするが、すぐにナナシ先生の腕が僕を捕まえようと―

「させないよ。」

「タカミチ！」

「…なんのつもりだタカミチ？俺とネギの邪魔だ。用がないなら立ち去れ。」

今度こそ助かった！
タカミチならきっと…

「そうはいかないよ。
ネギ君は…僕の大事な人だ。だから、僕が守って見せる！」

「タカミチ！？」

ま、まさかタカミチにまで効いちゃうなんて…

「つまりだ、タカミチは俺の邪魔をするわけだ。」

「キミがネギ君に近づくならね。」

「上等だ…老けメガネ。」

「調子に乗らないことだね…彼女いない＝年齢の童貞男。」

「てめぇ、まだそれ引っ張るか！？」

「…ダメだこの人達。早くなんとかしないと……」

ここはあれかな？

日本のドラマのように
「止めて！私のために争わないで！」とか叫ぶべきなのかな？

「来なよ。キミみたいな障害が多い方がやる気が出る。…僕は本気だよ？」

「俺だって本気だ。
俺にはわかる。俺の中にあるなにかが、この気持ちを愛だと確信させる！
ああそうだ！これは……愛だ！！」

「その言葉…嘘じゃないようだね。
でも残念。ネギ君を幸せにできるのは僕だけだ。」

「いや、俺だ！」

「どっちも無理です！！」
うわーん！！

誰か助けてっ！！！

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

・〜・〜・〜・〜・〜

教師生活に慣れてきた俺だが、最近ネギが俺のことを警戒したような目で見てくる。

…なんかしたか俺？

心当たりもないのに、小さな子供に警戒されるのは正直辛い。

おっかしいなぁ〜。

当初はネギの兄貴的ポジションを狙っていたんだが…

まぁ、それは置いといて…

ドッジボール事件も無事原作通り進んだみたいで、

ついにやってきました学期末テスト。

ネギま！最初の大イベントといっても過言ではない。

とはいえ、このまま原作通りに進めば無事に終わるだろう。

多分今日学園長に呼ばれたのも、ネギの最終課題についてのはずだ。

おおかた、最下位脱出できるよう協力しろとかだろう。

学園側としても英雄の息子がこんなところで失敗することは望んでないと思う。

もちろん俺も望んでいないが…

さて―

「学園長～、ナナシです。入りますよ？」

「おお、来よったか。
かまわん、入っ―って、返事してから入らんか…」

「細かいことは気にすんなよ。」

「まったく…。それで今日呼んだ理由じゃが、今度の期末テストについてじゃが。」

「ふむ。」

「実はの、そのテストでネギ君が先生としてやっていけるかどうか見るために、２－Ａの最下位脱出を目的とした最終課題を与えたんじゃ。」

与えた？

じゃあネギにはもう通知してるってことか。

「それでじゃ、お主にも副担任として２－Ａが最下位から脱出するために一肌脱いでほしいんじゃが。」

「まぁ、そんぐらいなら別にかまわないけど…」

実際、俺が何もしなくても、最下位は脱出できると思うけどな。

「それで、もしネギが課題をこなせなかったら？」

一応聞いとく。

「ふむ。課題をこなしたら４月から正式な職員として任命するが、失敗したら仕方ないがイギリスに帰ってもらうことになるの…」

まぁリスクなしでチャンスが手に入るもんじゃないしな。
それは仕方ないだろう。
だが、何度もいうが原作通り進めば、まず問題はないだろう。

「ちなみに、この課題を失敗したら、お主もクビじゃからの。」

……は？

「イヤイヤイヤ、何で？
俺別にネギの課題とは関係ないし。」

「もともとお主を雇ったのはネギ君のサポートをさせるためじゃ。
そのネギ君がいなくなったら、お主雇ってる意味ないじゃろ。」

「勝手に教師として雇っといて、それは酷くないかッ！？」

まさかの俺の危機！？
この期末テスト、ネギ君にとっての大イベントかと思ったら、俺にとっても一大イベントだったか！？

「それでは頼むの。」

「横暴だぁ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、という訳でやってきました。
第一回大・勉強会です。」

「何が、という訳よ。何も説明しないでどういうつもり？」

「はい、黙りなさいレッド。余計なこと考えている暇あったら、そ

の貧相な脳ミソに英単語の一つぐらい叩きこんでなさい。」

「ひどっ！？」

ひどくない。俺の生活がかかってるんだ。

万が一のことを考えて、行動するべきだろう。

「と、とにかく！ナナシ先生の提案通り、テストも近いので勉強しましょう！

その…うちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので！」

俺とネギがな…

「なので皆さん頑張って猛勉強しましょう～！」

「はーい！提案提案。」

「はい！桜子さん。」

「お題は英単語野球拳がいいと思いまーす！！」

「「おお～～！！」」

「ちょっ！？ネギならともかくナナシ先生もいるのよ！？」

「…俺のことは気にするな。いないものだと思ってもらっていい。」

「そんなカメラ持って、気にするなってのは無理よ！ていうかどこ

から出した!?」

チィ、やはりダメだったか…

「ナッシー、えっちぃー!!」

「違う!俺はただ教師として生徒の観察をしようと……」

「どんな観察よ!」

「あぅぅ、勉強してくださ～い!」

・～・～・～・～・～・～

「ったく、ろくに勉強できなかった…」

「アレは先生が悪い気が…」

あれから日も暮れて、夜。

俺はテスト対策のプリント作成のため、今だに学園にいる。

…なぜかさよも一緒だが。さよ曰く「夜の教室で一人でいるのは怖いんです。」ということだ。
気持ちはわかるが、お前幽霊だろ…

それはともかく、ネギ達は今頃図書館島に行っているはずだ。
本当は俺も行きたいんだが、さすがに明日担任も副担任もいなかったらマズいだろう。

「でも、ネギ先生達大丈夫でしょうか？」

「うーん、多分。」

ネギ達のことは学園長が様子を見てるだろう。
それに図書館島にはあの男もいるはずだしな。
いや、別の意味で危険かもしれんが…

「つーか、お前勉強しなくていいのかよ？」

「えっと…私、霊体なので用紙触れないんです。」

「…それもそうだな。」

近いうちにさよの体をどうにかするべきかもな…
触れないのは可哀想だしな。

「まあテストやらないですむのは助かるんですけどね。」

「オイコラ学生。」

決めた。
こいつにいつか絶対テスト受けさせる。

・〜・〜・〜・〜・〜

そして翌日―

「はい、という訳でやってきました。第二回大・勉強会で〜す。」

「だから、何がという訳でなんですかっ!?
ネギ先生とバカレンジャー5人組＋図書館組はどうしたんですか!?」

「そのメンバーは学園長の保護のもと、現在勉強合宿中だ。明日には戻ってくるだろ。
で、ネギ先生の代わりに、副担任である俺が今日のＨＲを担当することになった。」

「そうですか…」

雪広がホッと胸をおろす。やはり心配なのだろう。

心配しているといえば―

「あ～、桜咲。ちょっといいか？」

「…はい。」

「近衛木乃香は無事だ。さっき言った通り、学園長が保護している。」

「そうですか…。ですが、念のために私も護衛のために…」

そう言い、教室から出ていこうとするが―

「行かせねぇよ。」

「なっ！？は、はなしてください！」

「駄目だ。お前バカなんだから勉強しないとマズいだろ。」

確か桜咲もバカレンジャーとはいかないが、それでも下から数えた方が早かったはずだ。

「ですが、お嬢様が！」

「だから、近衛は学園長が見守ってるから大丈夫だって言ってんだろ。行くんだったらバカ直してから行け、バーカ！」

「バカ言い過ぎですよ！？」

「さて、じゃあ初めるか。」

「流されたっ！？」

「はい、超。お前今更勉強必要ないだろ？
お前は全教科でバカの奴のカバー頼む。」

「了解ネ。」

「葉加瀬は理数系を中心で頼む。
雪広はハーフなんだから英語ぐらい得意だろ？それ頼む。」

「わかりました。」

「だから私、ハーフじゃありませんって！」

「で、社会と国語は俺が担当する。
じゃあ初めるぞ。」

「「おおぉ～～！！」」
やる気だけは充分だな…

だが、勉強開始してしばらく経つと―

「ふん、くだらん。帰るぞ茶々丸。」

「はい、マスター。」

ったく、あいつは…

「コラ、何普通に帰ろうとしてんだ。」

「ちぃ、見つかったか。」

「正面から教室出ようとして、見つからないわけないだろ。」

「こんにちは兄さん。」

「ああ、茶々丸。」

ん？

何だその呼び方はって？

いや～、一時期エヴァの家に通いつめてた時に、色々あってね。

そんで茶々丸から兄さんと呼ばれるようになったんだよな。

「言っただろ？勉強会って。みんな頑張ってるんだからサボんなよ。」

「お前も知っているだろう。私はいくら勉強して、テストでいい結果とっても卒業出来ないんだから、やっても仕方ないだろう。」

そう言い残し、また教室から出ようとする。

だが！

「関係ない。」

「……は？」

「だからお前が卒業できるかできないかなんて、関係ない。
重要なのはお前が点数低くて平均的が下がり、最下位脱出できなくなって、俺がクビになっちまうこどだ。そんなことは認めない。」

「お前、私以上に自分勝手だな！」

「ははは、褒めるなよ。」

「褒めとらん！」

「とにかく、お前には協力してもらうからな。
今こそ、お前のお婆ちゃんの知恵袋的な何かを…」
「一言多いわ！…まったく、貸し一つだからな。」

そして席に戻っていく。
最初からそうしとけって。
さて、俺も始めるか。

「う～、お嬢様…」

「まだ言ってんのかコイツは。」

「ですがッ！？」

「わかった、わかった。
なら俺が勉強できると判断したら、行かせてやるよ。」

「…わかりました。」

「はい、じゃあまず簡単に問題出していくから。」

で、勉強を始めたわけだが…

「将軍直属の一万石未満の家臣を何というか？」

「…わかりません。」

「直参。」

「…直さん？誰ですか？」

「…人名じゃない。」

「安政の大獄に反発した志士達が大老、井伊直弼を登城途中に暗殺した事件を何というか？」

「殺人事件。」

「……いや、そーなんだけどさ。」

A．桜田門外の変

「じゃあ幕末から明治にかけて、シンボルとなった髪形は？」

「スキンヘッド？」

「…髪ねーし、それ。」

・・・・・・・・・・・・・

「はい、じゃあここまで。各自、明日のテストの為に、今日はもうゆっくり休むように。」

「「「は～い。」」」

とりあえず出来る限りのことはやった。

後は明日次第だ。俺にはもう出来ることはないけど、みんなには頑張ってほしい。

ちなみに、桜咲だが…

「…お、お嬢様…」

…うん、まぁ、聞かないどいてくれ。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

翌日、テストも終わり、結果が出たが、２－Ａは平均点８４，０となりトップとなった。

原作より平均が高いのは俺のおかげか…？

ちなみにきちんと俺は食券を２－Ａに賭けてた。

おかげでしばらくは飯に困らなくてすみそうだ。

仕事もクビにならずにすんだし、今回はハッピーエンドだったな。

～おまけ～

「あっ！ナッシー、それ全部食券？
みんな～、ナッシーがすごいたくさん食券持ってるよ～。」

「えっ…ちょっ。」

「本当だ。よーし、皆。ナッシーの奢りで打ち上げ行こー！」

「嘘だよね？さすがにクラス全員奢ったら、食券なくなるんだけど…」

「ＪＯＪＯ宛で焼き肉パーティーだぁ！」

「高いわ！！」

「行こうよナッシー！」

「いや、だから俺は…」

「ねえねえ。」

「む、無理…って、待て、来るな！こっちに来るな！話し合おう！なっ？」

「「「そ～れ！！」」」

「ギャアアアア！！」

こ、こんなの、ハッピーエンドじゃない…絶対に…

to be continue ？

第４話「ハッピーエンドなんて、そうそうあるもんじゃないと思う。」（後書き）

はい、第４話終了です。

今回のネタは、自分の好きなマンガから頂きました。マイナーなマンガだからわからないかな？

最初のホレ薬事件はそのネタをやりたかった為にやりました。後、ネギに主人公への苦手意識を持たせたかった…

後、刹那を少し馬鹿にしすぎたかなと思いましたが、気にしないでいきましょう。

次回は火曜日ぐらいを予定してます。ではまた。

第5話「お願い！」　「絶ぇっ対嫌だ！！」（前書き）

火曜日に間に合わなかった…。

もっと早めに書き始めとかないと駄目かな?

今回は若干オリジナルです。（違うかな?）

少し不安ですが、お付き合いください。

では本文をどうぞ!

第5話「お願い！」　「絶ぇっ対嫌だ！！」

「ハァ…ハァ…」

いきなりで悪いが、ピンチです。

なぜなら―

「いたかっ！？」

「いや、こっちにはいない！」

「くっ。いったい何処に行ったんだ！？」

「とにかく、早く奴を見つけだすぞ！」

「ああ。」

―とまあ、現在進行形で黒服の男達に追われている。

テレビやマンガなどではよくある状況だが、まさか自分がそんな状況になるとは想像もしなかった。

…普通は想像しなくて当たり前だけどな。

そもそも、何故俺がこんなめにあわなきゃいけないのか？
事の発端は、約一時間前まで逆戻る。

～一時間前～

「お見合いじゃああ！！」

「……は？」

期末テストも終わり、久々の休日。
日頃の疲れを癒すために、今日は一日のんびりしようと思ったが、
学園長から用事があると連絡を受けて断念。
そして現在その要件を聞くために学園長室まで来ている。

つーか、俺毎回この部屋来てね？
そのたび面倒な用事しかないきが…

そして今回も面倒事かと思ったら、コレだ。

「来て、一番最初の一言がお見合いってどういうことだよ？」

「言葉通りじゃよ。
お主、童貞ということもあって、彼女とかできたことないじゃろ？」

「……。」

「あっ、嘘、冗談！

じゃから、黙って部屋から出て行こうとしないで！ワシが悪かったから！お願い戻って！」

「ちぃ！仕方ねぇな。」

「謝ったのに舌打ち！？」

むしろ舌打ちだけで済んだと、感謝してほしい。

俺にこの話題はＮＧだと知っているだろうに。

「それで？続きは？」

「…帰らない？」

「内容による。」

「むぅ。…とにかく、お主に来てもらったのはさっき言った通り、お見合いさせるためじゃ。」

「だから何で俺が？」

「お主ももう結婚してもいい年齢じゃろ？
それなのに彼女の一人もおらんし。
なら、ワシが出会いを用意しようと思っての。」

２３歳なら、まだまだ結婚なんか考えなくてもいいと思うけどな…

「要件はわかった。…だけど、余計なお世話だ。」

とにかく、俺はまだ結婚する気なんてない。

いや、彼女は欲しいけどね？

「そんなこと言わずに受けてくれんかの？既に相手方も決まっておるし。」

そういうのは俺の返事聞いてからにしろよな…

「相手方には悪いが、嫌だね。」

「頼むよ～。なっ？ジジイの数少ないお願いじゃから。」

「毎回毎回、お願いしてる奴がよくそんなセリフ言えんな！」

「…はて？そうじゃったかの？何も覚えとらんわ。」

このジジイ！！

都合のいい時だけボケてんじゃねぇ！

「とにかく！どんなに頼んでも、俺の返事は変わらないからな。」

「そうか…。なら仕方ないの。」

およ？珍しく素直に諦めたな。

「最終手段じゃ。」

……はい？

「「「確保ぉー！」」」

すると、ドアからたくさんの黒服の男達が入ってきた。そして俺の両腕を掴みとられる。

うわ～、みんないい体格してんなぁ。

…って！

「ちょっ！？誰だよこいつら！？」

「心配いらんわい。ただお見合いを警護してくれるＳＰ達じゃから。」

「心配だわ！！

何！？ＳＰが警護するお見合いって！？

危険なの？危険なのかそのお見合い！？」

「ふぉふぉふぉ。」

「ジジイぃぃぃ！！！」

ヤバイ！よくわからないが嫌な予感がビンビンする。ならここは―

「…わかったよ。」

「ふぉふぉ。観念してくれたかの。」

そう思ったのか、俺の腕を掴んでいたＳＰの力が緩んだ。

今だ！

「んなわけ……あるかぁ！！」

「ふぉっ！？」

「「「なっ！？」」」

俺は腕を振り切って、出口へ向かう。

「くっ！追うんじゃ！」

「「「はっ！」」」

すぐに態勢を立て直すが、もう遅い。
既に俺はて部屋から出るところだ。

「絶っ対お見合いなんかしねぇからな！」

そう言い残し、俺は学園長室から去っていった。

もっとも―

「……ワシだって、お主なんかとお見合いさせたくないわい。」

学園長の呟きを聞くことはなかったが―

～現在～

「あのジジイぃ！覚えとけよ！！」

そうか、やっぱりそうか。
俺がこんな状況になってんのは、全部あのジジイのせいか。

「いたぞっ！！」

「やべっ！見つかった！」

ちくしょう、またＳＰ達との鬼ごっこかよ！

しっかし、何であのジジイはお見合い一つでここまで必死なのかね？
そんなに独身の俺が心配なのか？

……やめよう。あのジジイに心配されると思ったら、鳥肌が立つ。

「「「待てぇー！」」」

「くそっ。いい加減諦めろよテメーら！」

あーーもう！いったい、いつまで逃げないといけないんだよ！

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「ふう。」

なんとか逃げ切ったかな？俺は今中等部近くの茂みに隠れている。

あのＳＰ達もなかなか手強かったが、俺の某蛇も驚きの隠密行動の前では、もはや無力だ。

…いや、別に段ボールとか使ってるわけじゃないよ？そりゃあ、有ったら使ってたけど、そう都合よく落ちているわけないし。

と、こんな無駄なこと考えてる暇はなかった。

どこか安全で、身を隠せる場所はないか？

自宅の女子寮管理室……も駄目だ。あの学園長のことだから、ＳＰを向かわせていそう。

懐かしの我が教会……も駄目だ。シスターシャークティーに何言われるかわからん。

いらん小言まで言われそうだし。

エヴァの家……考えるまでなく入れてくれないのがわかってる。

あれ？もしかして、俺詰んだ？

てゆーか、選択肢が３つしかない俺って…

仕方ない。行く所ないし、あのＳＰ達が諦めるまで、ここで待つか。

まぁ、周りにＳＰの姿も見当たらないし、しばらくは大丈夫だろ。

そう思って、安心したら、後ろから―

「わっ！！！！」

「うへぁい！？！？」

な、なんだ！？まさか見つかっちまったか！？

そう思い、後ろを振り返ってみると―

「えへへ、見ぃーけ！」

可愛いというより、綺麗な和服の女性がいた。

うわ…レベル高いなこの子。

和服も似合ってるし、大和撫子って感じか。

っと―

「すいません、お嬢さん。今自分は込み入った事情があるならお早めに。」

「ややなぁ。ウチや、ウチ。」

ん？

このほんわかした喋り方って…

「近衛？」

「正～解！」

どうりで。この子なら和服が似合って当然だし、レベルも高いわけだわ。

ふむ、改めて見ると、本当に似合ってて、綺麗だな。服装一つでここまで変わるもんなんだな。

「先生、捜しても全然見つからないんやもん。大変やったわ。」

あっ！

「ヤバッ！」

俺は再び茂みに隠れこむ。

危ねぇ！

隠れてんのすっかり忘れてた。

「いきなりどうしたん？」

「バカッ、話し掛けんな！見つかるだろ！」

「あ～、別にもう隠れんでも大丈夫やよ？」

「はい？」

「ＳＰの人達目的果たした言うて、戻ったもん。」

何？どういうこと？

ＳＰの目的って、俺の捕獲で、お見合いさせることだよな。

その目的を果たしたってことは、まさか―

「近衛、つかぬことを聞くが今日の予定は？」

「ん？お見合いやよ。」

「ちなみにお相手は…？」

「んっ！」

そう言って、俺を指差す。

ですよねー。

最初に俺探してるって言ってたし。

というか、原作でこんな展開ないよな？

原作では逃げ出して、ネギと遭遇するんじゃなかったっけ。それが何で俺とお見合いすることになってんだ？

考えられる理由としたらジジイの差し金だが、可愛い孫娘を俺とお見合いさせるか？
疑問ばかり浮かんでくるが…
うーん？

「ナッシー？」

「ん？ああ、どうした？」

いかんいかん。つい忘れてた。

…呼び方に関してはもう何も言うまい。

「これからどうするん？」
「そうだな…」

お見合いっても、こんな場所じゃな…
つーか、お見合いって何するんだ？
前世でも経験したことないからわかんないし。
自己紹介とかも必要ないしな。
それだったらー

「とりあえず、何するか考えながらブラブラしてみるか？」

「うん、ええで。」

そこ。もっと気の利いた場所はないのか。相手着物だから考えろと

か言うな。
仕方ないだろ。突然の事態だったし、エスコートなんか慣れてないし。

・〜・〜・〜・〜・〜

結局、近衛には普段着に戻ってもらった。
和服じゃなくなったのは残念だが、普段着は普段着で可愛いからOKだ。

現在は適当に会話しながら屋台を見つけたり、店に寄ったりとブラブラしてる。
これは俗にいうデートというもんじゃないのか？
いや、お見合い…、これをお見合いと呼んでいいのかわからないが、同じようなものなのか？

とにかく、デートっぽいことを経験したことがない俺は無駄に緊張している。

そろそろ会話も続かなくなって、困っていると―

「うえーん！！！お母ぁーさん！！」

「……迷子か？」

「迷子やろね。」

はあ、仕方ない。

にしても今日は面倒事ばっかりだな。

「やっぱ行くん？」

「まあな。これでも神父だし、困ってる人は助けないとな。……悪いな。ちょっと行ってくれるから。」

「あっ、ウチも行く。」

「そうか？なら行こう。」

と、俺たちは迷子の子供に駆け寄る。

「おーい、どうした？」

side　このか

あの後、迷子の子供―ケンジ君のお母さんを二人で捜してるわけやけど…

「おじちゃん！次あっち！あっち行こう！」
「痛てて！わかった、わかったから髪引っ張んな！後、おじちゃんじゃなくて、お兄さんだからな！」

「キャハハハ！」

「…捜すつもりないだろ、お前。」

ケンジ君本人は目的を忘れて楽しんどる。
というより、さっき知り合った子供に普段あそこまで懐かれるもんやろか？

教会の仕事で慣れたんかな？
あそこまで懐かれるのは一種の才能やと思う。

…まぁ、懐かれとるっていうよりは、オモチャみたく扱われてるっていう方が正しいかも。

それにしても、ナッシーは変わらんなぁ。

ナッシーは覚えとらんと思うけど、昔、実は会ったことあるんやよね。

まだウチが小さくて、麻帆良に来たばかりの頃、道に慣れてなく、アスナもいなくて、ケンジ君みたく迷子になって泣いてた時、さっきみたくナッシーが声かけてくれたんよね。

今と変わらない仏頂面で面倒な顔しつつも、どこか優しい目をしながら…

そん時も、

「俺に任せろ。」

って言って、助けてくれたっけ。

でも今思い出せば、ナッシー大変やったんやろな。

ナッシーも多分道わかってなかったんと思う。

だってウチを連れて大分時間経っても目的地には着かんかったし。

それなのに、ウチを不安がらせないように必死に平気な顔して

「大丈夫、俺がいるから心配するな。」

って。

それで、ようやく目的地に着いたとき、ウチより安心してたもん。

でもあん時はナッシーが来てくれて、本当助かったなぁ。

誰かが一緒にいてくれるだけで、あんなに安心するとは思わんかった。

その時に名前を聞かんかったのは失敗やったな。

せやから、再会したときも最初わからんかったし。

けど、話してみると、あの時の人やと思って、なんとか確認するためにお爺ちゃんに頼んだりしたんやけど……。
今日やっぱりと確信したわ。
間違いなくこの人やと。

ただ、ナッシーが気づいてくれへんのは少しショックやな。

まぁ何年も前やから仕方ないとは思うんやけど…
それでも気づいてもらいたいのが乙女心っちゅーもんや。

とにかく。ナッシーと再会できたんはよかった。
これが好きとかの感情かはわからんけど、嬉しいのは確かや。

今日のこともあるし、これからはもっと話したりしたいな。

ナッシーは副担任やし、機会はたくさんあるハズや。
そしたら、もしかして思い出せてくれるかもしれんし。

…うん。ウチ頑張ろ！

ｓｉｄｅ　このか　ｅｎｄ

「バイバーイおじちゃーん!!」

「お兄さんだっ！」

ようやくケンジの母親も見つかり、一安心だ。
結局、最後までおじちゃん呼ばわりだったが。

ったく。俺はまだ２３だっつーの。

それにしても近衛がやけに上機嫌だ。
そんなに母親見つけたのが嬉しかったか？

まぁ結構時間かかっちまったけどな。
もう日も沈みそうだし。
そろそろお開きかな？

「そうやね。晩飯の支度もあるし、あんま遅いとアスナ達も心配すると思うし。」

「じゃあ帰るか。送ってく…って、寮だから一緒に帰れるのか。」

「そういえばナッシー、女子寮の管理人もやっとるんやね。神父に

教師に管理人って大変やない？」

「そうでもないけどな。」

サボってばっかだしな。

実際、サボらないでやったら身が持たないし。

「せやったら、今日晩飯食べに来ーひん？」

「いいのか？俺としては非常に助かるんだが…」

「構わへんよ。３人分も４人分もそう変わらんし。」

「本当か？じゃあお言葉に甘えさせてもらうか。」

しゃああ！！

女子の手料理ＧＥＴ！！！

しかも味は間違いなしの近衛の料理。

そう考えると腹減ってきた。

「よし！すぐ帰ろう。今すぐ帰ろう！」

そう言い、近衛の手を取る。

「あっ……。」

楽しみだな～手料理。

あの後、寮に戻り、近衛達の部屋で食べさせてもらった料理は絶品でした。
また食べに来てもいいとまで言ってくれた。
毎日はさすがに大変だろうから、週1・2ぐらいは食べに行きたいと思う。
ただ寮に戻ってしばらく、近衛が無言だったのが気になったが…。
まぁすぐに元に戻ったし、大丈夫だろ。
次食べに行く日が楽しみだな。

～おまけ～

お見合いの日の翌日。

「さて、ジジイ。懺悔はもう済ましたか？」

「ま、待たんか！昨日はなんやかんやでお主も楽しんだじゃろ？ならそれでよいではないか！？」

「それとこれとは話が別だ。」

「い、いいんか？聖職者がか弱い老人を傷つけたりして？なっ？謝るから、昨日のことはお互い水に流して「Ａｍｅｎ」「ギャアアアアアアア！！！」」

その日、学園長室から一つの叫び声が聞こえたとか、聞こえなかったとか。

真相は闇に葬られたまま。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第5話「お願い！」　「絶ぇっ対嫌だ！！」（後書き）

今回、原作キャラはこのかメインでいってみました。
このかの喋り方に苦労しましたが、おかしな箇所とかなかったでしょうか？

このかは個人的にネギま！で1・2位を争うぐらい好きです。

今後、主人公とはどうなるかは未定ですが、結構登場させたいと思っています。
次回は日曜日を予定してます。
今度こそ予定を守ってみたいと思うので、よろしくお願いします。

第6話「生意気だお前！」「貴様に言われたくないわ！」（前書き）

だいぶ更新が遅れてしまいました。申し訳ありませんm（＿＿）m

第6話「生意気だお前！」「貴様に言われたくないわ！」

本日の授業も終わり、放課後にいつも通り職員室で書類を片付けていると―

「桜通りの吸血鬼？」

「はい。今日クラスで話題になったんですよ。佐々木さんが桜通りで吸血鬼に襲われたって。」

そういえば佐々木が保健室に運ばれたって言ってたな。

そうか、ついにエヴァが動き出したか。

つーか、さよ。お前見えないからって、職員室に勝手に入んなよ…

「先生以外見えないんですからいいじゃないですか。それに私、他の人がいると出番がなくなっちゃうから、こういうところで頑張んないといけないし。」

「出番？」

「そこは気にしちゃダメです～。」

…よくわからないが、いいや。

とにかく佐々木が倒れたってことは、今日の夜にでも、ネギはエヴ

ァと接触するだろう。

俺？

俺は関わるつもりないよ。エヴァとの接触は、ネギが成長するか大きな分かれ道だ。

それを俺が手助けしたりしたら意味ないだろ？

それに、エヴァは女子供は殺さないから心配はいらないだろ。

だから俺は基本見守るだけにする。

…そこ。ならお前いらねーじゃんとか言うな。

俺には俺の大事な仕事があるの。

でもまぁ、エヴァに少しぐらい釘刺しとくか。

そんぐらいなら原作に影響もないだろうし、問題ないだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「お～い、エヴァ！」
「ん？…なんだ貴様か。」
「こんにちわ、兄さん。」

なんとか夜になる前に学園近くでエヴァ達を見つけることができた。
ったく、携帯ぐらい持っとけよ。

「魔法使いが機械に頼ってどうする？
それに機械は好かん。」
「一応、お前の隣にいる娘も機械なんだが…」
家事から何でも茶々丸に任せてる奴が、何言ってんだか。

「それでいったい私に何のようだ？
私は忙しいんだが？」

「今日の夜の準備でか？」
「！？気付いてたか？」
「まあな。」
知ってただけですけどねぇ～。

「目的はネギだろ？」
「…そこまでわかっているなら隠す必要はないな。
そうだ。私はナギにかけられた呪いを解くために、奴の血縁たるあ
の坊やの血が必要なんだよ。」

血縁者の血を吸えば呪いって解けるもんなのか？
やっぱエヴァが吸血鬼だからなのか？
その辺の知識はまったくわからん。

「で、私を止めるか？」

「止めないさ。」

「ほう…。いいのか？貴様はジジイから坊やのサポートを頼まれて
いたんじゃないのか？」

「あること全部俺がサポートしたらネギが成長しないだろ。
それに俺は一度、ネギにはエヴァみたいな本当の悪とぶつけた方が
いいと思ってるしな。」

「ふっ。私からしたら、お前も充分悪だと思うがな。」

「…これでも一応聖職者で、教会の神父なんだがな。」

「昔から言っているだろ？お前には似合わない。なにせ仕えるべき
神をまったく信じてないんだからな。」

うっせ！

似合わないことなんか俺が一番わかってるつーに。
それに俺が死ぬ原因を作った奴のことなんか信じられるわけないだろ！

「しかし、だったら私に何の用なんだ？」

「ネギは好きにするといいさ。でも一般人には手を出すな。」

「……。」

「一般人に手を出した所為で、学園側も既に気付いている。近い日にも学園長から呼び出されるだろう。
これ以上一般人に手を出したらお前の立場が今以上に悪くなるぞ。
…それに、」

「それに？」

「これ以上俺の生徒を襲うなら、俺も見逃す訳にはいかない。」

今言ったこと。これが俺の本心だ。
はっきり言ってネギはどうでもいい。
ただこの世界に来て、一番長い付き合いのエヴァが罰を受けて、今以上に学園側から睨まれるのは俺は望んでいない。

それにまだ短い期間だが、自分の生徒を傷付けてほしくない。エヴァにとったらクラスメイトだしな。

「…ふん。わかったよ。
呪いが解けた状態ならまだしも、封印状態の身でお前と戦う馬鹿な真似はしないさ。」

なんとか説得できた……のか？

「その代わり、血はお前から貰うからな。」

「げっ…！」

「当たり前だ。私はお前の頼みを聞いてやるんだ。
それなら、それ相応の代価を貰うのが当然だろう？」

「…少し前までお前のことを心配した俺に、ラリアットかましたくなった。」

「そっちが勝手に心配したんだろうが。私はそんなこと頼んでないしな。」

そう言いエヴァは悪役らしい笑みを浮かべる。

止めてくれたのはよかったがどうやら代償はでかかったようだが…

・～・～・～・～・～・～

翌日、原作通りネギは元気がなくなっており、エヴァは授業サボタージュしていた。
まあエヴァのサボりはいつも通りだが…

というかネギの授業はともかく、俺の授業までサボらないでほしい。

話がそれた。それで、元気のないネギを心配した２－Ａの奴らが『ネギ先生を元気づける会』を開いた。
なんでも、大浴場で水着になり、色々サービスするらしい。
さっきも俺に大浴場の使用の許可を貰いに来たし。

俺も行きたいと言ったら、勿論笑顔で断られたが…

ネギ、１０歳だからって羨ましすぎる。
俺にももう少しウフフな展開があってもいいと思う。

そして今、俺に訪れている展開は―

「……。」

「キュ？」

口に水着？をくわえた、ネギま！の淫獣こと、アルベール・カモミ

ールと出会っていた。

カモは俺が魔法の存在を知っているとは知らないので、普通のオコジョとして振る舞っている。

とりあえず、話しかけてみるか。

当然、カモのことを知らないフリをしながらだが。

「こんな所でオコジョ妖精が何をしてる？」

「アンタ！？魔法関係者なのか！？」

「ああ。それとこの寮の管理人でもある。後、ここは魔法を知らない一般人が多い。あまり大きな声を出すな。」

「なら、ちょうどいい。

旦那、兄貴…、ネギ・スプリングフィールドっつう人を知らないかい？」

「誰が旦那だ。ネギは俺の同僚だ。今なら部屋に帰ってると思うから、部屋まで案内してやる。」

本当なら、案内するのはネギの部屋じゃなく、学園長室だけどな。

コイツ、結界を越えて侵入して来たし。

ろくな事しない奴だが、仮契約など重要な儀式にはコイツが必要だ。

それにネギが悩みを打ち明けられる数少ない奴だからな。

なので、俺はコイツを見逃しとく。

「ところで、その口のは…？」

「これですかい？これはさっき風呂場でね…。ここはいい素材が多いッスね。」

「それには同感だけど、水着は盗むなよ…。」

「へへっ。これが俺っちの生き甲斐でっさぁ。」

「…何がいいんだか。」

「なっ！？旦那、俺っちの、いや、男のロマンがわからないというんスか！？」

ふっ。わかっていない。コイツはなんにもわかっていない。

「カモ…確かにそこにもロマンがあるかもしれない。だが！それは持ち主から離れてはただの布だ！
俺は持ち主が！女性が！
それを着けているのを見て初めて、その価値があるんだと思っている！
これは下着もそうだが、俺にとってのロマンはそこなんだよ！」

すると―

「…負けた。負けたぜ旦那。まさかこんな極東で俺っち以上の変態と出会えるなんて…」

「なに、お前のロマンも素晴らしい物だと思う。人には人のロマンがある。お前は自分のロマンを信じて進めばいいさ。」

「旦那…。アンタが、アンタこそが真の漢だぜ…。」

カモ、実際に会って話してみると、なかなか漢らしい奴だ。
コイツなら俺と良き友になれる気がする。

「旦那、今日の所はコレは返しときやす。
けど、俺っちはまた自分のロマンを突き進みたいと思いやす。」

「ああ。これは俺が責任を持って持ち主に返しとく。…ただ、盗みは止めろよ。」

「そんなっ!?」

当たり前だ。
ロマンを突き進むのは構わないが、犯罪に手をだすのはアウトだろ。
とにかく、水着をカモから受け取る。

「アンタ…それ何持ってんのよ?」

「いや、何ってそりゃあ水着を…」

ん?
なにやら後方から声が―

「いくら彼女がいないからって、犯罪に手を出すなんて…」

「ナナシ先生…」

なんだ神楽坂とネギか。

てゆーか犯罪？

いや俺は―と、自分の手にある物を見て見る。そこには今受け取ったばかりの水着が…

で、此処は女子寮なわけで…

うん、事情知らない奴が見たら、立派な水着泥棒だ。

「ま、待て！これには深い理由が！」

「盗みをするのに、一体どんな深い理由があるのよ！？これだから童貞は嫌なのよ！」

「オイ！？お前まで人の傷口をほじくるか！？てゆーか中学生に童貞言われたくねーよ！！」

なんだ！毎回毎回！童貞がそんなに悪いか！？童貞はそんなに責められなきゃいけないのか！？

俺がそう思うと―

「待ってくだせえ！旦那は悪くないんす。悪いのは俺っちなんス！」

「お、オコジョ？」

「え…カモ君！？」

何か釈然としない終わり方だが、誤解は解けそうだし、よしとするか。

というか、カモが最初から話してればよかったんじゃね？

・〜・〜・〜・〜・〜

―数日後、

俺は夜の学園内の端ギリギリにいた。

いきなり時間が進み過ぎだと思うのは、多分気のせいだ。

あの後誤解は解け、カモが此処に来た理由やら、パートナー探しの話をして終わった。

そしてどうやら、ネギは今まで俺が魔法使いだと知らなかったらしい。

てっきり学園長が説明してると思ったんだがなぁ。

まぁ、俺は魔法使いとしてはネギよりも未熟で、三流以下なんだがな。

別にタカミチみたく詠唱出来ない体質な訳じゃない。いや、詠唱は確かに出来ないんだが…

発音が苦手なんだ呪文の。元が日本人の俺は、外国語なんてまったく話せず、それはこの世界に来ても変わらず話せない。

試しに長い呪文を発音しようとしたら途中で噛むし。

そして、呪文を覚えられない。
長すぎなんだよ呪文。
そんな長い呪文いくつも覚えられるわけないだろ。
だから俺に出来るのは簡単で短い詠唱呪文。後は肉体強化や簡単な無詠唱魔法。
だから、俺は魔法使いというより魔法戦士って言った方がいいかもしんない。
魔法の修行より、武術の修行の時間の方が長いし。

…ああ。
伝え忘れてたけど、俺はネギが茶々丸を襲うイベントや、山に逃げたり、夢を覗くイベントには関わらなかったよ。
茶々丸のイベントは危険かもしれないので、一応監視だけはしてたんだが、ネギは最後は教師として、生徒は傷つけられないと判断したので、介入はしなかったし。
後のイベントは単純に仕事を抜け出せなくて、介入出来ず、監視することも出来なかった。

…くそぅ、途中で新田に見つからなければ。

それで、エヴァとの対決だけは原作の名シーンだし、ぜひ見て見たいと思っていたんだが―

「どうしてこうなったんだか…」

＜何か言ったかい先生？＞

「なんでもねぇーよ。」

現在俺は、ネギ達の戦う場所とは違う学園の端で仕事をしている。

停電により、学園を守る結界の効果が全部…とまではいかないが、かなり弱まってしまった。

そのおかげで、それを好機とみた関西呪術協会やら、どこも知れぬ魔法使い達が学園を狙ってきた。

それを防ぐために、学園にいる魔法先生・生徒が駆り出されてる。

原作では書かれなかった裏話ってことだな。

俺は最初断ったんだが、学園長がどうしてもと言うし、依頼料出すって言ってきたし。

べ、別に金に目が眩んだ訳じゃないからね？

ただちょっと最近仕事サボり過ぎて、減給くらっただけで…

アレだ、アレ。俺も学園を守りたくて、善意で協力してるだけだ。

金はオマケみたいなモンで…

とにかく！

一度引き受けたんだ。

その分しっかり仕事はしてやる。

だけど―

「なんでこのエリアの担当者が俺とお前だけなの？

おかしいよね？

このエリア、他のエリアより敵の数多いみたいだし。それを二人だけって、どんな無理ゲー？」

＜私と先生なら二人でも大丈夫と判断されたんだろうね。ただでさ

え人手が足りないらしいし、少しでも人数を他に回したいんじゃないかな？＞

「ったく、酷いぜタツミー。」

＜タツミー言わないでくれないか。
あなたは自分が変な名前で呼ばれたくないくせに、他人には平気で変な名前呼ぶんだね。＞

「いや、最近俺も変な名前で呼ばれるの諦めてきたし…」

はい、というわけで只今このエリアで戦っているのは、今言った通り、俺とタツミーこと、龍宮だけです。
タツミーとは、今回みたく依頼された時一緒になることが多いんだが、毎回コイツと依頼がかぶると、面倒な依頼しかない。

ジジイ…、狙って組ませてんな。

だがまぁ、俺とタツミーはなかなか相性がいい。

タツミーは遠方からの射撃で、俺は前線での戦闘。
この体勢が一番理想的で、一番やりやすい。
…まぁタツミーは俺と違って、苦手な距離はないんですけどねー。

俺は先ほど説明した通り、魔法が苦手だし、武器なんか使わないから、接近戦しかできないし。

おかげでほとんど孤立している状態。
タツミーは遠くにいて、通話ごしじゃないと会話できないし。
ちゃんと援護射撃とかはしてくれるんだけどね？

「にしても、倒しても倒しても思春期の男子の部屋のエロ本なみに湧き出てくるな。」

＜その例え方はどうかと思うけど、その通りだね。
これは依頼料を上げてもらわないと、わりにあわないよ。＞

「本当だな。おかげでお気に入りの服がだいぶ汚れちまった。」

＜…今更ながらその服は戦闘にどうなんだい？＞

「えっ？なんか変？」

＜変わっているのは間違いないね。＞

自分の服装を確認する。

俺の服装は教師として使っているスーツでもなく、私服でもない。

俺が普段教会で仕事する際に着る服。
そう、司祭服だ。
これを着るとやる気が出て、集中できるんだよね。
もっともこれはただの司祭服ではない。
俺がオーダーメイドして発注した服。
見る人が見ればわかるだろう。
今の俺の服装は某麻婆神父と同じ服装。
神父になったからには着てみたいと思い、数年前に作った物だ。

家にはこれと同じ服が何着もある。

「格好よくない？」

＜ノーコメントだ。＞

むぅ…。シスターシャークティも同じ事を言っていた。

そんなにセンスが悪いだろうか俺？

ちなみに武術の方だが、本当はそこも中国拳法にしたいところだったが、中国拳法は原作キャラで使う奴が多いからやめた。
そこで色んな武術を試した俺が出した結論はムエタイだった。あくまでムエタイを取り組んだ我流だけどな。

なので俺の戦闘スタイルは接近戦での格闘。その補助として魔法を使うってとこかな。

司祭服にムエタイに魔法。
このミスマッチな感じがよくないか？

＜…理解できないね。＞

「うっせ。」

後、だいぶ前に気付いた事がある。
この身体、スペックが高い。
魔法による強化を使わずとも、ただの一般人なら簡単にあしらえるぐらい。

前の世界じゃ考えられない性能だな。
おかげで今の俺の格闘レベルは相当なもんだと自負している。
…自信過剰かな？

「っと…危ねっ。」

＜余計な事考えているからだよ。＞

「仕方ないだろ。こんだけ敵がいるんだから、現実逃避ぐらいしたくなるさ。」

＜…まぁ否定はしないさ。＞

術者を倒せば楽なんだけどな。
そうすれば召喚されたコイツらも消えるし。
生憎俺にはそういう探知能力はないし、タツミーの眼でも見当たらないらしい。
停電が終わるまで頑張るしかないのかな…

「＜……はぁ。＞」

・　・　・　・　・　・

・・・・・・・・・

「はぁ…。まだいるかな？」

ようやく停電も普及し、結界も回復した。
ようやく戦いから回復した俺は大橋に向かっていた。

「明日も仕事だっつーのに、働きすぎだろ俺。」

「いいかぼーや！私はあきらめた訳じゃないからな！満月の晩は背中に注意しておけよ！！」

いたよ。
夜中だっていうのに、ばか騒ぎしてる奴が。

「よぉ。」

「なっ、貴様！」

「ナナシ先生？」

「はは、負けちまったかエヴァ？」

「ふん。あのまま続けていれば勝っていた。」

「それでも負けは負けだろ？」

「ぐっ…」

おぉ、手加減してたけど、負けたのはよっぽど悔しかったようだな。

「ええーい！それで！？貴様は一体何しに来たんだ！？」

「そうカリカリすんなよ。……ほら。」

「…？これは？」

「代えの服。まさかその格好で帰る訳にはいかないだろ。……まあエヴァに露出癖があるなら別だが。」

「あるかっ！！

…だがコレは受け取っておく。」

やれやれ、素直にありがとうと言えないのかよ。

「あ…あのう？」

「ん？どうしたネギ？」

「エヴァンジェリンさんとナナシさんって、どういう関係で…？」

「ん～。俺とエヴァの関係か。

教師と生徒でもあり、長年の友人。
そんでもって、師匠と弟子ってとこかな？」

「私はお前と友人になった覚えはないぞ。」

…相変わらず冷たい。

「…弟子？……ええぇぇぇぇぇ！？
で、弟子ってナナシ先生が！？」

「おお。エヴァ弟子第一号だな。」

「まことに不本意ながらな。」

これ以上言われると、流石の俺も泣くぞ？

「じゃあ何？ナッシーも悪い魔法使いなの？」

「なんだ神楽坂、いたのか？」

「アンタより先にいたわよ！」

話に入ってこないからすっかり忘れてた。

…そこ。茶々丸にカモ。
自分達もいますよ、みたいな顔すんな。わかってるから。

「俺は自分を悪い魔法使いだとは思ってないな。」

「悪いのは性格だしな。」

「よしお前、もう黙れ。
負けたんだからもう少し静かにしてろチビ。」

「言うじゃないかガキ。
体ばかりでかくなって、精神年齢は低いくせに。」

「「……（ピキ！）」」

「えっ？あの…ちょっと2人共？」
神楽坂の焦る声が聞こえるが関係ない。
コイツは俺を怒らせた。

「マジ黙れよババア！いつまで経っても体はエターナルロリのくせによ！」

「貴様こそ黙らんか！なんだエターナルロリって！？貴様なんてエターナルチェリーじゃないか！」

「うるせぇぇ！俺にはまだ未来があんだよ！お前なんてもう未来ねぇじゃん！」

「あるわぁ！！私だって魔法を使えばナイスダイナマイトボディに…」

「幻術じゃねぇか！現実を見ろ現実を！」

「毎日日記にいもしない彼女との妄想を書いてる奴が何を言ってる!?」

「それ以上言うんじゃねぇぇ！
つーか何で知ってんの!?見たのか?俺の部屋見たのか!?」

「ふ、2人とも落ちついてください！」

「「うるさい引っ込んでろ!!」」

「ひぃ！」

やっぱりコイツは友人なんかじゃね！
服届けに来て損したわ！

～おまけ～

「あの、そういえばエヴァンジェリンさん。」

「…なんだ？」

「夢で見た父さんの近くにいた子は一体…？」

「ああ、それは…」

「俺だな。」

「……、えええぇぇぇぇぇ！？

だ、だって凄い可愛い子だったのに…、えぇ！？」

「昔はあんなんだったの。まだお前より幼かったし。」

「今じゃ見る影もないけどな。

昔はなかなか可愛げのある性格だったんだが…

今じゃ憎たらしいかぎりだ。

だから彼女ができないんだよ。」

「なに、キティほどじゃないさ。」

「「……（ピキ！）」」

「も、もう止めてくださーい！！」

「…仲良いわねあの２人。」

「はい。兄さんと一緒にいる時のマスターはいつも楽しそうです。」

「上等だぁ！最弱状態だからって関係ねぇ！ブッ倒してやる！」

「ふん！抵抗できない女に襲い掛かるとは。
とんだ聖職者だな！」

「「うがぁぁー！！」」

「ははは…、本当いつまで続くのかしら？」

「さぁ？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第6話「生意気だお前！」「貴様に言われたくないわ！」（後書き）

原作でいう3巻目を1話で済ませる自分。
…内容が薄いのだろうか？

関係ないが、皆様のおかげでお気に入り件数やアクセス数が毎回少しずつ増えていくのに対して、6話にもさしかかったというのに未だ感想が0な件。
…なぜだ？感想を書くレベルでもないということだろうか？
それとも更新速度を守らないからだろうか？

ということで感想を作者は死ぬほどお待ちしています。
感想があれば、今まで以上に頑張れると思います。

面倒かとは思いますが、どんなことでもいいので感想をお願いします。

次回は日曜を予定しています。
…次回こそは予定に間に合うよう更新したいと思います。

第7話「私扱いひどくないですか？」「ワシも…」「…キノセイダ」※誤字修正

まず最初に。

こないだの私の書き込みで感想をくださった方々。
誠にありがとうございました。
感想を頂くだけで、自分の作品に対するモチベーションが随分変わりました。

おかげで久々に更新予定日を守ることも出来ました。この調子で頑張っていきたいと思います。

※９／１９日誤字の報告を頂いたので、修正しました。

第7話「私扱いひどくないですか？」「ワシも…」「…キノセイダ」※誤字修正

―修学旅行

それは学園生活を語るには欠かせないイベントでもあり、同時に、学生達にとっても欠かせない重要なイベントであろう。

そして、修学旅行前の準備も学生達にとっては楽しみの1つではないだろうか？

だが―

「いいなぁ～。修学旅行いいなぁ～。私も行きたいなぁ～。」

「……はぁ。」

明後日の修学旅行に控え、皆各々の準備に取り掛かっているだろう今日。

俺の所に来たさよはさっきからずっとこんなんだ。

…はっきり言ってウザイ。

「仕方ねぇじゃん。
お前、地縛霊だから麻帆良から出れねえんだし。」

「先生はいいですよね。
可愛い子いっぱいの中、旅行できるんですから。」

「教師として同行するだけだから！」

変な言い方しないでもらいたい。

しかし、修学旅行に行けないのは流石にかわいそうだな…

確か原作では朝倉がどっかっから人形持ってきてなかったけ？

「どうにかして麻帆良から出れないかな？」

「無理ですよ～。先生が言った通り、私地縛霊ですから。……
…先生にとり憑く以外。」

そっか～。俺にとり憑く以外は無理か…

ん？

「待て。何最後の？
お前最後に何か恐ろしいこと呟かなかった？
つーか、お前とり憑くとかできんの？」

「いえ、やったことないですけど、私なんだかいける気がするんです。
だから先生、とり憑かせてくださいっ！！」
「嫌だわ！！
何そのお願い！？
俺がハイ喜んで！とか言うと思ったか！？」
「副担なんだから頑張ってくださいよ！」
「なんだその理由！？」
「何が嫌なんですか！？
こんな可愛い子が背後霊になるのに！」
「そこだよ！背後霊ってとこだよ！
つーか、自分で可愛いって言っちゃったよ！」
「大丈夫です！とり憑いても身体が重くなるだけで、他に影響は…ないです多分きっと！」
「身体重くなるだけで充分大丈夫じゃねぇよ！
それと最後、言葉濁してんじゃねぇか！」
「わかりました！少しだけでいいんで！」
「何その妥協してあげましたよ、みたいな顔！？
憑かれるのに少しもクソもあるか！」

「ＹＯＵ憑かしちゃいなさいよ。」

「ノリよく頼んでもダメだから！」

こいつ、こんなキャラだっけか？

もし違うなら原因はなんだ？

……俺か？

そんなことを考えてると―

「アレ？先生、携帯鳴ってませんか？」

「おお、本当だ。」

全然気付かなかった。

俺はポッケから携帯を取出し、画面を確認する。

ん？

登録してない番号だな…

誰だ？

「はいもしもし？」

＜ワシじゃ、ワシ。＞

……。

「お掛けになった番号は、現在使われておりません。ピーと鳴った後に、自分の人生を悔いて死んでください。」

＜嘘つけぇ！！最初にもしもし言っとたじゃろうが！あと何死んでくださいって！？＞

「ピー。」

＜死なんわぁ！＞

「チッ！」

＜舌打ち！？＞

マジで面倒くさいジジイだな。
なんであんなんが俺の上司なんだろうか？

「何故俺の番号を知ってるかとか色々聞きたいことがあるが、まず最初に何の用だ？
くだらない用なら、お前の残された毛根全部引き抜くからな。」

＜ワシ、今日は何もしていないのにこの対応。
酷過ぎない？
ワシこの学園で一番偉いんじゃよ？
学園長なんじゃよ？＞

「あン！？」

＜イエ、ナンデモナイデス、ハイ…＞

ったく、最初からそういう態度にしとけっつーの。
それなら話聞いてやらんこともないのに。

「で？用件は？」

＜修学旅行のことで話があっての。それで学園長室まで来てほしいんじゃ。＞

親書のことかな？
重要なことだと思うし、行ってやるか。

「わかった。今から向かうから待ってろ。」

・　・　・

にしてもまた学園長室か…

・・・・・・・・・・・・・

「―という訳なんじゃ。」

原作通り、ネギに特使として西に行き、向こうの長―近衛詠春に親書を渡す仕事を頼んだらしい。
それで、俺にはいつも通りネギのサポートをしてほしいと―

まぁ予想通り。
サポートなら毎回やっているし（え？）

「それともう1つ頼みたいことがあるんじゃが。」

「はい？」

他に何か頼まれそうなことあったけ？

「孫のこのかのことなんじゃが。」

ああ～。そのことか。

「実はの、関西呪術協会の中にこのかを狙っとる連中がおるんじゃ。」

「近衛…このかの巨大な力を狙ってか？」

「…気付いておったか。」

「まあな。学園長の孫で、『紅き翼』近衛詠春の一人娘だ。ただの一般人ってことはないと思ってたしな。」

「じゃがこのかは魔法のことを知らん。それこそただの一般人と変わりない。魔法関係者には何も抵抗できん。」

そりゃそうだろうな。

実際原作では簡単に攫われてたし。

「それでお主には修学旅行中のこのかの警護。必要なら相手の撃退を頼みたいんじゃ。」

なるほどね。

でも―

「このかには桜咲がいるだろう？」

「無論、刹那君のことは頼りにしておるよ。
じゃが万が一ということもある。
その時、腕のある人材が必要なんじゃ。
…頼む、引き受けてはくれんかの？」

学園長はいつにもなく真面目な顔で俺に頭を下げる。
やっぱり孫のことがとても大事なんだな…

だけど、俺に頼む必要はない。
なぜなら―

「このかは俺の生徒だ。
頼まれなくても、何かあったら助けてやる。」

俺にはこれから何が起きるか既に知っているという、アドバンテージがある。
問題があるとしたら、フェイトだが…

だが天ケ崎千草ならなんとかなるだろう。

「ふぉふぉふぉ。素直じゃないの。
…じゃが助かる。ありがとう。」

珍しくジジイが礼を言う。でも礼を言うのはまだ早いと思うんだけどな…

「それに、別にジジイのためにやるわけじゃない。

あくまで生徒のためだ。」

「しかしアレじゃの。
お主みたいなのを言うんじゃろな。
えーと…アレじゃアレ。」

「なんだよ?」

「ツンデ「ふんっ!」れべろぉ!?」

「お前さっきまでの真面目な空気返せよぉ!!
一瞬でぶち壊してんじゃねぇか!?」

「ぬおぉぉぉ…。か、角当てんのいかんじゃろ…」

何ふざけたこと言おうとしたんだこのジジイ…

男にそんな属性あっても気持ち悪いだけだ。

「いいないいな~。近衛さんはいいな~。私だって先生の生徒なのにな~。困ってる私は助けてくれないんだな~」

…お前、まだいたんだ。

・　・
・

・・・・・・・・・・・・・・

学園長室を出た後、俺に電話がかかってきた。

噂をすれば影というのだろうか。

かけてきたのは近衛だった。

何でも神楽坂の誕生日パーティをするから来ないか？とお誘いを受けた。

今日はもう特に用事もなく、断る理由もないので行くことにしたが、その際―

「先生はまさか私を一人きりにして置いていったりしないですよね！」

「…だからお前、麻帆良から出れないじゃん。」

「じゃあ行かないでください！」

「いや、もう行くって言っちゃったし…」

「ひ、ひどいです…。」

俺にどうしろと？

「…もういいです。一人は慣れてますから。行きたいなら行ってください。」

「あっ、そう？じゃあ行って来る。」

「う…うわーん！先生のバカァー！呪ってやるー！」

「呪うとか、お前が言うとシャレにならん。」

そのままさよはどこかに去っていく。

…少しかわいそうだったかな？

「先生の童貞ー！〇〇〇のくせにー！」

「オイこら待て！！

つーかなんでお前が知ってんの！？」

―みたいなことがありまして。

他人に聞こえないからよかったが、聞こえてたら大変だったぞ。

しかし、さよの移動範囲についてはきちんと考えとかないとな。

流石に不便だと思うし。

まぁ今は誕生日パーティを楽しませてもらおうかな。

～おまけ～

「やっほ～」

「あっナッシー！」

「アンタも来たの？」

「おう。近衛にお呼ばれして、お前の誕生日を祝いにな。」

「えっ……ありがとう…」

「ということでハイ。」

「これは？」

「これって、誕生日プレゼントに決まってんだろ？」

「私の誕生日知ってたの？」

「いや、知らん。」

「じゃあなんで用意できてんのよ？」

「男の必須テクだ。」

「そうなんですか！？」

「いやネギ…、信じちゃダメだから…」

「なー、なー。ナッシー、ウチには？」

「このか、誕生日でもないアンタにあるわけない「あるぞ？」嘘ぉ！？」

「それも必須テクなんですか！？」

「ああ。お前も男を磨けば自然と身につくさ。」

「いやいやいやいや！それ多分アンタだけだから！」

～おまけ2～

「で、開けてみろよ。」

「そう？じゃあ遠慮なく。ん？これって……。」

「アスナ？」

「アスナさん？」

「な、なななな、何でこんなのあるのよぉ！？」

「…何渡したん？」

「タカミチ・T・高畑
特別写真集Ｖｏｌ１

～紫煙と共に～」

「…何それ？」

「俺が作ったタカミチの写真集。タカミチファンやオヤジ趣味の人からは、たまらない一品だ。」

「高畑先生は知ってるん？」

「……まあ、神楽坂が喜んでいるんだし、いいんじゃないか？」

「…そうやね。」

「アハハハハ！高畑先生ー！！」

to be continue ？

第7話「私扱いひどくないですか？」「ワシも…」「…キノセイダ」※誤字修正

いや～。ようやく修学旅行編が間近になりました。

次回からは修学旅行編に入ると思います。

ちなみに、自分の学校の方も後少しで修学旅行があります。

それが終わる前に、修学旅行編を終わらせたいと思ってます。…無理か？

次回は木曜日を予定しています。

感想・評価の方もいつでもお待ちしています。

ではまた。

第8話「お土産、何がいい？」「思い出。」「……」（前書き）

どうも。久々の更新です。更新が遅れた理由は後書きに。

ついに修学旅行編に入りました。
いつも通り展開無理やりなので、それでも構わないという方はそのままお進みください。

第8話「お土産、何がいい？」「思い出。」「……」

side　ネギ

今日から僕達3―Aの皆は、京都・奈良へ修学旅行に行く。
そのため、既に新幹線に乗り、出席を確認している。
それにしても、日本の古都である京都・奈良に五日間も行けるなんて、なんて素晴らしいイベントなんだろう！
修学旅行以外にも、関西呪術協会の長への親書の件。それに父さんの住んでいた家も探したいし…
こりゃ就任以来最高に忙しくなりそうだ！
とりあえず、今は先生として引率を頑張らないと。

「ネギ先生……」

ん？後ろから声をかけられる。

「あ…あなたは15番桜咲刹那さん……と、ザジさん。」

「はい。…私が班の6班なんですが、エヴァンジェリンさん他二名が欠席したので、6班はザジさんと私の二人になりました。どうすればいいんでしょうか？」

「えっ！？……あ、そうですか。困ったな…。」

やっぱりエヴァンジェリンさん修学旅行には来れないんだ…

あれ？

もう一人は茶々丸さんだとして、あと一人はだれだろう？

みんな来てたと思ったんだけどな…

「じゃあアスナさん、桜咲さんを。

いいんちょさんはザジさんをお願いできますか？」

「はいはい。」

「構いませんわネギ先生。」

「え……」

これで班の方はどうにかなったな…

「あ……せっちゃん。一緒の班やなあ…」

「……。」

「あ……」

このかさんが話し掛けると、桜咲さんは頭を下げただけで行っちゃった。
桜咲さん。このかさんとあまり仲が良くないのかな？

「ネギ先生…」

また後ろから声がかかる。今度はなんだ？

「あ……しずな先生。
3―A、欠席三名を除いて、全員出席が確認できましたよ。」

「…そう、ありがとう。
生徒はちゃんといるのね。生徒は……」

しずな先生が額を押えて、ため息を吐く。
…どうしたんだろう？

「何かあったんですか？」

「……いないのよ。」

「はい？」

「だから、あと一人いないよのよ。」

「えええぇぇぇ！？だ、誰がいないんですかっ！？
ぼ、僕、もう一回出席確認行ってきます！！」

「ああいいのよネギ先生。来てないのは生徒じゃないから…」

「え？それじゃあ…」

なんだかあの人の顔が浮かんだが、気のせいであってほしい。
流石にあの人も社会人だし、あの歳になって遅刻はしない…はず。

「あなたの副担任よ…」

「あ、アハハハ……」

や、やっぱりか。
まさか修学旅行を遅刻するなんて。
ナナシ先生らしいっていったら、らしいけど…

「って！！
どうするんですかっ！？
もう新幹線出ちゃいますよ！？」

「携帯にも、家電にもでないのよ。
せめてここに向かってくれてたならいいんだけど…、まだ部屋で寝てたら最悪ね。」

＜えー、この電車はひかり２１３号新大阪行きです。停車駅と到着時刻を…＞

「出ちゃいましたよ！？
どうするんですか！？」

「はぁ…。本当、どうするのかしらね……。」

な、ナナシ先生！
一体何してるんだ！？

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　噂のあの人

「先生！起きてください！電車の時間、もう過ぎてますよ！？
修学旅行どうするんですか！？
学園長にも頼みごと受けたんでしょ！？」

「んん……、あと……」

「あと！？あと5分とか言わないでくださいね！？
本当にヤバいんですから！？」

「……5日…」

「終わってます！
5日も寝てたら修学旅行終わってます！！
いいから起きてください！！！」

「…ん～ムニャムニャ。」

……まだ寝ていた。

ｓｉｄｅ　噂のあの人　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　刹那

清水寺に着いた。

新幹線では軽い妨害もあったが、今は落ち着いたようだ。
ネギ先生は親書を奪われそうになったが…

やはり１０歳では荷が重いのではないだろうか？

本来なら、その荷を軽くするためあの人がサポートに回るハズなん

だが…

……何故だ？

あの人の姿が見当たらない。

あの人は学園長が信頼し、直接依頼を頼むほどの方だ。
腕も立つと聞いているので、心配はいらないと思う。
しかし、姿が見当たらないのは妙だ。

……はっ！？

まさか私の知らぬうちに裏で動いているのか？

ありえない話ではない。
あの人は学園長から信頼されている人物。
既に危険を察知して、動いていても不思議ではない。それなら、今姿が見当たらないのも納得がいく。

あの人が危険を潰しに動いているのならば、私はお嬢様を守ることに集中すればいい。

…ナナシ先生。お嬢様のことは私に任せ、頑張ってください。

ｓｉｄｅ　刹那　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　知らぬうちに株が上昇中のあの人

「うおおおおい！？
完っ全に遅刻じゃん！？
どうすんだよ！？
テメェもいたんなら起こせよ！！」

マズッた。
初日は特に事件はないと思って油断しちまった。

「起こしましたよっ！！
でもどんなに呼んでも起きなかったんです！！」

「諦めんなよ！もっと努力したらきっと俺は起きていた！
そんなんだから周りから気付かれないで地味な生活送るんだよ！！」

「ひどっ！？
それが善意で起こしに来てあげた人に対して言う言葉ですか！？」

「うるせっ！

結局起こせなかったんだから意味ないだろ！
つーか何だよ着信２１件って！？」

「ずっと鳴ってたのに、先生が寝てて気付かなかっただけでしょう！！」

「やべぇ…。しずな先生ならともかく、新田からも電話きてんじゃん…。
絶対怒ってるってあのオッサン。
なんで卒業した後も怒られないといけないんだ？」

あのオッサン、何かと俺に絡んでくるんだよな。

「全部自業自得な気が…」

「あアっ！？」

「イエ、ナンデモアリマセン…」

最近、さよの奴なにかと言うようになったな。

…反抗期か？

「…にしても早く向かわないとな。
また切符買い直さないと……経費で落ちないか？」

「無理だと思います…」

「ですよね～」

「私が先生に憑いて修学旅行に行く案は…」

「無理。」

「ですよね～」

「「はぁ……」」

前途多難だな…

ｓｉｄｅ　知らぬうちに株が上昇中のあの人　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　天ヶ崎千草

フフ…。風呂場では失敗してもうたけど、今度は成功のようやな。

西洋魔術士がいるゆーても大したことあらへん。
簡単にこのかお嬢様を手に入れられたわ。
このままお嬢様に戻って来てもらえたら、ウチら関西呪術協会も…
「待てーっ！！」
「ム…？」
何や？
「お嬢様ーーっ！！」
「このかーーっ！！」
ちっ。
どうやらもう追っ手が来たようや。
「まったく。しつこい人は嫌われますえ。」
けど、捕まる気はあらへん。
ここはさっさと逃げんと。
駅には人払いの呪符を貼っとるし、電車に乗ればなんとかー
「待てーーーっ！！」
ならへんみたいやな…

まぁええ。
ウチにはまだ手がある。
「お札さん、　お札さん。ウチを逃がしておくれやす。」

「わ――――っ!?」
「な、何この水!?」
「ガボガボ――△※◎!?」

「フフ…。車内で溺れ死なんよーにな。ほな。」
こんどこそ一安心やな。
流石に水の中ならあの子らも…

―斬空閃!!

「……は?」

ドアに衝撃が…って!
マズ…

「あれ～～」

・

・・・・・・・・・・・・・・・

「ゲホゲホ！」

じ、自分でやったのに、えらい目にあったわ…

「み、見たかそこのデカザル女。
嫌がらせは諦めて、おとなしくお嬢様を返すがいい。」

「ハァハァ…。なかなかやりますな。
しかし、このかお嬢様は返しまへんえ。」

ここまで来たんや！
絶対に逃げきったる！！

「あっ、待てっ！！」

…にしても、ホンマしつこいなぁ。

いっそ、ここでとっておきのお札使ってまうか？

…うん。そうしよ。

なら―

「よーここまで追って来よったけど、終いですえ。
とっておきの三枚目。いかせてもらいますえ。」

「おのれ！させるか！！」

「遅いですえ。
…お札さん、お札さん。
ウチを逃がしておくれやす。
喰らいなはれ！！
三枚符術　京都大文字焼き！！！」

「！！」

「ホホホ。並の術者では、その炎は越えられまへんえ。
ほな、さいなら。」
これぱかりはどうしようもないやろ。
炎で時間稼いどる今のうちに―

「んだよ。そんなつれないこと言わないで、俺の相手してくれよ。」

「……はい？」

そう思った瞬間、ウチの意識は途絶えた。

ｓｉｄｅ　天ヶ崎千草　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ようやく来た男

…やっとだ。やっと追い付けた。

まさかこんなに遅くなるとは思わなかったけど、大事な場面には間に合った。

まぁ、俺がいなくても無事解決することはわかってんだけど、念のためにな。

近衛も無事みたいだし、安心安心。

にしても軽いなぁ近衛。

それとも女の子は軽くできてんのか？

「風花風塵乱舞！！」

「おっ？」

この魔法は…

「逃がしませんよ！！
このかさんは僕の生徒で……って、ナナシ先生！？な、なんでここに！？」

「ナッシー！？」

「ナナシ先生！！」

「ういっす。」

やっと気付いたか。
…つーか神楽坂。
この状況でその呼び方はないだろ。
空気ぶち壊しじゃん…

「修学旅行遅刻するなんて何考えてるんですか！？」

「えっ、遅刻？」

「いや、遅刻じゃない。
ただ待ち合わせの時間に着けなくて、少し遅れただけで…」

「世間一般では、それを遅刻って言うんですよ！
それに少し遅れたって、初日終わってるのに何が少しですかっ！！」

「うっ…」
「この人に少しでも尊敬を抱いた私がバカだった…」

桜咲が一人でブツブツ呟いているがほっとこう。

それにしても、まだ１０歳のガキに説教される俺。
……情けねぇ。

「はっ！？ナナシ先生！！お嬢様は！？」

おお、そうだ。
忘れるとこだった。

「あ～、ただ気失ってるだけだから問題ないだろ。
…ほれ。」

俺はゆっくり山並みに投げた。

「はい？……って、えええぇぇぇぇぇ！？」

―近衛を。

「な、な、な、な、何考えてるんですかっ！？

お嬢様をいきなり投げるなんて！？」

「いや、実際に近くで見た方がいいと思って…」「だからといって投げることないでしょう！？
何かあったらどうするんですかっ！？」

「大丈夫だ。そのためにゆっくり慎重に投げたんだから。」

「そういう問題じゃありません！！」

「むぅ……」

今日はなんだか年下から怒られてばっかだな。

そんなこと考えてると―

「う、うぅぅん…」

あっ。すっかりコイツ（天ヶ崎）のこと忘れてた。

気失ってるみたいだし、今のうちに取っ捕まえとくかな…

「させないよ。」

「なっ！？…ぐぅぅ！？」

「先生っ！？
神楽坂さん、お嬢様を。
私は先生を「させまへんえ？」なっ！？」

いきなり腹に衝撃がきたと思ったら、俺は数メートル後ろに吹き飛ばされた。
咄嗟に身体を強化させなきゃ、危なかった。
しかし、天ヶ崎との距離が離される。
桜咲も何かあったみたいだが…
なんだ……？
「悪いけど、ここで彼女を捕まらせる訳にはいかないんだ。今日のところは退かせてもらうよ。」
「テメェは！？」
…フェイト・アーウェルンクス！
なんでコイツがここに！？
コイツの登場はまだ後だったハズ…
「帰るよ月詠さん。」
「あぁん。もうですか～？ウチ、物足りまへんわ～」
ちっ！
今はそんなこと考えてる場合じゃない。

「そんな簡単に逃げられると思ってんのかっ！？」

俺は強化した身体のままで、フェイトに迫る。

そしてフェイトの身体に拳を叩きつけようと―

「あなたこそ。その程度で止められると思ったのかい？」

「なっ！？」

だが、俺の拳はむなしくも空を切る。

そしてフェイトは俺の背後に周り、俺の意識を刈り取る一撃を…って！？

「ぬぉっ！？」

あ、危なかった…。

後少し反応が遅かったら、もう一発貰ってた。

「…今のを避けるとは思わなかったな。

勘がいいのか、それとも……。

まあいいさ。それじゃ、さよなら。」

「あっ！待ちやがれ！！」

ちっ。転移で逃げられたか。

…いや、逃げてくれて助かったかもしれん。

フェイトと対峙してわかった。今の俺では、逆立ちしたって勝つ事はできない。

あのまま強硬手段に出られたら、守りきれなかった。

とにかく、助かったというべきか…

「「「先生っ！！」」」

…どうやらアイツらも無事のようだ。

原作通りになれば無事解決すると思ってたけど、そうはいかないかもしれん。

さっきのこともあるし、何があるかわからない。

なんせ俺というイレギュラーを抱えてるんだ。

原作通りってのが元々無理なのかもしれない。

この修学旅行。

簡単には終わらないかもな…

～おまけ～

「シクシクシク…」

「オイ…」

「シクシクシク…。修学旅行、行きたかったな…」

「オイ…」

「あ～あ。先生は今ごろ、豪華な旅館で旅行を満喫してるんだろうな。」

「いい加減にせんか貴様ぁぁ！！！」

「ひゃあ！？

…なんだエヴァさんか。

少し静かにしてください。」

「ム…スマン。つい…って、違う！！」

「だからなんですか一人で騒いで…、ヒステリックですか？」

「なんで貴様が私の家にいるんだ!?
それと誰のせいで騒いでると思ってるんだ!?」

「だって先生が此処に行けば、私が見える人がいるって……。
というよりエヴァさん!
私のこと見えてたんですね!?
なのに、なんで教室で話し掛けてくれなかったんですか!?」

「周りからお前が見えてないのに私が話し掛けたら、一人で喋ってるアブナイ奴だらうが!!」

「それでも、私見えてますよ。的なアクションをしてほしかったです!」

「できるかぁ!
第一なんで私がお前を構わなきゃならんのだ!?」

「そんなつれないこと言わないでくださいよ!
修学旅行に行けない人同士、仲良くしましょうよ!」

「ええい、よるな!」

「エヴァさ～ん。」

「マスター…。先程からお一人で一体?」

「ケケケ、キニスンナ。」

「私にこんな面倒な奴押し付けて…。
帰ったら覚えとけよあの童貞神父！！」

「うるせぇぇ！！！」

「い、いきなりどうしたんですか！？」

「いや？なんだか悪口言われた気がして…」

「はぁ……？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第8話「お土産、何がいい？」「思い出。」「……」（後書き）

実は自分、こないだからバイトを始めまして、慣れてない所為もあり、疲れが酷く、なかなか更新できませんでした。
今後もこのような事があると思うので、更新は週に1度ぐらいになると思います。

更新が遅れても、作品を途中で放棄する気はないので、どうかこれからもよろしくお願いします。

関係ないですが、感想・評価お待ちしてます。
自分のやる気にも影響するので、ぜひお願いします。

第9話　「真面目は苦手なんだ。」「…見た目どおりやね。」（前書き）

9話にさしかかり、ついに12万アクセス突破！
これが早いのか遅いのかわかりませんが、お気に入り件数も少しずつ増えているので、よりいっそう頑張りたいと思います。

最近、この物語のヒロインがこのかに思えてきた件…
このかが好きなので、つい登場させてしまうんですよね。
早めに登場したさよは出番少ないし…

まあ気にしないでいきたいと思います（オイッ

第9話　「真面目は苦手なんだ。」「…見た目どおりやね。」

「―それでは麻帆良中の皆さん、いただきます！」

「「「いただきまーす！！！」」」

「…まーす。」

修学旅行2日目。
現在は大広間にて朝食中。
にしても眠い…。
昨日旅館に着いたのも遅かったし、よりによって新田に見つかって説教をくらった。
そのせいで全然眠れていない。

「ふぁああ…」

今日の自由行動は、見回りやめて寝てようかな？

「ナッシー眠そうやね。」

ん？

「お～近衛。おはよ。」

「おはよ～。」

ふむ。相変わらず癒される喋り方だな。
一家に一人癒しとして欲しいぐらいだ。

「夕べはありがとな。
よーわからんけど、助けてくれて。」

「いやいや、礼なら桜咲や神楽坂達に言ってくれ。」

実際俺はおいしいどこ取りしたようなもん。
それに一番頑張ったのはアイツらだし。

「……あ！せっちゃん。」

「……！」

桜咲がビクッと身体を震えさせたと思ったら、そそくさと移動する。

「あんっ何で！？
恥ずかしがらんと一緒に食べよ！」

ダッ

あ、逃げ出した。

でもそんな風に逃げたら―

「せっちゃん、何で逃げるん!?」

「わ、私は別にっ!」

追い掛けるよな普通…

これは仲良くなったと思っていいのか?

いや、正しくは仲が戻ったか。

なんにしても良い傾向であるのは確かだ。

「何々?桜咲さんのあんな顔はじめて見た~。」

「昨日の夜、何かあったのかな?」

「ううっ…。私の知らないところで何か楽しいことがあったのか?」

「ナッシー、何か知らないのっ!?」

「ナッシー言うな。」

上から和泉、佐々木、明石、椎名という順。

この面子はクラスでもよく話し掛けてくる奴らだ。

「で、なんだって？」

「だから！なんでこのかと桜咲さんがあんな風になってんの？昨日いったい何があったの！？」

「椎名…。それを聞いてしまうのか？」

「えっ？何？まさか重い内容？」

「旅行に行き、夜が明けたら関係が変わってる。だとしたら答えは１つしかないだろ？」

「ゴクン…。まさか…？」

「そう。そのまさかだ。近衛と桜咲は昨日のうちに大人の階「何適当なこと言ってんですかっ！？」だべらっ！？」

ぐおぉぉぉ…。

朝から後頭部につっこむとは…。

つーか、トレイを叩きつけるのはマズいだろ。

「はあ…はあ…。目を離した瞬間これですか？」

「いや、冗談だよ？あれだよ。軽い旅行ジョークじゃん？
だからそんなマジに…」

「……。」

―ジャキン

「嘘ぉぉぉ！！！
すいません！ちょっとしたジョークのつもりだったんです！！
俺が悪かったからその物騒な物しまって！
みんな見てるからぁ！！」

「……チッ。」

舌打ち！？

桜咲も原作と変わっているかもしれない。
…もちろん悪い方向に。

「ナッシー、うちよりせっちゃんと仲ええんやな…。うちにはツッコミなんか入れてくれへんのに…」

近衛が悲しそうな顔で話し掛けてくる。

斬り掛かられたのに仲が良いと？
一度この子にいい眼科を紹介した方がいいかもしれない。

てゆうかツッコんでほしいのか？

「ナッシーは今日どうするの？」

「俺？」

「うん。今日の班別行動、ナッシーはどうするの？」

予定か…。

2日目は確か原作では何もなかったんだけど、昨日のこともあるしなぁ。

何か予想外の事が起きてもおかしくない。

そう考えると近衛のいる5班に付いていった方がいいと思うんだが…

俺にも教師としての立場がある。

ネギもおそらく5班に付いていくだろう。

てことは5班には教師が2人付くことになる。

魔法先生である瀬流彦とかは近衛のことを説明すればなんとかなる。

だが、新田やしずな先生達を説得するのは難しい。

一般人に近衛のことは説明できないしな。

でも説得しないと俺は見回りか他の班に付き合わされる訳で、近衛の警護が出来なくなる。

…どうしようかなマジで？

「で？どうなの？」

「俺は……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「―告るのよのどか。
今日ここでネギ先生に想いを告白するのよ。」

「え～～!?そ、そんなの無理だよぅ!」

「無理じゃないわよ。
いい!?修学旅行は男子も女子も浮き立つもの!

麻帆良恋愛研究会の調査では、修学旅行期間中の告白成功率は８７％を超えるのよ！」

「ははははちじゅうななな？」

「しかもここで恋人になれば明日の班別完全自由行動日では、２人っきりの私服ラブラブデートも……！」

「ラ、ラブラブデート…」

「ん～。残念だけど、ネギは明日仕事があるんだよ。」

「あっ、そうなの？
だったらデートは最終日に……ん？」

「でも告白するんだったらはっきり言った方がいいな。
ネギは１０歳だから、その辺疎いと思うし。」

「「「きゃあああ！？」」」

「おおっ！？」

「な、なんでいるのよナッシー！？」

「やほー。」

はい。どうもナナシです。
結局5班に付いていくことにしました。
やっぱ何が起こるかわかんないし、念には念をな。
……え？
新田はどうしたって？
ハハハ、愚問だな。
あの鬼を俺が説得できるわけないだろ？
できないから黙って出てきた。
バレたら怒られるかもしれんが、バレなきゃいいんだよ、バレなきゃ。
「にしても青春してるね～若者達。
俺の学生時代もそんな甘い話が1つや2つ……ないな。」
「いやいやいや。ナッシーの灰色の学生時代はどうでもいいから。」
「灰色……。しかもどうでもいいって…。」
中学生に灰色言われる俺の学生時代っていったい…？

「…先生、今の話聞いてたですか？」

「ん？宮崎がネギに告る話か？」

「あ、あのその私はそのあれ！？」

「のどか、落ち着くです。」

…おお。見事にテンパってんな。

「でも、よく私達のいる場所わかったわね？」

「なに、俺のセンサーが並々ならぬラブ力を感じてな。その力を追ってみたら、此処にたどり着いたんだよ。」

「「ラブ力っ！？」」

「アホです…」

まぁ嘘だけど。

ただ原作知識で、５班が奈良公園に行くこと知ってただけだし。

「なんにしても、俺は応援してるぜ？
頑張ってネギをゲッチュしてくれ。」

「ゲゲゲ…」

の鬼〇郎？

「ゲッチュ！？」

今日一番の大声ありがとうございます。

「ナッシー、アンタ教師なのに応援していいの？
生徒と教師の恋愛をさ？」

「あ～、別にいいんじゃね？
恋愛なんて個人の自由なんだし。」

「…忘れてた。ナッシーに教師の自覚なんてあるわけないんだ。」

「失礼な。俺にだって自覚ぐらいあるぞ？
なにせ生徒のことを一番に考えてるしな。」

「そういうことじゃないんだけど…」

むぅ…。何がいけないんだ？

「とにかく！のどか。今日はアンタにネギ君と2人っきりの状況を
作ってあげるから！
行くよ夕映！」

「ラジャです。」

「あっ、ちょ！？
まだ心の準備が……」

「…まあ頑張ってくれよ。若者達よ。」

さて、俺も近衛を探さないと。
じゃないと、なんのために新田から逃げてきたかわからなくなる。

…にしても、俺も老けたかな？
他人にあんなこと言うなんて。

つーかこんな事考えてる時点で老けた証拠かもしれんが…

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「…いないな。」

とりあえず奈良公園を探し歩いているんだか、これがなかなか見つからない。
近衛も多分桜咲を探して歩き回ってると思うんだが…

「まさか公園外ってことはないよな?
それともまさか敵に……って、あれ?」

休憩所みたいな場所のベンチに1人で座っている奴がいる。

…あれ近衛だよな?

てっきり歩き回ってると思ったんだが…

「お嬢さん、1人で何してんの?」

「え?……あっ…ナッシー……。」

うん。見るからに元気がない。

多分というか１００％桜咲のことだと思うが…

「元気ないな。
ほれ、飲み物でも奢ってやるから元気だしな。」

「いや、別に奢らんでも…」

「何がいい？
女子ならイチゴオレか？
それとも紅茶か？」

「……イチゴオレで。」

「はいよ。」

自販機に金を投入する。
ついでに自分用のイチゴオレも購入しとく。

…なんだよ？

２０過ぎた大人の男がイチゴオレ飲むのはおかしいか？
いいだろウマいんだから。

「ほらよ。」

「あんがと…」

「それで？」

「それでって？」

「悩みがあんだろ？
これでも神父だし、相談事には慣れてるからな。
特別に出張ナナシのお悩み相談コーナーを開いてやるぞ？」

「プッ…。なんなんそのネーミング？」

「わかりやすくていいだろ？」

「…うん。そうやな。ナッシーには知っといてほしいしな。
…ウチの話、聞いてくれる？」

どうやら相談してくれる気になったようだ。
これは近衛に信用されてると考えていいのかな？
だとしたら、とてつもなく嬉しいんだが…

「おう。何でも聞いてやるぜ？
一時間でも二時間でも好きなだけ話しな。」

「ハハ、流石にそんな話さんけどな。
…それでな、ウチ麻帆良に来るまでは京都に住んでてな…」

・　・　・

・・・・・・・・・・

「―てことなん…」

一通り近衛の話を聞き終えた。

知っていたとはいえ、近衛の辛そうな顔を見ると、こちらも胸が重くなる。

「昨日せっちゃん達が助けてくれた時は、ウチのこと嫌ってる訳やなかったんと思ったんやけど…。
せっちゃん、今日の朝も、さっきもウチから逃げるから。
ウチ、せっちゃんに嫌われることしたんかなぁと思って…」

「……。」

「え？ナッシー？」

俺は無言で近衛の頭の上に手を置いて撫でる。

「どうしたん？」

「…大丈夫だ。」

「えっ？」

「桜咲は近衛のこと嫌ってる訳じゃない。
むしろ大切に思ってる。
ただ…そうだな、照れてるだけだ。」

「…そうなんかな。」

「そうだって。だから何にも心配することないって。修学旅行が終わるころには、昔みたく仲良く話してるさ。」

「ほんま？」

「ああ、俺が言うんだ。
間違いない。
神に誓っ…いや、アイツだけには誓わん。」

「はい？」

危ねぇ…。
間違ってとんでもない奴に誓うとこだった。
二度とこんなミスしないよう気をつけないと。

「いや、なんでもない。
…コホン。とにかく、近衛は今までどおりに桜咲に接してればいいさ。

そうすればきっといつか応えてくれるから。」

「…うん。なら、ウチ頑張ってみるわ。」

…少しは元気が出たかな？

「そうそう。その意気だ。２人ともいい子なんだ。
俺としても、そんな２人がいつまでもすれ違ってんのは嫌だしな。」
そう言って近衛の頭を思い切り撫でる。

…なんか癖になりそうだなコレ。

「ちょっ、ナッシー！？」

近衛が頬染めて抵抗する。
名残惜しいが、その顔に免じてやめてやろう。

それにしても、頬染めた顔で上目遣いは反則だと思う。

それだけで何人か殺せそうだ。

勿論死因は萌死にだが…

「よし。相談コーナー終了！
そろそろ集合時間だし、他のメンバーと合流しようぜ。」

そういえば、宮崎はもうネギに告ったかな？

誤って、告白中に合流することだけは避けないと。

「ナッシー。」

「うん？」

近衛が話掛ける。

なんだ？
まだ話があるのか？

「あんがとな。
ナッシーのおかげで元気出たわ。ナッシーに相談して、ほんまよかった。」

そういい俺に微笑む。

なんだこの子…可愛いすぎるだろ。

危うく俺が萌死にするとこだった。

この子もいずれネギの毒牙にかかるのか…
羨ましすぎるっ！！

「また悩み出来たら相談させてな？」

「いつでも相談しにきな。近衛みたいな美少女だったらいつでも大歓迎だから。」

「…び、美少女〳〵。」

さて、行くか。

にしても、やっぱ俺に真面目な空気は似合わないな。
もっと緩い空気じゃないとな。

頼むからシリアスな空気だけは止めてくれよ？
そんなもん一生なくていいから。

ｓｉｄｅ　このか

うぅ～。最後にあんなん言うなんて反則やろ。

おかげでさっきから顔が熱い。

鏡見んでもわかる。
今ウチの顔は真っ赤になっとる。

頭撫でられた時も真っ赤になったと思うし、その顔は間違いなくナッシーに見られとる訳で…

あ、あかん。
また顔が赤くなりそうや。
にしても撫でられるのは気持ちよかったなぁ。
抵抗しなければよかったかな？

でもナッシーが相談に乗ってくれるとは思わんかったな。
いや？別に信用しとらん訳やないよ？
ただ真面目な返答をしてくれるのが予想外なだけで…
でもそのおかげで元気出たし、せっちゃんもウチのこと嫌ってないと思えたし。

そういえばナッシー、せっちゃんの事よくわかってるみたいやったな。

朝も仲よさげやったし…

なんや？急にムカムカしてきた。

ナッシーがウチよりせっちゃんと仲よさげに話しとったからかな？
それとも逆で、せっちゃんがウチよりナッシーと仲よさげに話してるから…？

ん～？どうやんなろ？

今度三人でしっかり話した方がいいかもしれんなぁ。

ふふ、楽しみや。

ｓｉｄｅ　このか　ｅｎｄ

～おまけ～

旅館に戻り、ネギが朝倉に魔法の存在がバレた時、ナナシは―

「…ナナシ先生。」

「ハイ…」

「何か言い訳はあるかね？」

「いや、これには海よりも深い訳が…」

「あるのかね？」

「…アリマセン。」

「見て。ナッシー、新田先生に怒られてる。」

「本当だ。…クスクス」

「そこのロリ双子！笑ってんじゃねぇ！」

「こらっ！生徒に当たるな！！」

「ぐっ。…スミマセン。」

「やーい。また怒らてやんの。」

「ふふ、じゃあ頑張ってください。」

「…くそっ。覚えてろ。」

「…どうやら反省していないようだな。」

「してますっ！！
もう頭の中には反省の2文字しかないです！」

「どうだか…。
とにかく、ナナシ先生は明日までロビーで正座してなさい。」

「はぁ！？
ふざけんなジジイ！！！
今から明日まで正座ってバカじゃないの！？
つーかバカだろアンタ！？鬼！！人でなし！！」

「……何か言ったか？」

「さっ、正座しよっかな～。
朝まで正座できるなんて最っ高！
自分正座大～好き！」

「…ふん。」

「死ねジジイ（ボソッ）」

「あっ！？」

「あ～もうこの床気持ちいぃ～！！

これならいつまでも正座できるわ。」

やはりバレた。

哀れ、ナナシ。

to be continue ？

第9話　「真面目は苦手なんだ。」「…見た目どおりやね。」（後書き）

はい。ということで第9話終了です。
…新田ってこんな感じだっけか？

いきなりですが、皆様に質問です。
キャラクタープロフィールや主人公設定みたいのって書いた方がいいんですかね？

なにぶん未熟なのでその辺をどうしていいか分かりません。
もし、書いた方がいいならお伝えしてくださると助かります。

次回の更新は1週間以内を予定してます。

ただ、私自身が四日間修学旅行に行くので、守れるかはわかりません。

感想あれば守れるかも！？
ではまた次回。

第１０話「生徒狩りじゃあああ！」※１０／２３　誤字修正（前書き）

久々の投稿になってしまいました。
自分の修学旅行が終わったら、次はテスト週間に突入して…。
実際投稿してる場合じゃないけど、勉強しようと思うとアイディアが浮かんできてつい…。

今回内容メチャクチャになってます。（いつもか？）
ではどうぞ！

※１０／２３　に誤字報告が有り、修正しました。

第１０話「生徒狩りじゃあああ！」※１０／２３　誤字修正

ｓｉｄｅ　カモミール

「名付けて
『くちびる争奪！！
修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦！！』」

「「「ええええっ！？」」」

「「「キスーー！？」」」

姉さんが今回の作戦を発表する。
ちなみに姉さんとは、麻帆良のパパラッチこと朝倉和美。
つい先ほど兄貴の正体を知っちまったが、俺っちは姉さんの光るもんを見逃さなかった。

思った通り、ナイスな企画を提案してくれた。

これが成功して、カードを大量ＧＥＴできたら……

…グフフフフフ。

「ねぇ朝倉？」

「ん？どしたの？」

「キスするのはネギ君だけなの？」

「え？……あ～。そういやあの人もいたか。」

あの人？

…旦那か。

「…で、どうなのカモっち？」

姉さんが声を潜めて話しかけてくる。

確か旦那も魔法使いらしいし、それなら―

「問題ねぇ。旦那もＯＫにしよう。」

「りょーかい。」

兄貴だけじゃなく、旦那の分のカードもＧＥＴできたら……

…グへへへへへ。

「えっと、別にキスするのはネギ君じゃなくてもいいから。」

「でもネギ君以外って、ナッシーだよね？

いいの？変態だよ？」

「「「うっ！！！」」」

「…確かに。それならネギ君の方が…」

「いや、でも年齢的なことを考えるとやっぱり…」

「それでも変態はやっぱりちょっと…」

旦那…あんたも苦労してんスね。

自分の生徒から、こんな風に思われてるなんて…

「古。お主はどうする？」

「ん～やっぱりワタシはネギ坊主より、ナッシーアルね。

ナッシーとは一度手合わせしてみたかったアルよ。」

「ふむ…。それでは拙者も…」

「楓も参加するアルか？」

「拙者もあの御仁には興味があるでござるからな。」

…どうやら旦那にも人気はあるようっスね。

随分偏った人達から慕われてるみたいスけど…

「よーし。それじゃ

『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&ナッシー

とラブブキッス大作戦』開催しちゃうよー！！」

「「「いえーい！！」」」

ｓｉｄｅ　カモミール　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　噂の変態

新田から俺への拷問…じゃなくて、イジメ…でもなくお仕置きを受け、数時間―

「私は一度部屋に戻り、見回りを行うが……。けして、逃げたりしないように。」

「イヤダナ―。オレガソンナコト、スルワケナイジャナイデスカ。」

「…えらく棒読みな気がするが、まぁいいだろう。

そのまま反省してるように。」

「了解です！」

そう言い残し、新田がロビーから去る。

この時を待っていた…！

新田の馬鹿め。

この俺を1人にするなんてな！

「よっしゃ！さっそく逃げ「……。」…ないようこれからも頑張ろ。」

「……ふん。」

このジジイぃぃぃ！！！

黙って戻って来るなんて反則だろうが！

思わずマークが解けたと思って、逃げ出すとこだったじゃねぇか！

…しかし、まいったな。

これじゃ迂濶に逃げ出しでもしたら、すぐにバレて、またお仕置きされそうだ。

今度はお仕置きですめばいいが…

くそっ。

なんで俺だけがこんな目にあわなきゃならないんだ？

「――――！」

「ん？」

今なんか聞こえたような？

修学旅行2日目の夜、何かあった気がする。

俺が忘れている重要な何かを…

この状況を変えれる何かを…

「よーし。それじゃ
『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&ナッシーとラブラブキッス大作戦』開催しちゃうよー！！」

「「「いえーい！！」」」

……！

「これだぁぁ！！！」

―その時、ナナシの浮かべた笑みは、とても聖職者とは思えないモノであった。

・～・～・～・～・～・～

「『ネギ先生&ナッシーとラブラブキッス大作戦』いよいよスタート。
状況は報道部　朝倉がお送りいたします。
ちなみに、ナッシーは既にロビーから逃げ出してるので、注意してください。」

～・～・～・～・～・～・

始まったか。

つーか、何？

ネギだけじゃなく、俺もキスの対象に入ってんの？
いや、別にかまわないんだけどね？
ただ、俺をターゲットにする奴がいるのか？
「見つけたアルよ。」

「ニンニン。」

ん？

呟くような声が聞こえ、後ろを振り向いてみると―

「ほう…。イエローにブルーか。」

いたよ。
俺を狙っている奴ら。

でもまさかコイツらが俺を狙ってくるとは。
俺は知らぬうちにフラグを建てたようだ。

まさか…ついに俺にもモテ期が！？

「さっそく拙者達と手合わせお願いするでござる。」

「さあ。勝負するアルよ！最初からナッシーと戦えるなんてラッキーアル。
…って、なんで泣いてるアルか？」

「いや、勘違いした自分が情けなくて…」

「「？」」

そうだよねー。
俺がフラグを建てれる訳ないよね。
この2人が狙ってる次点で、目的は手合わせか勝負って決まってんじゃん…

いつになったら来るんだろ俺のモテ期？

…来ないことはないよな？

「よくわからないアルが、来ないならこっちから行くアルよ？」

仕方ない。
今は俺のモテ期のことは忘れて、この2人の相手をしなければ。

この企画に参加している以上、2人も俺のターゲットであることは変わりない。

「俺に勝負挑んだこと…後悔するなよ？」

全力でいかせてもらう。
みせてやるぜ。
俺の本気ってやつを！

「「ゴクン……」」

いくぜっ！

「新田先生ぇぇぇぇ！！！ここに部屋を抜け出した生徒が２人いまーす！！
来てくださーい！！！」

「「えええぇぇぇぇ！？」」

「はっはっは！ざまぁみやがれ！
これでお前らも新田に捕まって、俺と同じく朝まで正座だ！！」

「おかしいアル！！
今の流れ的にここは普通に勝負するとこじゃ！？」

「うるせぇ！
何が悲しくてお前らと勝負しねぇといけないんだ！？そんなことする暇あったら、俺は１人でも多くの生徒を俺と同じ目にあわせてや

る！！」

「「最低でアル（でござる）この教師！？」」

フフフ、何とでも言うがいい。
俺は1人であの地獄を味あわなきゃいけないなんて、まっぴらごめんだ！

「さあ！大人しく新田に捕まって、朝まで俺とともに正座して過ごそう！！」

「嫌に決まってるアル！
逃げるアルよ、楓！」

「あいあい！」

「もう遅い！
新田はお前らを捕まえに、もうここまで「ナナシー！いい加減にせんかっ！！」…はい！？」

新田が2人…というか、あきらかに俺の方向にやってくる。

まさか標的は俺だけか！？

「嘘ぉぉぉ！？」

俺も逃げないと！

「馬鹿アル！
自分で呼んどいて、自分が追い詰められてアル！
バカチェリーアルな！」

「てめぇ何だバカチェリーって！？
お前チェリーの意味わかって言ってんのかっ！？」

「それはでござるな…」

「お前も説明しようとしなくていい！！」

って、馬鹿してる暇じゃない。
このままじゃ捕まるのも時間の問題。

あの手を使うか…！

「前年度『ウルティマホラ』の優勝者であるクーフェイですが！！」

「…急に何を言いだすアルか？」

「本人も気にしてる貧相なバディのサイズは、上からＢ「にゃ、にゃにを言いだすアルかー！！！」…かかった！」

「ほえ？」

「―隙あり！！！」

「なっ！しまっ―」

ケガしない程度の力でイエローの足をはらう。
だが、そんな微弱な力でもテンパっている奴を転ばずには充分であって―

「コラクーフェイ！
何やっとるかー！！」

「にゃわーー！？」

よし。
囮作戦成功。
これでまずは1人目。

「…ひどい事するでござるなぁ。」

「ブルーよ。勝負の世界は非道なんだぜ？」

「ナッシー殿が非道なだけでは？」

「失礼な。…待て、なんだナッシー殿って！？」

「何か問題でも？」

「問題しかないわ！」

〜・〜・〜・〜・〜・〜・

「な、な、なんという番狂わせ！
最初の犠牲者は2班クーフェイだぁぁ！！
これで2班は戦力半減。
長瀬楓、いったいどうするのかぁ！？

……って、カモっち。
なんかナッシー暴走してるっぽいけど、大丈夫なのアレ？」

「わかんねぇ…。
…って、え〝っ！？」

「うわっ？
いきなりどうしたのカモっち？」
「あ、兄貴がいっぱい…」

「は？ネギ君がいっぱいって……え〝っ！？」

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

ふう。
なんとか逃げきれたか。

にしても、さっきのでブルーを潰せなかったのはミスったな。
正面からぶつかっても、勝てるかわかんねぇから、不意討ちで潰すつもりだったんだが…
さすがに二度目は通用しないだろう。

まあ、イエロー1人片付けただけで、よしとするか。
さっさと次の獲もｎ…もとい生徒を探さないと。

「あれ？」

前方にいる、あのチビで赤毛のガキはネギだよな？

…うん。間違いない。
あんなの日本にアイツしかいない。

悪いがネギにもイエローと同じ目にあってもらおう。そのためにまずは「ナナシ先生。」

「ちょっと今作戦考えてんだから話かけんなよ。」

えーと、結局どうするんだっけ？

…普通に襲っちまうか？

「先生。」

「いやだから話かけんなって。
後でいくらでも話てやるから。」

うん。そうだな。
襲っちまおう。
今のネギの実力ならなんなく襲えるし。

じゃあさっそく―

「先生。」

―プチン

「だあああっ！？
なんだよさっきから！？
話かけんなって言ってんだろうがっ！！」

誰だよ！
さっきから話かけてくる馬鹿はっ！？

ここは一発ガツンと説教してやる！

そのためにも、話かけてきた奴の顔を見るために、とりあえず後ろを振り返ってみると―

「……ネギ？」

そこにはチビで赤毛のガキであるネギがいて…

「いやいやいや！
えっ、何？どういうこと？だって前にもネギがいて、ここにもネギがいるって、ありえないでしょっ！？」

それともまさか双子！？

俺と同様のイレギュラーな存在か？

「ナナシ先生、キスしませんか？」

「……はあっ！？
お前、なに言って……あ。思い出した。」

コイツ、本物じゃなくて、紙型でできた身代わりじゃん。

確か原作では５・６体いて、それが原因でみんな新田に捕まるんじゃなかったっけ？

…あれ？
だったら今俺がやってること無駄じゃね？

俺が何人道連れにしても、結局参加者全員捕まるんだから。

いやー。

やっぱり何十年も前のことは忘れるもんだね。

すっかり忘れてたわ。

ま、これで俺が頑張る必要がなくなった訳だから、後は高見の見物を「チュー。」…できないな。

まずは俺を狙ってる

ネギ（偽）をなんとかしないと。

はあ…。にしても、何が悲しくて男にファーストキスをせがまれなきゃいけないんだ？

せめてネギが女の子ならまだいけ……ないな。

普通に１０歳は攻略外だ。

俺のタイプはしずな先生みたいな人だし。

っと。そろそろネギ（偽）を処理しないと。

テキトーに衝撃与えれば、なんとかなんだろ。

「チューー。」

だからしねぇっての。

「うわ…」

「ね、ネギ君とナッシー…そっちの趣味があったんだ…。」

「げっ。」

…明石にピンク。

しまった。誰かに見られる訳にはいかないから、早めに処理したかったんだが…

「うう…。ネギ君が私になびかない訳がこれだなんて…。しかも相手がよりによってナッシーだなんて。」

「待て。お前らは激しく誤解してる。違うんだ。落ち着いてくれ。後、ナッシー言うな。」

「ダイジョウブダヨ？
センセイタチニソンナシュミガアッテモ、ワタシハゼンゼンキニシナイカラ？」

「思いっきり棒読みだし、最後疑問ついてんじゃねぇか！」

コイツら完璧誤解してやがる。
ネギ（偽）が術でできてるなんて説明できないし、なにかうまい言い訳を！

「あのな？これは朝倉が用意した偽者で、誰に構わずキスをせがむんだよ。」

よし。我ながらナイス言い訳。

「信用できないよ！だってー」

「ナナシ先生大好きです。」

「ほらぁ！！」

「何余計なこと言ってんだてめぇ！？」

余計誤解されちまったじゃん！

もう、どうすんだよこの状況！？

「やっぱり、ナッシーが女性より男性にモテる噂は本当だったんだ…」

「何か聞き捨てならない話が聞こえたんですけど！？なにその噂！？」

「あれ？ナッシー知らなかった？

ナッシー、麻帆良じゃ結構モテてんだよ？よかったじゃん？
…主に運動部や体育会系の男性達にだけど。」

「よくねぇよ！俺はノーマルなの！」

なんであの学園にはろくな奴がいないんだ！？
やっぱ学園長がろくでもない奴だからか！？

「それに…ほら。ナッシーの写真集だって出てるし。」

「嘘ぉぉぉ！？」

「本当だよ？確か高畑先生のと同じぐらい売れてるし、図書館島にも寄贈されてるらしいよ。」

そう言って、携帯の画像を見せてくる。

そこには確かに俺の写真とタイトルが…

『ナナシ・クラート
～酒と涙と男と漢～』

「男だらけじゃん！？
最後女じゃないの！？
なんだよ『漢』って！？」

―バキッ

「あたしの携帯が!?」

明石が何か言ってるが無視だ無視。
誰だ?こんなもんを作った奴は。

―写真集を作ったのが、君だけだとは思わないでほしいね―

不意にそんな声が聞こえた気がした。

タ　カ　ミ　チ　か!!!

あの野郎。俺がタカミチ写真集作ったの知っていやがったな。
その仕返しに俺の写真集を作って…。

アイツ性格悪すぎだろ!!

「ネギ君…」

「まき絵さん…」

はい？

「えっ？2人ともあたし達が話してる間に何があったの？
なんでそんないい雰囲気になってんの？」

「ピンクがピンクのオーラ出してるし。
てか、さっきまでずっと俺のこと狙ってたのに、この心変わりの早さは何？」

いつまでもネギ（偽）に狙われるよりはマシだが、なにか釈然としないものがある。
2人は既にキスまでしそうな勢いだし。

うん？
また何か忘れてる気が…？
これ以上何を忘れてんだ？

さっき思い出したのは、ネギの偽者が何人かいて、それが原因でみんな新田に捕まるだから…

確か、捕まったのはネギ（偽）にキスしようとしたからで……キス？

…あっ！

「そのキス待っ―」

―チュッ

「！」

「では、任務完了ということで、ミギでした。」

―ボンッ！！！

「「「ぎゃっ！！」」」

・　・　・　・　・

「「「……ケポッ。」」」

～・～・～・～・～・

「こ…ここで5班を除くメンバー＋新田、ナッシーも脱落！
しかもネギ先生は全員ニセモノ！！
この瞬間、トトカルチョは親の総取りか～～っ！？」

『コラーッ！！そんなアホな朝倉！！！』

『食券返せ！』

「よし。ずらかるよカモっち！」

「たいした収穫がねぇが…仕方ねぇぜ！」

「…ほう。どこにずらかるつもりだ？」

「それは勿論…って！？
に、に、新田先生ぃ！？」

「主犯はナナシだと思ったんだが、どうやら違っていたようだな…
！」

「に、新田先生…。れ、冷静に！冷静に話し合いましょう！」

「私はいたって冷静だ。
なんたって、頭の中が煮えたきって、逆にスーっとするほどだから

な。」

「メチャクチャ怒ってるじゃないっスかっ！？」

「問答無用！！」

「ぴぎぃいいぃ！」

「全員朝まで正座っ！！
勿論ネギ先生も！」

『『『あ～あ…』』』

・～・～・～・～・～

結局、優勝したのは原作通り宮崎だけでおり、参加者みんなロビーで正座することになったが―

「ハッハハハ！！
馬鹿だ！馬鹿どもがいる！修学旅行で叱られて、しかも正座させられてる馬鹿が…痛っ！？」

「馬鹿はお前だナナシ！！教師が積極的に規則を破ってどうする！？
まったく！成長したのは見た目だけか！？
学生の時もあれ程規則を守れと言ってだろう！？
なのにお前ときたら…」

「あ～ハイハイ。俺が悪うございました。」

今回は説教を覚悟して参加したから、怒られても別にいいんだが、
それより―

「ハイは1回！！」

「…… ハイ。」

「「「クスクス…」」」

周りの視線が辛すぎる。

なんだ？
自分の生徒達の前で説教って？

こんなん新手の羞恥プレイじゃん。

「女子高エリアに忍びこんだ時も…」

「わぁーっ！！！
それは今言わなくても言いじゃないですかっ！？」

「いいや。この際だからとことん言わせてもらう。
そもそもお前は教師の自覚が足りな過ぎで…」

こ、こんなことなら参加しない方がよかった…

～おまけ～

「…瀬流彦先生。」

「ん？どうかしました？」

「先生は俺のその…えっと…しゃ、写真集のことを知っていたり…？」

「勿論知ってますよ！
ほらここに。
高畑先生とナナシ先生の初回限定版の２冊が…」

―ボッ

「ああっ！？
僕の家宝が燃えて！？」

「本っ当にろくでもない奴しかいないなウチの学園は！！」

―君もそのろくでもない学園の人達の一員だけどね―

「うるせぇよ！！」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１０話「生徒狩りじゃあああ！」※１０／２３　誤字修正（後書き）

はい。第１０話終了です。ついに話が２桁に突入しましたよ２桁に。
（↑ここ大事。）
実際たいして書いていないけど、１０話までいくのは長かったですね…

さて、ここで本分の説明ですが、ナナシは生徒には嫌われてません。
むしろ慕われています。
けど、変態だという認識です。
友達と接するなら楽しいけど、異性として見るのはちょっと…。
という感じが３―Ａの共通認識です。
…何人か例外（？）はいますが。
こんな主人公でハーレムなんてできるのか？
…無理だな多分。

それと自分の作品での新田は、ナナシの学生時代の担任ということにしてます。なので現在は説教キャラとして活躍してもらってます。

次回は１０月中にもう一度更新できたらいいなと思ってます。
ではまた次回。

※前回感想を頂いたのに、更新がいつも以上に遅くなってすいませんでした。
こんな作者ですが、これからも感想を書いていただけると、大変励みになります。
ぜひ感想お願いします。

第１１話「一級フラグ建築士と呼んでくれ。…建てれるのは死亡フラグだけだ

…な、なんとか１０月中に更新できた（汗）。

今回、過去最長の内容です。
初めての作品では２ページ分ぐらいしか書けなかったことを考えると、だいぶ成長したと思います。
…無駄な文章が増えただけか？

それと、ちゃっちいですが、戦闘描写もあります。
よく伝わらない部分もあると思いますが、作者の未熟ゆえ、どうかご理解ください。

第11話「一級フラグ建築士と呼んでくれ。…建てれるのは死亡フラグだけだけど」

今日で修学旅行3日目。
現在俺は朝食中。

さて、修学旅行も残すとこ2日となった。
そして今日はネギが親書を渡しに行く日だ。
確か敵との戦闘もあるハズなので、万全の状態で挑みたいんだが―

「…足痛えし…眠い…」

はい。
万全どころか、いつも以上に不調です。
それもこれもすべて、あの人の皮を被った鬼、新田のせいだ。
ったく。
修学旅行だってのに2日連続徹夜で説教しやがって。
おかげで寝不足だ。

えっ？自業自得だって？

…否定はしない。

にしても、今日はどうっすかな？

今回は自由行動だから、
教員の俺もある程度は自由に行動できるんだが…（まぁ、簡単な見回りみたいなのはあるんだけど）

ネギと一緒に行動したら
鳥居の中閉じ込められて、戦闘だしな。

つーか、その場合多分俺必要ない。

だって脱出方法とか覚えてないもん。
それにネギは犬と戦うし。

ちなみに、俺が戦うのはパスな。

だって、もしそれでネギと犬との間に芽生えるハズの友情が芽生えなくなるのは嫌だし。

べ、別に、俺が戦いたくないから戦わないわけじゃないよ？
本当だよ？

…まぁとにかく、もし俺がネギと一緒に行動したら空気になるのは間違いないから、ネギと行動するのはパス。

そうなると、近衛と桜咲と行動するべきなんだが…

それもなぁ…。

確かにシネマ村の途中から危険になって、俺も必要になるけど、それまでは俺、必要ないしな。

―今までも必要なかった―とかいうツッコミはいらないから。

それに、短い時間とはいえ、せっかく近衛と桜咲が2人きりになる機会だ。

邪魔したくはない。

とすると…本当にどうっすかな?

いつ敵が来ても大丈夫なように、護衛はしときたいけど、2人の邪魔はしたくない。

これを両立させる方法は…

…バレないようストーキング?

いや、それはなんだか人としてダメな気が―

「おーい！」

ん？

「いたいた。まだ朝食食べてたんだ？」

「朝倉？何の用だよ？」

コイツに関わると、ろくな目にあわない気がすんだが…考えすぎか？

「いや、今日自由行動じゃん？
それでチェッシーは何か予定あんのかな？って。」

「いや、まだどうするかは決めてないが…って、チェッシーってなに！？
まさか、チェリーとナッシーを略したわけじゃないよな！？」

「はは、考えすぎだよ。
チェッシーは
『チェッ、なんだ童貞のナッシーかよ。』の略だよ。」

「意味変わんないし！
てかより酷くなってる！？なんだその略称！？」

「…朝からそんなツッコんでて、疲れない？」

「ツッコませてんのはそっちだろっ！！」

「チェリーのくせに、突っ込むなんて…フッ。」

「そっちの突っ込むじゃねえ！！
しかも鼻で笑うな！」

「冗談だよ冗談。…2割ぐらい。」

「8割は本気なの！？」

最近クラス内での俺の扱いが酷過ぎる…

流石の俺も、そろそろ泣くよ？
俺のライフもう0だよ？

「じゃあ暇だったらウチの班と行動しない？」

「はっ？お前の班って…3班とか？」

何で俺が誘われんの？

「うん。本当はネギ君を誘いたかったんだけど…特にいいんちょが。
でも、ネギ君もういないから、この際ナッシーでもいいかなって。」

そんな悲しい情報聞きたくなかった…

俺はネギの代用品かなんかか？

それに俺は一応シネマ村にはついて行きたいんだが……ん？

「もしかして3班って、シネマ村とか行く予定？」

「ん？シネマ村？
うん。後で行く予定だけど…」

そっか。
それなら3班について行けば、2人の邪魔もすることなく、シネマ村の中で、護衛ができる…

これが1番の選択肢かな？

「よし。ならお言葉に甘えて、一緒に行動させてもらうわ。」

「OK。なら、もう班の人達はロビーに集合してるから、食べたらすぐ来て。」

「わかった。」

さて、いったいどうなるやら…

「―ズズズッ。」

あっ…味噌汁冷めてる…

～・～・～・～・～・

早いことで、既にシネマ村に入場した3班＋俺。

まぁ当然、入場したには金を払ったわけで…

…朝倉よ。

俺を誘った本当の理由はこれだったか。

おかげで、俺の財布の中から諭吉さんと他何名かが旅立たれた。

つーか俺より圧倒的な金持ちである雪広の分まで何故奢らなければならない？

しかも、そんな3班のメンバーは辺りに見当たらない。

更衣所に着物を借りに行ってから、戻ってこない。
（着物の料金も俺が払わされた。）

まさか俺…忘れられた？
金払わされるだけ、払わされて、捨てられた？

…いや、きっと迷子になってるだけだ。
ここも学園には及ばないが、以外と広いからな。
迷子になったのに違いない。
うん、そうだ。
そうに決まってる！

「近衛達捜すか…」

はぁ…。

もう2人ともシネマ村にいるかな？

いたとしても、地道に歩き捜さなきゃいけないんだけどな。

「「あ、あの！」」

「あん？」

見知らぬ女の子達が声かけてきた。

…またか。

制服着てるし、この子達も修学旅行に来てる学生だろう。

「しゃ、写真撮らせていただけませんか！？」

「いいですよ～。」

「「やった！」」

とまあ、さっきからこんな調子。

これで写真撮影は６回目。

俺はルックスだけはいいからなルックスだけは！

それに俺の着ている格好の所為もあるだろう。

脇に刀をさし、

背中に『誠』と書かれた羽織。

そう俺の格好は新撰組！

…ではなく、質素な暗い色の着物。

盗人用らしい。

新撰組用は数の都合上無理らしい。
そのおかげで唯一余っていた盗人用を選んだわけだが……嫌なくらい似合ってるらしい。

更衣所の人が絶賛してくれた。
盗人用の服が似合う俺っていったい…

つーか、なんで盗人用なんてあんだよ?
江戸村でも盗人用なんて置いてないぞ。

「「ありがとうございました!!」」

「いえいえ。」

だけど悪い気はしないけどね!

まあ、女の子にキャーキャー言われて不快になる奴はいないと思うが。

にしても、麻帆良じゃ考えられない状況だな。

普段言い寄ってくるのは何故か男子ばっかだし。

女子は俺の変な噂を信じて近寄ってこないしさ。

まあ、多分出回っている噂は全部事実なんだろうが…

「―お前もう知ってか？」

「なにがだよ？」

「ん？」

俺が自身の噂に悩まされてると
不意に近くにいた男達の会話が聞こえた。
なんだろ？

「なんか日本橋でイベントやるみたいだぞ。」

「マジ？見に行く？」

「ああ。もう始まるみたいだし、行ってみようぜ。」

へ～。
日本橋でイベントあんだ。
俺も暇だったら見に行こうかな？

「なんでもすごい美少年剣士とお姫様が芝居してるらしいぜ？」

…すごい美少年剣士とお姫様？

なんだろう…

ひどく心当たりが…

いや、落ち着け俺。

他人の空似ということもあるし、

ただの気のせい―

「神鳴流とかいうメチャクチャな設定らしいけど…」

「じゃねえええ！」

「「うわっ！？」」

やっぱ近衛達か！

そういや日本橋でそんな事あった気がする。

最近、原作の細かい内容を忘れてる気がする。

でも、原作最後に読んだのは何十年も前だし仕方ないよな？

ともかく。

俺は名もなき少年達に感謝しつつ、日本橋に急ぎ向かった―

・～・～・～・～・～・～

ｓｉｄｅ　美少年剣士

月詠に決闘を申し込まれた約束の時がきた。

お嬢様はともかく、３－Ａの人達がいるのは困るんだが…

「刹那さん、刹那さん！」

「え…？」

横から名を呼ばれる。

この声は…

「大丈夫ですか？
刹那さん！！」

「いよっ。」

「ネギ先生！！…とカモさん。
どうやってここに！？」

「えと、ちびせつなの紙型を使って、気の跡をたどって…」

…やはり天才と呼ばれるだけはある。
違う魔法体系でそこまでできるとは…

「それより何があったんだ姉さん!?」

「そ、それが…」

「ふふふふ。」

「「「!!!」」」

「ぎょーさん連れてきてくれはって、おおきに～。
楽しくなりそうですな。」

来たか…月詠…

「ほな始めましょうか！
センパイ…。
このか様も刹那センパイも…ウチのモノにしてみせますえ～。」

「……。」

「ふふふ。」

「せ…せっちゃん。
あの人…なんかこわい。
き、気をつけて……。」

お嬢様が心配そうに話しかける。

その言葉だけで私は充分―

「…安心してくださいこのかお嬢様。
何があっても、私がお嬢様をお守りします。」

「…せ、せっちゃん。」

私の偽りのない気持ち。

幼いころに誓ったソレは、今も変わらない。

―パチパチ…

「えっ！なっ！？」

「桜咲さんかっこいいわね～あやか。」

「ウチの部に来てくんないかな…」

「ええ！！桜咲さん！！
おふたりの愛！！！
感動いたしましたわ。
お力をお貸しします！！」

「だから違うんですってばいいんちょ！」

「おお。俺もお前の愛に感動したぜ桜咲。
俺の力も貸すぜ？」

「違うんですってさっきからずっと言ってる―って、ナナシ先生！？」

屋根の上から登場した
盗人？の服に身を包んだナナシ先生。

…屋根の上？
それにあの服は？

「ギリギリ間に合ったみたいだな。
鼠小僧ならず、名無し小僧ただいま参上！」

ポージングを決める先生。

うわぁ…

「「「ぶー！！！」」」

「まさかの一般人からのブーイング！？

登場しただけで何だこの扱い！？」

…あの人はどんな状況でもあんな感じなのだな。

「月詠…あの人以外の人達は…」

「おい、何で俺抜いた？」

「はいセンパイ。
心得てます～。
一般人の皆さんには、私の可愛いペットがお相手します。

ひゃっきやこぉー！」

月詠の掛け声と共に、式神が召喚される。

「ひゃっ…」

「いやあ～！
何このスケベ妖怪～！？」

「あぁん！」

…まあ確かにアレなら一般人でも無害だろう。

「こ、これは…」

しかし、お嬢様をこの場に留まらせるわけにはいかない。

「ナナシ先生！ネギ先生！このかお嬢様を連れて安全な場所へ逃げてください！！」

「ＯＫ任せろ。」

「えっ…でも。」

「見かけだけですが、ネギ先生を等身大にします。『――！』」

「わぁ！
僕は忍者の役ですか。」

実体もなく、飛べもしないが、小さな状態よりはマシだろう。

「ひゃあ！？ネギ君いつの間に！？
びっくりした！」

「はい。このかさん、僕について来てください！」

「その必要はないぜ？」

「え？…ひゃあ！？」

ナナシ先生がお嬢様を抱える。

…お嬢様に触れてるのは、緊急事態だから見逃そう。

「こうした方が早い。」

「あぅぅ…」

お嬢様も何頬を赤らめてるんですか？

「オイ！盗人がお姫様を誘拐してるぞ！？」

「何ぃ！？

あんなチェリー臭い奴が誘拐だとぉ！？」

「芝居の邪魔だぁ！

出てけチェリー！！」

「何好き勝手言ってんのお前ら！？

特に2人目、3人目ぇ！

何でお前らにチェリーだとバカにされないといけないんだよ！？

どうせお前らもチェリーだろうが！！！」

「「んだとぉ！？」」

「そんな醜い言い争いはどうでもいいですから、早く逃げてください！」

遊んでる場合じゃないのに、何やってるんですかこの教師は！？

「「醜い…」」

「しかもどうでもいいって…」

「早く行ってください！」

「…はい。

いくぜ？近衛、ネギ？」

「はい！」

「うん。」

大丈夫だろうか？

いや、あの方達なら大丈夫だ。

任せましたよ、先生達？

side　美少年剣士　end

・～・～・～・～・～

「近衛大丈夫か？ついでにネギも。」

「うん。ウチは抱えられてるだけやし。」

「僕も大丈夫です。
ていうか何で僕はついでなんですか！？」

「男だから。」

「何ですかその理由！？」

日本橋から離れた俺達だが、先ほどから変わらず敵の追っ手がくる。

まあ、敵っていっても、あのラブリーな生き物だから問題ないんだ

が…

後は城にさえ入らなきゃ大丈夫だろう。

城に入らなければ、追い詰められることもないし、

天ヶ崎達に遭遇することも―

「ここまでだよ。

お嬢様を渡してもらおうか。」

あったよ。

しかも天ヶ崎より厄介な奴と遭遇しちまった。

「ネギ！そこ曲がんぞ！」

「は、はい！」

だが付き合ってはやらん。あいにく今の優先順位は近衛を安全なとこに逃がすことだ。

幸いなことに、シネマ村は逃げ道が多い。

撒くことさえできれば…

「ネギ！速度上げんぞ！

まだ大丈夫か！？」

「はい！」

近衛を抱えてるから全力は出せないが、出来る限りの速度で逃げる。

「…ナッシー…」

近衛が不安そうな声で呼んでくる。

…不安なのは当たり前だよな。

近衛にとっちゃ、わけのわからない奴らに狙われてるんだから。

けど―

「心配すんな。」

「えっ？」

「桜咲にお前のこと任されたんだ。

約束する。

何があっても守ってやる。

お前に降り注ぐ火の粉があるなら、その火種ごと消してやる。

だから、心配すんな。

…って言っても、桜咲がいるから、俺はあんまり必要ないと思うがな。」

ま、いないよりはマシだとは思うしな。

「ううん。そんなことない。
あんなナッシー？
ウチ「あんま喋ると舌噛むかぞ？」……バカ。」

「はい？」

俺…気遣ったつもりだけど、何かマズいこと言った？
何故バカ？

「…旦那。今みたいなのがなければ、女性にもモテるのに…」

「…どういうこと？」

「デリカシーがないってことっスよ。」

俺ってデリカシーなかったのか？

てか、オコジョにデリカシー言われたくないわ。

「…鬼ごっこはもういいかい？」

「「「「！！！」」」」

先回りされた！？

やっぱこいつ尋常じゃねぇ…

もうこれ以上逃げても無駄だろう。

仕方ない―

「…ネギ。俺がアイツを足止めする。
その間に近衛を。」

「ナッシー！？」

「で、でも！」

「行けっ！」

「くっ…わかりました！
このかさん。こっちへ。」

「ナッシー気ぃつけて…」

「お～う。
あっ。逃げるなら城以外にしろよ！」

ふう…。

俺に任せて先に行けぇ。とか、完璧脇役＋死亡フラグじゃん。

…死なないよね、俺？

シャレにならん。

「もういいかい？」

「待ってくれたとは意外だな。いいのか？
目的のお嬢様は逃げちまったぞ。」

「かまわないよ。
お嬢様は千草さんがどうにかするだろうしね。」

「なら俺はお前をどうにかするか。」

「あなたじゃ僕をどうにかするどころか、触れることすらできないよ。」

…分かってたとはいえ、こいつムカつくな。
確かに倒せるなんて思ってはないが、触れることぐらいはできる…
…ハズ。

「そういや自己紹介してなかったな。
麻帆良学園女子中等部3－A副担任兼教会神父ナナシ・クラートだ。
」

「自己紹介は必要ないよ。僕はあなたに興味ないしね。
あるとしたら、お嬢様と英雄の息子である彼だけだ。」

男に興味もたれたくないから別にかまわないんだが、名前すら教えてもらえないとはな。

俺は眼中にないってことですか？

「…決めた。
お前のその顔に一撃以上いれて、名前聞き出してやる。
前言撤回するなら今だぜ？」

「フッ…。」

「鼻で笑いやがった！？」

本日鼻で笑われたの2回目だぞ！
もしかして流行ってんのか！？

「俺が本気の真面目モードがどれほど恐ろしいか教えちゃる！！」

俺は周りに人がいないことを確認し、自身の魔法発動体である腕輪を身に付ける。

強化だけなら必要ないが、本気となると必要だ。

「いくぜっ！
『戦いの旋律　加速二倍拳』」

俺の最もよく使う身体強化の魔法。

原作でネギが使う
『戦いの歌』の上級版だ。
…ちなみに、俺の使える魔法で一番高度な魔法だったりする。

俺はフェイトの前に瞬動で近づく。

左手を前にかざし―

「『光よ』！」

「っ！？」

簡単な初級魔法。

簡単っても、思い切り魔力を込めたもの。

それを目の前でくらったら、あのフェイトからでも僅かだか時間を稼げる。

「プラクテ・ビギ・ナル

ものみな焼き尽くす浄化の炎

破壊の主にして

再生の徴よ

『紅き焔』！」

俺の中で攻撃系最強魔法。爆炎はフェイトに直撃。

いくらフェイトでも、正面からの直撃なら！

…えっ？

もっと強い魔法は使えないのか？

無理！！！

紅き焔だって、使えるようになるまで、だいぶ練習したんだぞ！

そりゃあ俺だって雷の暴風みたいな派手で凄い魔法使いたいけど…

魔法は苦手なんだよ！

あんなん発動どころか詠唱すらまともにできんわ。

「…終わりかい？」

フェイトが爆炎の中から姿を現す。

…傷どころか、埃１つ付かないなんてな。

軽く自信なくすぞ俺。

「…ん？」

「はいっ？」

急にフェイトが俺から視線を離す。

その視線はかなり上の方に移されて……上？

つられて俺も上を向くと―

「…げっ！」

城の屋根に近衛とネギがいた。

城には逃げんなって言ったんだけどな。

つか、城登んの速くね？

と、余計なこと考えてる場合じゃねぇ。

俺も城に―

「いつまでよそ見する気だい？」

「なっ！？……がっ…！」

フェイトが一瞬で俺の前に距離を詰め、俺の腹に一撃を放つ。

俺はその衝撃で、城壁までぶっ飛ばされる。

「がはっ！？

…ぐっ…くそっ…！」

先によそ見したのはお前だろ！ってツッコむ余裕もない。

やられた瞬間、身体で嫌な音がした。

…骨が何本かイッタか？

「…一応、気絶させるつもりだったんだけど。
どうやら無駄に頑丈なようだね。」

「…無駄は余計だ…無駄は。」

やべぇ…くそ痛ぇ…。

動けないことはないが、
フェイト相手にそれは―

「これ以上邪魔されても困るし、あなたにはしばらく退場しててもらうよ。」

―くそっ！！

「「「おおおっ！？」」」

「せっちゃーん！！」

「？」

再びフェイトの視線が上に向けられる。

俺も同じよう上を向くと、桜咲を抱いた状態で、近衛が落下しており―

「えぇぇぇぇっ!?
ちょっ、2人、落ち!?―って痛たたっ!?」

…お、思わず大声出しちまった。

―じゃなくて!

2人は!?

「近衛、桜ざk…って、くっ!?」

着地する瞬間
俺の先ほどの魔法よりも強烈な光が放たれ、水しぶきが上がる。
光が収まると、そこには水の上に浮かぶ2人がいた。

「せっちゃん…よかった。」

「お…お嬢様…」

なんとか無事ってとこか。
桜咲の傷もふさがってるみたいだ。

むしろ俺の方が重症だし。
俺の傷は治らないのね…

「…あれ？」

そういやフェイトは？

光が放たれるまでいたんだが…。

助かったってこと？

なんか釈然としないな。
結局一撃入れられなかったし。

近衛も何があっても守るとか言っといて、俺は何もできてない。

…ハハ、口だけだな俺。

「だっせ…」

～おまけ～

「あれ？…ナッシー！？」

「なっ…先生！？
そのケガは！？」

2人が俺に気付いたみたい。

「…うぃす。大丈夫かお前ら？」

「いやいやいや！
そのセリフ、そっくりそのままお返ししますよ！」

「あの子にやられたん！？」

「バカ…。これはアレだアレ。
彼女に浮気がバレたせいで、ちょっと彼女にやられてだな…」

「どんな彼女ですかっ！？というか彼女いないじゃないですか！
嘘に嘘を重ねないでください！！」

「…俺…生きて帰ったら…彼女と結婚すんだ…」

あ…もう限界だ俺。

「そのセリフあかん！」

「シャレにならない状態で、なにフラグ建ててんですかっ!?
…って、先生?なに静かに目を閉じてるんですか?
冗談は…」

「せっちゃん、ナッシーほんまに気絶しとる!?」

「えええぇぇ!?
何不吉なセリフ残して気絶してるんですか先生ぇぇぇ!?」

「ナッシー!!!
どうしよせっちゃん!?
１１０番!?」

「それ警察です!!
と、とにかく本山に運べば何とか!」

ナナシ　―死亡―

「いや、だからシャレになりませんって!?」

～おまけ2～

「…ウチら、初日といい、今日といい、あんなのに邪魔されたん？」

「まあ…ね。」

「「……はあ」」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１１話「一級フラグ建築士と呼んでくれ。…建てれるのは死亡フラグだけだ」

はい。ということでナナシ死亡により完結！
…いや、嘘ですよ？
まだ続きますよ？

今回ようやく気付きました。
自分はギャグ以外は無理！少しでも真面目な感じになると、ダメダメになりますね
いや、ギャグが良いわけでもないんですけど…
でも多分次もギャグは少なくなる予定…
嫌だ！早く修学旅行編終わらせて、ギャグオンリーを書きたい（泣）！

次回も１０日以内に更新したいと思います。
ではまた次回。

※しつこいようですが、
作者は死ぬほど感想・評価をお待ちしてます。
面白い。の一言でもあればやる気ＵＰになるので、ぜひお願いします。

第１２話「主人公は遅れて登場する。…タイミングは悪かったけど。」（前書き

ま、間違えて削除してしまったので再投稿しました

面倒なことしてスミマセン

第１２話「主人公は遅れて登場する。…タイミングは悪かったけど。」

ｓｉｄｅ　ネギ

敵の本拠地である関西呪術協会の総本山に来た僕たち。
敵の本拠地であるから、
何が出てくるかわからないから警戒してたんだけど―

「「「お帰りなさいませ。このかお嬢様――ッ」」」

「「へ？」」

あ、あれ？

敵の本拠地なのに、お帰りなさい？

つまり此処って…

「さ、桜咲さん！
これってどーゆー…？」

「えーと、つまりその…、ここは関西呪術協会の総本山であると同時に、このかお嬢様の御実家でもあるのです。」

「「……」」

「「えええぇぇ～!?」」

「それ初耳よ!
何で先に言ってくれなかったの!?」

「す、すいませんっ…。
今御実家に近づくと、お嬢様が危険だと思っていたのですが……。
シネマ村ではそれが裏目に出てしまったようですね。御実家…総本山に入ってしまえば安全です。」

「そ、そっか。
ここがこのかの実家か…」

し、知らなかった…。

学園長のお孫さんだから、何かあるなとは思ってたけど…

「それでは私はナナシ先生を運ばなければならないのでここで。
ネギ先生や神楽坂さん達は先に広間へ。」

「あっ、はい。」

「そんなんどっかに捨てとけばいいのに…
チェリーなんだから、ほっといても1人でよろしくヤッてるわよ。」

「神楽坂さん!?
何マジな顔して物騒なこと呟やいてんですか!?
というよりヤッてるって何ッ!?」

「何ってナニに決まってんじゃない。てか、冗談よ冗談。
さすがの私でも死人に鞭打ったりしないわよ。」

「死んでないですよ!?
何勝手に殺してるんですか!?」

あ、アスナさん…
ナナシ先生に何か恨みでもあるのかな…?

冗談って言ってるのに、顔が笑ってない気が…

「にしてもスゴイ歓迎だねーこりゃ。」

「これはどーゆーコトですか?」

夕映さんが質問してくる。
どーゆーコトって言われても、魔法のことは説明できないし―
「は、はい。実は僕、修学旅行とは別に、秘密の任務があってここへ…」
「「「秘密の任務？」」」
「コラ、ネギ。
それ言っちゃって大丈夫なの？」
あっ…しまった。
いやでも、魔法関係については話してないし、大丈夫だよね？
「フフ、賑やかでなによりです。」
「「！」」
不意に知らない声が聞こえた。
その声の発生源の方を向いてみると―
「ようこそ明日菜君。このかのクラスメイトの皆さん。

そして担任のネギ先生。」

「お父様！久しぶりや！」

こ、このかさんのお父さんが西の長だったんだ

此処がこのかさんの実家だって時点で気付くべきだったな。

「長…ナナシ先生を忘れてます…」

「覚えてますよ？
でも話しかけても屍なので返事しないでしょう？」

「だから死んでいませんって！！
てか、なんですかそのどっかのＲＰＧみたいなネタは！？」

「知りませんか？
ドラ○エですよ。
いやあ、あのゲームはなかなか面白い。
個人的には？が一番好きなんですが、どう思います？」

「知りませんよ！！」

「ドラ○エを知らないんですか！？

…仕方ないですね。
私が初代から貸してあげますからそれを―」

「ドラ〇エは知ってます！私が知らないって言ったのは、？が一番面白いかなんて知らないって意味で…」

イ、イメージしてた人とだいぶ違うんだけど…

というか
いつまでドラ〇エの話してんですか？

「ちょっと2人とも！！」

アスナさんが間に入る。

さすがアスナさんだ。
2人を止めようとして―

「私はドラ〇エより、
ファ〇ナルファンタジーの方が面白いと思うわ！！」

「「だから知りませんよそんなの！！」」

・　・

・・・・・

…ようやく無駄な話も終わり、本題に突入することができた。

「東の長　麻帆良学園学園長近衛近右衛門から、西の長への親書です。
お受け取りください。」

「確かに承りましたネギ君。
大変だったようですね。」

「い、いえ。」

「……いいでしょう。
東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。

任務御苦労！！
ネギ・スプリングフィールド君！！」

「あ……ハイ！！」

よ、よかった！

これで任務達成だ。

妨害された時は、本当ダメかとおもったけど、なんとかやり遂げれた。

「おー。なんかわかんないけど、おめでとー先生！」

「御苦労さまー！」

「今から山を降りると日が暮れてしまいます。
ナナシ君は既に離れの小屋に運びました。
君達も今日は泊まっていくといいでしょう。
歓迎の宴をご用意致しますよ。」

あ、本当だ。
いつの間にかナナシ先生がいない…

「ナナシ先生は大丈夫なんですか？」

「心配いりませんよ。
…まあ修学旅行中は安静にしとく必要がありますけど。」

よかった…。

敵の襲撃も此処にいれば安全みたいだし、もう大丈夫かな？

～・～・～・～・～・～・

「うーん。このかさんのお父さんがサウザンドマスターの友達だったなんてね！」

西の長と友達って、やっぱり父さんは凄い人だったんだなぁ。

「親書も渡したし、明日は父さんの住んでた家に案内してくれるって言ってたし！
目的は全部果たしたねカモ君。」

「おうよ兄貴！」

「きゃあああ！？」

「「!?」」

どこかの部屋から悲鳴が聞こえた。

何かあったの!?

「カ、カモ君今の!?」

「嬢ちゃん達の部屋だ。
とりあえず向かおうぜ!」

「う、うん!」

急いでみんなの下へ向かうと―

「!?」

真っ暗の中に皆が…

「あ、あれ?皆さん何してるんですか?
部屋真っ暗にして…」

おかしいなぁ。
確かに悲鳴が聞こえたはずなんだけど。

そう思いながら皆に近づくと―

「え……こ、これは！？」

身体を石のように固めている皆の姿があった。

「朝倉さん！？パルさん！！の…のどかさん！！」

な、なんで皆が！？

此処にいれば安全じゃなかったの！？

「のどかさん、のどかさん！！」

「落ち着け兄貴！ヤツラだ！！
泣いてる場合じゃねえぜ！」

「で、でも皆が！」

「落ち着けって！！
石化ならきっと長のオッサンが解いてくれるって！
それよりヤツラに備えろ兄貴！！」

く…。

僕のせいだ…。

僕のせいで生徒の皆を…！

「でもっ…総本山にいれば敵は手を出せないハズじゃないの！？」

「来ちまってるもんはしょうがねえだろ！
今は現状分析より対処だ。しっかりしろ！」

……！！

そうだ！
アスナさん達は！？

「アスナさん！！」

「兄貴！」

「アスナさん！！
アスナさーん！！！」

屋敷を駆け回る。

いくら呼んでもアスナさんはいなくて…

まさか…アスナさん…

「ハッ…！そうだカードを！」

「それだぜ兄貴！」

さっそくカードを額にあてる。

通じてくれ…！

「アスナさん！！アスナさん！！」

『ネギ！？あんたは大丈夫なの？
私は今このかと一緒よ。』

「よ…よかったアスナさん…」

念話が通じた。

このかさんも無事みたいだ。

『それより何が起こっているの！？
お屋敷中の人達が石みたく固まってて…！』

のどかさん達だけじゃなくお屋敷の人達も石にされたのか…

「敵が来たんです！
気を付けて！」

『敵!?何でよ?一件落着じゃなかったの!?』

「とにかく狙われてるのはこのかさんです!!
合流しましょう!
場所はさっきのお風呂で!」

『わ、わかった!』

…よし。
早くお風呂に向かおう。

「行くよカモ君。」

「おうよ。」

「『杖よ!!』」

「兄貴、落ち着けよ?
いいな!?
わざわざ石化を使ってきたってコトは、堅気に危害を加えるつもりはないってことだ。」

「う、うん。でもっ…」

話しながらも、急いでお風呂場への廊下を駆けていると―

「「！！」」

「刹那さん！？
お風呂にいたんじゃ！？アスナさんが話するって…」
刹那さんも無事だったみたいだ。

けど、なんで此処に？

「ただならぬ気配を感じて飛び出して来ました。
何があったんです！？
お嬢様は…！？」

「そ、それがその…」

刹那さんに今の状況を伝えようとすると―

「ネ…ネギ君。刹那君…」

「「！？」」

「長…！」

そこには身体の半分以上が既に石化している長さんが―

「も…申し訳ない2人とも…。
本山の守護結界を、いささか過信していたようですね…」

「長さん！」

「平和な時代が長く続いたせいでしょうか…。
不意を喰らって、この様です。
か…かつてのサウザンドマスターの盟友が……情けない。」

話をしているうちにも、石化はどんどん進行している。

このままじゃ…！

「長！！」

「ネギ君、刹那君…。
白い髪の少年に気をつけなさい…。格の違う相手だ。例えるなら…
…初期状態とドル〇ゲスぐらいに…」

「なんでこの状況で、またドラ〇エネタ引っ張ってきたんですか！？
どんだけドラ〇エ好きなんですか！？
少しは空気読んでくださいッ！！」

き、緊迫した空気が…一気にぶっ飛んじゃった…

「すまない…このかを頼みます。
後、ボスに挑む前は…セーブを…忘れない…よう…」

「「えええぇぇぇぇ！？」」

「さ、最後に何バカ言って石化してるんですかっ！？」

「長っ！？長ぁーー！！」

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

・～・～・～・～・～・～

ｓｉｄｅ　アスナ

このかを連れて、とりあえず風呂場に到着したんだけど―

「ネ、ネギの奴はまだ来ていないみたいね。」

「せっちゃんもいーひん……。」

いつ敵が来るかわからないから油断できないわね…。
「私の後ろにいてね。」

「う、うん。」

周囲を警戒する。

見た感じ、敵はいないみたいだけど…。

「はあ…。はあ…。」

……！！

―瞬間的に身体を回転させ、ハリセンを振り抜く。

「！」

そこには水を叩いたような音が響いて―

「え……。」

「！」

「すごい。訓練された戦士のような反応だ。」

敵!?

いつの間に…!

「でも、お嬢様を守るには役不足かな。
君も眠ってもらうよ。
『□□□□』」

「ひゃっ!」

白髪の少年が呪文のようなものを唱えると、大きな音をたて、煙が発生する。

「あ…」

「アスナ!」

そして、みるみるうちに着物は石になっていく。

…まさか。

私も屋敷の人達みたいに…

そんな考えが頭を過るが―

「キャアアアッ!?」

「!?」

石になったのは私じゃなく、着物だけが石になり砕け散った。

―って!?

「やあん!何よコレー!?」

な、なんで服だけ石になって砕けるのよ!?

そりゃあ、身体は石にならないだけマシだけど!

「アスナ……キャ!?」

「このか!?」

突然現れた、悪魔のような怪物にこのかが捕まった。

「……じゃあお姫様はもらっていくね。」

「アスナ!アスナー!」

「ま、待ちなさい!!

このかは渡さないわよ！」

「行って。」

「あっ…。待てこの！」

行かすわけには行かない！

「ヴァーリ　ヴァンダナ　『水妖陣』」

白髪の少年が、またしても呪文のようなものを唱えると、風呂場のお湯から、いくつもの水の手が出てきた。

「げ！？お湯が！？
…って、え？な？ひゃ！」

そして、その手は私の身体をガッチリと掴んで―

「え…ちょっ。な、何するつも…」

―くすぐり始めた。

「な〝っ……あはは！きゃはははは！ぎゃはは！
ちょっ…待っいやあはははは！」

い、息が…！

「な、何であんた達は、こんな変な攻撃ばっかなのよーっ！」

「あれ…？こんな呪文だったかな…。服も脱がすつもりじゃなかったんだけど…」

疑問に思いながら、本を確認する少年。

そんなのいいから、止めなさいよ！

「今…僕の石化魔法を抵抗…いや、無効化したよねアーティファクトの力だけじゃない。……どうやったの？」

「へ？な、何？知らないわよそんなの！このスケベ！！」

「そう…。じゃあ死ぬまで笑ってもらうね。」

「ギャーー！？待って、待ってーッ！」

知らないもんは知らないんだからしょうがないじゃない！

…そう言う暇もなく―

「あはははは！ははだめははは！

ホントッ知らないってば！ちょ、やはっ苦し…あははは！
やだ、そこダメ…ッてば。背中は弱ッ…ひぎゃひゃはは！
ちょっ息がッ！はひ、うひひひ！
あはっ…あははっ！
はうっ…！
はひ…だ…だめ…死ぬ…」

「まだ足りない？」

「もー十分ーッ！！
うひゃひゃひゃ！
やめーーッ！！」

ｓｉｄｅ　アスナ　ｅｎｄ

・～・～・～・～・～

ｓｉｄｅ　ネギ

ようやく風呂場に着いたんだけど、そこには身体を痙攣させ、なぜか裸のアスナさんが…って!?

「あッ、アスナさん!?」

「だ、大丈夫ですかアスナさん!?
何があったんです!?」

「う…うう…刹那さん…
わ…私、も…ダメ…」

「ハッ…、ま…まさかアスナさん…」

刹那さんの顔が青ざめる。
そ、そんなにマズい状態なの!?

「どうしたんですアスナさん!?
何されたんです!?」

「え…えっちなコト…とか？　た、たいへんっ…！」

「ええっ!?」

「されてなーい!!…いや、されたけど。」

「どっち！？」

「それより！このかが攫われちゃったの！」

「「！！」」

このかさんが…！

「気をつけて。あいつ、まだ近くにいるかも…」

あいつ…？

――スゥ……

「！」

気配を感じ、刹那さんが振り返る。

僕も慌てて振り返るけど―

「刹那さん！？」

そこには既に白髪の子がいて、刹那さんに攻撃していた。

「ぐっ！？」

白髪の子の一撃で、刹那さんが弾かれる。

その勢いで壁に激突しようと「ぐばらっ！？」

……はい？

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「け、怪我人にタックルとか…どんだけ鬼畜なんだよ…？」

「「ナナシ先生！？」」

「ナッシー！？」

「…ナッシー言うな。」

簡単に説明しよう。

目が覚めた。

知らない場所だった。

近くに誰かいないか探し回った。

そしたら石像発見。

ここは近衛の家で、フェイトが襲撃したんだと理解した。

原作の知識を頼りに、ネギ達が集まっているであろう風呂場に向かった。

そしたら桜咲のタックル。

…なんだコレ？

俺なんか悪いことしたか？

「…あの怪我で、もう動けるとはね。
あなたには色んな意味で驚かされる。」

「ばーろー。あんなん怪我の内に入んねえよ。唾つけたら治ったぞゴラァ。」

「…気絶したくせに」

「…というか何で喧嘩口調なんですか？」

「ばかっ！
気絶なんかしてねぇし！
アレは…アレだ。
急に眠くなってアレだし！」

「はいはいはい。」

…最近神楽坂に限らず、皆俺に対する扱いが適当になってきた気がする。

「で？近衛は？」

「あいつが…！」

神楽坂がフェイトを指差す。

チッ…やっぱ間に合わなかったか。

「…みんなを石にして、刹那さんを殴って」

「せ、先生…」

「このかさんを攫って、アスナさんにえっちなコトまでして…！」

「だからちがうってば…」

「先生として…友達として…僕は…、僕は…」

ネギ…

「許さないぞ！！」

こんな男らしい表情もできるようになってたんだな。

なんだか俺感動した。

「……それでどうするんだい？ネギ・スプリングフィールド。

僕を倒すのかい？

…やめた方がいい。今の君では無理だ。
…そしてあなたも。」

「んだと!?」

「あ、待て!」

…野郎。
言いたい放題言いやがって。

「…水を利用した『扉』。…瞬間移動だぜ兄貴!?
かなりの高等魔術だ…」

「くっ…」

…やっぱネギも悔しいみたいだな。

「大丈夫ですか?アスナさん?」

「う、うん。刹那さんも。」

…無事なのはいいんだけどさ

「…てかいつまで裸なのお前?」

「…仕方ないでしょ！？
あいつにやられたんだから―って！こっち見るなぁー！！」

「ありがとうございまーす！！」

「感謝するなっ！！」

いやはや眼福、眼福。

ただやっぱりまだガキの部分が…

「……え？」

「……あっ。」

ネギがタオルを取り、アスナに被せる。

紳士的だなオイ。

べ、別に残念とか思ってねぇーから！

「アスナさんはここで待っていてください。
このかさんは僕が必ず取り戻します。」

「え…う、うん…」

「…おい。」

「はい？」

「僕じゃなくて、僕達だろうが。
1人でイイ格好してんじゃねえよ。」

「ナナシ先生…」

「…さっきまで人の裸に感謝してた人物とは思えないセリフね。」

「確かに…」

「ハイ、そこ黙れ。」

俺がせっかくいいセリフ言ったのに台無しじゃねぇかよ。

「けど、どうするんだよ旦那？
あのガキ…タダ者じゃねぇぜ？
ただ無謀に突っ込んでも…」

「心配すんな。」

「えっ？」

「ちゃんと作戦は考えてある。」

「本当か旦那！？」

「大丈夫なんでしょうねその作戦？」

「頭脳明晰完全無欠の天才である俺様が考えた作戦だぜ？
大船…そう、タイ○ニック号に乗ったつもりで安心しな！」

「その例えで安心できるかっ！！」

「よく自分のことをあそこまで言えますね…」

「自分が大好きなんでしょうね…」

「人をナルシストみたいに言うなっ！」

いや自分のこと好きだけどね？
ナルシストまでは流石に…

「とにかく！作戦は後で説明してやっから！
追いかけんぞ！」

「は、はい！」

「行きましょう！！」

「あ、待ってよみんな！
私も行くわよ！
今着替えを…」

・～・～・～・～・～

「おおっ…！や、やるやないか新入り！？
どうやって本山の結界を抜いたんや！？
最初からお前に任せといたら良かったわ。」

「……。」

「ふふ…。しかし、これでこのかお嬢様は手に入った。あとはお嬢様を連れてあの場所まで行けばウチラの勝ちやな。」

「んー！んー！」

「安心しなはれこのかお嬢様。何もひどいことはしまへんから。
さあ、祭壇に向かいますえ。」

「待て！！」

「そこまでだ。お嬢様を放せ！！」

「ハア…ハア…ハア。」

やっと追い付いた…。

「ちょっ…大丈夫ナッシー？」

「…もうタバコ止めようかな。」

なんでこいつら疲れてないんだ？

やっぱ若さか？

「先生…身体強化は？」

「あっ…！」

「…よく普通の状態で着いてこれましたね。」

すっかり忘れてた。

…バカだな俺。

「…またあんたらと変態か。」

「オイ。なんで俺だけ扱い別なんだ?」

「変態の自覚あったんだ…」

俺の周りの人間は
敵も味方も失礼すぎる…

「それはアンタが誰よりも失礼だからよ。」

……納得。

「んんっ!んーーっ!」

「天ヶ崎千草!!
明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ!
無駄な抵抗はやめ投降するがいい!」

「お母さんが泣いているぞ!」

「アンタは黙ってなさい!」

「…はい。」

桜咲のセリフが警察ぽくてつい…

だからこっちにハリセンを向けるのは止めてくれ。

「ふん。母親はあんたら西洋魔術師のせいで死んでもうたわ。」

…あれ？

俺…もしかして地雷踏んじゃった？

「それに応援が何ぼのもんや。
あの場所まで行きさえすれば…！
それよりも…あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。
本山でガタガタ震えてれば良かったと後悔するで。」

そう言い、天ヶ崎が近衛に近づく。

あっ…ヤバ

「お嬢様…失礼を。」

「んっ！？」

「「「！！！」」」

「『オン　キリ　キリ　ヴァジャラ　ウーンハッタ』」

どんどん呪文が唱えられていく。
それにあわせて、足下の水辺に次々と光り輝く陣が発生する。

「んんっ…！」

「お嬢様！！」

「このか…っ…！？」

そして―

「むん？」

「ふー。やれやれ。」

「…おいおいおい」

これは…

「「「！！！」」」

見渡す限り鬼、鬼、鬼。

何か原作より多くないか？
俺が地雷踏んだからか？

「誰か鬼達を統べるぬらりひょん…てか、学園長連れてこい。」

「無理です…というより無駄です。」

「ですよねー。」

はは、俺…またピンチかも

おまけ

「ぶえっくしょぉん!!」

「どうしたジジイ?
汚ないくしゃみして。」

「汚くないわい！
多分誰かがワシを誉め称えるような噂を…」

「おおかたどっかの童貞神父が悪口でも言ってるんだろ。」

「童貞で神父の人なんてナナシ先生しかいないじゃないですか…」

「…さよ。お前も言うようになったな。」

「はい？」

・～・～・～・～・～

「ぶえっくしょぉん！！」

「うわっ！？汚なっ！」

「汚くねぇーよ！！」

「いきなりどうしたのよ？」

「わからん。多分誰かが俺を誉め称えてるんだろ。」

「…あっそ。」

「まったく…もてる男は辛いな。」

「…こんな状況なのに、幸せな奴ね。」

「まあな！」

「褒めてないわよ…」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１２話「主人公は遅れて登場する。…タイミングは悪かったけど。」（後書き）

さて、修学旅行編もようやく終盤に差し掛かりましたね。
ナナシの作戦で上手くこのかを救えるといいんですけどね（笑）

それではまた次回

第13話「ピンチになれば覚醒する。王道だよね。」※1／9　誤字修正版　投

どうも。

今回ナナシが今まで使わなかった主人公力を使いきります（笑）

それと今回は作者の妄想（病気）が存分につまってます。
それでもウェルカムという方はお進みください。

では、どうぞ。

第１３話「ピンチになれば覚醒する。王道だよね。」※１／９　誤字修正版　投

ｓｉｄｅ　ナナシ

近衛の力で天ヶ崎が鬼達を大量に召喚した訳だが―

「ちょっとちょっと！！
こんなのありなのー！？」

「やろー。このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな。」

「に、２００体ぐらいいるんじゃないかな…」

やっぱ原作より多いし…

「あんたらにはその鬼どもと遊んでもらおか。
ま、ガキどもだけは殺さんよーにだけ言っとくわ。
安心しときぃ。」

「…２３歳てガキに入るかな？」

「もう立派な大人かと…」

「俺！よく中身はガキだと言われます！
だから俺もガキにしといてください！」

「情けなっ！！」

「な、ナナシ先生にプライドはないんですか…？」

そんなんより命の方が大事なんだよ！

俺だけ命の保障がないとかイジメじゃん！

「バカはほっといて行くわ。ほな。」

「まっ…待て！！」

「おいっ！？結局俺の命の保障はされないの！？」

……行っちゃった。

「…どんまい。」

「…肩に手を置かないでくれ。」

くそ…あと5、6歳若かったらよかったのに…

「何や、何や。久々に呼ばれてと思ったら…」

「相手は幼い嬢ちゃん、坊っちゃん…それにおっちゃんかいな。」

「そんな老けてねえよ!!」

確かにガキの年齢には分類されないけど、おっちゃんの年齢にも分類されないから!
それに俺はまだお兄さんぐらいの年齢だっつーの!
てか、妖怪におっちゃん言われたくないわ!

「せ…刹那さん。こ、こんなのさすがに私…」

「明日菜さん、落ち着いて…。大丈夫です。」

「…ネギ。作戦を説明する時間が欲しい。障壁を…」

「わかりました。
ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

何?自分で障壁作れ?

…出来たらやってるわ。

「逆巻け　春の嵐　我らに風の加護を
『風花旋風風障壁』！！」

「「「「おおっ！？」」」」

ネギが呪文を唱えた瞬間、俺たち４人を閉じ込めるように竜巻が発生した。

「こ、これって！？」

「風の障壁です。ただし2、3分しか持ちません！」

「よし！旦那！さっそくだが例の作戦を説明してくれ！状況はかなりまずいが…」

「心配ないぜ。ちょい誤差があるけど、予想の範囲内だ。」

誤差ってのは勿論鬼の数だけど。

まさかこんなに多いとは…

「作戦はいたって簡単。
二手に別れる。それだけだ。」

作戦内容は原作と変わらない。

恥ずかしながら原作以上の作戦は考えられなかった。

「俺たちの最優先すべきことは近衛の奪還だ。敵を全て倒す必要はない。
だから、この場の鬼達を引き付けておき、一撃離脱で近衛を奪還。
後は頼もしい応援が来るまで逃げるなりすればいい。」

「なるほど…」

「ナッシーがまともな事喋ってる…」

…バカレッドの発言はスルー。

「しかし…そう上手くいくでしょうか？」

「確かに…。だが旦那の案以外に案はねえ。」

「…わかりました。それでいきましょう。
では鬼達は私「必要ない」―なっ！？」

「鬼達を引き付ける役は俺1人でやる。
お前ら3人が近衛を奪還するんだ。」

そう。これが原作との大きな違い。

原作では神楽坂・桜咲が残り、ネギが奪還に向かったが間に合わなかった。

だが原作とは違い、俺がいる。

俺が鬼達を引き付け、3人が近衛の元に向かえば、間に合う可能性がある。

「むっ、無茶です！いくらなんでも…！」

「大丈夫だ。俺はお前らを信じてるぜ。きっと俺の変わりに近衛を救って戻って来ることをな。」

「そういう問題じゃありません！
この鬼の数じゃいくらナナシ先生でも！」

俺が恥をしのんで言ったセリフが決らなかった…。
やはりああいうセリフは主人公とかじゃないとダメなのか？

「…大丈夫じゃね？
麻帆良の警備の時も一度こんぐらいの数と戦ったことあるし。」

まあ、その時は龍宮がいたから無事だったんだが…

「ですが！ナナシ先生は我々と違って殺されるかもしれないんですよ！？」

確かにこの状況で俺1人残るのは絶体絶命のピンチかもしんないが…

「心配ないっつーの。」

「…え？」

「俺は死なないぜ？
なんたってこの世界遺産級の美しさを誇る肉体を失うなんて、世界中の俺を愛してくれる女性を悲しませることはしたくないからな。
それに俺自身も未使用なまま死ねるかっての。」

「……。」

あれ？無言？
もしかしてすべった？
桜咲ならツッコむと思ったんだが…

「こんな時に何言ってんのよ！！」

「ぶべっ！？」

桜咲ではなくレッドにツッコまれた。

…ハリセンで。

「は、ハリセンで叩くな！ハリセンは意外とダメージ大きいんだぞ

！？」

「アンタがＫＹ発言するからでしょ！」

「俺は空気読めないんじゃない。
…読まないんだ！！！」

「なお悪いわ！」

「ぶべらっ！？」

ま、また叩かれた…

俺がレッドに叩かれた頬を押さえ、痛みをこらえていると―

「…は、はは…あははっはははは！」

なぜか桜咲が笑い出して…って、はいっ！？

「刹那さん？」

「……まったく。ナナシ先生はどんな時でも先生のままなんですね。
」

「どういう意味だそれ？」

桜咲が笑い涙を拭いながら、俺によくわからないことを言ってきた。

「行きましょう。ネギ先生、明日菜さん。」

「刹那さん!?」

「で、でもこの状況でナナシ先生1人残すのは…!」

「ナナシ先生なら大丈夫です。
ですよねナナシ先生?」

「……桜咲、お前…」

「刹那でいいですよ先生。先生が私たちがお嬢様を救えると信じてくれたように、私もナナシ先生なら大丈夫だと信じます。
だから…頼みましたよ?」

「……ああ!」

「皆さん!そろそろ障壁が!」

「ネギ!障壁が解けたら一発デカイので敵の軍団に風穴を!そしたらそこを突っ切れ!!」

「はい!ラス・テル・マ・スキル・マギステル…」

…よし。
信じてもらったんだ。
期待に応えられるよう頑張りますか。

「ナナシ先生…」

「刹那？まだ何か？」

「さっきの言葉…嘘じゃありませんよね？」

なんだ？
まだ疑ってんのか？

「もちろんだ。信じてくれたんだろ？」

「はい。
ですから…絶対にお嬢様を……私を悲しませないでくださいね。」

「……は？」

えっ…と、今のは…？

「来るわよ！」

・・・・

「そろそろか…」

「ふふん。待たせよってからに…」

そしてついに風は止み、ネギ達が姿を現すと―

「！」

「『雷の暴風』！！」

ネギの最大呪文である雷撃を纏った竜巻が敵の軍団の一部を貫いた。

「おおおお！？」

「西洋魔術師かああ！？」

そして―

「今です！！」

「オヤビン！ガキどもが！？」

「坊っちゃんは空に逃げちまったが、嬢ちゃん達は地上におる！逃がす「させるかよ。」―なっ！？」

「『紅き焔』！！」

「ぐううううう！！」

今度は爆炎が鬼達を襲った。

「こんな素晴らしい美青年が目の前にいるのに、他に目がいくのは失礼じゃないか？」

「お主も西洋魔術師か！」

「オヤビン！今ので嬢ちゃん達も逃げちまっただ！」

…とりあえず作戦の前提である二手に分かれることは成功したか。

「…全部で３０体以上は喰われたか。」

「やーれやれ。西洋魔術師にはわびさびってもんがなくてアカン。」

「ほっとけ。」

刹那の最後の一言も気になるが…今はコイツらだ。

俺は俺の役目を果たそう。

「にしても…ワシら相手に兄ちゃん１人か。」

「なんだ?俺１人じゃ不満か?」

「不満も不満。久々に召喚され戦えると思えた矢先、これや。兄ちゃん１人でどんくらい保つか…」

なるほど。

そういうことか…

だが―

「……。」

「何や兄ちゃん?あまりの数にちびりおったか?」

「……はん。馬鹿かよテメエ?」

「うん?」

「そんなわけねえだろ。逆なんだよ逆。」

「は…?」

まったく。
なんもわかってねえなコイツら。

「俺がどれくらい保つかじゃねえ…
お前らが俺相手にどれほど保たせられるかだ!!」

「…言うやないか人間風情が。
なら死んでも恨むなや!」

「上っっ等!!!」

こっちは俺がなんとしても終わらせてやる。

だから…そっちは任せたぜ3人共。

side　ナナシ　end

side　刹那

私と明日菜さんは地上からお嬢様の元へ向かう。

空から向かうネギ先生よりは幾分か遅くなるが、
時間差で違う方向から奇襲を仕掛けることができる。

もっとも
相手に奇襲が通じるかは別だが…

「ちょっ、ちょっと刹那さん！
本当にナッシー1人残していいの！？
さすがにあの数は…！」

「明日菜さん…」

わかっている。

いくら先生でも、それが無茶…無謀であることを。

でも―

「大丈夫です。」

「えっ…？」

「私達がお嬢様を取り戻すと信じてくれている先生を、私は信じてます。

その先生が大丈夫と言ったんです。

なら、私はその言葉を信じるだけです。」

「刹那さん…」

こんな未熟な私を、先生は信じると言ってくれた。

分の悪い賭けのような作戦でも、１人残り、私達を信じて待っていてくれてる。

なら

私はそれに応えるだけだ。

先生の信頼を裏切らないためにも。

「急ぎましょう明日菜さん。私達は私達の役目をしっかり果たしましょう。」

「う、うん！」

―たとえそれが、あの力を使うことになったとしても。

ｓｉｄｅ　刹那　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「『紅き焔』！」

爆炎が敵の群れに喰らいつき、滅する。

「ぐわぁっ！？」

・　・　・

「『魔法の射手　連弾・闇の１８矢』！！」

放たれた魔法の矢は、その数だけ敵を葬る。

「ぬうううう！」

・

・

「『紅き…焔ぉ』！！！」

そしてまた再び爆炎が敵を飲み込む。

「ぐわあああああ！？」

・　・

・

…今ので何匹目だろうか。

ネギ達が行って5分ほど経ったが、敵は依然として多いままだ。

「に…２００体以上の兵が5分もせず半ば近く…！

そ、それをたった1人で…　何者や兄ちゃん！？」

「ただの神父…いや、今は教師か？」

もっとも2つとも、前に魔法って言葉が付くけど。

「く…。あんなまだチェリーそうな奴にワイらが…」

「オイこら!?」

一言多いから一言!

なんだ!?

シネマ村といい鬼達といい、俺はそんなにチェリーっぽいのか!?

チェリー特有のオーラとかが出てんのか!?

「やるなチェリー…」

「いやだから待て!」

「強いなチェリー…」

「お前らいい加減に…!」

「「「流石だチェリー!!」」」

―プチン

「うるせえよッ！！
なんなんだお前らのその妙な団結力！？
数が多いから誰が言ったかわからねえと思ったら大間違いだぞ！
チェリーって言った奴全員顔覚えてんからな！！
覚悟しろよ！」

てか何で鬼達がチェリーなんて単語知ってんだ！？

「ほう。覚悟できなければどうなるというのだ？」

「あん？」

「次は某が相手になろう！だが、某は今までの奴らとはちと出来が違うぞ！？」

烏族か…

言葉通り、今までの奴らとは違うみたいだな。

……主に喋り方が。

「今まで確かに頑張った！だが所詮は西洋魔術師！
接近し詠唱させる暇を与えなければ…！」

そう言い、烏族は俺に接近してきた。

なるほど。

考え方は悪くない。

「ふんッ！」

烏族の奴が手にしてる剣を俺の首を狙い、横に振るう。

その剣速は確かに今までの奴らとは違う。

ただ―

「がッ！？」

「接近すれば……なんだって？」

俺は体を屈め、振るわれた剣を避ける。
そして振るった後の隙を狙って敵の懐に潜り、膝を腹に打ち込む。

「残念だったな。俺は魔法
より肉弾(こっち)戦の方が得意なんだよ。」

「ぐっ…ぬかったわあああああ！」

「最近は負け続きだったからな。
ここいらで今までの分精算させてもらうぜ。」

というより、この戦いだけは負けるわけにはいかないからな。

「さあ。次はどいつが相手だ？」

悪いがいつになく真剣にいかしてもらうぜ。

けど、そんな俺の思いとは裏腹に―

「なっ！？」

巨大な光の柱が天を貫いた。

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

「見えた！！あそこだ！！！」

みんなと別れ、空から敵の元に向かい、ようやく場所にたどり着く

ことができた。

「むぅ！？こ、この強力な魔力は……！？
…儀式召喚魔法だ！！
何かでけぇもん呼び出す気だぜ！！」

召喚魔法！？

そ、それって…！？

「兄貴！急げ！手遅れになる前に！！」

「う、うん！！
……あっ！？」

天に昇る細い光の柱の中心にお猿の人がいる
そしてそこに―

「このかさん！！」

まだ儀式が完成した様子はない。

いける！！
まだ間に合う！！
このかさんを助けるんだ！
―ゴオオオオオ！
「！？」
背後からの気配を感じ、振り返ってみると、そこには空を駆ける黒き狗。
……あれは…狗神！？
「『風楯……』！！」
ダメだ！間に合わ…
「！！！」
「兄貴！？」

「わあああっ！？」

狗神の衝撃で杖から落とされた。

このままじゃ…！

「くっ…『杖よ』！

……『風よ』！！！」

着地の瞬間に風の魔法によって、なんとか勢いを殺すことができた。

でも…今の攻撃は…

「よおネギ。」

この声はやっぱり…！

「へへっ。嬉しいぜ。

まさかこんなに早く再戦の機会が巡ってくるたぁな。」

学ラン姿に狗族の耳。

見た目は僕と同じ子供だが、その実力はこの身がよく知っている。

「ここは通行止めや！！
ネギ！！！」

「コタロー君！！」

あと少しで祭壇に到着だったのに…！

「さあ！
戦ろうやネギ！！」

「どいてコタロー君！！
こうしてる間にもこのかさんが……なっ！？」

急に祭壇から感じる魔力が強大になると、光の柱もそれに合わすように太くなった。

「…どうやら千草の姉ちゃんの作戦が順調に進んでるみたいやな。
あれなら完成も近いんやないか？」

「…何で！？
何であのお猿のお姉さんの味方をするの！？

あの人は僕の友達をさらってひどいことしようとしてるんだよ！？」

「ふん！千草の姉ちゃんが何やろうと知らへんわ！
俺はただイケ好かん西洋魔術師達と戦いたくて手を貸しただけや！
けど…その甲斐あったわ！」

えっ…？

「お前に会えたんやからなネギ！！
嬉しいで！！
同い年で俺と対等に渡り会えたんはお前が初めてや！さあ…もう一度言うで？
俺と戦おうやネギ！！！」

「戦いなんてそんな…意味ないよっ！
試合だったらこれが終わった後いくらでも…」

そうだ。
それなら今戦わなくても…

「ざけんなぁ！！！」

！？

「俺にはわかるで。コトが終わったらお前は本気で戦うような奴や

ない。」

そ、それは…

「俺は本気のお前と戦いたいんや。
今…ここで！！
この場所で！！」

…コタロー君

「ここを通るには俺を倒すしかない！
俺は譲らへんで！！」

「ぐっ……」

「挑発に乗るな兄貴！！
何とか出し抜く手を考えるんだ！！」

「全力で俺を倒せば間に合うかもしれんで！？
来いや！ネギ！！
男やろ！！！」

「……！」

ゴメンねカモくん…

僕は…

「…わかった。」

「兄貴！？」

「へっ…！そうこなくっちゃ！」

「うおい兄貴！！」

「1分で終わらせるよ。

……いくぞ！！」

「来い！！」

お互いに身体を強化し、距離を詰めようと駆け出す。

「わあああああっ！！」

「おおおおおっ！！」

しかし―

「何！？」

突如、巨大な手裏剣が2人の間に飛来した。

―ひゅっ…

「！？」

「がああああああっ！？」

手裏剣が飛来した直後に何者かが現れ、そのまま小太郎に一撃を与える。

小太郎はその一撃により吹き飛ばされ、木に激突した。

「がっ…残像!?
分身攻撃!?
なっ…何者や!?」

―すぅ…

「え…!?」

き、消えた!?

い、今のは…

いきなり消えた人物に驚き、辺りを見回してみると―

「あっ。」

1本の木の上に、僕のよく知っている彼女らがいた。

「な…長瀬さん!?夕映さん!?」

な、なんでここに!?

「熱くなって我を忘れ、大局を見誤るとは……。
精進が足りぬでござるよネギ坊主。」

「…何や姉ちゃん達は。」

僕だって知りたい。

本当に何で2人が…

「私が携帯で呼んだです。ネギ先生。」

「ゆ、夕映さん。」

屋敷のどこにも姿が見えないと思ってたけど、無事だったんだ…

「さあ。ここは拙者に任せ行くでござる。
急ぐのでござろう?」

「で、でも、え?
あのっ……」

ま、任せるって…

つまりコタロー君の相手を…

それじゃあ長瀬さんが…！

「…拙者のコトなら心配いらぬ。
今は考えるより行動の時でござるよ。」

「で、でも……あっ！」

長瀬さんが僕を押し出す。

「さあ早く！！」

「～～～っ！」

長瀬さん…

くっ。

「すいません長瀬さん！」

「すまねえ。のっぽの姉ちゃん！」

そう言い、僕は祭壇へと向かう。

これ以上、時間を費やす訳にはいかない。

すみません長瀬さん…

どうか無事でいてください。

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「あの光の柱は！？」

「ほっほ～。こいつは見物やなぁ。」

どういうことだよ！？

ネギどころか、刹那と神楽坂も間に合わなかったのか！？

…いや落ち着け。

まだアイツは出てない。

ならまだ間に合うハズだ。

「どうやら雇い主の千草はんの計画が上手くいってるみたいですなー。
あの可愛い魔法使い君や刹那センパイ達は間に合わへんかったんやろか？」

げっ…。この声は…。

「まあウチには関係ありまへんけどなーお兄さん。」

「……月詠！」

よりによってコイツまで…
コイツは刹那の方に向かうと思ってたんだが。

「仕方ないやないですか。千草はんの指示でここに残れ言われたんですから。」

…さようですか。

「でも、こっち残ってよかったかもしれまへんえ。」

ん?

「お兄さん、面白いし斬り甲斐がありそうやもん。」

そう言い、恥じらうように頬を赤く染める月詠。

「おいおい…。女に言い寄られるのは大好きだけど、ヤンデレは勘弁だぜ?」

「あんイケズぅー。」

そんな風な喋ってけど、実際はかなりピンチだ。

鬼達レベルならともかく、月詠レベルはマズい。
あの剣はいくら身体強化しても受け止められるわけないし、二刀流なんてやりづらすぎる。

「…武器でも所持しとくべきだったかな。」

まあ持ってても、扱いきれないと思うけど…

「何言ってはるんですか。男は全員、下半身にエクスカリバー的な聖剣を所持して…」

「ストップ!!それ以上女の子が言っちゃ駄目!!」

まさかの下ネタ!!

月詠さん。
ヤバイ奴とは思ってたけど、こっち方面でもヤバイとは!

流石は神鳴流!!

「さて…。ウチ、お兄さんとお喋りしに来たわけやないですえ?」

「俺としてはお喋りで構わないんだが…」

「そんなこと言わず……殺り合いましょ。」

「――――！」

…なんちゅー恐ろしい顔すんだよ。

不覚にもチビリそうになったぜ。

…チビリそうなのは嘘だからな？

にしても、月詠相手にしつつ鬼達の相手を1人で…。

自分で残ったとはいえ、これなんて無理ゲー？

「…やれやれ。助けが必要かい先生？」

「おっ！」

俺の前に颯爽と現れた頼もしい援軍。

我らが隊長　龍宮真名

ナイスタイミングだ。

「うひゃー！あのデカいの本物アルか？
強そアルねー。」

イエロー…じゃなくて、クーフェイも一緒か。

「仕事料はちゃんと支払ってもらうよ先生。」

「そりゃないぜタツミン！」

「…帰ろうかクー。どうやら先生は私達の力なんていらないみたいだ。」

「嘘！！冗談！！アメリカンジョーク！！
だから帰って来てください龍宮様！！」

「日本なのにアメリカンジョークって…」

「黙ってろ馬鹿っ！！」

「にゃにおー！！」

「…で？結局どうするんだい？」

この状況で龍宮ほどの実力者が助太刀してくれるのは非常にありがたい。

でも料金が…

「……」

くっ！

「…後で領収書発行してください。」

「よし。取引成立だ。」

経費で落ちるかな…？

うん。落ちなかったらジジイにでも請求しよう。

「じゃあ、俺は鬼達を相手にするから龍宮はアイツを「先生は彼女を頼む。私達は鬼達を引き受けよう。」―ええええええええ！？」

やっぱ俺が相手すんの！？

「いつまで待たせはるんですかー！
いい加減殺りましょー！」

覚悟…決めるしかないかぁ

「はあ…。どうせなら殺るよりヤル方がよかった…」

「セクハラだよ先生。」

「…もう言わないから銃口をこっちに向けないで。」

「行きますえー。」

ついに我慢出来なくなったのか月詠がとんでもない速度で接近してくる。

「ちょっ！？まだ喋ってんじゃねえか！？」

「もう待ちきれまへん！」

ちぃ！

これだから最近の若い奴は嫌なんだ！

我慢ってモンを知らない奴が多すぎる！

…あれ？
なんだか俺年寄りくさい？

「えーい。」

「うおっ！？」

のんびりとした口調とは違い、振るわれる剣は容赦なく速い。
―って速すぎだろ！？

「ちぃ…」

月詠の二刀流の前に、俺は避けることしかできない。
やっぱ素手じゃ不利か。

「いつまで避けはるんですか？
これじゃつまりまへんよ。」

「言ってろ！」

確かにこのまま防戦一方じゃ勝てない。
てかいずれ負けちまう。

仕方ない。

あの作戦を使うか…！

「月詠ー！！」

「はい？」

「注っ目！！」

そう言い指先を月詠に向ける。

「『光よ』！」

「っ！？」

瞬間、俺の指先が眩しいほどの光が発生する。

フェイトにも通じたこの作戦。
初見ならまず成功する。

「よっしゃ！続けるぜ！
プラクテ・ビギ・ナル
ものみな焼き尽くす浄化の炎！」

月詠にはフェイトのような強力な障壁はないはず！
なら、この至近距離の紅き焔なら倒せる！

「破壊の主にして　再生の徴……がっ！」

し、しまった……

昼間の傷が…！

無理に身体動かしたり、魔法使い過ぎたせいで開いちまったか…！

くそっ…こんな時に…

「なんや知りまへんけど、惜しかったですなあ。」

「！？」

「先生！？…ちぃ！」

龍宮が俺の元に来ようとするが鬼が多すぎるため、それは阻まれる。

そして月詠の一撃が一直線に俺の身体を切り裂く。

「がっ……！」

そして俺の身体から赤い血が噴き出る。

俺は立っていられず、膝から崩れ落ちる。

「はっ……はぁ、はぁ、はぁ。」

これは……ヤバイ

身体が動かねえし、意識が朦朧（もうろう）としてきた。

「残念ですなあ…」

コツコツ、と一歩ずつ俺に近づく足音が聞こえる。

―おいおい。まさかこんなとこで終わんのかよ？

…そうだ。
まだ終われない。

近衛と約束しただろう。
絶対に守るって。

刹那に信じてもらっただろう。

絶対に悲しませないって。

「けど、これも勝負の世界。恨まんといてくださいな？」

だから…動いてくれよ俺の身体！

俺はこの世界でも意味なく死んでいくわけにはいかないんだ！

―その通りだ。じゃないとせっかく生き返らした意味がねぇじゃねえか。

「お兄さん程度ならどうとでもなるんやけど、これ以上雇い主の計画邪魔されんのも面倒やしなあ。」

―言っただろ？俺をどうか楽しませてくれって。俺はまだ全然楽しめてないぜ？

何でもいい…！

この状況を打破できる何かを！

「だから…死んでもらいますえ。」

月詠が剣を構える。

そしてそのまま俺にトドメの一撃を加えようと―

「先生っ！！」

ちくしょう…！

俺は…。俺は…！

―しょうがねえな…。予定とは違うが、俺がなんとかしてやるよ。

貸し、１つだぜ？

「えっ…？」

この時俺は、どこかで聞いたような懐かしい声を耳にした。

だが、それに気付いた直後、俺の意識は途絶えてしまった。

side　ナナシ　end

side　――

「なっ…!?傷が…!?」

男の身体に刻まれた傷があり得ない速度で治る。

…いや、あれは再生していくと言った方が正しいだろうか。

そして男は何事もなかったようにその場に立ち上がる

「よいしょっと。」

「…何者ですかお兄さん?傷を瞬時に全て治すなんて。」

「ん？…まあ待てって。
ちょっと一服な。」

そう言い、男は自分の服からタバコを取り出す。

「げっ…安物吸ってやがんなぁ。
けどないよりマシか…」

「先生！！無事…！？」

男の安否を確かめるために顔を確かめた彼女は気付く。

彼の瞳が、いつものような翡翠のような色ではなく、まるで血のような深紅の色であることに。

「先生…なのかい？」

「ふぅ…。」

答えは返ってこない。

普段の彼なら他人を無視するようなことはしないだろう。

「さて、待たせたな。」

「結局…アンタは何者なんや？」

「俺か？俺は…」

男はその質問に笑みを浮かべながら答える。

まるで彼女らの反応を楽しみに期待するかのように。

そして

返ってきた答えは―

「―神。」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第13話「ピンチになれば覚醒する。王道だよね。」※1／9　誤字修正版　投

はい。

やっちゃいました。

主人公がピンチに謎の覚醒…王道というか中2病というか（汗）

いいんです！
私はそういう王道が好きなんだから！（↑オイッ

今回も
感想・評価・意見を待ってます。
ぜひお願いします

ではまた次回

第１４話「これで俺も最強に…えっ？今回だけ？」（前書き）

今回、内容がメチャクチャに…（汗）

せ、戦闘シーンやギャグ以外は大っ嫌いだ！（泣）

…とまあ心の叫びが漏れた所ですが、今回本当にメチャクチャです。
それでもカモンという方はお進みください。

第１４話「これで俺も最強に…えっ？今回だけ？」

ｓｉｄｅ　龍宮

「神……やて？」

「そう神様。本来ならお前らなんかじゃ見ることもできない偉い存在なんだぜ？敬えよ。」

理解できない…

…誰なんだアイツは？

先生？

いや違う。

彼ならばこんな嘘をつく必要がないし、何よりあの傷が治った説明ができない。

だとしたら彼はどこに…

「お兄さん、笑いのセンスがありまへんなあ。
そんなんじゃ誰も笑いませんよ？」

そもそもこんな状況では笑えるとは思えないが…

「笑わせるつもりなんてねえ。そんなんは道化にでも任せときゃいいんだよ。」

「この状況じゃ道化はお兄さんやと思いますけど？」

「言うじゃないか。
所詮はこの物語に縛られている傀儡風情が。」

「…どういう意味で？」

「お前が知る必要はねえよ。
教えたとこで理解できるとは思えねえしな。」

「…なんやお兄さん。えらい可愛げがなくなりましたなあ。」

「当たり前だ。俺は可愛いじゃなくて美しい部類だからな。」

「……」

「反応しろよっ！
すべったみたいで恥ずかしいだろうが馬鹿っ！！」

「理不尽やっ！？」

…やっぱり先生か？

なんというか雰囲気が同じようで違うような…

「…ンだよ？なんか言いたそうな顔じゃねえか。」

ジッと見られることが気に障ったか、先生（仮）が話しかけてきた。

やはり、こうして正面から見ると、外見は瞳の色以外は間違いなく先生と変わりないな。

「…何者なんだお前は？」

「…はぁ。またその質問かよ？
何度も言わせんな。
神だよ神。英語でＧＯＤ。理解したか？」

「ふざけるな。真面目に答えろ。
お前は何者だ？
私が知ってる先生なのか？」

そう言い、私は銃口を先生に向ける。
勿論、ただの一般人なら殺せる威力を持っている。

「いたって真面目に答えてるんだが…。
まったく、自分の理解の範囲外の出来事が起きると認められないってのは、人間の悪い癖だぜ？」

呆れながら私に近づく。

その歩調はまるで、私の構えてる銃なんて関係ないように。

「それで先生だっけ？
心配すんな。先生なら此処にいるからよ。」

先生（仮）は自分を指差す。
それはつまり…

「やはり…先生、なのか？」

「その質問にはＹＥＳとも答えられるし、ＮＯとも答えられる。」

ＹＥＳともＮＯ？

それは先生であり、先生ではないということか？

意味がわからな……！

「……別人格か？」

「へえ。ようやく理解できたみたいだな。」

「しかし、別人格の存在なんて知らなかったんだが？」

「当たり前だろ？

今初めて表に出てきた上に、先生本人すら知らねえんだから。」

つまり、今いる先生（仮）はナナシ先生のことを認識できるが、ナナシ先生は先生（仮）の存在を認識できないということか。

「しかし、先生の別人格であるお前が、神というのはどういうことだ？」

「ああ。それはな「ああ～！！もうややこしいわ！」―まだ俺が喋ってんだろうが！！
人の話は最後まで聞けと習わなかったか低能！！」

先生（仮）の話に耐えきれなくなったか、神鳴流の女が急に声を上げる。

「ようわかりませんが、結局は敵なんやろ？
なら簡単なこと。
お兄さんが何者か関係ありまへん。
ウチは誰であろうとただ斬るのみ。」

「ったく狂乱女が。イカれてやがんな。
…けど、嫌いじゃないぜ？そういうの。」

先生（仮）は姿勢を相手に向ける。
先ほどまで苦戦した相手だというのに、その表情には余裕が見える。
人格が変わった程度で、あの女の相手が出来るとは思えないが…

「神をも鳴かす流派…か。はたして本当に俺を鳴かすことができるかな？」

そんなセリフはお構い無しに相手が接近する。
そのまま右手の太刀を振りかぶり―

「いきますえ。斬ー岩ー剣！」

早速奥義か！

不味い！

「先生っ！」

私は急いで狙いを相手に定めようとするが―

「『折れろ』」

「!?」

「なっ…!?」

先生が一言呟くと、その言葉の通りに相手の剣が折れた…

魔法?

だが、あんな短い詠唱で剣を折るほどの威力があるわけ…

「やはり脆いな…。
いかに強靭な刀とはいえ所詮は人の造りし物。俺に届くわけ…ぐっ!?」

「先生!?」

先生（仮）は急に悲痛の表情を浮かべると口から血を吐く。

今の攻撃は当たっていないし、どういうことだ?

「…ちっ。まだこの身体じゃ俺の力は扱いきれねえか。なら…」

そう言い先生は空を見上げ、そのまま空に…って!?

「飛んだっ!?」

「浮遊術!?」

馬鹿な!

アレは高位の魔法使いしか使えないはずだ!

「人間に使えて、俺に使えない道理がねえだろハゲ。…にしても上から見ると、とんでもない鬼の数だな…。…っておよ?アレは…」

私はハゲてないんだが…

それよりも先生（仮）が視線を光の柱の方向へ向けた。

それにつられ、私も視線を先生（仮）の見ている方向へ向けると―

「なっ!?」

この距離からでも見える巨大な鬼がいた。

「アレが出たってことはもう時間は少ねえな。」

くっ。刹那達は間に合わなかったか！

「これ以上傀儡どもの相手をしてる暇はねえ。
一瞬で殲滅してやる。」

すると、先生（仮）の身体から凄まじい魔力が溢れる。
なんだこの魔力は！？
この魔力量は、明らかに先生（真）のを越えている！

「契約に従い　我に従え
炎の覇王！
来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣！」

「「！！」」

この詠唱は！

ヤバい！

「これは…不味いですなあ。」

神鳴流の女はすぐさまこの場から離れていく。

「クー！私達もこの場から離脱する！急げ！」

「ほえ？」

鬼の相手をしていたクーに向かい叫ぶ。
クーはそれに気付き、急いでこちらに来た。

「どうしたアル？まだ鬼達を倒しきってない…」

「説明は後だ！」

私達は鬼達に背を向け、走りだす。
鬼達は突然の出来事に対応できていない。

「なんや嬢ちゃん達？
逃げおったぞ？」

「オヤビン！アレ！？」

「おう？」

「ほとばしれよ　ソドムを焼きし　炎と硫黄　罪ありし者を死の塵に！」

詠唱が完成し、先生（仮）が構える。

鬼達とは充分距離を離せたが…

「『燃える天空』！！！」

―ドオッ！！

瞬間、先ほどまで私達のいた場所に超高温の炎が発生した。

その炎は鬼を焼き尽くし、辺りの木々も焼き尽くす。

「あ、危なかったアルな…」

クーが呟くが、私は返事している余裕がなかった。

あの魔法はやはり炎系最大呪文…

「広範囲焚焼殲滅魔法…」

「…さて、行くか。」

そう言うと、先生（仮）の身体が光に包まれて、姿を消した。

「…転移魔法か？」

光を媒体にしたのか？

まさかそんな技法を一個人が…

「まったく…謎ばかりだ。」

「ほんまですなあ。

鬼は全滅してもうたし、千草はんになんて説明しましょ？」

「…生きていたか。」

木々の陰から神鳴流の女が出てくる。

「あれぐらいじゃ死ねまへんよ。…って言うてもギリギリやったんですけど。」

…確かに。

所々彼女の服が黒焦げている。

「あのお兄さんを斬り損ねてもうたから、代わりにお姉さんを斬らせてもらいますえ。」

「できるかな?」

そう言い、両者はそれぞれの獲物を構える。

「神鳴流に飛び道具は効きまへんえ?」

「知ってるよ。」

とにかく先生…

よくわからないが無事でいてくれよ?

ｓｉｄｅ　真名　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

…間に合わなかった。

後少しだったていうのに…

「惜しかったね。こちらに数をかけたのはよかったけど、いささか力不足だ。」

隣ではアスナさんと刹那さんも僕と同じように疲労しきっている。

３人がかりで戦ったっていうのに…！

「殺しはしない…けれど、自ら向かってきたということは相応の傷を負う覚悟はあるということだよね。」

「ぐっ…！」

「体力も魔力も限界。
よく頑張ったよネギ君。
けど、ここまでだ。

ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト
小さき王　八つ足の蜥蜴
邪眼の主よ！」

「な、何！？
これは呪文始動キー！？
こいつ西洋魔術師！！
しかもこれは…！
姐さん！奴の詠唱を止め―」

「ダメです！間に合わない！」

「時を奪う　毒の吐息を
『石の息吹』！！」

―ボゥムッ！！

ぐっ！？

「…しまった。大きすぎた…」

「ハァ…ハァ…」

「な、なんとか逃げれた。奴はまだこっちに気づいていません。」

「だ、大丈夫ネギ？
ひどい死にそうじゃん。」

「あ、ありがとう。アスナさんも…」

「！？
ネギ先生！？その手…！」

「え？」

し、しまった…！

敵の呪文を受けた箇所を見られてしまった。
急いで隠したけどばれちゃったみたいだ。

「だ、大丈夫。かすっただけです。」

「……！」

すると刹那さんが覚悟を決めたように―

「…お二人は今すぐにげてください。
お嬢様は私が救い出します。」

「えっ！」

そんな無茶な！

「お嬢様は千草と共にあの巨人の肩の所にいます。
私ならあそこまで行けます。」

「で、でもあんな高い所にどうやって？」

そうだ。

あんな場所、僕みたいに杖で飛んで行かないかぎり…

「ネギ先生、明日菜さん…私…、２人にも…ナナシ先生にもお嬢様
にも秘密にしておいたコトがあります…」

秘密？

「この姿を見られたらもう…お別れしなくてはなりません。」

「え……」

刹那さんは身を屈めるように力を込める。

そして―

「でも…今なら…あなた達になら…」

―バサァッ

刹那さんの背中から、天使のような白い翼が生えた。

「…これが私の正体。
奴らと…同じ…化け物です。
でもっ…！誤解しないでください！
私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！
…今まで秘密にしていたのは」

そう言う刹那さんは瞳に涙を浮かべる。

「…この醜い姿をお嬢様やナナシ先生達に知られて嫌われるのが怖かっただけ…！私っ…」

刹那さん…

「宮崎さんのような勇気も持てない…情けない女ですっ…！」

「…ふぅーん。」

「ひゃ！」

ふ、ふぅーんってアスナさん…

するとアスナさんはおもむろに刹那さんの翼に触れる。

「あの…明日菜さん？」

そしてそのまま腕を振りかぶり…ってアスナさん！？

―バッチィィン！

「きゃう!?」

「なーに言ってんのよ刹那さん。
こんなの背中に生えてくんなんてカッコイイじゃん。」

「え…」

「あんたさぁ…　このかの幼なじみで、その後2年間も陰からずっと見守ってたんでしょ?
その間あいつの何を見てたのよ。
このかがこの位で誰かのことを嫌いになったりすると思う?
ホントにもう…バカなんだから。」

「あ…明日菜さん…」

「それに私達もそんなんで嫌いになるわけないじゃない。
ナッシーだってどうせ、スゲーカッコイイ!羨ましいぃー!とか言うに決まってんじゃない。」

「ハハハ…」

そう言ってる姿が簡単に思い浮かぶ。
確かにナナシ先生なら言いそうだ。

「行って刹那さん！
私達が援護するから！
いいわよねネギ！」

「ハ、ハイ！」

「ホラ、早く刹那さん。」

「……は、はい！」

刹那さんは飛ぶ姿勢にはいる。
それと同時に煙の中から…

「！」

「…そこにいたのか。」

ぐっ。ついに見つかったか。

「ネギ先生…」

刹那さんが顔だけ僕の方へ向ける。

どうしたんだ？

「…お嬢様の…このちゃんのために頑張ってくれてありがとうございます。」

そう言い残し、刹那さんは飛び上がる。

「！」

白髪の子はそんな刹那さんを打ち落とそうとするけれど―

「『魔法の射手　光の一矢』！！」

「！」

残った少ない魔力でなんとか攻撃を阻止する。

ホントにもうボロボロだな…

「ネギ、大丈夫？」

「さ、さて…ここから…どうしようかカモ君？」

「ああ…。こっちはもう手は出し尽くしちまったからな。」

ホントにどうしようか…

―…坊や聞こえるか？

悩んでいると突然頭の中に声が響く。

「こ、この声は！？」

―フフフ…。わずかだが貴様の戦い、覗かせてもらったぞ。

の、覗いたって何処で！？

―まだ限界ではないハズだ坊や。

意地を見せてみろ！！

あと1分半持ち堪えられたなら、私が全てを終わらせてやる！！

「こ、この声、これってまさか…！」

「ああ姐さん！！」

あの人が来てくれるのか…？

―坊や。惜しかったが、貴様小利口にまとまり過ぎだ。
今からそれじゃ、とても親父にゃ追いつかんぞ？
たまには後先考えず突っ込んでみたらどうだ？

「いや、兄貴は結構後先考えずに…」

―ガキならガキらしく、後のことは大人に任せな。
もっとも1人後先考えない大人がいるが…

…ああ、あの人か。

「…ナッシー。」

「…旦那。」

みんな同じ人をイメージしたようだ。
どんだけ評価低いんだあの人…

「…ネギ。」

「…はい。行きます！」

「ＯＫ！」

１分半！

なんとか持たせる！

「来るのかい？…では相手をしよう。」

「ＧＯ！…って何だぁ！？この強大な魔力は！？」

カモ君がそう言うと、急に後ろに振り返る。

僕も振り返ってみると…

―ドオッ！！

えっ…？

いきなり森から炎が燃え上がった。

「か、か、火事ぃー！？」

「落ち着け姐さん！
ありゃあ魔法だ！それもヤバい強力な！」

「でも…確かあの方向は！？」

…そうだ！あっちにはナナシ先生が！

「ちょ、ちょっと！ナッシーは大丈夫なの！？」

「わかんねえ…。旦那なら無事だとは思うが…」

ナナシ先生…

「おう。先生なら無事だぜ？」

「「「えっ？」」」

聞き慣れた声が上から聞こえたので、顔を向けると―

「ナナシ先生！？」

「ナッシー！？」

と、飛んでる！？

た、確か飛ぶのって、凄い魔法使いじゃないと無理なんじゃ…

「よう人形君。とりあえず初めましてかな？」

「…何を言ってるんだい？あなたと対面するのはこれで４回目のハズだけど？」

「いいや初めてだよ。
…俺とはな。」

ニヤリと笑う先生。

その笑みは今まで僕がみたことないような表情だった。

「お前にはこの身体がお世話になったからな。
借りた分、全部まとめて返してやるぜ。」

「何度も言うけど、無駄だよ。あなた程度の実力では僕には…」

「『風精召喚・戦の乙女９９柱』！！」

「！？」

精霊魔法！

だけどあの数は！？

風によって編まれた戦乙女達が白髪の子へと突撃する。
白髪の子はそれを後ろに飛び回避する。

「ほら！おかわりだ！
来れ雷精　風の精！
雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！」

「あの呪文は！？」

僕の最大呪文と同じ…！

「『雷の暴風』！！」

詠唱を終え、先生から雷を帯びた竜巻が発生する。

その竜巻は白髪の子を正面から捉え…

―ドオオオン！！

先生の魔法は祭壇への橋をも巻き込み、その凄まじい衝撃は僕達を襲った。

「きゃあああ！？」

「ぐっ…！？」

な、なんて威力だ！

同じ魔法で、ここまで威力が違うものなのか！？

これならあの子でも…！

すると煙の中から―

「…驚いたよ。まさか彼にこんな力があっただなんて。」

「なっ！？」

む、無傷だなんて…！

「ホントだぜ。いくら俺でも無傷なんて聞いたら落ち込むぞ。」

「「！？」」

煙から現れた白髪の子の背後に、突然先生が現れる。

いったいいつの間に！？

「瞬動…！」

そのまま白髪の子の腹に手を当てると―

「遅い。『障壁突破・炎の大剣』！！」

言葉の通り、炎の大剣が現れ、白髪の子を貫く。

「！？」

『障壁解除』と『無詠唱魔法』の組み合わせ！？
そんな高度な技を…！

「…むっ。幻像か…」

貫かれた身体が水のように流れ落ちる。

「…どうやらあなたに対する認識を改めるべきだね。認めるよ。あなたは強い。」

「はん。俺が強いのは当たり前だろうが！
少なくとも人形に負けるほど弱くはねえ。」

「あなたはいったい何者で何を知って…いや、やめよう。とりあえず今日の所は退かせてもらうよ。」

「逃げるのかよ?」

「この調子じゃ千草さんの計画も失敗に終わりそうだしね。早めに退散するよ。…それじゃあまた。」

―パシャッ

そう言い残し、白髪の子は消えていった。

か、勝ったのか…?

「つまんねえ奴だな…。」

先生は心底つまらなさそうにつぶやく。

「ちょっとネギ…。あれ本当にナッシーなの?」

「そう言われてみりゃあ旦那とは違う気が…」

僕もそれは思った。

なんだ…この違和感は？

「どうやら忌み子の方も無事お嬢様を救い出せたようだな。」

「「「!?」」」

忌み子…だって？

…刹那さんのことか？

「…誰よあんた？ナッシーじゃないわね？」

「あん？何言ってやがる？どこからどう見てもお前らの知っている皆のアイドル、ナナシ「嘘よ。」…なに？」

「私の知っているナッシーはね、冗談を言っても、他人を馬鹿にしたりなんか…するわね。」

アスナさん…。そこはしないって言い切らないんですか。

「けどね？

ナッシーは決して自分の大切な生徒を傷つけるようなことは言わないわよっ！！」

「……」

「姐さん…」

「アスナさん…」

やっぱりアスナさんも、なんやかんやでナナシ先生のことを慕って…

「そして何より！
ナッシーと言われて、ナッシー言うな！って言わないナッシーなんて、ナッシーじゃないわ！！」

「「そこっ！？」」

た、確かにいつも言うなって言ってるけど…

だからってそんな理由で…

「ハーハッハッハハ！」

いきなり先生が笑いだした。

「…ハハハ。さすがはメインヒロインというべきか。いい勘じゃないか。」

「だったらやっぱり…」

「貴様はナナシ・クラートではないということか…」

「お前は…」

僕らの背後から声が聞こえる。

この声は―

「エヴァンジェリンさん!!」

「エヴァちゃん!!」

「…闇の福音。」

「…貴様については後だ。今はスクナだ。」

「見せ場は譲ってやる。
失敗んなよ？」

「…言ってろ。」

―ズシンッ！

【グオオオッ！？】

そう言うと、スクナに電流が流れ、拘束する。

あれは茶々丸さんか？
手にはデカいライフルのようなものを持っている。

「見とくがいいお前ら。
最強の魔法使いの最高の力を！」

エヴァンジェリンさんは先ほどの先生と同じように、飛び上がる。

そして―

「リク・ラ・クラ・ラック・ライラック
契約に従い　我に従え　氷の女王！
来れ　とこしえのやみ！
『えいえんのひょうが』！！」

呪文を唱えた瞬間、スクナ周辺が凍り付く。

「な、な、何者やあんた！？」

「くくくく。相手が悪かったなぁ女…。
ほぼ絶対零度１５０フィート四方の広範囲凍結殲滅呪文だ。
そのデカブツでも防ぐこと適わぬぞ。」

ひゃ、１５０フィート！？

「我が名は吸血鬼エヴァンジェリン！！
『闇の福音』！！
最強無敵の悪の魔法使いだよ！！
アハハハハハ！！」

「ノ、ノリノリねーエヴァちゃん。」

「いい年のおばちゃんが何見栄を張ってんだか…」

「そこのお前！聞こえているぞ！私はおばちゃんじゃないっ！！」

「年齢３桁なら充分おばちゃんだろ…」

「…一緒に凍るか貴様？」

「この肉体美が永遠に保存されるのは悪い話じゃないが、遠慮させてもらう。」

「ふん。なら黙ってろ。
全ての命ある者に等しき死を
其は安らぎ也！」

「な、なあああ！？」

氷像に亀裂が入っていく。
それは氷像全てにまわり―

「『おわるせかい』
…砕けろ。」

最強の魔法使いを前に、あっけなく砕け散った。

side　ネギ　end

side　???

「アハハハ！バァカめ！
伝説の鬼神か知らぬが、私の敵ではないわ！」

あーあ。あんな嬉しそうな顔しやがって。
そんなに久々に全力出せたことが嬉しいかね？

「でもエヴァンジェリンさん。登校地獄の呪いは？」

「それですが…。」

主人公の質問にロボ子が答える。

「強力な呪いの精霊を騙し続けるため、今現在複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に1回『エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けてます。」

「今回の報酬として明日、私が京都観光を終えるまでジジイにはハンコ地獄を続けてもらう。」

「ご、5秒に1回って…。学園長大丈夫なの？」

「棺桶に片足ぶちこんでる腐りかけのジジイになんてことを…」

「いや、言い過ぎですから！？」

「ふん！この事件のそもそもの原因はジジイの見通しの甘さにある！この程度の苦労当然だ！」

キッツいなーこいつ。

「それより貴様…結局誰なんだ？」

「俺？」

またこの質問かよ…

「…！そうよあんた！あんた誰なのよ！？」

…まさか忘れてたのかこいつ？

忘れてんな…馬鹿だから。

てか、何度何者か聞かれても答えは同じなんだけどな。

「神。」

「「「「はい…？」」」」

やっぱりこんな反応かよ…

「髪？」

「違う。」

「紙？」

「違う。」

「香美？」

「だから違うっての！！
てか香美って誰だよ！？
明らか女の名前じゃん！？神だっての神！！ＧＯＤの神！！」

なんでどいつもこいつも違う字で聞き返してくるんだ！？

「…こういうところはナッシーそっくりね。」

「確かに…」

「…兄貴？なんか苦しそうだけど、大丈夫かよ？」

ん？

「…大丈夫だよカモく…」

「兄貴！？」

…主人公倒れちゃったよ。

「ど、どうした坊や！？」

「ネギ！？ちょちょ、ちょっとっ！？」

「ひでぇっ。右半身が石化を…！」

そういえば人形の石化攻撃を受けたんだっけ。

そりゃ大変だ。

「みんなー！！」

「先生！」

お嬢様と忌み子も来たか。

「このか！刹那さん！」

「あっ！

ナッシーもいる…って、ナッシーやない？」

「へえ。こんなかではお嬢様が一番勘がいいじゃないか。」

「誰だ貴様！！ナナシ先生をどこに…！」

「刹那さん！そいつは後で！！
それよりネギが…！」

「…！？ネギ先生！？」

「どうしたでござるか！？」

「楓さん！夕映！」

それに犬っころもいるよ…
一気に集まりすぎだろ…

・　・　・　・

「…危険な状態です。
ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が非常に遅いのです。
このままでは首部分まで石化した時点で呼吸ができず、窒息してしまいます。」

「…ど、どうにかならないのエヴァちゃん!?」

ひぃ、ふぅ、みぃ、に…

さすが主人公。１０人もの奴らが心配してくれてるよ。

１人ぐらい心配しない奴がいてもいいと思うのに…

「私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。…だが。」

だが?

闇の福音は俺の方を向き―

「自称神ならなんとかできるんじゃないか?」

「自称じゃねえ。」

…しかし、そうきたか。

これは予想外。

けどまあ―

「できるけど？」

俺に不可能はないし？

「ホント！？」

「なら…！」

「けど、やだね。」

「「「「なっ！？」」」」

驚いてる驚いてる。

いいねえこの表情。

見てて気持ちいい。

「なんでよ！？なんとかできるなら早く…！」

「なーんで俺が人助けなんか面倒なことしないといけないんだ？
かったるい。」

「あ、あんたねえ！
それでも人間なの！？」

「…だから俺は神だから人じゃねえって。」

まだ理解してなかったか…どんだけ馬鹿なんだ？

「～～！いいから助けなさいよっ！」

「必死だねえメインヒロイン。
そんなに主人公が死ぬのが嫌なのか？」

「何わけわかんないこと言ってんのよ！？
早くしてよ！このままじゃネギが…！」

「知ったことか…って言いたいとこだが、そろそろマジで時間ねえな。」

「えっ…？」

「こいつはこの物語の重要なファクターだ。
ここで死んでもらったらつまらない。
お前には俺を楽しませるために生きててもらうぜ？」

俺は主人公へと手を掲げる。

俺の力はまだこの身体じゃ制御できないから使いたくなかったんだが仕方ないないな。

「『治れ』」

「「「！？」」」

俺がそう唱えると、一瞬、まばゆい光が発生する。

その光が収まると―

「…あれ？みなさん？ここは…？」

「ネギっ！！」

「「ネギ先生っ！！」

これで一件落着かな？

「馬鹿な…。あんな魔法…見たことない…。そもそもあれは魔法…なのか？」

闇の福音が1人で考えこんでいるが、こっちもタイムオーバーだ。

最後に伝言を…と

「あ…と、お嬢様。」

「…ん？なんやナッシー…じゃなくてええと…」

…ああ。なんて呼んでいいか分からないのか。

なら―

「俺のことは普通に神様と呼んでいいぜ。」

「ああそう。なら神はん。どうしたん？」

神はん…！

なんだか新鮮でいいっ！

…じゃなくて

「先生を頼むぜ？」

「先生？ナッシーのこと？」

「そ。次俺が現れるまでにまた死にかけてもらったら困るからな。しっかりこいつの手綱を握ってくれ。」

「…うん？ようわからんけどナッシーに無茶させんようしたらいいんやな？」

「ああ。」

「なら任せてや。」

いい子だなこいつ。

先生には勿体ないな。

まあ本人が嫌がってないんだからいいか。

「そんじゃさいなら。」

「えっ?ちょっ、神はん!?」

これで、またしばらくは傍観するのみか…

せいぜい暇にしないようにしてくれるといいんだが…

頼んだぜ?先生。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１４話「これで俺も最強に…えっ？今回だけ？」（後書き）

あれ？今回ナナシが出てないような…？

まあこんな回もあるか！

次でようやく修学旅行編を終わらせたいと思います。
ようやく次から好きなようにギャグが書けます（↑今までも好きに書いてた気が…

それでは感想・評価待ってまーす！

また次回！

第１５話「旅行の帰りは寝ちゃうもんだよね。」（前書き）

ついに修学旅行編完結です。

第１５話「旅行の帰りは寝ちゃうもんだよね。」

―修学旅行４日目　朝

「知らない天井…じゃないな。」

どうも、ナナシです。

目が覚めたらなんだか見覚えのある部屋にいました。

どこだ此処？

てか俺、なんでこんなところに？

俺は確か鬼達と…

「目が覚めたか。」

不意に声をかけられ、その発生源の方を向くと―

「……まな板？」

「ふんっ！」

「ぐばらっ！？」

「起きた瞬間私に喧嘩売るとはいい度胸じゃないか。ええ？いったい私の身体のどこがまな板だというのだ？」

「主に胸が…って！？
スンマセン悪気はないんです寝ぼけてただけなんですだから殺気を出さないで！！」

「…ふん。」

た、助かった…

よく息継ぎしないで喋れたな俺…

てか何でエヴァがここにいんの？…って、応援で来たのか。

「エヴァがいるってことは無事に全部解決したみたいだな。よかった、よかった。」

「……覚えてないのか？」

「覚えてない？何？お前のスリーサイズ？悪い。俺、お前みたいな幼児体型に興味な「リク・ラ・クラ・ラック・ライラック　契約に従い　我に…」―それはシャレにならん！？一応俺怪我人だぞ！？」

「…次はないぞ。」

怖っ！？

こいつは冗談が通じないから嫌なんだよ！

ツッコミで殲滅魔法とかどんだけっ！？

それに俺は怪我人だっていうのに……あれ？

「……」

「どうした？」

「…傷痕がない？
それになんか身体の調子もいい気が…」

「…本当に覚えてないんだな？」

「だから何をだよ？」

「…ならいい。」

「？」

ホントにわからん。

何か忘れてんのか俺？

昨日の戦いの最中に気を失って…どうしたんだ？

龍宮とイエローがなんとかしてくれたのか？

怪我は…詠春さんとこの人が治療してくれたのかな？

うーん…色々謎だ。

俺が昨日の出来事に頭を悩ませていると、部屋の入り口から―

「エヴァンジェリンさん、ここにいましたか。」

「むっ？」

「おっ、刹那。」

「ナナシ先生？お目覚めになられたんですね。」

「ああ、たった今な。」

「先生…ですよね？」

「？

当たり前だろ？」

コイツもどうしたんだ？

人の顔を凝視したりして。

「…やはりいつもの先生だ。

なら昨日の先生は…」

だと思ったら、今度は1人でうつむいてブツブツ呟いてるし。

なんだ？

エヴァと刹那もアレな日なのか？

刹那はともかく、エヴァは……ないな絶対。

「オイ、なんで貴様は人の身体を見て、1人で納得したような顔してるんだ？」

「おーい、刹那？」

「無視するなっ！！」

うるせっ！

これ以上余計なこと言って、命を危険にしたくねえんだよ！！

「あっ…はい、なんでしょう？」

「お前、俺はともかくエヴァに用事があるんじゃねえの？」

「そ、そうでした。
…エヴァンジェリンさん。」

「ん、なんだ？」

「私は…麻帆良から…お嬢様の下から離れようと思います。」

……は？

離れる？

「…そうか。」

「はい…。一族の掟であの姿を見られた以上、一緒にいるわけにはいきません。…では。」

そう言い、刹那は俺の部屋から外へと出ていく…って、ちょっと待てっ！？

「離れるってどういうことだよ！？昨日、俺が気絶してる間になにがあったかは知らないけど、そんないきなり…！」

「…先生にはあの姿をお見せしていませんでしたね。」

お見せしてない？

それにあの姿って？

…あっ！

「私は…人と烏族のハーフです。これ以上、私みたいな者がみんなの傍にいるわけにはいかないんです…」

「……」

……やべぇ。

まさか知ってましたなんて言えるわけもないし、どうしよう…。

いや、でも、ここで何か言わないと刹那は行っちゃいそうな雰囲気だし。

頑張れ俺！

何か言うんだ！

なんとか刹那を引き止められるような言葉を！

「刹那っ！！」

「は、はいっ！？」

―さあ、言うんだっ！！

「…実はあのガチャ〇ンは空手初段らしいぞ。」

「「……は？」」

…え？今俺なんて言った？

なんで刹那もエヴァもポカンとした顔で、俺を見てるの？

「あの…私が言うのもなんですが、普通この状況でガ〇ャピンの豆知識なんて言う必要は…」

「言わないでっ！
ただ俺は刹那を引き止めようとしただけで…！」

「私を引き止める言葉は、豆知識程度でいいってことですか？」

「違うからっ！
そんなつもりで言ったんじゃないから！」

俺の馬鹿！

これじゃあＫＹなんて言われてもしょうがねえじゃん！

「……」

「そんな人を、駄目だこのチェリー、みたいな目で見るのはやめろ！……って誰がチェリーだっ！？」

「誰もそんなこと言ってませんよ！？」

「…どんだけ慌ててるんだアイツ。」

と、とにかく、今度こそ刹那にまともなコト言わないと！

「せ、刹ｎ「大変よ刹那さーんっ！」ぷげらっ！？」

「せっちゃん、せっちゃん、大変やーっ！」

今度こそと思った俺に神楽坂の飛び蹴りが炸裂。

てか刹那って呼んでるのに俺を蹴るってどういうことだよ？

「待ってください２人共！……って、大丈夫ですかナナシ先生！？」

「俺に優しくしてくれるのはお前だけだよネギ…」

蹴った本人は俺に見向きもしないし…

「どうしたんですか？」

そして、刹那。

お前も何もなかったように話を進めるなよ…

「実は３－Ａの旅館に飛ばした私達の紙型がストリップショーなんか始めて大暴れしてるらしいのよっ！」

「えええっ！？」

「マジかっ！？」

「あっ…復活した。」

「どこに反応してるんだコイツは…」

くそぉ！！

なんでその場にいないんだ俺は！

ナナシ・クラート一生の不覚！！

「…ナッシー？」

「誰もストリップを見たいだなんて思ってないんだからな！？」

「思ってるんや…」

ばれた！？

「ナッシーも他人事じゃないわよ。
ナッシーの身代わりもストリップ始めたらしいんだから。」

「誰得っ！？」

「さすがナナシの身代わり…。
変態なとこまでそっくりだとは。」

「俺はストリップなんかしたことねえよ！！」

「変態は否定しないんですね…」

否定してる余裕がないだけだから！

「おっ！ここにいたか桜咲にチェッシー！」

「だからチェッシーはやめろっ！！」

騒がしくしてると、それにつられ、他の奴らも出てきた。

「チェッシー！ホテル嵐山へ急行するアルよ！」

「呼び方が伝染した!?」

どうしてくれるんだ!?

チェッシーなんて呼び方は嫌すぎる!!

「荷物の準備できましたー!」

「ホラ刹那。身代わりはお前の専門だろ!」

「せっちゃん、チェッシーはよー!」

「近衛まで!?

結局俺の呼び方はチェッシーのままなの!?」

それだったらまだナッシーのほうがマシだわ!

「……」

「…刹那?」

1人黙っている刹那に声をかけてみると―

「…はぁ。」

「なんで俺見てため息してんの!?」

「…いえ。ただ、先生を見てると色々考えていた自分が馬鹿らしく思えて。」

「あれ?もしかしなくても俺馬鹿にされてる?」

「…仕方ないですね。」

はい?

「先生にお嬢様を任せるのは不安になりました。やはりお嬢様は私がお守りします。」

「ふ、不安て…」

自分の生徒に不安て思われる教師っていったい…

「でも…」

ん?

「ありがとう…。ナナシ先生…。」

「刹那…」

「…フフ。さあ行きましょう先生。」

そう言い、刹那はみんなのいる方へ向く。

…なんか釈然としないが、刹那は去らないみたいだし結果オーライってことでいいかな?

「…よし!行くぞお前ら!嵐山に急ぐぞ!
ビリの奴は全員にジュース奢りだからな!」

そう言い、俺は駆け出す。

終わりよければ全てよし。

不意にそんな言葉が頭に浮かんだ俺であった。

「ナッシーそっち道ちゃうで！」

「嘘ぉ！？」

・～・～・～・～・～・～

「マスター、満足いきましたか？」

「うむ。いった。」

「…酷い目にあった。」

エヴァは久々に学園の外を観光できたため、満足そうな顔をしているが、隣にいる俺は疲れ果てた顔をしていた。

だってー

・・・・

『ナッシー。エヴァちゃんが京都観光したい言うから一緒に行こ。』

『いや、俺はこれからしずな先生をデートにお誘いするという大切な用事が…』

『さあ行こー！』

・・・・

『あーー！』

『ここが清水寺か！
よし、ナナシ。飛び降りろ！』

『無茶言うなっ！？』

『いいから行け！』

『あーーー！？』

・　・　・　・

―みたいなコトがありまして。

…ホントよく生きてたよな俺。

「やあ皆さん。ゆっくり休めましたか？」

「むしろ休む前の方が調子よかったんですけど。」

「あはは…」

ついにエヴァの観光に付き合うという拷問も終わり、詠春さんと合流した俺達。
なんでも、今からナギが一時期住んでいた家に行くんだとか。

「こうしてお話するのは初めてですね。
私がこのかの父であり、関西呪術協会の長である近衛詠春です。
以後お見知りおきを。」

「こちらこそ。
俺は麻帆良学園３－Ａ副担任兼教会神父のナナシ・クラートです。」

「ええ。あなたのことは学園長からお聞きしていますよ。」

ジジイから？

なんだろ？
どうせ余計なコトばっか話してるんだろうけど。

「このかのこととか、このかのこととかを…ね？」

―ゾクゥゥゥ！！

な、なんだ！？

詠春さんは笑顔なのに、なんか笑ってない気が…

「まさかナナシ先生は自分の教え子に手を出したりはしませんよねえ？」

「は、はい！なんかよくわからないッスけど、大丈夫です！ええ！」

「ならいいです。
では行きましょう。」

そう言い、詠春さんは歩きだす。

な、なんだったんだマジで…

俺…知らない間に詠春さんの気に障ることでもしたのか？

それとも近衛になんかして、それが気に喰わなかったとか？

「ナッシー、お父様と何話してたん？」

「うおっ近衛！？…さん。」

「なんでそんな驚くん？
しかも、なんでいきなりさん付けなん？」

「いえ、得に理由は…」

「？」

びっくりした…

詠春さんにあんな風に言われた後だからつい…

「ありがとうなナッシー。」

「うん？
どうしたいきなり？」

なんかお礼言われるようなことしたっけ？

「昨日、ウチを助けるために無茶してくれたんやろ？」

…ああ。そのことか。

「あんなの俺にとっちゃ無茶じゃねえ。」

「それでもや。ウチのため頑張ってくれたんやろ？」

「うっ…まあ。」

「ならお礼言わんと。」

…こう正面から礼言われるとなんかな。

若干照れくさい感じが…

「それにせっちゃんを引き止めてくれたし。」

「俺はなんもしてねえよ。麻帆良に残ることを決めたのは刹那自身

だし、近衛達がいるから残ることにしたんだと思う。」

「……」

…ってあれ？

なんで急に黙ってんの？

俺なんか変なコト言ったか？

「近衛？」

「…今、せっちゃんのこと刹那って…」

な、なんだろう…

近衛の雰囲気が、さっきの詠春さんと同じような…

「あ、ああ。それは昨日刹那がそう呼んでくれって…」

「ふーん。せっちゃんからなぁ…」

なんか怖い！

こんな近衛初めて見た！

そうすると、今度はいきなり落ち込んだ感じになって…

「ナッシーはウチのこと嫌い…？」

…どういう意味だ？

いや、多分ＬＯＶＥとかのじゃなくＬＩＫＥ的な意味だと思うから。

「…普通に好きだけど？」

まあ嫌いになる要素がないからな。

「なら、なんでウチは近衛のままなん？」

……は？

「せっちゃんは名前で呼んどるのに、ウチは苗字呼び……不公平やん。」

「いや不公平やんと言われても。
別に近衛が嫌いだから苗字で呼んでるわけじゃないんだし…」

「……」

がああああ！！

なんだこの状況は！？

これはあれか！？
名前で呼べってことか！？

でも、こう改まって言うとなると、いささか恥ずかしさが！

「……」

ジト目で見てる…

くそっ！
こうなったら覚悟を決めろ俺！

たかが名前で呼ぶだけじゃないか！

「……こ、このか。」

「うーん…聞こえへん。」

なんですとぉぉぉぉ！？

絶対聞こえてたじゃん！

それを聞こえないフリするなんて…！

小悪魔かチクショウ！

…ああもう！

「このか！これでいいだろう！」

「うん充分や。」

近衛…じゃなく、このかは俺の言葉を聞くと、心底嬉しそうに微笑む。

その顔を見ると、名前で呼んでよかったと思えるわけで…

「……（カチャッ）」

「詠春さん!?
黙って剣を抜こうとしないでっ!?
てかどっから出した!?」

さっきまで何も持ってなかったのに!
これがサムライマスターの実力か!?

「…ちっ!」

「露骨な舌打ち!?」

「…まあいいでしょう。
それより皆さん、着きましたよ。」

…詠春さんって、こんな怖い人だっけ?
原作のイメージじゃ、温厚なイメージだったんだけど…

「ここが…父さんの…」

ネギが感慨深そうな表情をしてる。

まあ憧れの父の家に凝れたんだから当然か。

にしても隠れ家みたいな家だな…

草木が茂って、家を隠すようにしてるし。

「では入りましょう。」

そして玄関を開けると―

「わーー。」

「スゴーい！本がたくさん。」

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています。」

確かにスゴい本の量だな…

縦長な家の棚に余すことなく本が詰まってる。

「ここに…昔父さんが…」

しっかし、いい家に住んでたんだなナギの奴。

「…ここ、家賃とかいくらぐらいだろ？」

「少なくともアナタの安月給じゃ無理ですね。」

「言葉にトゲがっ！？

つーかその安月給渡してんのは、アンタのお義父さんだからな！」

俺、相当この人に嫌われてんな…

そんな話をしているうちに、各々の好きに家の中を散策し始めて、中には魔法についての本をあさる奴も現れた。

「オイ、いいのかアレ？」

「素人目には何の本かわからないでしょう。

お嬢様方！故人の物ですからあまり手荒なは扱わないでくださいね！」

「そりゃそうだ。」

「アナタに関しては触れないでください。」

「なんでっ!?」

・・・・

「どうですかネギ君?」

「ハ、ハイ!
見たいものや調べたいものがたくさんあって……時間がもっとあれば。」

「ハハハ、またいつでも来ていいですよ。」

京都っていつでもいける場所じゃないと思うんだが…

「あの…長さん…。
父さんのこと聞いていいですか？」

「…ふむ、そうですね。」

詠春さんは少し考えたように呟き―

「…ではこちらを。」

フレームに収まった写真を見せてきた。

「…この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達…」

すげえ豪華なメンバーの写真だな。

売れば高いんじゃね？

けど、タカミチはいないんだな…

「戦友…？」

「ええ。２０年前の写真です。」

つまり俺がナギと会う前…この世界に来る前の写真か。

「…父さん…」

「私はかつての大戦で、まだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。
…そして２０年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄…サウザンドマスターと呼ばれていたのです。」

「……」

やっぱすげえ奴だったんだよなナギは…

「しかし…彼は１０年前突然姿を消す…。
彼の最後の足取り…彼がどうなったかを知る者はいません。
ただし公式の記録では１９９３年　死亡―。
それ以上のことは私にも…すいませんネギ君。」

「い、いえ、そんな。ありがとうございます。」

詠春さんでもここまでしか知らないか…

俺も俺の知ってる原作知識じゃナギの行方はわかってないし。

「結局手がかりなしか。
残念だったな兄貴。」

…一般人がいるのに喋っていいのかお前?

「…ううん。そんなことないよカモ君。
父さんの部屋を見れただけでも来た甲斐があったよ。」

健気だねえこの子は。

ってそうだ。

忘れるとこだった。

「詠春さん。お願いがあるんですけど…」

「…何ですか?」

…そんな嫌そうな顔しなくても。

「実は――――で…」

「ふむ、これまた随分特殊なものを…。
いいでしょう。不本意ですがアナタにはこのかのことでお礼をしたかったところです。
近いうちに用意しましょう。」

「…ありがとうございます。」

不本意って…

「ハーイ！そっちのみなさん難しい話は終わったかな？
記念写真撮るから下に集まって！」

すると朝倉からそんな提案が出た。

俺は反対する理由はない。むしろ賛成なわけだから―

「おっ！いいね！俺先頭ド真ん中！」

「チェッシーは背が高いんだから後ろに決まってるでしょ。」

「てか写るの？」

「チェッシー言うなっ！
そして写るに決まってんだろ！」

くっ…。

しょうがないから先頭ド真ん中はネギに譲るか…

「じゃあ行くよー。
1＋1はー？」

「「「「にー！！」」」」

「古くねっ！？」

～・～・～・～・～・

ついに帰りの時間が来た。
俺たちは新幹線に乗り、午前中に麻帆良に到着予定。でも、いくら３－Ａでも帰りの新幹線では―

「やれやれ…。あれほどうるさかった３－Ａが、静かなものですな。」

「ふふ、ホントに…。
ハシャギ疲れたんでしょうね。」

「1人…仕事を放棄してる馬鹿はいますが。」

「あら。そこがナナシ先生らしいじゃないですか？」

「…なんにしても着いたら説教ですな。」

「あらあら。」

「むにゃむにゃ…やめて、俺のために争わないで…」

「まったく…どんな夢を見てるんだか…」

「……ぐぅ。」

おまけ

３－Ａ＋ナナシの身代わりが旅館でストリップをしてた時―

「あの男は！自分の立場というものをまだ理解していないようだな！止めるぞ瀬流彦君！」

「……い。」

「瀬流彦君？」

「ナナシ先生…いい。スゴくいい…」

「瀬流彦君！？」

to be conuinue ？

第１５話「旅行の帰りは寝ちゃうもんだよね。」（後書き）

というわけで修学旅行編完結しました。

この修学旅行編で瀬流彦がアレな人になってしまいましが…

まあいいでしょう（笑）

次回からは麻帆良での日常編を描きたいと思います。

ではまた次回！

第１６話「１度落ち込むとなかなか立ち直れないもんだよね」（前書き）

ひ、久しぶりに総合評価を確認したら１０００ｐｔを越えていた…！

これも全て今この作品を読んでくれた方々のおかげです！

本当にありがとうございます！

これからも皆様に評価していただけるよう精進したいと思います。

第１６話「１度落ち込むとなかなか立ち直れないもんだよね」

修学旅行も終わり、麻帆良に帰ってきた俺。

そんで今日は日曜日で仕事も休みなんで、久々に自由を満喫しようと思ったんだが―

「…なあ、いつまで旅行に行けなかったこと拗ねてんだよ？しょうがないじゃん。お前地縛霊だから麻帆良から出れないんだし」

「……つーん、だ」

「…はぁ」

…これだよ。

コイツ、いきなり俺の部屋に来たと思ったら勝手に拗ねだしやがった。

この状態のさよを無視して出かけたら、後々面倒なことになるのは

目に見えてるので、こうして慰めようとしているんだが…

「…ふーん、だ」

…まるで効果がない。

いったいどうしろって言うんだよ？

「…ったく、わざわざ土産も買ってやったのに不満て…我が儘な奴だな」

「そこですよっ！」

「は？」

なにが？

「先生がお土産を買ってくれたのはとても嬉しいです。…でも！」

「でも？」

「なんで八つ橋なんですかっ！？」

なんでって言われてもな…

「いや…だって京都の土産の定番は八つ橋じゃん」

まあ土産は八つ橋だけじゃないけど、それはまだ秘密ってことで。

「私幽霊ですよっ！？
八つ橋なんか食べれるわけないじゃないですか！」

「…それもそうだな」

すっかり忘れてた。

最近、普通にコイツと話してたから、幽霊だってことに違和感がなくてつい…

「なんでもっと幽霊が喜びそうなお土産を買ってくれなかったんですかっ！？」

「売ってねえよそんなの」

幽霊が喜ぶお土産ってなんだよ？
墓とか？

「…ああ。もしかして線香とか数珠の方がよかった？八つ橋とどっちにするか悩んだんだけど…」

「私に成仏しろってことですかっ！？」

ヤバイ…。
なんかさよをイジるのが楽しい…。
旅行じゃイジられてばっかだったから、こういうの久々だし。

「うぅぅ…。私はこのまま八つ橋の賞味期限が切れるのを、指をくわえて待つことしか…。
…って、ちょっと！？」

「…モグ？…ゴクン。
今度はなんだよ？ビックリしただろ？」

ったく、人が食事してるっていうのに…

「なんで先生が八つ橋食べてるんですかっ！？
それ私へのお土産なんじゃ…！」

「だってお前食べれないんだろ？
腐って捨てるのはもったいないし…、それなら俺が処理しようかと」

「だからって私の前で食べなくてもいいじゃないですか！」

「悪い悪い（笑）」

「確信犯ですか！？」

やっぱ八つ橋は美味いな。
京都の名店の所までわざわざ買いに行った甲斐があった。

「しっかし本当に美味いよなあ～。
土産の定番になるわけだよコレは」

「うぅぅ…」

「あれ？どうしたさよ？
食わないのか？…って、食べれないんだっけ！
そりゃあ残念だなあ！
こんな美味いもん食べれないなんて！
俺には堪えられないと思うぜ！」

「……」

…っと、調子乗ってイジり過ぎたか？
黙って俯いちまったよ。

「……か」

「ん？」

「先生の…！」

あ…なんかイヤな予感。

「馬鹿ぁぁぁぁぁ！！」

「うおっ!?さ、さよ?」

な、なんかさよの身体から黒いオーラが…

「旅行に行ってる間、私がどんな気持ちで待ってたかも知らないで…」

怨念がましいさよの周りの物が、地球の重力に逆らい、浮き出す…

って!ポルターガイスト!?

―ガッァシャーン!!

「食器が!?

お、落ちつけさよ!

な?まずは冷静になれ!

頼むから暗黒面に呑まれるな!?」

「エヴァさんも私を置いて京都に行っちゃって、結局は1人になりましたし…」

さよの周りには新しく我が家の重量級の家具が浮かんで…

その家具達はなぜか全部俺の頭上へと浮かび上がり―

「待って!俺が悪かった!反省してる!だから許してくれ!」

「先生は…もっと…」

「！」

「私を構ってくれてもいいじゃないですかぁー！！」

さよが叫んだと同時に、宙に浮かんでいた家具達が一斉に落下した…

「ちょっ！？冷蔵庫は重さ的にヤバイだろ！？
さすがにそれが当たったら…あーーーー！！？？」

・　・　・

「…死ぬかと思った」

今回はマジで死にかけた。
一瞬走馬灯が頭をよぎったもん。

「先生が悪いんじゃないですか」

「…にしても、ここまでしなくてもいいんじゃね？」

「…すみません」

俺の部屋の家具は倒れ、ガラスや食器は全て割れて破片が辺りに散らばって危険な状態に…

それはまるで俺の部屋だけ地震でも起きたようになっていた。

「…帰って早々学園で、しかもなんで自分の部屋で命の危険を感じなきゃいけないんだ？」

部屋は精神的に一番心休まる場所のハズなのに…

しかも―

「…これを1人で片付けんのか？」

この惨状の原因であるさよ本人は物に触れないから戦力外だし。

マジでどうしよ…？

「……」

「先生？」

仕方ない…！

こうなったら―

「出かけよう」

世の中逃げるが勝ちだ。

「片付けはっ！？」

「大丈夫だって。

帰ってくる頃にはきっと妖精さんが部屋を元通りにしてくれてるか

ら」

「いや無理ですよ！
なんですかそのビックリルーム！？
現実逃避はやめて素直に片付けしましょうよ！」

「どこに行こうかな？」

「駄目だこの人！？」

学園…には行く必要ないし、どっか適当にブラブラすっか。

「……っと」

その前に一服しとくか。

ライターはどこにやったっけか？

「……あれ？」

「どうしたんですか？」

「いや、ライターが見つからなくて…」

「無くしたんじゃないですか？」

そんなハズないんだけどな…

今朝さよが来る前に一回吸ったんだから部屋に…

「……部屋？」

そうだ。

今朝吸った時にライターは棚の上に置いたんだ。

ならばと棚を見るが、勿論棚も倒れていて中身をばらまかせているわけだから―

…うん。

「…プラクテ・ビギ・ナル…」

「探すの諦めた！？

しかもライターがない程度で魔法使うんですか！？」

うっさい！

せっかく魔法使えるんだから、活用しないでどうすんだ！

「『火よ灯れ』」

よし、これでようやく……って

「あれ？」

「失敗ですか？」

「そんなハズは…あるかも」

なんせ魔法は苦手分野だし、一回ぐらい失敗しても仕方ないかな？

ならもう一度…

「『火よ灯れ』」

「火…出ないですね」

なんで！？

別に呪文も間違ってないし、術式もあってるのに！

こうなったら出るまでやってやるよ！

「『火よ灯れ』！

『火よ灯れ』！！

『火よ灯れえぇ』！！！」

「せ、先生…」

これから俺は３０分努力するが全て失敗し、無駄に終わったというコトを伝えておく。

・　・　・　・

・　・

俺は走った。

ある場所を目指して。

その場所に着けば、全て解決すると信じて。

そして、俺は目的の場所の扉を開いた―

「助けて！
エヴァえもーん！！」

「どうしたんだいナナシ君？
またジャイ〇ンに苛められたのかい……って、アホかあぁあああぁああ！？
誰がエヴァえもんだ！？」

「エヴァがノリツッコミだと！？」

「やかましいわっ！」

だって、あの冗談が通じないエヴァが、まさかノリツッコミだなんて…！

初めての経験に俺感激！

「…相変わらず騒がしい奴ね」

「あはは…」

「ん？なんだ。
ネギとレッドもいたのか」

エヴァの家に客がいるなんて珍しいな。

「そうだ！
聞いてよナッシー！」

「聞いてやるからナッシー言うな」

俺はいったい何回このセリフを言わなきゃいけないんだ？

「エヴァちゃんたら、ネギに足を舐めて下僕として忠誠を誓えって言うのよ！」

「うっわあ…。なんつーアダルトな要求を…」

「待てぇーい！！
そこだけ説明したら私はただの変態じゃないかっ！
そこの坊やが私に弟子入りしたいって言うから、その条件を出したんだ！」

…ああ、なるほど。

そういえばそんなイベントあったな。

それにしても…

「懐かしいなぁ。
俺も最初エヴァにそんなこと言われたっけ」

もう何年前の話だろ？

「そういやエヴァちゃんの弟子だったわねナッシーって」

「おう。つまりネギがエヴァの弟子になったら俺の弟弟子ってこと

になるな」

「ええっ！？」

「…お前が俺をどう思ってるかよくわかったよ」

ビックリするぐらい嫌なのかよ。

「そ、それで、どうしたんですか結局！？」

…逃げやがったな。

「どうもこうもあるか。
この男、私が坊やと同じ条件を言ったら―
『本当に舐めていいの？』―なんてマジな顔して言うもんだから、
思わず私から断ってしまった」

「フッ…」

「そこで格好良くポーズ決めてもダメだから！
アンタがエヴァちゃん以上の変態だってことはもうわかってるから
！」

誤魔化せなかったか…

馬鹿だから誤魔化せると思ったんだが。

「それで最終的には定期的に血を吸わせることで妥協してもらったんだよな」

「が、コイツ…タバコなんぞ吸いよって。
おかげで血が不味くなって飲めたもんじゃない」

俺としては助かったがな。

「それで?
お前はなにしに来たんだ?」

…そうだ。
本題を忘れるとこだった。

「実はかくかくしかじか…で」

「はあ?魔法が使えないだと?」

「通じた!?」

かくかくしかじかで通じるもんなんだな…

「百聞は一見にしかずだ。やってみろ」

「はいよ。
プラクテ・ビギ・ナル
『火よ灯れ』」

とりあえずエヴァに言われた通りやってみたけど、結果は先程と変わらない。

「どう？
お前から見て、なんかおかしい所ない？」

「別に呪文や術式におかしな所はない。ただ…」

「ただ？」

「お前から魔力を感じられない」

「……は？」

魔力を感じられない…って

「いやいやいや！
いくら俺の魔力量が少ないっていっても、感じられないってコトはないだろ！？」

「感じられないんだよ、微塵とな」

そんな馬鹿なコト…

俺はエヴァだけでは信じられないので、ネギの方にも視線を移すが…

「…すいません。僕でも魔力を感じることは出来ませんでした…」

「…マジかよ」

優秀な魔法使い2人が魔力を感じられないんだ。

俺に魔力が感じられないのはもう確定だろう。

でも何か原因があるのか？

「…ナナシ。最後に魔法を使ったのはいつだ？」

「最後に？」

えっ…と、麻帆良に帰ってきてからは使ってないから…

「修学旅行だっけか。
このかを救出する時に鬼達と戦った時が最後だと思う」

「…やはりそうか」

やはり？

「なんだよ？
なんかわかったのか？」

「…原因は不明だ。
ただ、しばらく魔法は使えんかもしれん」

なっ！？

「魔法が使えない！？
どうすんだよ！？
ライター無い時とか、朝遅刻しそうになった時魔法が使えないんじゃ…！」

「お前は魔法をなんだと思ってるんだ！？」

くっ。

これは日常生活でいろいろと不便になりそうだ…

あっ、でも身体は気で強化すればいいか。

「本当は深刻な問題なんだろうけど、なぜか空気は軽いわね…」

「まあナナシ先生ですし…」

…外野がうるさいようだがスルーする。

「まあなんにしても…」

「ん？」

エヴァが意味ありげに悪い笑みを浮かべる…

…なんだか本日2度目の嫌な予感がする。

「これでお前はただの能無しチェリーになったわけだな」

「なっ！？」

ただの…能無しチェリーだと…？

「違うのか？
魔法が使える以外、お前に特技はあるのか？」

「体術！まだ俺には体術が残って…！」

「最近負け続きなのにか？」

「がはっ！？」

ひ、人が気にしていたコトを…

「……そうだ！俺神父じゃん！聖職者じゃん！人の相談受けるとかは得意だぞ！」

むしろ教師とかよりこっちが本職だし！

「チェリーが何を言っても説得力がないだろ」

「……！」

そ、そうなのか…？

俺が何言っても説得力はないのか…？

だったら…今の俺の存在意義っていったい…

「た、ただの…能無しの……チェリー、か」

フフフフフ…

「ああ！？
ナナシ先生がついに反論できない状態に！？」

「ていうかガチで落ち込んでるじゃない！？
自分でチェリーって認めちゃってるし！」

「いいんだよ…。
どうせこのまま一生未使用で…チェリーとして死んでいくんだから…」

「どんどんネガティブ思考に！？」

「どうすんのよエヴァちゃん！？」

「知るか。全部事実だろ」

俺にはもう…希望の１つもないのか…

「大丈夫ですよ兄さん」

…茶々丸？

「兄さんには素晴らしい所がたくさんあるじゃないですか」

「ちゃ、茶々丸…」

「私はよくそれを知ってますよ」

「茶々丸っ！！
俺の味方はお前だけだ！
もうエヴァの所なんかよりウチに来い！」

あまりの嬉しさに茶々丸に抱き付く。
…勿論避けられたが。

「いえ、それはお断りします」

「あっ、そう…」

「ていうか何勝手に人の従者を口説いてるんだ…」

なんかわからないけどフラれた気分。
結果はわかってたけど、なにも即答しなくても…

まぁそれより…

「で？」

「で？…とは？」

何を尋ねてるか分からないという風に首を傾げる茶々丸。

もう！焦らし上手なんだから！

「だから俺の素晴らしい所だよ。
たくさん知ってるんだろ？ならコイツらに教えてくれよ」

「……えっ」

「…（わくわく）」

茶々丸は何言ってくれるんだろうな？

「あの…兄さん」

「ん？どした？」

もしかしてエヴァの前だから遠慮してんのかな？

「…すいません。
私のデータの中に該当する内容はありませんでした」

「……」

……。

「あはははは！！
い、いいぞ茶々丸！さ、さすがは私の従者だ！」

「ちゃ、茶々丸さん…今のはヒドイ…」

「だ、大丈夫ですよナナシ先生！
先生にもきっといい所が…！」

ネギが俺にフォローの言葉をかけるが…

「…どこだよ？」

「そ、それは……アスナさんっ！お願いします！」

「ちょっ！？何で私に聞くのよ！？
自分で答えなさいよ！？」

「２人共素直に言ったらどうだ？
何も思いつきませんでした、と」

「「……」」

「そこで黙るなよ！！」

もうコイツら嫌だ！

「くそぅ！覚えてろよお前ら！
うわあああああ！」

そう言い残し、俺はエヴァの家から飛び出す。

「ああ！？雑魚キャラみたいな捨てゼリフ！？」

「しかもいい大人が、うわあああああ！って…」

そんなセリフが聞こえたので、俺は一度その場に立ち止まり、エヴァの家に向き直る。

さんざん好き勝手言いやがって！

それなら俺も言わせてもらうからな！

「レッドのくまパーン！」

「もう違うわよ！
なんで悪口が私だけピンポイントなの！？」

「うるせえパイ〇ン！！」

「それセクハラだから！
ていうかパイ〇ン言うな！…って待ちなさいよ能無しチェリー！！」

そう言いレッドもエヴァの家から飛び出す。

「チェリーで悪いか！？」

「開き直った！？」

そんなやり取りをしながら俺は逃げる。

「待て不能！！」

「不能じゃねえよ！まだ元気だわ！」

こうして俺の久々の麻帆良での1日は、レッドとのリアル鬼ごっことなった。

そしてなぜ魔法が使えなくなったかは分からないまま、俺の心に深い傷をつけた1日でもあった。

おまけ～1～

残された人達はというと…

「…行っちゃいましたね」

「ふん。馬鹿2人がいなくなって助かったわ。」

「マスター。
お茶の準備が…」

「むっそうか。ならお茶にさせてもらおう。
坊や、弟子入りの件は後日テストを行うから、それで決めさせてもらう。
…そうだな。また土曜にでも来い。」

「弟子入り?
…あっ!はい!」

「…忘れてたな?」

「…ごめんなさい」

馬鹿2人のせいで弟子入りの件を忘れていたネギであった。

おまけ～2～

あの後
寮に帰宅したナナシは―

「……はぁ」

「先生～。なんで落ち込んでるんですか？
それより片付けしましょうよ」

「いいんだよ俺はどうせ片付け1つ出来ない能無しなんだから…」

「本当にどうしたんですか！？

帰ってきてから朝と立場が逆ですよ！？」

「……はぁ」

また1人でネガティブになっていた。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１６話「１度落ち込むとなかなか立ち直れないもんだよね」（後書き）

今回、感想を寄越してくれた方からのアドバイスで
セリフの文末。」の前の『。』をつけるのを止めてみました。

少しは読みやすくなったでしょうか？
とにかく、しばらくはこのやり方で書いてみようと思います。

さて、第１６話でしたが、原作でアスナがホレ薬を食べてることに書き終わってから気が付きました。

その描写を書くと文量が大変なことになってしまうので、ホレ薬は無視することにしました。（↑オイッ

そしてチェッシー。
魔法使えなくなりました。多分しばらくは使えないままです。
それまでは能無しチェリーでいてもらう予定です（笑）
まあ今までも能無しな感じでしたけどね（笑）

次回からはネギの弟子入りイベントが続くと思います
２話ぐらいでまとめられたらいいな…

それではまた次回！

第17話「男には触れてはならない部分があるよね」（前書き）

いきなりでなんですが、更新する時間って、夜中より昼とか夕方、0時前の方がいいですかね？

この時間の方がいいよ。

という意見がありましたら教えていただけると助かります。

第17話「男には触れてはならない部分があるよね」

side　ネギ

「よーし！今日からまた頑張るぞーっ！」

今日は修学旅行が終わってから、初めての学校。
この学園までの道のりを走って登校するのも久しぶりな気がする。

「中間テストもあるし、アスナさんも勉強頑張ってくださいね！」

「うぐ…！うっ、うるさいわね！」

「あはは、ネギ君元気やなー」

…そう言えばエヴァンジェリンさんもテストするって言ってたな。
弟子入りのためのテストかあ…
何だろう？

でも『先生の仕事』と『強くなるための修行』。
…大変だけど頑張らなきゃ
立派な魔法使いになるために…
父さんに追いつくために…

「ケンカだケンカだ！」

「部長に５０枚！！」

「ん？」

朝からなんだか騒がしいと思い、その声の発生源の方に首を向けてみると、１人を中心に人だかりができていて…

「あれ…？あれは…」

あの見覚えのある金髪で褐色肌の女性は―

「くーふぇさん！？」

な、なんであんな所に！？

「た、た、大変!?
くーふぇさんが悪そうな人達に囲まれて…!?」

「あれはいつものことでござるよ」

ひょこっと現れた楓さん。
…いつからいたんですか?

「今日こそ勝たせてもらうぞ!
中武研部長クーフェ!!」

すると一斉にくーふぇさんに襲いかかって―って危ない!?
けど僕の心配はいらん心配だったようで―

「ふっ」

「なんぷっ!?」

「はっ」

「ぷべらっ!?」

全ての攻撃を受け流し、確実に一撃で相手を仕留めていた。

「「「……」」」

僕やアスナさん、このかさんはその光景をみてポカーンとし、開いた口がふさがらない。

「古は学園の格闘大会で優勝してるあるからな。
ああして毎日挑戦者が後を絶たないでござるよ」

そして、ものの数分も経たずに…

「弱いアルネ。
さあ、もっと強い奴はいないアルか？」

相手を全滅させた。

す、凄い…

「お。ネギ坊主。」

くーふぇさんがこちらに声をかける。
どうやら僕達に気づいたみたいだ。

「おはようございます。
くーふぇさん」

「ま…」

ん？
背後からなんだかのぶとい声が…

「まだじゃあ部長！！」

「うひゃあ！？」

振り返ってみると、そこには殴りかかろうとする男性がいて―

「ネギ君あぶなー！？」

よ、避けれない！？

「炮拳（パオチュアン）！！！」

「ごはああっ！？」

…え、えっ？
今なにが…

「大丈夫だたアルかネギ坊主？」

くーふぇさんが助けてくれたのか…？
僕を助けた状態で相手を一撃で倒すだなんて…

「い、いえ…どうも。
つ、強いですねくーふぇさん…」

「ンニャハハ。楓や真名にはかなわんアルよ」

くーふぇさんは何事もなかったように隣に並ぶ。
しかもあんな大勢を相手にしたのに息を切らしていない。

…本当に凄いな。

「でも毎朝これじゃあ大変じゃないですか？」

「…まぁ、アレよりはマシアルからな」

アレ？

くーふぇさんはそう言うと遠くに顔を向ける。

その視線の先には先程よりも多くの人集りができていた。

そしてそこには―

「かかれぇ！！」

「ナナシさん！俺の思い！受け取ってくれぇ！！」

「ごっつぁんです！」

「だあぁぁあ！！来るんじゃねえテメエら！！
何なんだ毎朝毎朝！？」

「な、ナナシ先生…」

そこには運動部などの体育会系らしき人達に迫られているナナシ先生がいた。

「ぐはっ!?
いい…パンチでした…!」

「…本ッ…望…!」

「「「ごっつぁんです!!!」」」

「気持ち悪いよお前ら!?ていうか相撲部多すぎだろ!?」

「…な?アレに比べたらマシアルよ」

「ハ、ハハハ…」

本当…あの人は何処でも何時でも変わらないな…

「アレが噂のファンクラブですか…」

「夕映さん!?」

「おはようございますネギ先生」

「お、おはようございます」

楓さんと同じよう夕映さんもいきなりひょこっと現れた。
同じ学園に向かってるんだから途中で会うことは不思議じゃないけど、どうして2人ともこういきなり…

「なーなー夕映。今言ったファンクラブってなんなん?」

「ナナシ先生を尊敬・信仰する方々によって結成されたファンクラブのことです」

「「「信仰!?」」」

尊敬ならともかく、あの人に対して信仰って!?

「そのクラブは学園非公式で、活動内容・メンバー数など全て謎に包まれているのです。ただ…」

ただ？

「噂では、そのメンバー構成の男女比はまさかの１０：０という数字で…」

「「「１０：０！？」」」

そ、それって男性しかいないってことだよね！？
ある意味凄い気が…
というか、ありえないと思うんだけど…

「主に運動部などの体育会系の人達を中心に活動しているそうです」

ナナシ先生はこのクラブのこと知ってるのかな…？
知っていたらほっとかないと思うんだけど…

「なあアスナ？ウチもそのクラブに入って「止めなさいこのか！お願いだから入らないで！！」…むー」

…アスナさんの判断は間違いなく正しいと思う。
あんな得体の知れないクラブには入らないほうがいい、絶対に。

「お前らいい加減にしろ！遅刻すんじゃねえか！！」

「「「あっ！」」」

そ、そうだ時間！

早く行かないと！

本当…朝から何やってたんだろ…

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

…ひどい目にあった。

朝は遅刻して新田に説教されるし、仕事をサボｒ…もとい、休もうとしたら新田に捕まるし。
そして帰ろうとしたら新田に仕事を追加された。

…あれ？なんだこの新田との遭遇率？
この広い学園でどうしてここまで遭遇できるんだ？

まさか俺と新田には何か運命的なものが…ねえな。

あんなオヤジと運命あってたまるか。

それはともかく、ようやく仕事から解放された俺は、さよに用があるため３－Ａの教室に向かっていた。

「皆帰ってますように…」

誰か残ってたらさよと話せないしな。

そう思いながら俺は教室の扉を開いた。

さよは……いた。
いつもの座席に座っているな。

教室に他の奴は…右確認…左確認…よし、いないな。

「おーい、さよ。」

「先生？」

誰もいないことを確認した俺はさよへと話かける。
さよは俺の声に反応して近くに寄って来た。

「どうしたんですか？
…まさか寂しくなって私に会いに来たとか！？」

「それはない」

「そんなはっきり言わなくても…」

別に寂しくならないしな。それにわざわざその程度で会いに行くかっつーの。

「じゃあいったい何の用があるんですか？」

「フフフ。喜べ！今日はお前に２つ目の旅行の土産を持ってきたぞ！」

「……」

「そんな警戒した目をするなよっ！？
大丈夫だから！
八つ橋よりこっちが本命だし、絶対お前も喜ぶもんだから！」

「…どんなお土産なんですか？」

むぅ…。
これだけ言ってもまだ信じらんないみたいだな。
だが、これを見てもまだそんな顔できるかな？

俺は懐に手を入れ、さよへの土産を取り出す。
その中身は―

「さよちゃん人形用本体藁人形ぅ～（ダミ声）」

全長約２０ｃｍぐらいの藁人形だった。

「なんですかその声！？
…って、その藁人形は？」

「さよ太君がこの人形にとり憑くことによって、学園に縛られず自由に外に行き来することができるんだよ～（ダミ声）」

「誰ですさよ太君って！？なんでまだその声なんですか！？
…ってえええぇえええ！？本当ですか！？」

「驚きすぎだ」

つーかツッコミすぎだろ。いくつ質問してんだよ。

「原理はどうなってっかは知らないけど、効果は確かだぞ」

なんたって西の長である詠春さんに頼んで用意してもらったもんだからな。
わざわざ取り寄せてもらっし。

「先生…私のためにわざわざ…！」

「感動するのは後にしな。ほら、とり憑いてみろよ」

「は、はいっ！」

さよは人形の中にスゥっと入っていく。

なんかドキドキしてきたな。

…頼むからちゃんと動いてくれよ。

そして―

「せ、先生！！」

「おっ…おお！？

動いてる！？

動いてるぞさよ！！」

俺の目の前にはピョンピョンと飛び跳ね、嬉しそうに動く藁人形がいる。

…藁人形の状態で動いてるとなんか怖えな。

「凄いです先生！！

私、動けてますよ！！」

「凄い凄い」

一気にテンション高くなったな。
まあ、喜んでくれてるみたいだからいいんだけどさ。

「これに私の人形があればもう完璧じゃないですか！」

「そうだな。後はさよちゃん人形の中に藁人形を入れれば……」

…ん？
なんか忘れてる気が…
なんだっけか？

「それで？
私の人形はどこですか？」

えっと…確かさよちゃん人形は…

「……あっ。」

「…なんですかその今思い出したみたいな顔は?」

「…いや、その…忘れてた…」

…やっちまった。

「忘れてたんですか!?
……まあいいですよ。
今の私は機嫌が良いですから、少しのミスぐらい許してあげます」

えらく上から目線だなコイツ…
何様のつもりだよ…

でも忘れたのは俺なんだし、今ぐらいは逆らわないでおこう。

「それで?
いったい何処に忘れたんです?
家ですか?それとも職員室ですか?」

…勘違いしてるぞコイツ。忘れたってのはそういう意味じゃないんだけどな…

「…別に持ってくることを忘れたわけじゃない」

「？」

「さよちゃん人形を用意…つまり作ることを忘れてたんだよ…」

「……え？」

理解できないみたいな表情のさよ。

今のうちに耳栓用～意。

「えええぇええ！？
何やってんですかっ！？
なんでそんな重要なコト忘れてたんですか！？」

…耳栓しててもうるさく聞こえるんだけど。
どんだけ声デカイんだよ？

「だから悪かったって…」

「どうするんですか！？

私には藁人形の状態で動いてろってことですか!?
不気味過ぎますよ!!
そんなのただのホラーじゃないですか!?」

「お前の存在が既にホラーだろうが!?」

「私のことはいいんです!どうせ皆に気付かれないんですから!!
だから私なんて…私なんて……うわあああぁん!!」

泣いた!?

人形忘れたぐらいでか!?

と、とにかく、なんとか泣き止ませないと…

「さ、さよ?」

「うぅぅ…」

「ゆ、幽霊はネガティブが似合うよな?」

「う…うわあああん!!」

逆効果!?

笑えるジョークだと思ったんだが!

「せ、先生の…!」

「お、おい、さよ…?」

さよの身体っていうか、とり憑いた藁人形がプルプルと震え出す。

だから怖いって!!

「先生の…!」

すると、さよを中心に周りの机や椅子が浮かび上がる。

…あれ?

なんだかこんな光景見たばっかな気が…

そのまま机達は俺の頭上へと移動…って!?

「や、やめろ！？
2連続で同じネタは飽きられるって！！
そんなんじゃ視聴率上がらないから！！」

そしてそのまま俺に向かって…

「不能ぉー！！！」

「お前まで言うか！？
つーか違うっての！！
ちゃんと機能するわ！！
いつでも発情できるって……ギャアアアア！？」

「もう知りません！！」

さよは怒ったまま教室から出ていく。
…藁人形のままで。

追いかけなきゃいけないとは思っている。
だけど―

「か、角が…股間に…！
つ、潰れた…。なにかが潰れた気がする…」

男にしか理解できない痛みを耐えることで精一杯だった。

おまけ

それからしばらくの間ナナシは―

「ねえナッシー？」

「…なんだよ？」

「なんで中腰なの？」

「禁則事項だ…」

「はあ…？」

…まだ痛いようだった。

追伸

その日、手芸部に中腰のまま頼み事をしているナナシがいたとかなんとか。

そして、学園に歩く藁人形の噂が出回ったらしい…

…何やってんだ2人共。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第17話「男には触れてはならない部分があるよね」（後書き）

勢いで作ってしまったファンクラブ（笑）
これからどんな活躍（？）をするのやら…

そして、さよちゃん人形の登場。
原作よりもだいぶ早めの登場になりました。（って、いっても、登場したのは藁人形だけですけど…）

…おや？
ネギの弟子入りの件がまったく進んでいない気が…？
…まっ、いっか（↑オイッ）

それではまた次回。

特別番外編？『ギブミーチョコレート』（前書き）

本編が進んでいないのに思わず投稿してしまったバレンタイン特別番外編…

そういえば番外編は初になりますね。
なにやらドキドキします…

※今回番外編を読んでいただく際の注意点

・今回の話は本編とは関係ありません

・本編との時間軸が大幅にズレています

・この話のみですが、キャラの好感度にいささか変動があります

以上の注意点をふまえて読んでいただくと助かります

それでは

特別番外編？『ギブミーチョコレート』

―２月１４日

それは女性にも
男性にも特別な１日ではないだろうか？

特に男性にとっては今年一年のモチベーションを決める重要な１日
といっても過言じゃないはず。
そして、その日のために、己を磨き、女性への好感度を上げている
男性もいるだろう。

なぜなら
２月１４日はそう―

バレンタインなのだから―

Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ａｎｏｔｈｅｒｗｏｒｌｄ特別番外編？

『ギブミーチョコレート』

「ついに…ついにこの日がやって来たぁー！！」

俺は胸から沸き上がる衝動に逆らえず、思わず叫んでしまう。

でも今日ならそれも許されるハズだ。

なぜなら…

「先生、何朝から叫んでるんですか？
寮の人達に迷惑ですよ？」

「ああ悪い…って、なんで朝からいるんだよお前！？」

さよが横から自然に声かけてきたから、普通に返事しちまった。

「幽霊には神出鬼没のライセンスが備わっているんですよ」

そしてなぜかサムズアップするさよ。

いや…確かに幽霊は神出鬼没かもしんねえけどさ…

あれ？

よく考えてみると、コイツ不法侵入じゃね？

幽霊だからって法律を無視していいのかよ？

「……」

「そこで黙るなよっ！」

自覚してんのかよ！

「そ、それより！

先生はなんで朝から叫んでたんですか！？」

誤魔化しやがったな…

…と、そんなことより！

「バレンタインなんだよ今日は！！」

「……はい？」

なにソレ？みたいな顔をするさよ。

だから…！

「バレンタインだって言ってんの！
バ・レ・ン・タ・イ・ン！！」

「…ああ。ありましたねそんなイベント」

ありましたね、だと！？

…駄目だコイツ。女として枯れてやがる。

「しょうがないじゃないですか！！
私６０年間幽霊生活で、そんなイベントとは無縁だったんですから
！！」

…それもそうだな。

ん？じゃあ…

「…お前チョコ渡せないってコト？」

「そうですけど？」

「ならば用はない！
立ち去れ！！」

「ひどっ！？」

ひどくなんてない！

俺にチョコを渡せない女なんて今日は邪魔なだけだ！

「そんなこと言ったら、世界中の女性が邪魔ってコトになりますよ！

先生がチョコ貰えるわけないんですから！！
今年も０個ですよ！！」

「お前こそひどいなっ！？てか、なんで去年０個って知ってんの！？
…くそっ！見てろよ！数時間後にはチョコの食い過ぎで鼻血出し過
ぎて殺人現場の死体みたいになってやるからな！」

「怖いですよ！？」

と、朝からさよとバカ騒ぎしていると、部屋のチャイムが鳴り響いた。

「朝から誰ですかね？」

「……」

これは…まさか！？

「朝から俺の部屋にやって来て
『アナタに…誰よりも早く一番に渡したかったの…』的なイベント
が発生したのか！？」

「発生してませんから！！なんですかそのギャルゲーイベント！？」

俺は自分の直感を信じる！
きっと玄関の前にはボン、キュッ、ボン！のナイスボディな女性が…！

さあ！
いざ開こう！
理想郷（アヴァロン）への扉を！

「先生は幸せな人ですよね本当に…」

そして俺は扉を開いて―

「「「ナナシさん！！ごっつぁんです！！！」」」

―すぐ閉じた。

「……」

「どうしたんですか？
理想郷への扉を閉めたりして」

「いや理想郷どころか地獄が見えたんだけど…」

きっと疲れて幻覚でも見たんだな多分。
うん、そうに違いない。

なら！もう一度理想郷への扉を開いて…！

「「「ハッピーバレンタインですナナシさん！！
俺達のチョコ、受け取ってください！！！」」」

「「「「「ごっつぁんです！！」」」」」

―またすぐに閉じた

「現実じゃん！？
なんだよアレ！？
ボン、キュッ、ボン！じゃなくてボン、ボン、ボンじゃねえか！！
どうして俺の部屋の前がリアルバイオハザード状態になってんの！？」

「よかったですね。
イベント発生してるみたいじゃないですか」

「よくねえよ！？」

朝からむさ苦しい男共が部屋を訪ねるイベントってなんだよ！？

嫌すぎるわ！！

なんとしてでもこのイベントは回避しなければ…！

「玄関で待ち構えられてるんですから、回避するのは無理なんじゃ…」

「甘いな！こんなんで俺を捕まえられると思ったら大間違いだぜ！！」

そう言い、俺は玄関の扉とは逆方向の窓に手をかける。

ここから脱出してやる！

「先生って、たまにスゴい行動力ありますよね…」

「褒めるなよ。

…そんじゃあ遅刻すんなよさよ！またな！」

「褒めてませんよ…って、行っちゃった…」

・　・　・　・　・

「そっちに行ったぞ！！」

「足の速い陸上部がナナシさんを追うんだ！
残りは先回りしろ！！」

「「「おうよっ！！」」」

「なにお前らの無駄なチームワーク！？
なんで違う部活の部員達同士でここまで息が合ってんだよ！？」

なんとか寮から脱出し学園に向かったんだが、俺を追う人数が次々に増え、今じゃリアル鬼〇っこと言ってもおかしくない状況になっ

てしまった。

だが！

「職員室に入れば…！」

そう。さすがにコイツらも職員室までは追ってこないだろう。
だから職員室に入れば俺の勝ちだ！

「うおおおおっ！！」

俺は職員室への廊下を全力で駆け抜ける。

えっ？
教師が廊下を走るなって？
非常事態だから見逃せっ！

「よっし！俺の勝ちだ！」

そしてついに職員室に着き、その扉を開いて―

「な、ナナシ先生！？

どうしてこんな早く!?
ちょっ、ちょっと待っていてください!
後少しで身体にチョコを塗り終わｒ「待つかボケェ!!」るべらっ!?」

なぜか扉を開けた目の前に、身体にチョコを塗っている途中の瀬流彦がいたため、全力で顔面を殴ってしまった…

ここ…職員室だよな?

他の教師も見ないフリしないで止めろよ…

「な、殴られるのも…悪く…ない、かも…」

…聞かなかったことにしよう。

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

その日の放課後―

気付いたんだけどさ、俺がチョコ貰えないわけないじゃん。

だって俺女子中の教師で、副担任だよ？

タカミチや新田が貰えるぐらいなんだから俺も貰えるハズじゃん。

そう思ったので俺は、授業が終わった途端３－Ａの教室に向かった。

けど―

「ごめんねナッシー？
ネギ君にあげることしか考えてなくて…」

「私も…」

「うん、アタシ達も…」

「てか、あげる予定なかったんだけど…」

お、俺には義理すら渡してくれる子はいないのか…

それなのにネギや、他の男どもは…

「はは…ははは、ハーハッハッハハハハ！！！」

「な、ナッシー！？」

「ショックで壊れた！？」

もういい！！
チョコなんていらん！！

「タツミー！！」

「…タツミー言わないでくれるか？」

既に帰宅準備を終えて、教室から出ようとする龍宮を引き止める。

「女子が男子にチョコをあげるのを阻止してくれ！」

「…断るよ。なんで私がそんな無意味なこと…」

そう言うと思った！

だがここで引くわけにはいかない！！

俺は懐から例の物を取り出し、龍宮に投げ渡す。

それは―

「ここに好きな金額を書けぇぇぇぇ！！」

―小切手

「ある意味男らしい！？」

「でもやってることは最低だよ！？
どうするの龍宮さ…」

「引き受けよう」

「「「引き受けるんだ！？」」」

…ふふふ。これで人員は整い、作戦を決行できる！！

「待ってろリア充共！！
俺がお前らの幸せ、ぶち壊してやる！！」

「あれが私達の副担任なのか…」

「言わないで…」

「「「はあ…」」」

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

教室を出て、世界樹広場近くの見晴らしのいい塔の上に移動した俺

達。

「…本当にやるのかい？」

作戦を開始するという直前龍宮が確認をするかのように尋ねてきた。

「ああ。どんな結果になっても俺は後悔しない」

「…まあ引き受けた以上は仕事を遂行するよ」

そう言い龍宮は、銃を構え、スコープを覗く。

やはりコイツに頼んで正解だな。
頼もしいかぎりだ。

…痛い出費だったけど。

「2時の方向…さっそくターゲットを発見したよ」

作戦開始だ！

「撃てぇぇ！！」

「はあ…」

・・・・・・・・・

「え、英子先輩！
こ、これって！？」

「…義理よ義理。同じドッジ部だから仕方なくよ」

「それでも嬉しいです！
ありがとうございい…」

―パァン

「「…えっ？」」

「い、今の音は…って、あああ！？」

「ど、どうしたの直哉君！？」

「ちょ、チョコがぁあああぁ！？」

・・・・・・・・・

「は、はる樹君…コレ…」

「んー？なんだよコレ？」

「今日…バレンタインだから、はる樹君のために作ってきたの…」

「えっ……」

「受け取って…くれる？」

「あ、ああ！ゆき、ありがと…」

―パァン

「「えっ？」」

「な、なに今の！？」

「いや、俺にも…って、えええ！？」

「ど、どうしたの！？」

「ちょ、チョコが！？」

「えええええ！？」

・・・・・・・・・

「ハハハハ！ざまあみやがれ！！」

見たか！これが我が秘策！
『男子がチョコを貰う前に目の前でチョコを狙撃し、破壊しちゃいましょー』
だ！！

「…長くないかい？」

「ほっとけ！」

いいんだよ！
わかりやすいんだから！

「…もうこの辺りにチョコを渡す女子はいないようだね」

なら次のターゲットがいる場所へ移動すっか。

どこに行こうか…

「―シー！」

ん？

「ナッシー！！」

「ナッシー言うなっ！」

塔の下から俺を呼ぶ声が聞こえたため、下を向いてみると―

「…このか？それに刹那もいるし…」

なんだろ？

とにかく下に降りるか。

「どしたのお前ら？」

「やっと見つけたわ～。授業終わってすぐに職員室行ったのに、ナッシーいないんやもん」

「あっ、悪い」

行き違いになったのかな？けど、職員室まで行ったってことは何か大切な話か？

「あんなナッシー…実は…「ここにいましたか、ナナシ」え？」

このかの言葉を遮るように、また俺を呼ぶ声が今度は背後から聞こえた。

振り返ってみると―

「まったく…どこをうろちょろしてるかと思っていたら…」

「捜した…」

「シスター？ココネ？」

修道服に身を包んでいる教会の褐色肌2人組である
シスターシャークティとココネがいた。

2人もなんか俺に用か？

「この子がどうしてもアナタに渡したいって言うから仕方なく…」

「…ウソ。シスターも乗り気だった」

「な、何を言ってるんですか！？
私は別に…！」

…なにがどうしたんだ？

シスターは1人で慌て始めたし…

「チョコやよ、チョコ」

「……はい？」

「今日用事がある言うたらチョコ渡す以外ないやん」

ま、マジか…！

「マジですよ先生。
私も味は保証できませんが、作ってきました」

「せ、刹那…」

すると1人1人大きさや形の違う包装された箱を取り出した。

それを―

「はい、ナッシー。
チョコレート」

「どうぞナナシ先生」

「…今回だけですからね」

「…あげる」

「み、みんな…！」

…俺、気付かないだけで、本当は幸せな奴なんだな。
だって、こんなにもいい奴らからチョコを貰えるなんて…

「ありがとう…みん」

―パァン

「な…？」

今の嫌な音って…

「私は仕事を遂行しただけだよ先生」

「た、タツミー…」

じゃあ今の音ってまさか…

俺はおそるおそる視線を下に移してみると―

「あああああ!?
俺のチョコが!?」

地面に落ちている見るも無惨なチョコの箱があった。

「チョコを破壊していいのは…チョコを破壊される覚悟がある人だけだよ」

そんな名言っぽいのいらないから!

よ、ようやく貰えると思ったチョコが…!

「…ナナシ?どういうことですか今のは?」

ニコリと微笑みながらこちらに近づくシスター。

目が笑ってない!?

「し、シスター?
これは別に…!」

ヤバイ…。シスターが爆発寸前だ…
なんて説明すれば…

「ナナシ先生は女性からチョコを貰える男性を妬んで、チョコを破壊していたのさ」

「あっ、バカっ！」

「…へえ、そうですか」

シスターの身体から魔力が溢れ出る。

……オワタ

「最後に…言い残すことはありますか？」

ならば言わせてもらおう。

「…ギブミー」

「……？」

「ギブミーチョコレェートッ！！」

「天・誅！！」

「ギャアアア！？」

おまけ

「うぅ…グスン…」

「なあナッシー、元気だしぃな。
チョコならまた作ってあげるから…な？」

「今日貰えないと意味ないんだよ！！」

「全部自業自得な気が…」

「…！」

「せっちゃん！
それ言ったらアカン！？」

「え？」

「う…うわあああん！！」

「な、ナッシー！泣かんといて！」

「いい大人がチョコぐらいで何泣いてるんですか…。はあ…」

ば、バレンタインなんて……大っ嫌いだ！！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

特別番外編？『ギブミーチョコレート』（後書き）

いかがでしたでしょうか？
結局チェッシーはチョコ０でしたね（笑）

…しかし、読み返してみるとチェッシー最低ですね。他人のチョコ破壊するってオイ…

ナナシ
「ギブミーチョコレート！！」

まだ言うか…

ナナシ
「誰でもいい！義理でもなんでもいい！お願いだからギブミーチョコレート！」

いや…もう諦めろよお前。

次回…というより、本編の方は３日以内に更新できたらいいなと思ってます。
ではまた次回！

Ｐ．Ｓ

…自分ははたして今日チョコ貰えるんでしょうか？

…無理かな（笑）

第１８話「学生なんだから夜更かしはほどほどに」　※２／１９　誤字修正版

番外編で予告したくせに、更新遅れてすいませんでした！

でもしょうがないんです！

ちょ、チョコが！チョコがあれば予定通り頑張れたハズだったんです！

ナナシ

「貰えなかったんだな…」

……グスン。

と、とにかく更新が遅れてすいませんでした。

今回、必要性の分からないおまけはないです。

いや…誰も期待してないことはわかってるんですけど、一応報告を…。

※２／１９　誤字修正版投稿しました。

第１８話「学生なんだから夜更かしはほどほどに」　※２／１９　誤字修正版

ｓｉｄｅ　ナナシ

「るんるんる～」

「ご機嫌だなお前…」

どうも。ナナシです。

さよＰ・Ｇ（ポルターガイスト）事件から数日―

その間に手芸部から例の物が届きました。

そう。

―さよちゃん人形が。

…手芸部仕事早くね？

頼んでまだ数日なのに…

さすがは麻帆良の生徒ということか。

性能がハンパねぇ。

まあそんなわけで、届いてすぐにさよを呼んで、人形に憑かせてみた。

それでちゃんと動くか確認して、問題なかったからネギ、朝倉及び3－Aの魔法関係者に紹介したんだよ。

もちろん皆最初は幽霊ということで驚いていた…

刹那やタツミーに関しては武器を取り出そうとしたからマジ焦った…

とにかく、これでさよに俺以外の友人が出来たわけだから、ようやく俺離れするだろうと思ったんだけど―

「らんらんる～」

「……はぁ」

…これだよ。

なんでまだ俺と一緒にいんの？

別に嫌じゃないんだが、これじゃ紹介して友人増やした意味がない

気が…

それにコイツのいる位置―

人形にとり憑いたさよだが、当然一般人に歩いてるとこを見られるわけにはいかない。

そのため移動は誰かに運んでもらう必要がある。

それは仕方ないので運んでやることにしたんだが…

「……」

「…？どうしたんですか先生？」

「いや…その…なんていうか…」

…なんで肩の上なの？

俺としてはポケットとかが理想なんだけど…

傍から見たら、いい大人が肩に女の子の人形乗せているヤバイ奴―ていうか変態じゃん。

「大丈夫です！私がいてもいなくても先生は立派な変態ですから！」

「……」

「嘘ですっ！嘘ですから窓を開けて、私を外に投げようとしないで！？」

「身体手に入れたからってあんま調子のんなよ…！」

さよを投げ捨てるのは止めたが、今度は忠告するために力強く握り締め、顔に近付ける。

「つ、潰れ…！
先生…な、内臓的なもんが出る…！
しょ、少年誌じゃ載せちゃいけないもんが出ちゃいますって…！」

「出ねぇよ！」

人形の身体で内臓的なもんってなんだよ…

…綿とかか？

それはいいとして、これ以上締め付けるのはヤバそうだから緩めてやるか。

「…ハァ…ハァ…。
なんで身体を手に入れたその日に命の危機を感じなきゃいけないんですか…？」

「自業自得だろうが」

最近コイツに色々と痛い目にあわされてばっかだから、反撃できる時に反撃しとかないとな。

けど、あんまりやりすぎると、またＰ・Ｇの餌食になるから気をつけないと…

「ナッシー！！」

あん？

廊下の先から俺の忌みする名前を呼ぶ奴が近づいて来て…ってヤバっ！

「ちょっと隠れてろ！」

「むぐぅ！？」

近くにあった箱の中に、乱暴だがさよを投げ入れる。
そうしてる間に相手は俺の側にやって来た。

「今なに投げてたの？」

「ただの紙クズだよ」

スマン…さよ。

今度ジュース奢るから許して…って、ジュース飲めないじゃんアイツ…

…まあいいや。

それより…

「何のようだよピンク？」

「そうだ！ねえ、どうしよナッシー！？」

「主語を言え主語を。
それとナッシー言うな」

やって来た相手は３－Ａのバカピンクこと佐々木まき絵。

ピンクには珍しく、エライ思い詰めているような顔をしているんだが…

「実はネギ君がエヴァちゃん相手にテストすることになったんだけど…
でも私がマズいことしちゃってネギ君に迷惑を…
それで私に何かしてあげれることはないかな…って思ったんだけど…」

「何も思いつかなかったってわけか…」

「うん…」

どうでもいいけど、ピンク…説明ヘタだな。

事情を知っている俺だからよかったけど…

にしてもしてあげれるコトねぇ…

…ふむ

「お前が思うままに好きなことすれば？
サポートでも何でもいいから」

「ほえ？」

ピンクが何言ってるのかわからないという顔をする。
いや…俺も、イマイチどう伝えていいかわからないんだが…

「お前がどういう行動をするかはわかんねえけど、それはネギの為にすることなんだろ？
だったら結果はどうあれ、ネギにとっちゃプラスになるハズだぜ」

「そういう…ものなのかなぁ…」

「実際のとこ、応援するってだけでもネギの為にはなる。
誰かが自分を応援してくれる…それだけで人は頑張れるもんだしな」

…なんか説教っぽくなっちまったな。
それに大したこと言えてないし…

「…うん。そう…そうだよね。わかったよ！」

そう言い、胸の前に両手で握りこぶしを作るピンク。
その姿をみると先ほどのような思い詰めているような雰囲気はなく―

「とりあえず私、思いついたコト全部やってみるよ！結果はどうあれチャレンジしてみる！」

いつもの見馴れている佐々木まき絵がいた。

「ん…そうか」

なんとか力になれたかな？
こんな風に誰かにアドバイスする役とか似合わねえけど、たまには悪くないな。
まあ…たまにだけど。

「ありがとねナッシー！
今日はなんか頼れる先生みたいでよかったよ！」

そう言い残し、ピンクは俺に背中を向け、走り去る。

「じゃあねー！」

ったく…

「…ナッシー言うなっつーの」

嬉しいこと言ってくれんじゃねえか。

しかしネギの弟子入りの件か…

大丈夫だとは思うけど、気になるし、見に行ってみるかな?

「…終わりましたか?」

「おお!悪かったなさっきは!
でも俺の咄嗟の判断に感謝しろ…って臭ぁ!?」

箱から隠れていたさよが出てきたから、掴みあげてみたんだが、なんだこの臭さは!?

「先生のせいでしょ!?
咄嗟とはいえ、いくらなんでもゴミ箱に投げ入れなくてもいいじゃないですか!?」

「ゴミ箱？…あっ！」

さよを入れた箱を確認すると、俺のいた位置から見えない部分に『ゴミ箱』という貼り紙が…

その中には学生が捨てたティッシュやらガムやら弁当やら色々入っていた。

…やっちまった。

「悪イ…。本当ニスマナカッタ…」

「そう思うなら鼻を押さえて私から遠ざからないでくれますか！？」

「だって近くだと臭いんだもん！仕方ないもん！」

「可愛く語尾に“もん”って付けても許さないですからね！？」

「わかったよ…。ほら」

俺は廊下にある付属品の物をさよに使う。

「わっ…ぷ!?
ちょっと!?何、人にアルコール消毒液使ってるんですか!?」

「消毒してやろうと…」

「失礼ですよ!!」

むぅ…じゃあどうしろと?

…洗濯でもするか?

「何でとり憑いた初日に身体にこんなダメージ受けないといけないんですか!?アレですか!?
実はこの人形は呪いの人形か何かですか!?」

「自分が幽霊だということと、人形をかけて呪い…。上手いな!」

「かけてませんよ!」

「いざとなったら俺が呪いぐらいなんとかしてやるって!
適当に聖書でも読んでれば解除できると思うし」

「教会の人間とは思えないセリフ！？
ていうか無理ですよ！
そんな適当さで解除できる呪いがあるわけないじゃないですか！？
先生の本職なんですから適当にやらないでください！！」

「はっはっは！」

「笑って誤魔化さないでください！」

そろそろ収拾がつかなくなったし、行くか。
いつまでも廊下で騒いでるわけにもいかんし。

「先生が原因で騒ぎ始めたんじゃないですか…」

確かに…。

まあ、いつものことだろ。

とにかく移動するためにさよを再び肩の上に乗せて…

「悪い悪い。ほら、行こうぜ…って臭ぁ！？」

「まだ言いますか！？」

ピンク…さっきの言葉…間違ってたかもしんない…

相手の為にすること全てがプラスに働くとは限んないかも…

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

・～・～・～・～・～・～

ｓｉｄｅ　――

時は進み
日曜日の午前０時
世界樹前広場にて―

「エヴァンジェリンさん！！」

広場の階段から1人の少年の声が鳴り響いた。

「ネギ・スプリングフィールド！
弟子入りテストを受けに来ました！」

「フフ…。よく来たなぼーや。では早速始めようか」

それに対し、階段の上で待ち構えるのは金髪の少女―エヴァンジェリンとその従者達。

「お前のカンフーもどきで茶々丸に一撃でも入れられれば合格。
手も足も出ずに貴様がくたばれば、それまでだ」

「…その条件でいいんですね？」

ネギは確認するかのように、ニッと笑みを浮かべながら聞き返した。

「…ん？ああ、いいぞ。
…それよりも」

そのネギの態度に一瞬疑問に思ったが、エヴァンジェリンには、それよりも気になることが2つあった。

それは―

「そのギャラリーは何とかならんかったのか!?」

「はぁ、ついて来ちゃって…」

階段下でネギを応援する一部の3－Aのメンバー達。

そしてもう1つ―

「なんで貴様が私の隣にいるんだ!?

ていうかなんだそのメガホン!?」

「だって応援っていったらメガホンだろ?」

なぜかエヴァンジェリンの隣でメガホンを構える、黒いキャソックに身を包む男だった。

side　――　end

side　ナナシ

ネギの弟子入りテストを見にやって来たんだけど、眠いな…

0時って夜更かしし過ぎじゃねーか。

まあ、広場に一般人がいない時間となると、こんぐらいの時間じゃないとダメなんだろうけど。

「まったく…相変わらず野次馬根性だけは立派だなお前…」

「テヘッ」

「照れるな！！

褒めとらんわ！！」

けどネギの奴いいのかよ？
魔法のコト知らない運動部４人組まで来てて。

テストは体術しか使わねえから大丈夫なんだろうけど…

「それよりナナシ。テストの邪魔だ。見るなら見るで移動…いや、待てよ？」

「なんだよ？」

人を邪魔扱いしたと思ったら急に何か考え始めやがった。

どうせ、またろくでもないコト考えてんだろうな…

「ククク…気が変わったぞ」

「あん？」

「おいぼーや！
テスト内容の変更だ！」

「「「なっ！？」」」

テスト直前で変更！？

さっきその条件でいいとか言ってたのに！？

「ちょっと待ちなさいよエヴァちゃん！？
いきなり変更だなんてズルすぎじゃない！？」

「黙ってろ神楽坂明日菜。言っただろう、気が変わったと。
それに私は弟子をとる気はないのに、わざわざテストというチャンスを与えてやったんだ。
なら、多少の我が儘ぐらい聞くべきだろう？」

なんという自己中発言…

だから友人少ないんだよコイツ…

「……」

「心配するなぼーや。ルール自体は変わらないさ。
ただ…」

ただ？

「相手が茶々丸から変わるということだけだ」

…それだけ？

なら別に構わない気が……って、待て。

茶々丸以外となると、相手は誰がいる？

エヴァ本人は…ないな。

茶々丸にやらせないで自分でやる必要がない。

３－Ａの連中…もないな。情が移る可能性もあるし、戦いにくいだろう。

チャチャゼロ…もない。絶対に。

てか動けないしアイツ。

もし動けたとしても悲惨なコトにしかならない気が…

じゃあ誰が…

「相手はコイツだ！

いいな！」

そう言いエヴァが指差したのは…

「……俺！？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１８話「学生なんだから夜更かしはほどほどに」　※２／１９　誤字修正版

ようやく弟子入りテストに入りました…（汗）

なぜか勢いでテストの相手をナナシにしてしまいましたよ…

てことは、次回は少し戦闘描写を入れなきゃいけないのか？

がああああ！？

な、なんで自分から苦手分野に突入してしまったんだ！？

そうなると文量的な問題でギャグも少なめになるわけだから…この作品の持ち味が！？

なので次回は難産になる予定…

まあ、いつもそうですけどね（笑）

ではまた次回

第１９話「信念」（前書き）

やっちゃいました…
第２０話…

せっかくの２０話がこんな感じになってしまうとは……（泣）

今回いつもよりギャグ少なめで、短いです。

そして、相変わらず成長しない戦闘描写があります。

伝わりにくい表現や分かりにくい表現もあるとは思いますが…全力で見逃してください！（↑オイ）

第１９話「信念」

ｓｉｄｅ　アスナ

ネギの弟子入りテストのために、こんな夜遅くにこのかや刹那さん、運動部４人組達と世界樹前広場に集まった。

テスト内容はいたって簡単。

ネギが茶々丸さんに体術で一撃入れればいいだけだった。

けど―

「相手はコイツだ！
いいな！」

エヴァちゃんの一声で―

「俺！？」

ネギの相手が茶々丸さんからナッシーに変わろうとしていた。

…あれ？

ナッシーって確か今魔法使えないわよね？

だったらむしろネギにとっちゃラッキーなんじゃ？

「ぼーやもそれで構わないな？」

「あっ、はい。僕は別に…」

「ちょっと待て！？

何本人を置いて勝手に話を進めてんの！？

俺は了承してないぞ！？」

ナッシー…、エヴァちゃんが一度決定したことに抗議しても無駄だってことに、そろそろ気付きなさいよ…

「うるさい黙ってろ。師匠命令だ」

ほらね？

「嫌ですぅ～。戦いたくないですぅ～。こんな時だけ師匠面しないでください～」

「ええい語尾を伸ばすな！ウザったいわ！！」

「拒否権を発動しますぅ～。俺は頼まれてもＮＯと言える人間なんですぅ～」

いい加減こっちもウザくなってきたわね…。
刹那さんとか他の皆は苦笑いしてるし。

それに、そんな言い方じゃエヴァちゃんを怒らせることにしかならない気が…

「…わかった。貴様は戦わんでいい」

「マジで！？」

って、はい？

あのエヴァちゃんがえらく簡単に引き下がったわね…

「そうだ。私が悪かった。お前に頼むのはいささか酷だったもんな」

「……はい？」

「たたでさえお前はぼーやに負けているものが多いんだ。
知識・ルックス・人望……数を挙げたらキリがないが、これに加えて体術…。つまり力まで負けたらそれこそ本当の無能だもんな？」

「なっ！？」

エヴァちゃん…もしかしてナッシーを挑発してる？

「なあに。気にすることはないさ。
お前は口先だけは立派だからな。
いつもどおり隅で犬のようにキャンキャン吠え散らかしているといいさ」

…いくらなんでも、あんなあからさまな挑発に乗るわけが―

「…ってやる」

「うん？何か言ったか？」

「戦ってやるって言ってんだ！
上等だぁ！俺が無能じゃないってこと教えてやる！
ネギごとき俺がブッ殺してやるよ！！」

「殺しちゃダメだから！？」

―あったよこのダメ教師！どんだけ単純なのよ！？

「…フン。なら決定だな」

「はい！」「おおっ！」

・・・・・・・・

―というわけで、ネギの相手は結局ナッシーになり、２人は現在広場の上で対峙している。

「でもさ、ラッキーよね。相手が茶々丸さんからナッシーに変わるなんて。
これならネギも簡単に合格できるんじゃない？」

―と、近くにいた刹那さんとくーちゃんに話しかけてみるけど…

「……マズいアルな」

「……ええ」

「えっ？」

なんで2人ともそんな深刻そうな顔してるんだろう？
それに、マズいって―

「では始めるがいい！」

そんなことを考えている間に、エヴァちゃんにより戦いの火蓋が切られた―

「契約執行９０秒間！
ネギ・スプリングフィールド！！」

あれって修学旅行の時に使ってたのと同じ…！

ネギは自身の魔力によって身体を強化する。
ナナシはそんなネギの姿を見て、感嘆したような声を洩らす。

「へぇ…。自分への契約執行か。面白いコト考えやがったな」

そう言い、ナナシは姿勢を低め、構える。

「「……」」

お互いに相手の窺っているのだろう。
2人はその場に構えたまま動かない。

しかし、その状況に痺れを切らしたのか―

「やあああぁーっ!!」

―ネギが攻撃に出た。

契約執行のおかげで速い!
あれなら…!

「ダメです先生!?

ただ真っ直ぐにナナシ先生に接近しては…！」

刹那さんが声を張り上げて叫ぶ。

けど―

「がっ！？」

その叫びもむなしく、ネギの横っ腹にナナシの蹴りが決まった。

「ネギ！？」

「ネギ君！？」

ネギはそのまま、その衝撃で地面を弾むように蹴り飛ばされた。

「な、なんで！？

ナッシーは今魔法（ちから）は使えないんじゃ！？」

なのに、なんであんな簡単にネギがやられてるの！？

「奴は何も使ってないさ。何もな」

……エヴァちゃん？

いやらしい笑みを浮かべながら、エヴァちゃんが私達の方に話しかけてきた。

「貴様は勘違いしているようだから教えてやる」

「勘…違い？」

私が何を勘違いしてるっていうの…？

「もっとも、そこにいる桜咲刹那とチャイナ娘は最初からわかっていたようだがな」

「「……」」

「いいから焦らさないで何を勘違いしてるか教えなさいよっ！」

そんなやり取りをしている間にもネギは立ち上がり、再びナナシに接近し、拳を突き出す。

けれどナナシは身体を横に逸らすことでそれを回避する。
そしてそのまま攻撃により硬直しているネギの後頭部に向かって、
肘を勢いよくぶつけた―

「ぐぎっ！？」

「ネギ！？」

ネギは強烈な一撃に耐えきれず、地面にひれ伏してしまう。

「神楽坂明日菜、お前は奴を弱い奴だと思っているだろう？」

「だ、だって、ナッシーって戦いの度にボロボロになってるじゃない！
勝ったところなんて見たことないし…」

「貴様は修学旅行でしか奴の戦いを見たことないだろう。
奴が負けた相手はどれも規格外だ」

た、確かにそうかもしれないけど…

「だが、お前の言うとおりナナシは弱い」

「……はい？」

突然何を？

てか話の流れ的にここは強いって言うとこじゃ…

「ナナシにはぼーやみたいな才能はない。
これから奴がどれほど努力しても、奇跡でも起こらないかぎり私のような一流相手には勝つことは無理だ」

せいぜい二流止まりだろうと告げるエヴァちゃん。

「だが、奴はその事実を知っても立ち止まることはなかった。
何度敵に倒されようが、ボロボロになろうが、心だけは、奴の信念だけは折れることはなかった」

「……」

「故にナナシは弱いかもしれんが―」

そういうとエヴァちゃんはナッシーの方を見て、告げる―

「―同時に誰よりも強い人間だ」

ｓｉｄｅ　アスナ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

まったく…。

末恐ろしいガキだなホント。

これがクンフー習って１週間の奴の動きかよ…。

こんなん見せられたら俺の数年間の修行が無駄に感じるわ。

けど―

「はあ…はあ…はあ…」

まだ俺には届かない。

「ネギ…、いくら防御に魔力(ちから)を集中しても、そろそろ限界だろ？」

「ま、まだ…でふ」

その根性は認める…認めるけどな…

「なあネギ…？
なんでお前はそこまで頑張れるんだ？」

「…あの人に、父さんに追いつくためには…どんなことでも頑張らなきゃいけないから…！」

やっぱそうかよ。

「お前のその信念は…諦めることはできないんだな？」

「…はい…！」

…そうだよな。

コイツは6年前のあの日から、それだけを目標に…、ナギだけを目指して走り続けてんだもんな…。

今さらこんなトコで立ち止まれねえよな。

なら俺もそんなネギに相応の態度を示さないと失礼だよな。

「…ネギ。次で最後だ。
俺は今の俺が持てる全てをお前にぶつける。
お前も全力で来い…！」

「…はいっ…！」

そう言い、俺は構える。

そして―

「うおおおぉぉ！」

「うわあああああ！！」

―2人の影が交差し、一つとなった。

「…はあ…はあ…！」

「……」

ナナシの拳は空を切り、ネギの拳はナナシの胸を捕えていた。

「当たり…まふぃた…！」

悪りぃなエヴァ…。

「ああ…。合格だよネギ。お前の…勝ちだ」

負けちまった…。

「「やっ…」」

「「やったーっ！！」」

「ネギくーん！」

「おっ…と」

限界が来たのだろう。
俺にそのまま倒れこんでくるネギ。

「寝ちまった…のか？」

それとも気絶か？

どっちかはわからないが、ネギの表情は満足そうだった。

俺はネギをレッドに預け、その場から離れる。

「おい無能」

「真顔で無能言うなよ！？冗談に聞こえないから！」

「冗談じゃないんだが…」

「なお悪いわ！！」

負けたら無能だとは言ってたけど、いきなり無能扱いは酷くね！？
これでも魔法使えないなか頑張ったんだぞ！？

「貴様…最後のはワザと受けたのか？」

「いや…。少なくとも最後の一撃だけは俺は本気だった」

倒すつもりでいったんだけどな…

ったく、ネギの野郎。

あんなボロボロで、どこに力が残ってたんだよ？

「負けた俺が言うのも何だが、約束は守れよ？」

「…フン。わかってるさ」

なら、いいけどな。

「じゃあ俺は帰るわ。
もう眠くてたまらん」

「…好きにしろ」

にしても、条件付きとはいえ、もうネギに負けるようになっちまったな…

俺も、もう一度別荘で鍛え直そうかな？

「そうそう。貴様への罰は後々伝えるから、覚悟しとけよ？」

「えっ？」

……罰？

「私はお前のせいでぼーやを弟子入りさせることになったんだぞ？なら罰ぐらい受けるべきだろう」

「お前が勝手に俺を指名したんだろうが！？」

「おや？戦ってやるって言ったのはどこのどいつだったかな？」

「ぐっ…！」

確かに言ったことは言ったけど、それはその場のノリに流されたというか…

「とにかく負けは負けだ。潔く罰を受けろ」

「…お手柔らかにお願いします」

「考えておいてやるさ」

俺、死んだかも…。

おまけ1

「まあ、これでネギは俺の弟弟子になったわけだ」

「そうですね」

「なら俺を『兄さん』、もしくは『兄貴』と呼べる権利を差し上げよう！」

「いや結構です」

「即答！？」

おまけ2

「ナッシーのこと、弱いけど強いみたいなこと言ってたけど、結局どっちなの？」

「弱い」

「ちょっ！？そんなあっさりと！？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第１９話「信念」（後書き）

ナナシ…久々に真面目モードになったな。

今回はナナシへのエヴァの評価が分かる話でした。

…なんか読み直してみると、自分でもよく分からないコト書いてましたね（笑）

それに、やっぱりギャグじゃないと筆は進みにくいですね。

次話はギャグオンリーのつもりですのでご期待を（笑）

次回の更新ですが、リアルの方の学校で学期末テストが間近なので、しばらく更新はできないかもしれません…。

でもテストの時期に限ってネタが多く思いつくんですよね…。

なので、もしかしたらいつも通り更新するかもしれません。

ではまた。

第２０話「南の島…そう、それは男の楽園！」（前書き）

珍しく昼に投稿。

テスト前に何やってんだよ自分…

第２０話「南の島…そう、それは男の楽園！」

「―よし、では始めろ」

ネギがエヴァに無事弟子入りしてから数日―

「いきます！
契約執行３６０秒間！
ネギの従者　宮崎のどか！神楽坂明日菜！」

今日ようやくエヴァの下で第１回目の修行が開始された…。

開始されたのだが―

「くっ…」

「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

「――次！対魔・魔法障壁全力展開！！」

「ハイ！」

「そのまま3分持ち堪えた後、北の空へ魔法の射手１９９本！！
結界張ってあるから遠慮せずやれ！」

「うぐっ…ハ、ハイ！！」

「うわ…きっついなぁ…」

エヴァがやたらスパルタになっていた…

そんな感想を抱きながら、俺はネギの修行を見学していた。

この修行内容って修学旅行以上に魔力を消費すんじゃねえか？

ここにいるのは１１人と１匹。

ネギ・レッド・宮崎・このか・刹那・イエロー・綾瀬・エヴァ・茶々丸・俺・さよ。

それとカモだ。

…なにこの異色メンツ？

統一感なさすぎだろ…

別にいいんだけどさ…

と、タバコを吸いながら考えていると―

「タバコあかーん！」

「あっ！コラッ！」

…このかに取り上げられた。

「返せ俺の精神安定剤！」

「こんな身体に悪いもん吸っとたらアカンて！」

「大丈夫だって！これはタバコじゃなくて…アレだアレ。チュッ○チャップス的なモンだから！」

「煙出てたやん！？」

「煙噴出口付きチュッ○チャップスだ！」

「何その無駄な機能！？」

……結局取り上げられてしまった。

くそぅ！今タバコ1箱買うのも辛い状況だから1本1本大切に吸おうと思ったのに！

値上がりしてから色々と経済的に大変なんだぞ！？

……あれ？

「何でこのかがこっちにいるの？」

「うん？」

いや…そんな可愛らしく首を傾げられても…

「ネギのパートナーなのに、修行に付き合わなくていいのか？」

刹那は仮契約してないから分かるけど…

まあ、刹那の場合は俺が仮契約する機会を潰しちゃったからなんだけどな。

「…？ウチはネギ君のパートナーやないよ？」

……はい？

パートナーじゃない？

修学旅行で仮契約してないってこと？

なら何でネギ生きてんの？

このかが力に目覚めない限り、あの石化しかけた状態のネギを助ける手段はないハズだが…

それともネギは石化を受けなかったのか？

俺というイレギュラーのせいで、原作とは違う展開になったとか…

……謎だ。

「まぁ、いっか」

どうせ終わったことだし。
無事にネギも生きてるんだから問題ないだろ。

「…ナナシ先生は魔法使いなんですか？」

俺が自己解決すると、綾瀬が話掛けてくる。

しかし、その質問は…

「いや…魔法使いだけど、今は魔法使いじゃないっていうか…」

「？」

…どう説明するべきか？

魔法使えなくなっちゃいました。テヘッ！

とか言った日には俺の評価が今以上下がりそうだし…

「ナッシーは今魔法使えなくて、ただの一般人と変わらないんよ」

「あっさり言わないで！？後、ナッシー言うな！」

…でもホント、なんで使えなくなったんだろ？

あれからずっと使えないままだし…

まさかこのまま一生使えないままだとか！？

そしたら俺は足手纏いになっちまうのか！？

…そこ。今でも充分足手纏いだとか言うな。

少しぐらい役に立っとるわい！

魔法が使えなくても、まだ俺には道が残ってるしな！

「刹那！」

「はい？どうしたんですかいきなり叫んで？」

「意味はない！」

「…はあ」

よくわからないという顔をしているが構わない！

「『気』を教えてくれ！」

「『気』ですか？」

たとえ魔法が使えなくても、気が使えればなんとかなるハズ！

むしろ気は体力を使うから、俺に向いてるかもしんねえし！

「しかし私もまだ未熟な身ですし…」

「謙遜すんなって！少なくともここにいるメンバーじゃ、エヴァを除いてお前が一番だし！」

イエローも気は使えるとは思うが、アレは無意識に使ってるしな…

「…わかりました。私でよければ」

「サンキュー！」

よし！これで俺はようやく今の無能状態から脱出できる！

…あ、今自分で無能って認めちゃった気がする…

「では好きなように構えてください」

…今は刹那の説明に集中しよ。

「ステップ1です。丹田に力を入れてください」

「おう」

丹田って確かヘソの下辺りだよな？

「ステップ2です。身体に流れるエネルギーを全体に張り巡らしてください」

「おう…って、はい！？」

「最後です。そしたらその張り巡らしたエネルギーを解放してください」

「ちょっ、ちょい待て！」

すると刹那の身体がら淡い光のようなものが吹き出る。

そして、刹那はやり遂げたような表情を浮かべ一言―

「できましたか？」

「できるかああ！！！」

なんだよそのアバウトな説明は！？

「ステップ1と2でハードル上がりすぎだろ！？
なに身体に流れるエネルギーって！？
まずはそのエネルギーをどう感知する方法を教えるべきだろうが！
？」

「一を聞いて十を知ることが大事だと思います！」

「今のは一どころか0だったんですけど！？」

コイツ、俺に教えるつもりないんじゃねえのか！？

説明が雑すぎる！

俺と刹那がそんな会話をしていると―

「光の精霊１９９柱　集い来りて敵を射て
『魔法の射手　連弾・光の１９９矢』！！」

ネギの魔法が北の空の障壁に向かって放たれた。

「「おおー！」」

「キレー…」

「ふん！俺だってあれぐらい余裕で…」

「できるんですか？」

「…できません」

魔法が使えた時でも１９９矢はちょっとキツいかな…
俺はネギと違って魔力量は少ないし…

「あうう？」

「せんせー！？」

…って、おや？

さすがにネギでも契約執行や色々した後に今のはキツかったか？
地面に倒れこむように気絶しちゃったよ…

「あらら、ネギも情けないな」

「先生だけには言われたくないと思います」

「うるせえよ…って、なんださよ、いたのか？」

「いましたよ！具体的にいえばずっと先生の肩の上にいましたから！ていうかさっき、自分で人数数える時カウントしてたじゃないですか！？」

「それもそうだな」

全然話さないから忘れてたし。

それより最近さよが肩に乗っていることに違和感がなくなっている気がする…

将来肩凝りに悩むようになったらコイツの責任だな…

「人形ぐらいの重さで肩凝らないでくださいよ！？」

「いや、霊的な意味で肩が凝るというか…」

…あれ？

これもある意味憑かれた状態になるんじゃね？

常に幽霊を肩に乗せてるわけだし…

…忘れよ。

この後、ネギとレッドが痴話（？）喧嘩をして、レッドが立ち去ると、ネギやこのか、刹那はエヴァの家に寄ることになった。

なんでも、これからの方針を決めるんだとさ。

俺は関係ないから、１人で寮に帰ることになったが…

「だから私を忘れないでください！？」

「お前の家は寮じゃねえじゃん！？」

教室で１人寂しいとゴネたさよは結局エヴァの家に泊まらせることにした。

本人は不本意そうだったが、俺の部屋に泊まらせるのは色々問題があるしな。

…主に霊的な意味で。

部屋で起きた時、動く人形が目の前にいるとか心臓に悪すぎるし、呪われそうで嫌だ。

もっともそれをさよに説明した時、なぜかP．Gの餌食（ポルターガイスト）になったが…

…俺って最近P．G率が高すぎじゃね？

・～～・～・～・～・

週末に差し掛かり、休日をどう過ごすか悩みながら、久々に教会に顔を出してみたら―

「南の楽園？」

「そっ。いいんちょが南の島に1日遊びに行くから、クラスの皆も一緒に行くわけになったんだよ。
で、せっかくだからナッシーも誘おうってことになったんだ」

「ナッシー言うな」

美空から南の島へのお誘いを受けていた。

南の島かぁ…

青い空に…青い海…

サンサンと照る太陽…

そして、ビキニのお姉様…

…うん。

「行きましょう」

これは普段頑張っている俺に対してのご褒美だなきっと！

ならそれを断るなんてことはできない！

「ん、わかった。なら集合場所と時間は後で連絡するから準備しと

いて」

「了っ解！」

「…やけに気合い入ってるね？
そんなに楽しみなの？」

フハハハハハ！

待ってろよ楽園！！！

・・・・・・・・・・

そして―

「「「よぉぉーっし！」」」

「「「海だぁーっ！！！」」」

「だぁー…」

予定通り無事に南の島に着いた。着いたんだが…

「貸し切りってどういうことだよ……！」

ここの島は、雪広グループ管轄のリゾートらしく、雪広がネギのために1日貸し切りにしたそうだ。

それはつまり、今日この島には3－Aだけしかおらず、他には誰もこないわけで…

「くそぅ！！俺の『南の楽園！お姉様達とのドキドキバレーボール大会！ポロリもあるよ』計画が！？」

「南の島まで来て、何大声で恥ずかしいコト叫んでるですか…」

「ここまで欲望丸出しだと逆に清々しいわね…」

「あはははは…」

背後から聞き慣れた声がしたので振り返ってみると―

「なんだ、お前らも来てたのか？」

「それはこっちのセリフよ」

スクール水着に身を包んだレッド・このか・刹那の3人がいた。

しかしスク水か…

しっかり3人を上から下まで観察して…ふむ。

「アリだな！」

「何がっ！？」

しかし3人共…うん、今後の成長に期待だな。

「…えらく馬鹿にされた気がするんだけど、気のせいかしら？」

「キ、キノセイダヨ…」

あ、相変わらず妙なとこだけ鋭い奴だな…

「あ…アスナさん…」

ネギ？

「ふんっ」

ネギの呼び掛けにそっぽを向き、立ち去るレッド。

…なんだ？まだ喧嘩してたのか？

レッドも素直じゃないな…

「まったく…。あのおサルさんはいつまで意地を張ってるんでしょうね？」

「確かに。……！？」

俺と同じような感想を持った奴がいたようなので、そちらの方に振り向いてみると、そこには雪広、那波、村上の３人がいた。

「俺の…楽園は…こんな所にあったのか…！」

「はい？」

「あなたの胸に惚れました」

そう言って、那波の手を取る。

「あらあら？」

「なに不純な理由で告白してるんですか！？」

「うるせぇ！目の前でこんな立派なもんぶら下げられたら告白するしかないだろ！？」

「それもはやセクハラですよ！？」

な、那波…なんて恐ろしい奴なんだ…！

クラスＮｏ．１の胸を惜しみなくビキニで披露するなんて！！

「千鶴さんも！
なに満更でもない顔してるんですか！？」

「だってナナシ先生可愛いんですもの」

「「「……はい？」」」

可愛い？誰が？

…俺？

「自分に正直で、自由で好きなように生きる…。まるで子供のように愛らしいとは思わない？」

「千鶴さん！？
いくらこの人の精神年齢が子供レベルだとしても、愛らしいなんて

感情を抱くのはおかしいですわよ！？」

「おいコラ」

そこまで精神年齢低くないわ！

「ナッシーの子供みたいな馬鹿な行動が、ちづ姉の母性本能を刺激したみたい…」

「お前らさっきから失礼だからな！？
無意識に俺を傷つけてることに気づけよ！？」

「ふふふふ」

「那波も！俺を『手に掛かる子ねぇ』みたいな顔で見ないで！？」

お前は俺の母親か！？

「でもナナシ先生とは今まで話す機会がありませんでしたし、こうして話すのは新鮮ですね？」

「まあそうだな」

「これを機に仲良くしましょうね先生？」

そう言い、小悪魔チックな笑みを浮かべる。

そんな表情をされて断れる男がいるか？

いや、いない！

「ああ、よろしく」

それにクラスの生徒と交流を深めることに反対する理由もないだろ？

…ほ、ホントに理由はそれだけだよ？

まさか目の前で強調される谷間に惑わされたなんてことはないからね！？

・　・　・　・

・・・・

そろそろ日も沈みかけ、空と海を茜色に染め始めた。

あのあと、ネギとアスナを仲直りさせる作戦が決行されたが、失敗に終わったことだけを伝えておく。

そして現在、休憩所っぽい場所にいたネギと図書館組の宮崎、綾瀬に近づいてみると―

「私も、ネギ先生と仮契約というヤツをさせて頂けませんか？」

「えっ…ええ～っ！？
仮契約ー！？」

綾瀬がネギの手を取り、顔を近づけさせていた。

…何この告白現場？

ていうかここでも告白か？

アレか？南の島は人の気持ちを開放的にするのか？

「あれ？旦那？」

「よおカモ、お邪魔だったか？」

俺の存在にいち早く気づいたカモ。

「しかし綾瀬も大胆だな。こんな所で告白なんて…」

「「告白？」」

…ん？もしかしてコイツら仮契約の中身を知らない？

はっはーん…

「だからネギに仮契約…。つまりキスを頼んでたんだろ？」

「「き、キス！？」」

あらら。やっぱ知らなかったみたいだな。

「き、キスってー」

「宮崎も修学旅行でやっただろ？
つまり契約の儀式にはキスが必要なんだよ」

「のどか！違うです！
私はそーゆーつもりは全くこれっぽっちも…！
ナナシ先生も適当なことを吹き込まないでください！」

事実なんだけどな…

そりゃあキス以外にも方法はあるけど…

「ネギくん、しつもーん！パクテオーてキス以外にやり方ないんー？」

ほらな？

やっぱりキスが一番一般的なやり方なんだよ。

ていうかパクテオーじゃなくて、パクテイオーな。

「このかさん？急にどうさたんですか？」

「うん。ウチな、あれから考えてやっぱり魔法使いになる勉強することにしたんよ」

「えー！？
そうなんですか！」

「うん！それでウチせっちゃんにもパートナーになって欲しいんやけど」

…コイツらもか。

本来なら仮契約といえ、もう少し慎重に相手を選ぶもんなんだけどな…

これが若さか？

「そういえば、ナナシ先生にはパートナーはいないんですか？」

ネギがそんな藪蛇な質問をしてくる。

コイツ…わかって言ってるんじゃねぇだろうな…！

「俺はお前と違って女性に恵まれてないんだよ！
このラブルジョワめ！」

「あうう！」

俺がネギに正義のグリグリ攻撃をしていると…

―くい、くい

何やら俺の上着を引っ張る感触が…

「…えへへ」

「このか？どうした？」

自分を指差しながら、俺の顔を見つめるこのかがいた。

その顔は、夕日のせいか、日焼けのせいかで、赤く染まっていたが…

「……」

「……？」

このかが喋るのを待っているが、一向にその気配がない。

俺に用事があったんじゃないのか？

「…はぁ、もうええよ」

そう言い、俺の上着を話し、諦めたような顔をするこのか。

なんだったの今の？

「「「ナナシ先生…」」」

「旦那…」

他の奴らは俺を非難するような目で見てくる。

何！？

俺は何もしてないぞ！？

「兄貴も旦那も、女心がわたっちゃいねえな…」

「駄目ですねこの担任と副担…」

「だから何が！？
つーか、オコジョに女心わからないとか言われたくねえし！」

このセリフ、前も言った気がする！

ほら！ネギもオコジョに言われて落ち込んでるし！

「ナナシ先生と…同じ扱いされた…」

「そっちかよ！？」

落ち込む理由がおかしいだろ！？

それよりネギはレッドのことはいいのかよ！？

「あーっ！？」

忘れたのかよ！？

・・・・・・・・・・

翌日の早朝―

「バッ…！？ちがっ、そーゆ意味じゃないわよ！
あんたが余りにガキで無鉄砲だから心配で見てらんないってだけの話で…！」

「そんなことお姉ちゃんが聞いたら何て言うか！？
あわわわ！ぼぼぼ僕困ります！」

「だから違うんだってアホーッ！！」

海の中で、いつも通りばか騒ぎしている2人がいたとか…

ていうか何言ったんだレッドは…？

おまけ

帰りの途中―

「いやあ楽しかったな南の島！」

「そやね～」

「やっぱりたまには息抜きも必要だよな」

「先生はいつでも息抜きしてるようなもんでは…」

「ほっとけ」

「あれ、そういえば…」

「どした？何か忘れ物でもしたか？」

まあ、忘れ物があっても雪広がなんとかしてくれると思うけど…

「さよちゃんは？」

…さよ？

「……あっ」

麻帆良に忘れ物じゃなく、忘れ者をしていたナナシであった。

to be continue ?

第２０話「南の島…そう、それは男の楽園！」（後書き）

南の島いいなぁ。

自分もテストなんか忘れて行きたいなぁ。

ナナシ
「現実逃避すんなよ…」

はい、今回は南の島編ということでギャグ＋若干恋愛？要素を入れてみました。

ネギとアスナの喧嘩の件は全部書こうとすると、文量が大変なことになるので、省略しました。
まあ、仲直りしたからいいよね！（↑オイ

次回の更新は…テストのため、１週間以上かかるかもしれません。
（といいつつ、普段通り更新するかもしれませんが……）

では今からまた勉強タイムに入りたいと思います。

また次回。

第２１話「忍びよる影」（前書き）

こんな状況ですが、更新させてもらいました。
執筆してるとなんだか精神的に落ち着けるんで…。

今回から悪魔襲撃編です。
そして短いですが、ナナシ以外のオリキャラも登場します。

では。

第２１話「忍びよる影」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「―は？ネギの修業がおかしい？」

本日の授業も終わり、机の上に蓄まっていた書類を片付けていたところ―

「そうなの。いつもたった2、3時間の練習なのに、帰って来る時にはフラフラなのよ？
そんなの絶対におかしいわよ」

ネギの保護者…もとい、レッドが職員室に訪れていた。

―てか、そんなの俺じゃなくてエヴァに直接聞けよ…
珍しくコイツが職員室に来たから、てっきり成績のことを相談しに来たのかと勘違いしちまった。

「うっ…！？
そ、そんな相談しないとヤバイの私？」

「いくらここがエスカレーター式っていっても、毎回毎回この点数じゃなぁ…」

「い、今は成績の話なんていいじゃない！
それより今はネギのことの方が重要よ！」

成績も充分重要なんだけどな。

しかし、ネギが修業に出かけて帰って来るまでの短時間でフラフラになる理由はやっぱり―

「別荘かな？」

「別荘？」

そういやコイツはまだ知らないのか。
なら、おかしいと思っても仕方ないな。

「説明するより、自分で見てもらった方がいいだろ。―さよ」

俺はさよの名を呼び、指を鳴らす。

すると―

「呼びましたか先生？」

「キャッ！？」

机の引き出しから霊体の状態のさよの頭がひょっこりと出てきた。

自分で呼んだとはいえ、なんちゅー場所から現れてんだよ…

お前はネコ型ロボットか、何かか？

「さ、ささよちゃん！？驚かさないでよ！？」

「えへへ～すいません」

イタズラが成功したのが嬉しかったのか、言葉とは違い、その顔に反省は見られない。

てかレッド…。

少し声のボリューム下げろよな？

ここ何度も言うけど職員室だし、周りから見たら、お前机に話しかけてる危ない奴だぞ？

「で、何か用事ですか？」

「おっと、そうだ。
悪いんだけどレッドをエヴァの家の別荘まで案内してやってくんねぇか？」

「別荘まで？
はい、別にいいですよ？」

「あれ？ナッシーは行かないの？」

「ナッシー言うな。
俺はまだ書類が残ってるしな。今日はパスだ」

「ナッシーもちゃんと仕事するのね…」

「あ、当たり前だ！？」

い、言えない…！

この机の上にある書類のほとんどが仕事サボったせいで新田に出された始末書だなんて…！

「まっ、いいや。
じゃあねナッシー。仕事頑張ってね？」

「オ、オウ気ヲツケテ行ッテキナ…」

……

「…行ったか」

危ない危ない…。
これ以上俺の評価が下がったら堪ったもんじゃねえしな。

「しかし自分で招いた結果とはいえ、この量は相変わらずえげつないな…」

積み重ねられた書類を見て改めて弱音が出るが、やらないわけにはいかない。

「頑張りますか」

―まずは一枚目と、俺は仕事を再開した。

…もっとも、書類を別荘に持ってけば時間気にしなくてよかったんじゃね？と気付いたのは、最後の書類を手に取った時だったが…

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　アスナ

「アスナさん、遅かったですよ」

「な……！どどどこなのよここーッ！？」

『別荘』という物がよくわからないまま、さよちゃんにエヴァちゃんの家まで案内してもらった。

そしたら塔のミニチュアが中に入ってる水晶玉の前に立たされたんだけど―

「驚きました？これが別荘です！」

私はいつの間にかミニチュアの中にあった塔の頂上に立たされていた。

―うっわあ…高いわねぇ。それに暑いしここ。

塔の周りは見渡す限り海しか広がってないし、こないだの南国を思い出すわ……って！

「ちょちょちょっと！？非常識（ファンタジー）もいい加減にして欲しいわよぉーっ！！」

「慣れれば大丈夫です！」

「非常識に慣れたくないわよ！」

ていうか、今目の前にいるさよちゃんもかなりの非常識なのよね…
幽霊だし、その幽霊と普通に話している私も非常識に染まりつつあるわね…

「実はクラスの人達がアスナさんより先に来てたんですよ」

「クラスの人？」

クラスの人達っていうと、このかや刹那さんかしら？

「はい。２人も来てますけど、他にも図書館の２人組、朝倉さん、それにクーさんも来てますよ？」

「えらく人数多いわね…」

やっぱり皆ネギのことが心配なのかしらね？

…それとも暇なだけかしら？

「さあ、こっちですよ」

「あっ、うん」

引き続きさよちゃんに案内してもらい、塔の階段を降りる。

なんでもこの下に皆いるらしい。

「…ふふふ、いいだろ？
もう少し…」

「ん？」

…エヴァちゃんの声？

「も、もう限界ですよっ！」

「少し休めば回復する。
若いんだからな」

「あっ…ダメ…！」

「いいから早く出せ」

こ、こここれってまさか……！？

少年雑誌では掲載できないような〈バキューン〉な展開！？

「エヴァさん、またやってるんですか…」

「また！？」

じゃあ何！？

ネギが毎回やつれてフラフラになる原因はエヴァちゃんとの…！

一生できないナッシーとは違い、ネギならいつか勢いでヤッちゃうかも、とは思ってたけれども！

でもまだ１０歳のネギには早すぎるわよ！

ここは私が止めないと！

「コ、ココココラーッ！！子供相手に何やってんのよぉーーっ！！！」

と、叫びながら2人の声が聞こえる部屋に突入してみると―

「ん？」

「ま、マスター…！
そそそ、それ以上は～！」

ネギの腕から血を吸っているエヴァちゃんがいた。

―ステーン

そんな効果音がふさわしい転び方をしちゃった私。

でも仕方ないと思う。

予想していた光景とは、まるで違うモノを見せられたんだから…

「…何だお前？」

「何って、何やってんのよーーっ！？」

「授業料に血を吸わせてもらってるだけだよ。
多少魔力を補充せんと、稽古もつけれんし…」

―もっとも、献血程度だけどな。
と言うエヴァちゃん。

…じゃあ何？

ネギがあんなやつれて、フラフラになったのは、ナニしてたからじゃなく、血を吸われたからで……

「どーーーせそんなことだと思ったわよ!!!」

「…何だと思ったんだ？」

「ウフフな展開でも想像してたんじゃないですか？
…嫌ですねぇ、最近の中学生は。
何かあったら、すぐにいやらしい考えに結びつけるんですから」

「うるさいわねっ！」

ていうか、さよちゃんオバサンくさいわよ！
しかも考え方がナッシーに似てきてるし！

「えっへん！」

「褒めてないわよ！！」

・・・・・・・・・

「―ここは私が造った『別荘』だ。
しばらく使ってなかったんだがな。
ぼーやの修業のために掘り出してきた」

あの後、とりあえず落ち着いた私は先に別荘に来ていた皆と合流した。

それで今はこの別荘についてエヴァちゃんから説明を受けてるんだ

けど―

「ここで1日過ごしても、外では1時間しか経過していない。…まぁ、この別荘は1日単位でしか利用できんから、どっちにしろ1日経たんと外に出れないようになってるんだがな。

とにかく、これを利用して、ぼーやには毎回丸一日たっぷり修業してもらっているんだよ」

魔法使いって、デタラメ過ぎるわよ…

夏休みの最終日とか、宿題片付けるのにスゴい便利そうじゃないコレ。

「思考回路がナナシと同じだなお前…」

「まさかナッシー…」

「ああ…。あの馬鹿、夏休みの最終日の夜に私の家に来て『別荘貸してくれ!』と奴は、あれこれ中学から高校までの間ずっと別荘に頼っていたな…」

「ナッシーらしいっちゃ、らしいわね…」

…うん。私は別荘に頼らないで、夏休みの宿題ぐらいは計画的に終わらせよ…

「でもそれじゃあネギ君、1日先生の仕事した後、もう1日ここで修業してたってこと？」

「教職の合間にちまちま修業しても埒があかないからな」

「「「ええーっ！？」」」

そ、そんなハードスケジュールだったのコイツ！？

「てことはネギ坊主は1日が2日アルか！？」

「大変すぎや！？」

ったく…。このガキンチョは本当に1人で頑張って…

「ネギ…、あんた、またそんな無理して…」

「大丈夫ですアスナさん」

大丈夫じゃなさそうだから聞いてるんだけど…

「それに、また修学旅行みたいなことがあったら困るし、強くなるためにこんなことくらいで、へこたれてられませんよ！」

「……」

ネギはそう決意したような顔をするけど…。

なんだろう…

私にはそのネギの決意が、どこか危ういモノのように感じた…

ｓｉｄｅ　アスナ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「…なんだか誰かに馬鹿にされた気がする」

ようやく、あの山のような書類を片付けることができた。

いったい何度あの書類を焼却炉で燃やしてしまおうかと、考えたことか。

まあ、やったら余計に書類を増やされるとわかってるから、やらなかったけど…

とにかく、そんなわけで今日の仕事を終了させた俺は1人で寮までの道を歩いていた。

エヴァの別荘に顔を出すかどうか考えたけど、雨が降っていて、行くのは面倒なので止めた。

「おっ…雷」

濡れないように空を見上げると、雲はなんだか黒っぽくなっており、遠くからは雷の落ちる音がする。

「こりゃあ、早く帰ったほうがいいな…」

と、俺が歩く速度を上げようとしたら―

「へっ、へっ…」

「…行き倒れだ」

―道の端に、黒い柴犬……かな？
種類はともかく子犬が行き倒れてた。

「大丈夫かー…って、ケガしてんじゃんコイツ」

放置しておくわけにもいかないので、拾い上げ、抱き抱えてみると前足にケガをしていることに気づいた。

「どっかの犬とケンカでもしたのかね？」

…もちろん返事は返ってこない。
てか返事されたら怖いわ。

そんな馬鹿なことを考えながら、抱き抱えたまま家に連れてこうと

したら―

「あら…？先生？」

「あっ…本当だ」

「那波に地m…村上」

俺の背後から見知った顔が現れた。

「…今私のこと地味って言おうとしませんでした？」

「俺が自分の生徒に対してそんなこと言うわけないだろ村k…ジミー？」

「なんで今言い直したんですか！？
普通に村上って呼べばよかったじゃないですか！？
ていうか、ジミーって人名っぽく言っても駄目ですからね！？」

「ふむ…。ジミーはツッコミキャラだったか…。
俺と相性いいな！」

「どうでもいいですよそんなの！？」

おお…！なかなかキレのあるツッコミ…！

コイツは磨けば光る存在かもしれん。

…主に笑い的な意味で。

「先生？その子は？」

那波の視線は真っ直ぐ俺の胸元へ。

まあ、普通胸元に犬がいたら気になるわな。

「拾った」

「拾ったって…」

いや、事実だし。

「どうするんですか、その子？」

「そうだな…」

とりあえず部屋に連れてって、ケガを治療して、してから……

「……鍋？」

「「絶対ダメです！！」」

おや？

気のせいか、犬が先程より震えている気が…

冷えたか？

「気絶してても無意識に命の危機を察知してるんですよ！」

「そんなムキになんなよ…かわいい冗談じゃん…」

「先生だと冗談に聞こえないんです！」

失礼なこと言うなジミー。

「大丈夫だって。鍋にはちゃんと葱も入れるから」

「なら仕方ないですね」

「ちづ姉！？
仕方ないって何！？
駄目だからね！？
犬は絶対に食べちゃ駄目だからね！？」

「冗談よ夏美」

「駄目だ…。
この2人を組ませたら悪ノリしかしない…」

そう言い、頭を押さえるジミー。

苦労人なんだなコイツ…

「いつまでも無駄話してないで、寮に戻ろうぜ？
俺らもナベも風邪ひいたら困るし」

「はい」

「ナベって、まさか犬の名前ですか！？
なんですかその食べる気まんまんな名前！？
その名前だけは止めてください！！」

「「……（ジュルリ）」」

「ダメえぇぇーーっ！！」

はっはっはははは。

・・・・・・・・・・

「包帯は…どこかな、と」

寮に着いて、２人と別れた俺は（ジミーだけは最後まで疑いの眼差

しを向けてきたが）、犬の治療のため、医療品を探していた。

「さよがいれば、どこになにがあるか全部把握してんだけどな…」

…よく考えると、なんでさよは全部把握してるんだ？

アイツは俺のオカンか？

「おっ…あったあった」

しかし、これがギャルゲーだったら俺が拾うのは、美少女で、部屋に連れ込んでイベント発生ってのが鉄板なんだけどなあ…。

俺拾ったのは犬だし。

つくづく俺はそういう星の下とは縁がないんだな。

それとも、あの犬が目覚めたら犬耳美少女になったりして―

「―って、ないない。

それこそギャルゲーの主人公にしか訪れないイベントじゃねぇか。

それ以前に、あの犬オスだったし」

まったく…。いい大人が何悲しい妄想してんのかね…

そう思いながら、医療品を持って、犬を寝かせた部屋のベッドに向かうと―

「……マジ？」

ベッドの上には犬ではなく、黒髪の子が寝ていた。

その子の頭には犬耳。お尻には尻尾が付いている。

俺の妄想と違う箇所があるとすればただひとつ―

「…誰得な展開？」

その子が、美少女ではなく美少年ということだけだった。

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

激しく雨が降る中、麻帆良の土地に2つの異様な影があった。

「―さて、君はあの時からどの程度使える少年に成長してくれたかな？」

「あら？えらく楽しそうじゃない？」

楽しげな笑みを浮かべる、帽子から靴まで黒一色の服装に身を包んだ老人に、同じような服装をした1人の見た目麗しい若い女性が話かけた。

「当然だよ。私は才能のある少年は好きだからね。…だから、手出しはしないでくれたまえよ？」

「ふん…。興味ないわよ、そんなお子ちゃま。あるとしたら、こっち…」

そう言うと、女性は懐から一枚、写真を取り出す。

その写真には翡翠色の瞳をした金髪の青年が写っていた。

「貴方は私の渇きを潤してくれるかしら…？

ねぇ…

―ナナシ・クラート…」

雨はさらに激しさを増し、女性の問いは誰も答えることなく、雨音の中に消えていった―

おまけ

「夏美、あやか、そろそろ夕御飯にしましょ？」

「はい」

「うん―って…ち、ちづ姉、こ、これって…？」

「あら、今日は鍋ですの？少し季節外れじゃありません？」

「たまにはいいじゃない。それにスタミナもつくし」

「それもそうですわね」

「どうしたの夏美？
食べないのかしら？」

「…い、いいいい嫌あぁぁぁぁぁぁ！！！」

「ど、どうしたんですの夏美さん？」

「さあ？ウフフ…」

to be continue ?

第２１話「忍びよる影」（後書き）

小太郎、夏美・千鶴フラグ折れる（笑）

ナナシが見事に叩き折りました（笑）

悪魔襲撃編は後１・２話程度で終わらせたいと思ってます。
その後はオリ展開ですが…
そして次回はギャグ少なめで戦闘描写あり…。
最近こんな展開ばっかですね…。

なんで自分から苦手なバトル展開に進んでしまうんでしょうか？
…謎だ。

次回はリアルの状況次第で更新が変わると思います。
この作品を期待してくれている方々には申し訳ありませんが、ご了承ください。

第２２話「遠慮って大切だよね…」（前書き）

まずは最初にご連絡が。

前回の話で今回は戦闘描写があると予告しましたが、今回の話に戦闘描写はまったくありません。

それと悪魔編は１・２話で終わらせるつもりでしたが、もう１話ほどプラスする可能性があります。

予告とは違う展開になってしまいましたが、どうかご了承ください。

第２２話「遠慮って大切だよね…」

ｓｉｄｅ　ナナシ

突然ですまないが、俺は今スゴく混乱している。

目の前の状況が理解できないからだ。

…なぜかって？

ＯＫ。ならばその理由を知ってもらうために、少し状況を振り返ろう。

まずは、犬を拾った。

怪我していたので部屋に連れて帰り、治療しようとした。

とりあえずベッドに犬を寝かせた。

すると、まあビックリ！

目を離していた間に、拾った犬が男の子になっていました！

…どこのビフォーアフターだよ？

マジで

「なんてことでしょう！」と言いたい気分だよ…

そこはギャルゲーなら男の子じゃなくて、美少女に変わるべきだろうが！

…まあ俺のくだらない妄想は置いといて、この犬耳少年をなんとかしないとな。

裸のままでいられて、風邪ひかれても困るし…

そんなわけで、俺は犬耳少年に近づくと―

「おろ？」

コイツ…どこかで見たことあるような…？

原作キャラで犬耳の少年なんて……いた！

「名前なんだっけ？
確か…えっと…」

ネギのライバル的存在で、修学旅行で戦ったんだっけか？

それで名前が…こ、こ、こ

「小五朗？」

…そんな難事件を眠りながら解決するような探偵みたいな名前だっけか？

なんだか微妙に違う気がするが…

「別にいっか」

ひとまず名前は小五朗でいいとして…どうしよ?

怪我はたいしてひどくないから部屋で治療できるとして、その後は……不本意だが学園長、ジジイに連絡するか。

なら先にジジイに連絡しとくか。

そっちの方が治療した後にスムーズに対応できるだろう。

「ジジイ…ジジイ、と」

嫌々携帯の電話帳に登録しているジジイの番号に連絡をし、コールしているとー

「うおっ!?」

俺の耳元で携帯が壊れた。

「…やめろ。誰にも連絡するんやない…」

部屋から俺以外の声が聞こえたので、そちらを向いてみると、何か投げたような格好でこちらを見る小五朗がいた。

ああ起きたんだ…。

よかった、よかった……って違う!?

何か投げた格好って、つまり…!

俺は無惨にも破損して床に散らばった携帯の欠片を見ると、ひとつ異色な物が落ちていた。

…ボールペン?

…あれか?

まさか小五朗はボールペンで携帯を破壊したのか?

なんちゅー荒技…。

てか文房具の使い方間違ってるから!!

凶器になる文房具ってどんだけ!?

「そ…そこのおっちゃん」

「お兄さんだ！」

「何か…俺が着るもんと、食い物を持ってきてくれ」

それは別に構わんが…

後、どうでもいいが、お前今フル〇ンだぞ？

少しは前隠せや…

「小五朗…いったい何があった？
関西で拘束されてるハズのお前がなぜ麻帆良に…？」

「小五朗…？
違う…俺の名前は…名前？…あれ？
誰やったっけ俺…？」

記憶喪失…か？

「違う。俺、あいつに会わな…」

「お、おい…大丈夫かよ」

「！？」

いきなり頭を押さえる小五朗が心配になり、目の前まで近寄る。

だが―

「ち、近寄るなっ！」

「！」

小五朗の腕が振るわれ、俺の肩をひっかく。

爪が鋭いのか、俺の肩から簡単に血が流れる。

―ちょっ、痛ぇぇぇ！？

まさかの家庭内暴力！？

ＤＶ！？ＤＶなのか！？

なんか違う気もするが、そこは問題じゃない！

問題は小五朗が臨戦体勢だということだ。

ここはアレか？

某有名映画の風の谷のあの娘のように「大丈夫…怖くないよ…」的な感じで相手が自分に気を許すまで一方的に攻撃を堪えるしかないのか！？

「「……」」

一応確認してみたが……無理だ！！

あれは相手が小動物だから成功したわけで、人間相手に、しかも裏の関係者に一方的に攻撃されたら怪我じゃすまん！

つーか死ねる！

「……」

昔の偉い人はこう言い残しました…。

―殺られる前に殺れ、と！

「ふんっ！」

「あがっ！？」

意識が朦朧としていたのか、隙だらけの小五朗の首筋に手刀をかます。

上手く決まった…、もしくは既にフラフラだったためか、その一撃で小五朗は簡単に倒れる。

…後者である確率の方が高い気がするが。

「安心しな。峰打ちだ」

手刀に峰打ちもクソもないけどな。

「さて…面倒なことになってきたな…」

気絶し倒れた小五朗をみて、そうつぶやく俺。

とりあえずは学園には連絡しないでおこう。

…携帯壊れたから連絡しようないし。

とにかく小五朗をもう一度ベッドに寝かせ、看病してやるか。

その前にフル○ン状態をどうにかしないと…

「俺の小さい頃の服がまだあればいいんだけどな」

そのためには、タンスの奥まで探さないとな…

ホント、面倒なことになってきたな…

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

「―ええっ！？
魔法を教えるんですか？
今ここで？」

師匠（マスター）と別荘での修行の最中に、アスナさんを筆頭に３－Ａの皆が別荘に不法侵ｎ…もとい、訪れてきた。

それで今日は修行にならないって言われて、そのまま休みになったんだけど、のどかさんと夕映さんの図書館二人組に魔法を教えてもらいたいと頼まれた。

「あのー、いいんでしょうか師匠？」

「勝手にしろ。
どうなっても私は知らんがな。
…いっそクラス全員にバラしゃいいんだ」

こちらに背を向け、寝転がりながら答える師匠。

…そんな適当に答えなくてもいいじゃないですか。

「まあ『別荘』は外より魔力が充溢してるから、素人でも案外ポッと使えるかもしれんぞ？」

「ダカラ俺モ動ケルンダガナ」

…なら、やってみてもらおうかな？

・　・　・　・　・　・　・

「で、では一番簡単なのからいきましょう。皆さんには初心者用の杖をお渡しします」

小さい頃に僕が使っていた練習用の杖をいくつか用意してきた。

形は先端が星のやつから月・翼など色々ある。

というより、教えるのは2人だったハズなのに、いつの間にか全員に教えることに…。

別に構わないけどね…

「これを振りながら、プラクテ・ビギ・ナル　『火よ灯れ』です」

まずはお手本として、僕が実際に杖を振ってみる。

「いいですか？こうです。プラクテ・ビギ・ナル
『火よ灯れ』」

そう唱えると、僕の持つ杖の先から小さな火が発生する。

「「「ほぉーー」」」

それと同時に皆さんから歓声が上がり、拍手が送られた。

…魔法学校を卒業したんだから、さすがにこれぐらいは出来ないとね？

「ま、こんなのよりライターを使ったほうが早いんですけど。初心者用の呪文ですね」

「あれ？でもナッシーはライター代わりによくその呪文使っとるよ？」

「ナナシ先生は、ライター代が勿体ないとか言ってましたよ？魔法（こっち）の方が地球的にも財布的にもエコなんだとか言って…」

このかさんの疑問に、ナナシ先生とよく一緒にいるさよさんが答える。

よく一緒っていうか、ほとんど毎日一緒にいる気もする…

そう考えると、今日ナナシ先生がいなくて、さよさん1人ってのは珍しいかも？

「まったく…あの駄目教師は…」

「魔法がライターの代わりって、神秘の欠片もないわね…」

…言わないでください。

そんなことしてるのはナナシ先生だけなんですから…

「ん？てことはさ…」

今度は朝倉さんが疑問の声を上げる。

どうしたんだろ？

「その初心者用呪文ができなかったら、私達はナッシー以下ってこと？」

「「「……」」」

「い、いえ、おそらくナナシ先生も長い間練習したから出来てるわけで、皆さんが今日1日出来ないとしても、ナナシ先生以下ってことには…」

そもそも1日で成功されたら立場がないっていうか……あれ？

「どうしたんです皆さん？いきなり黙ったりして…」

「……るわよ」

はい？

「絶対成功させるわよ皆！この事実がナッシーに知られたら、いつ馬鹿にされるかわかんないわ！」

「「「おおー！！」」」

な、なんだか妙な一体感が…

魔法が成功しないからってナナシ先生は馬鹿にしたりなんかは……するかも。

あの人なら言いかねない。

まあ必死になって練習することは悪いことじゃないから別にいいかな？

その必死さが少し怖いかもしんないけど…

「プラクテーッ！」

「あっ、出た！

のどか、今出たえ。一瞬やけど」

「夕日が反射しただけだよ今の」

「出るアルーッ！」

「出るですーっ！」

追記しておくと、それから成功した人は1人もいなかった。

皆、その必死さが空回りしたんだと思う…

終わる頃には数名を除いて、すごい落ち込んでいた。

そんなにナナシ先生以下ってことが嫌なんですね…

・・・・・・・

夜になり、皆が寝静まった頃―

―ドシッ！

雷の矢を一矢、自分の手に纏わせ突き出す。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル
来れ　虚空の雷　薙ぎ払え
『雷の斧』！！！」

「うおおっ！？」

師匠から教えてもらった魔法を唱えると、低い威力だが雷が発生し、空き缶に降り注ぐ。

「すげえっ！さすが兄貴！2、3ヶ月はかかるって言われたのに、この調子ならすくだぜ！？」

「ダメだよ。威力も低いし無詠唱魔法の射手も全然出てないし…」

それに、この中は外より魔法が出し易いしね…

「ん？」

そんなことを考えてると、背後から拍手が聞こえた。
もう皆寝てるハズなんだけど、誰だろう…？

気になって振り返ってみると―

「さーすが魔法先生。
天才少年は違うわね」

「アスナさん！」

そこには1人、スカートにワイシャツ姿のアスナさんが立っていた。
…ワイシャツの胸元のボタンが少し開けすぎじゃないかな？
寝てたから仕方ないとは思うけど…

アスナさんはそんな僕の考えなぞ関係なしといわんばかりに近寄ってきた。
そして―

「でも…一言言わせてもらうと、頑張りすぎて体壊しちゃ何もなんないのよ～」

ヘッドロックをかけてきた。

「うぐぐ…ゴ、ゴメンナサイィー！
今日は皆と遊んじゃったので、その分を…」

「だ・か・ら！
休んで遊ぼのも修行のウチよ！
頑張りすぎなのアンタ」

ぎ…ギブ…アスナさん…そろそろ息が…！

「少しはアンタはナッシーのサボり癖を見習いなさいよ！」

「えっ！？
それはちょっと…」

「…ごめん。今の発言は私が間違ってたわ。忘れて」

「…はい」

ナナシ先生を見習うと悪い結果にしかならない気が…
やっぱりアスナさんも同じ認識なんですね…

「にしても不思議よね…」

露骨に話を変えましたね…
ヘッドロックを解いてくれたからいいんですけど…

「あんだけ騒いで食っちゃ寝したのに外ではまだ２０分ぐらいしか経ってないなんて」

「ハハハそうですね」

「これこそ魔法の力だな」

「「……」」

…僕もアスナさん以上に話を変えちゃうけど、アスナさんには知ってもらっていた方がいいよね…

「あのアスナさん」

「えっ、何？」

「ちょっとお話聞いてもらってもいいですか？」

「え…な、何よいきなり」

少し慌てたような声を出してるけど大丈夫かな？

「お話しておいた方がいいと思うんです。
パートナーのアスナさんには」

「え…？
べ、別にいいけど……何の話？」

「僕が頑張る理由…
6年前、僕がサウザンドマスター…、父さんと出会った時、何があったのかを」

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「むぐ…ん〝む…うん。
はぐっ…むぐ…」

「…どんだけ食えば気が済むんだよお前」

倒れた小五朗をベッドで寝かしていたら、しばらくして目を覚ました。

今度は意識もハッキリしていたので大丈夫かと思ってたら、第一声が―
「腹…減ったぁ…」
だもんなぁ…。

仕方ないから飯を用意したら、遠慮なしにガツガツ食いまくりやがって…

もう冷蔵庫の中身がすっからかんだ。

くそぉ…食材買いなおさないと…

今月財布の中身がピンチだっていうのに…！

「ごっそさん！
はあ…なんとか生き返ったわ」

「…それはよかったな」

「味は微妙やったけど、腹の足しにはなったわ」

「全部遠慮なしに食っといてそのセリフか！？
そこはお世辞でも旨かったと言うべきだろ！」

「いや…ほんまに微妙やったんやもん…」

返せ！
今食った料理の食材全部吐き出してでも返せ！！

「でも、サンキューな。
助かったわ」

…ぐっ。まあ礼を言ったからには許してはやるが…

「…で？
小五朗、名前以外のことなんか思い出せたか？」

「小太郎、や。誰や小五朗って…」

なんか小五朗って呼び方が気に入ったんだよね。
いいじゃん。
「太」か「五」の微妙な違いぐらい。

「いいわけないやろ…」

むぅ…残念。

「で、記憶は？」

「いや…アカン…。
頭に霧がかかったみたくなって…」

「そっか…」

やっぱり一時的な記憶喪失かな？

時間が経てば、記憶が戻るかもしんねえが、専門の知識がねえから断言できん。

そうなると、やっぱ学園側に頼るしかねえかな…

いづれは報告しないとはいけないし…

「「うーん…」」

すると、俺と同じように、いきなり悩んだ表情を浮かべる小太郎。

なんだ？食い過ぎて腹でも痛くなったか？

「あんぐらいの量で腹痛めたりせんわ！」

「あんぐらい…」

俺の三日分の食糧を、あんぐらいって…

「なんか…俺、重要な用事があったような…」

「重要な用事？」

…なんだ用事って？

拘束されていたコイツに用事があるとしたら……ネギ関係か？

確かコイツ、ネギにやたら執着してたし。

……ん？

なんか引っ掛かんな…

俺も何か重要なコトがあった気がするんだけど…

「…忘れた」

多分原作で何かイベントが起きるんだろうけど、問題ないだろ。

起きたら起きたで、主人公（ネギ）が解決しているだろうし。

「なあ兄ちゃん」

「あん？何か思い出したのか？」

小太郎が何か思いだしたら、少しは手掛かりが見つかるかもしれないな。

「腹…減ってきた」

「ぶふぅ！？」

は、腹減っただと！？

「あんだけ食ったのにまだ食べれんのか！？
ていうか今の話の流れなら記憶を思い出すべき場面じゃねえか！
それなのに、なんだ腹減ったって！？」

「仕方ないやろ！？
俺は成長期やし、考えたら腹減るんは当たり前や！」

「成長期っても限度があるわっ！
アレか！？お前の胃袋はブラックホールにでも繋がってんのか！？
てか、まだ5分も考え始めてないだろうが！！」

コイツの目的は実は俺ん家を赤字にすることなんじゃないのか！？
いったい食費だけでいくら削るつもりだ！？

「なあ兄ちゃん…頼むわぁ…。またなんか作ってくれ…」

「さっき微妙って評価されたのに作る気になるか！！それ以前にウチにはもう食糧がねえよ！！」

「アカンな兄ちゃん。
食糧はこまめに買いだめしとかんと」

「お前のせいだからね！？さっきまで普通なら数日は暮らしていける充分な食糧があったんだからな！！」

わかってて言ってんじゃねえのかコイツ！？

「……（ウルウル）」

「ええい！？
そんな捨てられた子犬のような目で俺を見るな！？
そういうのは女の子がやってからこそ効果が発揮されるもんで、お前がやっても意味ないわ！！」

これ以上コイツの食費に金を使ってたまるか！！

「…と言いつつ、財布持って玄関に向かってるやん」

「はっ！？」

いったいいつの間に！？

…！

まさか小太郎が人を洗脳できる魔眼を持っているなんてことは！？

「ないわ」

「あ…やっぱり？」

ですよねー。

「「……」」

……はぁ。

「行って来まーす…」

「おう。気ぃつけてな」

…俺ってもしかして押しに弱いのかな？

俺は頼まれてもＮＯと言える人間だと思ってたんだが……はぁ。

俺は雨が降る中、いつになく重たい玄関の扉を開けて外へ出てった。

もっともー

「なんやあの兄ちゃんえらいオモロイやっちゃなぁ」

扉を閉めた後につぶやいた小太郎の一言は、俺には聞こえることはなかったが…

・〜・〜・〜・〜・〜

「これだけ買えば、いくらアイツでも充分だろ」

近くのスーパーで一人暮らしでは確実に多すぎる量の食糧を買い、片手にはパンパンになったビニール袋を2つ。

本来なら重くて歩きたくないところだが、心配無用。
刹那から教わった『気』を活用し、肉体強化をしている。
おかげで重たい荷物もへっちゃらだ。

「…あの説明じゃ無理だと思ってたのに、やってみれば出来るもんだな」

刹那、恐るべし。

そんな俺は、只今寮とは逆方向の学園側に向かっている。

一応、小太郎のことをジジイ、もしくは魔法先生に報告しておいた方がいいと思うしな。

携帯があれば、こんな手間はかからなかったんだが……はぁ。

…なんか今日ため息ばっかだな俺。

まあ、1日でこんだけ不幸な出来事に遭遇したら、ため息も吐きたくなる。

「しっかし…行く順番間違えたな。
先に学園行ってから、買い物すればよかった」

ホント今日は不幸…いや、これはただの自業自得か。

そんなこんなで、ようやく学園まで半分ぐらいの場所まで来た。

よく見れば、ここは前にネギの弟子入りテストをした近くじゃね？

世界樹が近くに見えるし…

相変わらずデカイな、と世界樹を見ていた。

すると、道の先にポツリと人影が見えた。

「この雨の中、傘も持たないで何してんだ…？」

気になった俺は、とりあえずその人影に近づく。

遠くからでは分からなかったが、近づいていくと人影が、全身真っ黒な服に身を包んだ女性だということが判断できた。

更に近づくと、その女性がかなりの美女だということも分かった。

―うわあ…えらく美人な人だなぁ。
しかも金髪の巨乳だし。
スペックたけぇなオイ。

年は…しずな先生ぐらいかな？

なら、しずな先生といい勝負なんじゃねえかこの人？

でも、なんでずぶ濡れのまま立ち尽くしてんだ？

「どうしたんですかお姉さん？こんな雨の中…。
よかったら家まで送りますよ？」

べ、別に相手が美女だから送ろうとしているわけじゃないからね！？
困っている人に手を差しのべるのは、神父として当然のことで…！
相手が巨乳だなんてことはまったく関係ないんだからね！？

「……」

女性は俺を上から下までじっくりと見つめる。
もしかして疑われてる？

「いやホントに送るぜ！？見た目で判断しちゃダメだから！！」

俺は狼にはならないから！

「うふふ優しいのね。
でも気遣いはいらないわ」

「でも…」

「だって私には帰る家なんてないもの」

……はい？

家がない？

家出？ホームレス？

「その代わり…」

「あん？」

……なんだ？

「今晩私を買って下さらない？」

「……はい？」

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

おまけ

「兄ちゃんが食糧買いに行ってくれたんはいいけど、暇やな…。
なんかオモロイもんないかな?」

そう言うと小太郎はナナシの部屋の中をあさりだす。

すると―

「なんやコレ…?
きょにゅう…ばくはつ?
…うわぁ、なんでこの本裸の女の写真ばっかなんや?兄ちゃん、こういうの好きなんか?
俺にはわからんなぁ…
おっ。こっちにまだある」

しばらく大量の大人の本を見た後、小太郎が何とも言えない気持ちになったのは、ここだけの秘密である。

to be continue ?

第２２話「遠慮って大切だよね…」（後書き）

さよが別荘に行っているからナナシにツッコミを入れる人がいない…！

さよ…君は意外とこの作品で重要なポジションにいたんだね…

おまけでは勢いに任せて小太郎にナナシのプライベートを発見させてしまいました…

ゴメンね小太郎（笑）

ではまた次回。

第２３話「接触」（前書き）

今回視点が変わることが若干多いかもしれません。

そして、自分の苦手な戦闘描写が今回あります。
伝わり難いかとは思いますが、全力で見逃してください（↑オイ）

後、必要性のわからない
『おまけ』は今回は無しです。

では。

第２３話「接触」

ｓｉｄｅ　さよ

エヴァさんの別荘の中で、ネギ先生の過去を聞いた私達は（盗み聞きしたって言った方が正しいかもしれませんが…）、そのまま別荘で１日過ごした後、外の世界に戻ってきました。

私達が別荘で１日過ごしても、外では１時間しか経っていないなんて、魔法って相変わらず便利ですよねー

それに私は幽霊なんで歳とらないので、いつまでいても大丈夫ですし…

「じゃあねネギ君。
何かあったらいつでも読んでよ。協力するからさ」

「は、はい…」

寮のエントランスに着きました。
朝倉さん、図書館2人組、クーさんとはここでお別れのようです。

「ううっ…困ったな…」

「何が？」

「ホントはあーゆー危険なことがあるかもしれないから、僕と関わるのは考えた方がいいって言うつもりで6年前の話をしたつもりだったんですけど…」

逆効果じゃないですかね？
あんな話されたら3－Aの皆さんは絶対協力すると思いますし…

「いいじゃん。皆協力してくれるって言ってんだし」

「アスナさんもですよー」

それでも今更関わるなって言われても…って感じがしますけどね。
もうアスナさん達は深い部分まで関わってしまってますし。

「でも、うーん…。
いや、やっぱり僕が強くならなきゃ。

…よし！もっともっと修行頑張るぞっ！」

…やっぱり最終的にはそうなるんですね。

でもこれ以上頑張ったら、本当に倒れちゃうんじゃないでしょうか？

「―って、ちょっとちょっと！
これ以上頑張ったらブッ倒れちゃうわよ！」

ほら。
アスナさんも同じこと思ってますよ？

「大丈夫ですよアスナさん！」

そう言い残して走り去るネギ先生。

いや…大丈夫じゃないから心配してるんですけど…

「もー、あいつまた1人で背負って張り切っちゃって…」

「あやー、ネギ君またフラフラになってまう？」

「そうですねー」

「「うわっ！？」」

アスナさん、このかさん、刹那さんの3人全員がいきなり驚いた顔して私を見てきましたけど、どうしたんでしょうか？

私、何か変なことでも言いましたか？

「い、いたのね。さよちゃん…」

「気づかんかった…」

「てっきりエヴァンジェリンさんの家に残っているのかと…」

なっ！？

「ずっといたじゃないですか！？
確かに喋ってはいなかったかもしれないですけど、隣にいましたからね！？」

「いや…気を抜くと忘れちゃうというか…ねえ？」

「うん…やっぱ人形の姿でいてくれんと…」

「…そうですね」

「3人そろって薄情すぎませんか！？
私達同じクラスメイトですよね！？
なのに忘れちゃうってどういうことですか！？」

「「「…ゴメン（すいません）」」」

「謝らないでください！」

余計に悲しくなっちゃうじゃないですか！？

「に、にしてもな、ネギ君て少し頑張りすぎる性格やない？」

「ま、マジメすぎんのよ」

「た、確かに。けれどその性格もネギ先生の過去を聞いた後では納得とゆー感じですが…」

さ、３人して無理矢理話を変えて、私を忘れていた話を無かったことにしようとしている…！

これが数の暴力というヤツですか…！？

「うーん…まあ、ホントだったら近所の悪ガキとバカなコトして遊んでるような年頃なのよね…」

「そうですね…。
しかし、先生の周りにいるのは年上の方々ばかりですし…」

「そいえば、ネギ君てカモ君以外にはいつも敬語やしね」

「ま、まあな」

あっ…もう完璧に無かったことになりましたね。

ていうかカモさんも今まで喋ってなかったのに、何で私と違って忘れられてないんですか？

小動物は覚えてられて、私は覚えてられないって……ぐすん。

「んー…。
同い年の友達でも日本にいればえーのにか」

私も友達欲しいです…。
私のことを忘れないでいてくれるような友達が…。

「そういえばさ、何でさよちゃん此処にいるの？」

「忘れられたと思ったら、今度は私の存在否定ですか！？」

「違うわよ！？
何でそんなネガティブに解釈したの！？
そーゆ意味じゃなくて、何でエヴァちゃん家に残らないで、寮までついて来たの？って意味で訊いたの！」

…ああ、そういう意味ですか。

「ナナシ先生の部屋に行くんですよ。
今日こそは先生に部屋の掃除してもらわないといけませんから」

…あっ。あと持ち込みの仕事があったらサボらないよう注意しないといけませんね。

まったく…。
先生たら私が言わないと、いつまでたっても掃除も仕事もしないんですもん。

私に人形じゃない生身の身体があれば、代わりに掃除ぐらいはしてあげられるんですけど…

それにしても、独身男性の人って仕事はともかく、掃除とかの家事ってしないんですかね？

先生は料理や洗濯はするみたいですけど、掃除だけはしないみたいですし…

「さよちゃんって、もはや立派な通い妻よね…」

「典型的な駄目亭主を支える良妻って感じですね…」

「むー…」

…あれ？
3人ともブツブツ何言ってるんでしょうか？

このかさんにしては何故か睨んでますし…

ですから私、何か変なコトでも言いましたか？

ｓｉｄｅ　さよ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「今晩私を買ってくださらない？」

「……はい？」

雨が降る中、傘もささずに立っていた女性（美女）に声をかけたら、
そんなセリフが返ってきた。

…アレ？

何この展開？

朝から色々と予想外の展開ばっかなんですけど？

それとも何か？

俺にもついに春が来たということか？

「ねえ、どうするの？」

女性は身長の関係で自然と俺を見上げる形になる。

そんな風に上目遣いで尋ねられたら、興奮して俺はもう…！

……ん？

この感じは…

…ふむ。

「……いいぜ」

俺は周りに人がいないことを確認し、女性を傘の中に入れる。

「じゃあこの先で―」

そのまま女性を周りから死角になる場所へ誘導する。

そして―

「…！？」

「アンタを狩ってやるよ」

女性の首に向けて、全力で蹴りを放った。

が、女性はその場から後ろに大きく跳ぶことにより、蹴りを回避する。

……やっぱりな。

「…何のつもりかしら？」

「それはこっちのセリフだっつーの。
ったく…純情な俺の心を傷つけやがって」

そう言い、俺は頭をポリポリとかく。

先程の動作で傘を手放してしまい、雨で身体が濡れてしまうが気にしない。

「アンタ、ただの人間じゃないだろ？
いったい何者だ？」

「……」

黙りか…。

まあ、今更違うと言われても俺の蹴りを避けた時点で言い逃れできんが。

一般人が俺の蹴りを、しかも不意討ちの一撃を避けれるハズないしな。

…自惚れてるわけじゃないからね！？

「…ははは、あははは。
あーはっはっはっはは！」

「ぬおっ！？」

雨の中、急に盛大な笑い声を上げる女性…
客観的に見たらかなり不気味だぞ。

「ははは、なによ。ただの残念な子かと思ってたのに意外と鋭いトコあるじゃない」

失礼だなオイ。

「こう見えても女を見る目はあるつもりなんでね。
そう簡単にひっかかってたまるかよ」

今まで女性関係で酷い目にあったことしかないしな！
これ以上同じ過ちは犯さないさ！

…若干、直感的なもんがあったのは内緒だが。

「そして何より…」

「ん？」

「アンタがいくら美女っても、俺の股間センサーに反応がなかった。俺のセンサーは悪い女には反応しない優れもんでね」

さっき感じた違和感はそれが原因だったしな。

「……不能なの？」

「違うわっ！！」

だから俺をそんな憐れんだ目で見るな！！

「まあいいわ。
そのセンサーが正確かどうかは知らないけど、私の正体に感づいたことは褒めてあげるわ」

「そりゃあどうも」

嬉しくないけどな。

「ご褒美って言うのはなんだけど、代わりに私の正体を教えてあげる」

そう言うと、女性は被っていた帽子を顔の表情を隠すようにとる。

「私は―」

そこには…

「ただの悪魔よ」

角のような物が生えた異形の、悪魔の顔があった。

side　ナナシ　end

side　さよ

「だだだ、だれですかアナターっ！？」

あの後、寮のエントランスでアスナさん達と別れた私は1人、ナナシ先生の部屋に向かいました。

部屋の電気がついていたので既に帰ってたんだと思いいつも通り部屋に入ると、そこには見たことのない犬耳の少年がいました。

「うおっ！？
何やいきなり！？
って姉ちゃん、俺に気づかれずここまで接近するなんて、いったい何者や！？」

「それはこっちのセリフですよ！
あなたこそ何者で、なんで先生の部屋にいるんですか！？」

…およ？
そういえばこの男の子、私が見えるんですね。
私から話かけたからって、普通の人なら一度認識しないかぎり、見えないハズなんですけど…

……はっ！
まさかこの子はナナシ先生と同じ魔法関係者！？
だったら、私が見えても納得できますけど…

「―って、それは！？」

「あん？」

男の子のいる場所の上に、乱暴に置かれているその本達は…！

「せ、先生のエロ本ベストコレクション…！
あ、あなた、もしかして泥棒さんですか！？」

「ちゃうわ！俺を泥棒なんかと一緒にすんな！」

「不法侵入の人が否定しても説得力ありません！
それに違うならなんでコレクションを全部出して物色してたんですか！？」

「不法侵入でもないわ！！それにコレは…アレや。単なる好奇心で…！」

「好奇心で盗もうとしたんですか！？」

「せやから俺は泥棒ちゃうて！！」

こういう時はどうするんでしたっけ！？

１１０番？

でも私電話触れませんし、どうすれば！？

「…賑やかなとこすまないね」

「「！？」」

私と男の子が言い合いをしていたら、いつの間にか全身黒ずくめの

外人？のお爺さんが部屋に入ってきた。

―ま、また不法侵入者ですか！？

それとも泥棒！？

ていうか濡れた格好、その上靴を履いたまま部屋に入らないでくださいよ！

「やあ、狼男の少年。
元気だったかね？」

「お…お前は！？」

「知り合いなんですか！？」

不法侵入者仲間ですかね？

「…誰やったっけ？」

―ステーン

私、今足がないくせに転んじゃいましたよ…

「そんなお約束なネタはいいですから！！」

「はは、すまん」

一気に重い空気が軽くなっちゃった気がします…

「やはり一時的に記憶に混乱があるようだね」

記憶…混乱？

この泥棒少年さんが？

「さて、少年。
私の要求はただ一つ。
『瓶』を渡してもらおうかな？」

…瓶？

「我々の仕事の目標…いや、私の目標はネギ少年だが…、その瓶に再度封印されては元も子もないのでね」

ネギ先生が目標？
それに我々って…
この人の仲間がまだ何人かいるってこと？

「瓶……？
それに…ネギ…？
ネギやて…？」

「思いだしたかね？
…それで？瓶を渡す気にはなったかな？」

「何のことかわからんわ。それにたとえ持ってたとしても―」

泥棒少年さんは座っている姿勢から、しゃがみこむように立ち、足にぐっと力を入れる。

「あんたには渡さへんけどな！」

そして勢いよく駆け出し、お爺さんに殴りかかりました。

…って、え？ええ！？

「ふむ」

お、お爺さんは泥棒少年さんの一撃を片手で防御し、もう片方の手で反撃します。
泥棒少年さんも、その一撃は防ぐんですけど、お爺さんがそのままパンチをラッシュするので防ぎきれません。

「ぐっ…！」

そしてお爺さんは、ひるんだ泥棒少年さんのお腹に鋭い蹴りを決め、壁まで飛ばします。

2人とも動きが速すぎて上手く解説できないんですけど…

…って、何で私が解説なんかしているんでしょうか？

「…私は才能のある少年は好きでね。
幼さの割に君は非常に筋がいい」

「…何？」

「おとなしく瓶を渡してくれれば、君を傷つけずに済むのだがね」

いや…既に思いっきり傷つけてますよ？

たった今蹴り飛ばした後じゃないですか…

「へっ…傷つけるやて？
やれるもんなら……やってみい！！」

「むお！？」

だからもう傷つけられたじゃないですか…

私がそんなツッコミを心の中でしていると、泥棒少年さんは今度は６人でお爺さんに殴りかかり…６人！？

「こ、これは…！？
影分身というヤツかね！？東洋の神秘！！」

泥棒少年さん…魔法関係者かと思ってたら、忍者さんだったんですね…

泥棒少年さんは、数の前では全て無意味！と言わんばかりにお爺さ

んに6人全員で攻撃しています。

「！」

そして、ついに耐え切れなかったお爺さんのお腹に、泥棒少年さんの一撃が決まりました。

「ぐむ…！」

「余裕ぶっこいとるからやでオッサン。
これで終わりや！！
『狗神』！！！」

「……？」

泥棒少年さんが決め技らしい名前を叫びますが…、何か手違いでもあったんでしょうか？

何も起きません。

本人も何も起こらないコトに驚いてるみたいです。

「うむ素晴らしい。

やはり思った以上に見込みがあるな君は。
おじさんビックリしちゃったよ」

当然お爺さんがその隙を見逃すわけがありません。

泥棒少年さんの手首をガッシリと掴みあげます。

「しかし残念ながら術が使えないコトは、忘れたままだったようだね」

お爺さんはその状態のまま腕を振りかぶり、泥棒少年さんのお腹に―

「ぐっ…！？」

拳を叩きつけました。

「う……が……」

…これは、もしかしなくてもピンチなんじゃないでしょうか？

そして泥棒少年さんは気絶しちゃったみたいですし…助けられるのは…私だけ？

でも…私に出来るコトは限られてるし、この状況で出来るコトって…

「前途有望な少年の未来を閉ざすのは、本意ではないのだが―」

とにかく何でもいいから助けないと！

「恨まないでくれたまえ」

「…が…うぐ…」

「えいっ！！」

私は私の唯一の能力と言っても過言じゃない…

かつて1人の人物を恐怖のドン底にたたき落とした能力を発動した。

「ぶばらっ！？」

そう―P・G（ポルターガイスト）を。

「～～痛っっ！」

とりあえず近くにあったタンスを浮かべ、お爺さんの顔にぶち当ててみました。

あっ…ちなみに恐怖のドン底にたたき落とした人物って、わかっているとは思いますけど、ナナシ先生のことですから。

先生のおかげで、この能力を簡単に発動出来るようになったんですよ？

「こ、これは驚いた。
隠密性が高い上に霊力まで高いとは…。
お嬢さんは非常に霊格が高い幽霊（ゴースト）のようだね」

そ、そうなんでしょうか？
ただ地味で影が薄いだけな気がしますけど…

あと褒めてくれるのは嬉しいですけど、その前に鼻血を止めてください。

みっともないですよ？

「小太郎君といい、君といい大変気に入った。
本来なら君にも来て頂きたいんだが、生憎私には幽霊を捕まえる手段がないのでね。

諦めることにするよ」

小太郎君？

泥棒少年さんのコトですかね？

「おや…？」

「！？…さよさん！？
それに…小太郎君！？」

「ネギ先生！どうしてここに？」
「妙な魔力を感じて…。
それよりこの人は！？」

「不法侵入者Ｂです」

「……はい？」

ちなみに不法侵入者Ａは小太郎君って子ですよ。

「ネギ君…。君の仲間と思われる７人は既に預かっている。

無事返して欲しくば私と一勝負したまえ」

「え…！？」

お爺さん…不法侵入以外に誘拐もしてたんですか？

どんどん罪状が増えていきますね…

「学園中央の巨木の下にあるステージで待っている。仲間の身を案じるなら助けを請うのも控えるのが賢明だね…」

「あっ、待て……」

お爺さんはそう言い残すといきなり現れた水溜まりの中に消えていきました。

エヴァさんが使う、影が媒体の転移魔法の水版でしょうか？

何にしても、これからどうなるんでしょうか…

そしてナナシ先生…。

先生はいったい何処で油売ってるんですか？

先生の生徒が現在進行形でピンチなんですよ?

だから…早く助けに来てくださいね…先生。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第２３話「接触」（後書き）

あれ…予定していた部分より進んでいない…！

まあ大丈夫でしょう

（↑えっ？）

最近この作品のメインヒロインは実はさよじゃないかと思ってきた件…

だいたいナナシと一緒に行動してますし、もしかしたらナナシの次くらいに出番が多いキャラかも…

それと最近感想が少ないなーと愚痴ってみます。

いや…感想がないと不安なんですよね？

作品中のギャグがスベリまくってんじゃないのか？とか、読者様に不快に思われてるんじゃないか？とか思ったりして。

そんなわけで自分は感想を心待ちにしています。

一言でも感想を頂けたら、おそらく天に昇るぐらい喜ぶと思います（笑）

なので、どうか私を助けると思って感想をお願いします。

次回の更新は、現在学校が春休みなんで1日でも早く更新したいと思います。

では。

第２４話「戦闘開始」（前書き）

少し更新遅れまてしまいました（汗）
申し訳ありません。

ナナシ
「何やってんだよ…」

そして今回から！
作者の気まぐれで、前書き・後書きにチェッシーが登場します！

ナナシ
「チェッシー言うなっ！！てか気まぐれかよ！？」

うん。
他の作者様の作品で前書き・後書きに自分のキャラを登場させてる人が多かったからつい。

ナナシ
「まあ…出番が増えるならいいけどさ…」

そうだよ！
よかったじゃんナッシー！

ナナシ
「その呼び方もダメ！！」

えー？
でも感想見るとチェッシーやナッシーって呼んでくれている方々の方が多いよ？

ナナシ
「なん…だと…！？」

では事実に気づいてしまったナッシーはほっといてどうぞ！

第２４話「戦闘開始」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「ＡＫＵＭＡ…だと？」

俺の目の前にいるのは先程までいた女性（美女）ではなく、人としての面影を失くした異形の怪物―ＡＫＵＭＡがいた。

「お前…本当にあのＡＫＵＭＡなのか？」

「ええ？
貴方の思っているその悪魔で間違いないと思うわよ」

…マジかよ。

どうすんだよ？
俺イノ〇ンス持ってねえのに…
破壊できねえじゃん…

おい、誰でもいいから黒か白の教団に行ってきて、エク○シスト連れて来いよ。

「…それで？
そのＡＫＵＭＡが俺に何の用があんだよ？
俺は別にＡＫＵＭＡに恨まれるようなことはしてないぞ……多分」

「（…何かしら？彼と私の間で認識の違いがあるような…？）
別に貴方に恨みがあるわけじゃないわ。
貴方を狙うのは、それが依頼主から受けた仕事だからよ」

「依頼主？誰だよ？」

俺を狙う奴なんて……駄目だ。心当たりが多すぎる。

「そんな簡単に依頼主のことを教えるわけないじゃない」

「ですよねー」

まあ、一応訊いてみただけだからいいんだけどさ。

「じゃあ依頼主から受けた仕事の内容はなんなんだ？アレか？俺のサインでも頼まれたのか？」

「そんなわけないじゃない貴方のサインなんて頼まれてもいるもんですか」

そんなハッキリいらないって言わなくていいじゃん…

麻帆良生徒には意外とよく頼まれるんだぞ…

…主に男子からだけど。

「私達が依頼主から受けた仕事内容は『学園の調査』『ネギ・スプリングフィールド及びカグラザカアスナが今後どの程度の脅威となるか調査』。そして―」

…私“達”？

他にもコイツ以外の悪魔がいるってことか？

いや…だが、それより気になるのが―

「『ナナシ・クラートの実力の調査。そして確認次第、可能ならば

対象の抹殺』それが今回の仕事内容よ」

「!?」

調査だけならまだしも、可能ならば抹殺とはな…

「…穏やかじゃねえーなオイ」

それと、ようやく思い出せた。

小太郎を見ていて何か忘れているような気がしていたが、どうやら気のせいじゃなかった。

これは原作に出てきたた悪魔、ヘルマンがネギ達を襲うイベントだ。

だが俺の知識が正しければ目の前の奴は原作に登場していなかったハズだ。

コイツも俺と同じイレギュラーな存在か？

それとも俺というイレギュラーが新たな悪魔を招き寄せてしまっただけか？

色々と疑問が浮かぶが、今確かなことはただ一つ―

「あらあら？ショックで言葉も出ないのかしら？」

俺が只今絶賛ピンチだということだ。

「（…どうする？ヘルマンの仲間だとしたらコイツも悪魔としての爵位は伯爵以上だろう。
魔法が使えない今の俺じゃどう考えても…）」

「さて…このままお話してても仕方ないし、私もそろそろ仕事に取り掛かろうかしら？
ヘルマンも他の調査対象と始めたようですし」

「…見逃してくんねえか？依頼主には対象は危険視する必要もなかった相手だとか報告してさ？」

そこ！
情けないとか言うな！

どっかの弓兵も言っただろう！？
剣をとるときは必勝を誓った時だって！

こんな戦い、今の俺には勝率が低いって分かりきってるだろうが！！

「それは無理な相談よ。
依頼主の依頼は絶対…抹殺しろと言われたら従うしかないわ。

それに―」

それに？

「私自身貴方に興味があるのだもの。
貴方が足掻き、傷付き、悶える姿…想像しただけで濡れちゃうわ」

「…っ！？
…アンタみたいな美女にそこまで想われてるなんて光栄だね」

お、思わず身震いしちまった！？

コ、コイツは色んな意味でヤバい奴だ…！

「さあ逝くわよ坊や（チェリー）？
足掻いて足掻いて…どうか私を潤おしてちょうだい」

「ぐはっ！？」

「……急にどうしたの？」

「…いや、久々にチェリーって言われたら、思った以上に精神的ダメージが大きくて…」

「？」

意味分からないって顔してるが、分からなくていいんだよ。

この痛みがわかるのは一部の男性だけなんだから…

「よく分からないけど、始めていいのね？」

わざわざ訊いてくるとは、意外と律儀だな…

―っと、余計なコトを考えてる場合じゃねえ。

それよりそろそろ覚悟を決めねえと。

「……うっし！」

逃げれねえなら俺がとる行動は一つ。

ここで死んじまわないよう余裕綽々の目の前の敵に足掻きまくってでも打ち勝つことだけだ！

「来るなら来いよ。
神父（俺）が悪魔（お前）に負けるわけにはいかねえ」

だから、俺はどしゃ降りの雨の中自分を鼓舞するかのように叫びあげる。

「せいぜい格下相手だと油断してな！
お前が油断している間にその身体
俺が滅してやるよっ！！」

「フッ…いつまでそんなに吠えていられるかしら？
いいわよ…
私の身体…滅せれるものなら滅してみなさい！」

「へっ！」

―さあ逝くぞ悪魔よ

神への祈りは充分か？

side　ナナシ　end

side　小太郎

「―いた！あそこだ！！」

「何やあの後ろの木は！？デッカいなあ！」

記憶を思い出した俺は、あのオッサンをブッ倒すため指定された場所にネギの箒に乗って向かっとる。

狗神を使えん今の俺にはオッサンを一人で倒すんは難しい。

せやから、ネギと共闘することにした。

「射てネギ！
先制攻撃や！！」

「でも！」

「牽制だって！
いけ兄貴！！」

「わ、わかった！」

ようやく指定された場所が見えてきた。

ホントなら俺が自分で先制するとこやけど、今の俺にこの距離から射てる術はない。

先制攻撃は譲るでネギ！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル
風の精霊１７人　縛鎖となって　敵を捕まえろ
『魔法の射手　戒めの風矢』！！」

ネギの呪文がステージにいるオッサンに向かって放たれる。

「うむ、いいね」

せやけどオッサンの前で呪文が―

「弾かれた!?」

「障壁か!?」

「いや!何かにかき消されたように見えたぜ!?」

ちぃ…!
先制攻撃は失敗か…

呪文かき消すなんて、いったいどんなトリック使ったんや?

謎が残ったままやけど、俺らは箒から飛び降りてオッサンと正面から対面する。

「来たでオッサン!!」

「皆を返してください!」

「ネギ！」

「アスナさ……あっ！？」

俺らに最初に対応したんはオッサンの後ろで吊されてるアスナちゅう姉ちゃん。

ネギはその姿見て、何か気付いたみたいやけど…

何に気付いたんや？

「アスナさんがまたエッチなコトに！？」

「そこかい！？」

「違ーーーうっ！！！

違わないけどっ！」

どっちやねん。

てか、またって、あの姉ちゃん前にもあんな状態になったんかいな。

それに、さっき兄ちゃんの部屋で妙な本たくさん見たからアレぐらい何とも思わんな…

「アナタはいったい誰なんです!?
こんなことをする目的は何ですか!?」

…エッチなことやないか?

「いや、手荒な真似をして悪かったネギ君。
ただ人質でも取らねば君は全力で戦ってはくれないかと思ってね」

確かにな…
ネギの性格考えたら、全力で戦ってもらうには人質取るんが一番効果的やと思うし。

「私はただ君達の実力が知りたいだけだ」

あっ…エッチなコトが目的じゃなかったんやな…

「私を倒すことができたら彼女達は返す。
条件はそれだけだ。
これ以上話すことはない」

「はん!
それだけでええんか!?

楽勝や！！」

「こ、小太郎君！？」

人質を盾にされたり変な要求されるかと思っとったけど、それなら話は簡単や！
このオッサン倒せばそれで終いなんやからな！！

そう俺が意気込んだ瞬間―

「よし僕がいく。
小太郎君は下がってて」

「何！？」

アホかコイツは！？

「何ゆーとんネギ！？
魔法使いのくせに勝てる訳ないやろ！
ひっこんどれ！！」

「ええ！？小太郎君こそ何言ってるの！？
今あのおじさんに負けたばっかじゃん！」

「なっ……アホ！
狗神出せたら勝ててたわ！」

てか全力の状態やったらわざわざネギと共闘なんかせえへんわ！

「じゃ狗神ないから今ダメじゃん！
小太郎君僕にも負けたしね！！」

「アホか！あんな奇襲二度も喰らうか！
もっかいやったらボコボコや！！」

しかもあん時は姉ちゃん達の邪魔が入ったから喰らっちまったんやし！

「とにかく！僕がやる！！僕あれからかなり修業したから、狗神と変身なしならもう僕のほうが強いと思うよ！！」

「何やとっ！？
上等やこのチビ！！」

自惚れんのもいい加減にせえ！！

「ぬうう！！」

「うぐぐ！！」

―よし、こうなったら方法は一つ！

「勝負やネギ！！！
どっちが強いかここで白黒つけたるわ！！」

「いいよわかった！！」

「何しに来たのよアンタ達ーっ！！！」

何も言わんどいてくれ！
これは男と男の人勝負なんや！！

「元気があってよろしい……が、二人で来るのが賢明だと思うがね」

オッサンは指を鳴らす。

「「！？」」

すると俺らの周りに、俺らと同じくらいの背丈の女が3人現れて―

「うおっ！？」

あ、危な…！

今の蹴りは防いだけど、一気にステージの下まで飛ばされちまった。

「何やアイツら！？」

「ありゃスライムって奴だぜ！」

……スライム？

スライムて、もっと丸くてポヨヨンとした奴ちゃうんか？

それが女の形…

イメージと全然ちゃう…

「「！！」」

そう思ってる間にスライム３人（匹？）が同時に接近してくる。

「へっ…ネギ！
休んでてええんやで？
接近戦は苦手やろ」

「大丈夫！
小太郎君こそ女の子は殴れないんじゃないの？」

「はん！」

バカ言うなや！

「キャハハハ」

「女ゆうても軟体動物がフリしてるだけなら…」

俺は接近してきた１人に標的を定め―

「関係ないわっ！！」

他の1人に向かって
思い切り殴り飛ばした。

「それって差別ー！」

う゛……

でも、やっぱやりにきぃ…

俺がスライム2人を対応している間に最後の1人がネギに向かって
……ってアカン！？

魔法使い（ネギ）が相手に接近されたら…！

「いけるのか兄貴！？」

「いけるよ！
『戦いの歌』！！」

けど俺の心配は杞憂やったようで、ネギは相手の攻撃を次々受け流し、腕を絡まれても、余った片方の腕で反撃…って、お、おお！？

「フッ……ハッ！！」

ネギは前に向かって踏み込み、両方の手のひらを突き出すように相手の腹に当てる。

相手はその衝撃に耐えられずブッ飛ばされる。

「やるネ」

「おお！？
何やソレネギ！？」

「何って魔力供給の呪文だよ。完全版の」

「ちゃうちゃう！！
その体術や！！変な動きやけど流派は！？」

前の時はそんな動き出来んかったで！？

「中国拳法だけど？
八卦掌とか八極拳とかゆーの習ってて…」

「アッハハハ！！
中国拳法か！
そらええわ！！」

どうやら強くなったゆーんは自惚れやなく、ホンマみたいやな！
いいでネギ！
それでこそ俺の認めたライバルや！

「おっ！」

俺らはまた接近してきた3人を再び迎撃する。
今度はネギの動きを横から見とるけど、やっぱあん時とは動きが別人や。

「げ！？」

「しゃっ！」

「……ふむ」

スライム3人をオッサンの方に向かって蹴り飛ばす。
今度はこっちから接近させてもらうで！

「奴らは相手にすんな！
狙いはあのオッサン1人や！」

「うん！」

俺は敵に聞こえんようネギに小さな声で耳打ちする。

「…ええな？有効範囲は2，8メートルや。
しくじんなよ？」

「わかってる」

三度目の正直とでもいうつもりか、スライム3人がまたしても接近してくる。

「いけネギ！！」

「OK！」

「キャハハハハッ」

「へっ…しぶといな。
さすが軟体動物」

今回スライム3人を迎撃するのは俺1人。
ネギはオッサンの下に向かわせる。

「けどお前らの相手は…」

「「「!?」」」

「この俺や!!」

俺は分身を2体出す。
数は少ないけど、力は本体と同等の分身体や！

―さあ、やれネギ!!

「はあああ！！
『魔法の射手・光の一矢！！』」

「ぬ…！？」

ネギは魔法を無詠唱で発生させる。

それはさっきと同じようにかき消されるけど、目眩ましには充分！！

ネギはその隙にオッサンの後ろに回り込み、俺の渡した例の物をオッサンに向ける。

「！」

「僕達の勝ちです」

「ネギ！」

よっしゃあ！！

「『封魔の瓶』！！」

あの瓶は俺がオッサンから奪ったもんで、対象を封印する力がある。
至近距離でしか使えんけど、その条件もクリアした！
発動した以上、オッサンは封印されるしか…

「ひゃ……あああああああああっっ！？」

「アスナさん！？」

何や！？

「いやあああああああああああああっ！！」

「アスナさん！？」

何でや！？
何であの姉ちゃんが苦しんでるん！？

「うあっ！？」

「何！？」

姉ちゃんの悲鳴が上がると、呪文を発動しようとしていた瓶の魔力が弾ける。

呪文の魔力を失った瓶は、そのまま地面へ落下した…

何で封魔の瓶が…!?

「え……な!?」

「封印の呪文がかき消された!?」

これもダメなんか!?

さっきからいったいどんなトリック使ってんや!?

「ふむ……実験は成功のようだね。
放出型の呪文に対しては完全だ」

実験…やと?

「さて……そろそろ私も本気でやらせてもらうとしよう。
まさか、これで終わりではあるまい？
ネギ・スプリングフィールド君」

「「……！！」」

これは…マジで手強いなオッサン…

さあ…どうすんや…ネギ？

ｓｉｄｅ　小太郎　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　――――

ネギ達が戦っている世界樹前ステージの、そう遠くない場所では別の戦いが繰り広げられていた。

「はあ…はあ…はあ…！」

もっともそれは戦いというより一方的な暴力と表現した方が適切かもしれない。

「あらあら…さっきまでの勢いはいったい何処に行ってしまったのかしらね？」

どしゃ降りの雨の中、傷一つない女は楽しげな笑みを浮かべながら、男へと近づく。

男は女とは逆にボロボロの状態で、頭から血は流れ、身体の所々には痣が見られる。

既に満身創痍といった感じだ。

「ぐっ……！」

「ふふふ…。
貴方、べらべらと喋っている時よりも、そうやって痛みに苦しんでいる姿のほうがずっとイイ男よ？」

「…っ…何言ってんだよ……！
俺がどんな姿でも…イイ男なのは、当たり前じゃねえか…」

男は圧倒的不利な状況だというのに、女と同じような笑みを浮かべる。

「…ふぅん。
まだそんな冗談が言える元気があるんだ…
ならもっと痛めつけても大丈夫よね？」

「俺に…そんな趣味は…ねえんだけど…な」

「あら残念」

女は言葉とは裏腹に全く残念そうじゃなく答える。

「けど貴方にはまだまだ私の趣味に付き合ってもらうわよ。
だってこの程度じゃ私は全然潤わないんだもの」

「…っ…たく、いったいどこの無理ゲーだよ…こりゃ…」

―死ぬかもなコレ…

と、男が無意識に呟いた言葉は、誰にも聞かれることなく雨音にかき消されていった…

to be continue ？

第２４話「戦闘開始」（後書き）

ナナシ
「おい…」

ん？

ナナシ
「前半の俺の最後のアレ…完璧Ｆａｔｅじゃん！？
士郎じゃん！？
何書いてんの！？」

格好よくなると思って（笑）

「（笑）じゃねーよ！
しかも前半あんな挑発するようなコト言って、後半にはもうボロボロってどういうこと！？
やられんの早いよ！？」

まあ相手が相手だし、魔法使えない今のお前じゃ早くて当然じゃね？

ナナシ
「それでも抵抗する姿ぐらいは書けよ！」

次回な。

ナナシ
「絶対だぞ…！」

では。

第２５話「戦う理由」（前書き）

また更新が遅れてしまいました！
本当スイマセン！

ナナシ
「ダメダメだな」

でも仕方ないんです！
今回ギャグを入れないで全文書いたら思ってた以上に時間がかかって…！

ナナシ
「ギャグないの！？
どうすんの！？
ギャグなかったらこの作品の持ち味０じゃん！？」

しょうがないじゃん！
ギャグ入れられる雰囲気じゃなかったんだから！

ナナシ
「確かにあのバトル展開でギャグ入れるのはキツいかもしれんが…」

てなわけで不安だらけの２６話ですが、どうぞ！

※後書きにちょっとした質問があります。
よければ後書きも見てってください。

第２５話「戦う理由」

ｓｉｄｅ　ヘルマン

「―この一帯に結界を張らせて頂いた。
全力で戦って大騒ぎしても周囲に気付かれることはないよ」

そう、これで彼らも全力で戦える。

…もっとも、全力で戦えるようになったのは私もだがね。

「ぬんっ！！
『悪魔パンチ』！！！」

「！！」

「何！？」

早速私は瞬動術を使い、彼らの背後に回る。

そして、そのまま私は全力の一撃を彼らに放った。

「ちっ！」

「うわあっ！？」

あの至近距離からの一撃を二人共躱したか…

「この威力……！！
へっ！これが本気かオッサン！！」

まだまだ余裕の表情を見せる彼らに、今度は威力は下がるが連射性のある攻撃を放つ。

「うわわわっ！？」

慌てながらもギリギリのところで回避する二人―

…ふむ。
これも躱すか…

「瓶が使えんならしゃあない！

ネギ、ゴリ押しや！」

「く……それしかないね」

ゴリ押しで勝てるほど、私は甘くないのだがね。

「ヒュッ…」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル
闇夜切り裂く一条の光
我が手に宿りて敵を喰らえ…！！」

「『犬上流・空牙』！！」

「『白き雷』！！」

魔法と気弾が私に向かって放たれる。

確かに威力は高いかもしれんが…

「あ…！はあああっ！？」

「アスナさん！？」

「また消された!?
とっときの気弾まで!?」

彼女がいるかぎりそれは無駄だよ。

「マジックキャンセル……魔法無効化能力というやつだよ」

彼らも薄々気付いていたのではないだろうか？

「一般人のハズのカグラザカアスナ嬢…。
彼女が何故か持つ魔法無効化能力…。
極めて希少かつ、極めて危険な能力だ…。
今回はソレを我々が逆用させてもらったがね」

「！」

「な、何やて!?
魔法無効化……!?」

ネギ君のあの表情…、やはり思い当たるフシがあったか…

「―さて、私に対してもう放出系の術や技は使えないぞ。
男なら……」

私は構えながら、彼らに近づく。

「拳で語りたまえ」

そして再び拳を振るった。

これもまた躱される。

だが―

「わあっ！」

「ふっ！」

「ぐっ…！？」

私に攻撃しようとしたネギ君に、カウンターぎみの一撃で対応する。

そして、相手が怯んだ隙に全力で踏み込み―

「『悪魔アッパーッ』！」

「!?」

「うおっ!?」

―どうした?

徐々に私の動けについていけなくなっているぞ?

私は二人に向かってひたすら拳を打ち込む。

何発かは防いでいるようだが、それでもヒットしている数の方が多い。

「ふんっ!」

「あぐっ…!?」

「がっ…!?」

最後にトドメと言わんばかりに、二人まとめて蹴り飛ばす。

「くっ……」

「ぐそっ…つえええー」

二人はまだ動けるようだが、正直言ってこれは―

「……やれやれ。
この程度かね？」

期待外れだよ。

「先程の動きはなかなか良かったが……どうやら私が手を下す程ではなかったようだね…？
残念だよネギ君…」

「小太郎君大丈夫！？」

「アホ！まだいけるわ！
…いくで！」

「うん！」

二人とも立ち上がり、また私に向かってくる。
しかし結果は変わらない。
「いや…違うな。
ネギ君、思うに君は…」
私は小太郎君のみを殴り飛ばす。
ステージの観客側席の上の方まで飛ばしてみたが―
「う……」
今度は立ち上がれないようだ。
「本気で戦ってはいないのではないかね？」
「！？
な、何を…？
ぼ、僕は、僕は本気で戦ってます！！」
「そうかね？」

私にはとてもそう思えないのだが。

「やれやれ…、サウザンドマスターの息子が…、なかなか使えると聞いて楽しみにしていたのだがね。彼とはまるで正反対…戦いに向かない性格だよ」

この少年は甘すぎる…。

彼のその甘さは戦場では致命的な弱点だ。

「君は…何のために戦うのかね？」

「な…何のために？」

「そうだ。小太郎君を見たまえ。実に楽しそうに戦う」

小太郎君は、この状況においても笑っていた。

それはつまり私との戦いが楽しみだったのだろう。

「君が戦うのは？
仲間のためかね？
……くだらない。
実にくだらないぞネギ君。期待外れだ。
戦う理由は常に自分だけのものだよ。
そうでなくてはいけない」

それ以外の理由…、ましてや他人のために戦う人間は強くなれるハズはない。

「『怒り』『憎しみ』『復讐心』などは特にいい。
誰もが全霊で戦える。
あるいはもう少し健全に言って『強くなる喜び』でもいいね。
そうでなくては戦いは面白くならない」

「ぼ、僕は別に戦うことが面白いなんて…」

…やはりそう言うか。

「僕が…僕が戦うのは！」

「一般人の彼女達を巻き込んでしまったという責任感かね？
助けなければという義務感かね？
義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞネギ君」

それでは実につまらないしね。

「いや…それとも君が戦うのは……」

君の人生を根本的に変えてしまった―

「あの6年前の雪の夜の記憶から逃げるためかね？」

「え…、な……なんでそれを…」

私はネギ君の全力を見てみたい。

「ち、違います！
僕は……！」

「そうかね？
では……」

そのために必要ならば、過去の傷口（トラウマ）を開いてもらうことになっても構わない。

「コレなどは……いかがかね？」

「…あっ…」

私は帽子を下にずらし、顔を隠すようにとる。

再び顔を出した私を見たネギ君の顔は、驚愕という2文字に染まっていた―

「はっはっは…。
喜んでもらえたかな?
いいカオだよネギ君…。
その表情だ。
いやぁ、今時『ワシが悪魔じゃー』と出ていっても、若い者には笑われたりしてしまうからねえ」

「あ…あなたは…」

気付いたかね?

さっきから私は悪魔と叫んでいたのだがね…

「そうだ。
君の仇だ…ネギ君」

side　ヘルマン　end

side　ナナシ

「―さあ、まだまだいくわよ」

「ちっ！」

繰り出される一撃を、俺はボロボロの身体に鞭を打って回避する。

…刹那に『気』を教わっておいてよかったな。
じゃなきゃ1分もしないうちに殺されていた。

「本当に逃げるのが得意のようね。
でも、それだけじゃ私には勝てないわよ？」

「ぐっ…！」

そんなことは俺が一番分かってんだよ！
けど、お前の攻撃を避けることで精一杯なんだよ！

「貴方、魔法使いなんでしょ？
なら魔法の１つでも使ってみなさいな！」

「はっ！笑わせんなよ。
お前ごときに魔法を使う必要なんてないね！」

「…っ！いつまでその余裕が続くかしら！？」

俺の返答を聞いて、さらに激しさを増す攻撃。

―くそっ！
使えるんだったら当の昔に使ってるわ！

そしたら、ちょっとはマシな戦いが出来たのによ！

「ここまで追い詰められてるのに、まだ魔法を使わないつもりなの？」

「追い詰められてる？
冗談を！

ここから俺の華麗な逆転劇始まるんだぜ！？」

いや…追い詰められてんのは冗談じゃなく事実なんだけどな…

「それに何度も言わせんなよ！
お前ごときに魔法を使う必要はねえんだっつーの！！」

本当は使えないだけですけどねー。

「そう…。
貴方がそういうつもりならもう何も言わないわ…。
けど―」

「あン？」

「使わないと…死ぬわよ？」

「！？」

そう言うと悪魔は一歩下がり、全身に力を込めるよう構える。

―って、ヤバッ!?
あの構えは!?

「『悪魔キック』!!」

「ぬぅお!?」

―ズドンッ!!!

放たれた大砲のような蹴りを、俺は予想していたおかげかギリギリで避けることができた。

あ、危ねぇ…!
あんなんまた喰らったら、もう立てねえよ!

…ん?まただって?

はい、そうですよ?
お察しのとおり、アレは一度既に喰らってますよ?

俺がこんなボロボロになった一番の理由が、アレの直撃を受けたからだし。

そこ!

情けないとか言うな！

初見であんなん避けれるわけないだろ！？
普通の蹴りかと思って防御したのに、そんなんお構い無しに大ダメージだわ！！

「へえ…今度は避けれたようね」

「舐めんな！
俺に同じ技は通用しねえんだよ！」

嘘だけどな。

「それにヘルマンの技が『パンチ』で、お前が『キック』って、技名に捻りがねえんだよ！！
名前の頭に悪魔って付けりゃいいってもんじゃねえんだぞ！」

「貴方…ヘルマンを知っているの？」

初めて驚いた表情を見せる悪魔。（実際悪魔の姿だから驚いてるかどうか分からないけど、雰囲気的に驚いてるように見える）

「……あっ」

ヤベッ…つい勢い余って言っちゃった…。

「いったい何処でヘルマンのこと知ったのかしら？」

「…禁則事項だ」

まさか漫画から知ったなんて言えるハズないしな。

「…まあいいわ。
どうせ貴方は此処で私に殺されるんですから」

「……」

確かに状況だけ見たら俺はピンチで、いつ殺されてもおかしくはないだろう。

なんせ魔法は使えないし、身体は既にボロボロなんだから。

けど、ぶっちゃけ―

「もう魔法の使わない貴方には飽きてきたし、そろそろ終わりにしましょう」

「同感だ」

勝機はある！！

「はっ！」

再び嵐のような連撃がまた俺を襲う。

おかげで俺はまた防戦一方になる。

「ぐっ……」

今のようなスピードもあり、連射が出来るような攻撃じゃ避けることしかできねえ。

けど、奴の必殺技…『悪魔キック』は話が別だ。

確かにあの威力は脅威的だろう。

当たったら大ダメージ確実だし。

だけど威力が大きい分、どうしても構えが大振りになり、攻撃直後、僅かな隙が出来る。

だから、その一撃を避け、なんとか奴の懐に潜り込み隙があるうちに、俺の全力の一撃を叩き込めれば…！

もちろんリスクもある。

少しでもタイミングを間違えて、奴の一撃をもう一度受けたら俺は…

「ほらほらぁ！
だんだん動きが鈍くなってきたわよ！！」

「そっちこそ！
攻撃にキレが無くなってきてんぜ！
いい加減疲れたんじゃねえか！？」

けど、やらなきゃどっちにしろ死ぬだけだ。

『やらないで後悔するのか、やって後悔するのか』

この二択だったら、俺は後者を選ぶぜ！

「そんなもんかよクソババア！？
歳とって経験豊富なんだから、俺みたいな若造ぐらい簡単に倒してみろよ！
俺の知り合いは６００歳で世界最強だぞ！！
無駄に歳とるんだったら、そんぐらいの実力見せてみるよぉ！！！」

俺が見たトコ、この悪魔は一見お姉さんタイプに見えるけど、実際は短気で相手の挑発に簡単に乗るガキと同じだ。
なら、こうして相手を怒らすような挑発をすれば、すぐに限界がきて―

「今なんて言った…？」

「耳が遠くて聞こえなかったか！？
ならもう一度言ってやるよ！！
クソババアって言ったんだクソババア！！」

「こぉ…っの、クソガキィィィ！！！」

怒りを晴らすために、必殺の一撃を俺にぶつけてくるハズだ！

「いいわよ…！
そんなに死にたいのなら、今すぐにでも殺してあげるわ…！」

そう言うと、再び俺から距離をとり、構える。

―き、来たっ！

チャンスは一回！
男をみせろ俺！！

「『悪魔キック』！！！」

「っ！」

蹴りの範囲から外れ、瞬動を使う。

慣れてない『気』での瞬動のため、『入り』が甘いが関係ねえ！！

完璧とはいえない瞬動で、相手の懐に入った俺は、目の前で目ん玉見開いてる奴に話し掛ける。

「1つ教えてやるよ…！」

「！？」

「俺はな―」

力を込めろ…！

半端な一撃ではなく、完璧な一撃を入れるために…！

深い踏み込みと、『気』の一点集中。

一瞬で相手の命を奪う一撃を…！！

「やられっぱなしは…主義じゃねえんだッ！！！」

瞬間―俺の全力の蹴り…渾身の一撃が奴の身体を捉えた。

「ぐふっ…！？」

そのまま悪魔を近くの建物まで蹴り飛ばす。

建物は、その衝撃に耐えられず、悪魔を巻き込んだまま崩れさった―

「……」

出てきたりは…すんなよ？
今の一撃でこっちは限界越えてんだからよ…

「……」

瓦礫からは物音はしない。
何かが動く気配もない。

ってことはつまり…！

「大っ…勝利ッ！！」

俺は無意識に両手を上げバンザイする。

いやあ今回はマジで死ぬかと思った…。

冗談抜きで。

けど、なんとか生き残れたな。

これは俺も成長しているってことかね？
魔法も使えない状態で、格上の相手を倒すなんて。
…このままこの調子で最強目指しちゃいますか！？
まずは第一段階としてエヴァを倒す…って、いきなり無理じゃん。
第一段階でハードル高すぎだろうが…。
やっぱ俺が最強を目指すのはキツいな。
「…っ…痛ぁ」
にしてもこの怪我は病院行かないと不味いな…
骨も何本か折れてるくせえし。
…医療費、経費で落ちるかな？
それに建物壊しちまったしなぁ…
その再建費も…
……ちなみに自腹は無理だぞ？
まあ、いざっていうときはあの悪魔の主にでも請求するか。

とにかく今は病院行かないとな。

もう身体中が悲鳴上げてるし。

―ガラッ…

そう思い、その場から立ち去ろうとした俺は背後から物音がするのに気づいた。

「あン…？」

気になった俺は、先ほどまでいた場所を振り返ってみると―

「『悪…魔…キック』！！」

俺と同じようにボロボロになりながらも瓦礫の上に立ち、俺に向かって蹴りを放つ悪魔がいた―

「がっ……はっ！？」

悪魔の一撃をモロに受けた俺はダンプカーに撥ねられたかのように勢いよくブッ飛ばされ、今度は俺が建物に激突した。

「ぐっ……がはっ…！？」

込み上げて来たものを抑えられず、俺は口から血を吐き出す。

「油断…した…わね…！
いくら全力の一撃が決まったからって…相手の生死を確認しないだなんて…甘いんじゃない…？」

「ぎっ……くそっ…」

確かに甘かった…！

戦闘中に相手の生死を確認しないで立ち去るだなんてどこの素人だよ…！

完璧な一撃だったからって油断しちまった…！

「もう貴方には何の慈悲もあげない…！
代わりに永遠の苦しみを与えてあげる…！」

そう言い、一歩ずつ俺に近づいて来る悪魔。

―くそったれ…！
身体が動かねぇ…！

「私もね、ヘルマンほどじゃないけど石化が得意なのよ…？
抵抗なしで受けたら永久石化は免れないわ…！」

―動け…！
動けよ俺の身体…！
頼むから動けよっ！

「さあ、永久の眠りにつきなさい」

―動けよぉっ！！

「おいおい…センセ、またピンチなのかよ？」

今…声が…聞こえた気が…
…気のせいか？

「もしかしてセンセには毎回戦闘でピンチになる設定でもあんのか？

でもそれだと視聴者は飽きちまうぜ？」

「！？」

―気のせいじゃない…！

俺ははっとして周囲を見渡す。

…今の声はどこから聞こえた？

かなり近く…至近距離から聞こえたような気が…？

「しっかし…どの世界でも悪魔は俺の邪魔をする運命なんだな。

少しは身の程をわきまえろよ」

「何を…言ってるの…？」

それは俺のセリフだ。

何意味わからないことを言ってるんだコイツは？

そして、この声の主はいったい何処にいるんだ？

「にしても、これで貸し2つ目か？
俺は別に構わんが、このままじゃ貸しが溜まる一方だぞ？」

今の2つ目ということは何か気になったが、それは後だ。
俺はようやく悟った。

この声の出所を。

「まあ俺もあの悪魔が気に入らないから、今回は無料で助けてやるよ」

…この声は俺だ！

この声は俺の口から発せられてるんだ…！

そして俺がその事実に気が付いた瞬間―

「命を懸けてかかってこい悪魔よ。
あるいはこの身に届くかもしれんぞ？」

心臓が勢いよくはねた気がした―

to be continue ?

第２５話「戦う理由」（後書き）

ナナシ
「本当にギャグがなかったな…」

でしょ？

ナナシ
「てか何また今回のパクりセリフは？
某アメフト部のハア〇ア三兄弟のセリフに、最後は麻婆神父のセリフじゃん…。お前何普通に有名作品のセリフ使ってんだよ…」

いいんだよ微妙に変えてるんだから！
二次創作なんて全部そんなもんだし！！

ナナシ
「失礼なコト言うな！？」

…ごめんなさい。

ナナシ
「で？質問ってのは？」

うん、あのね？
今って季節春じゃん？

ナナシ
「そうだな」

で、ギャグオンリーの春の特別番外編を考えたんだけど、今番外編を投稿すると本編の空気が台無しになる気がして…

ナナシ
「確かに…」

でも悪魔編の終了を待ってたら、４月中に投稿できないと思うんだよね。

ナナシ
「まあお前のあの遅い更新速度じゃ、そうなるな」

でしょ？
だから投稿するか迷っているんだよ。

ナナシ

「じゃあどうすんだよ？」

だから読者の皆様の中で、番外編を読みたいって方がいたら投稿したいと思う。

ナナシ
「そんな物好きいねえだろ…」

自分からしたら一人ぐらいはいてほしいけど…。

とにかく、これを読んでくれた方で番外編を読みたいって方がいれば、感想でもメッセージでもいいんで、お伝えください。

ナナシ
「待ってるぜ」

まあ誰からも要望なくても、私の気分次第で投稿する可能性はあるかもしれませんけどね（笑）

ナナシ
「オイッ！？」

ではまた。

第２６話「この魂に憐れみを」（前書き）

まずは皆様にお知らせが！
前回
「番外編投稿すべきか？」と訊ねた際、たくさんの方からの意見をいただきました！

ナナシ
「皆様には感謝だな」

本当にありがとうございました！

それで結果として番外編は今のシリアス展開が終了したら投稿することにしました。

それで、少しでも番外編を早く投稿するために、本編の更新速度を速めたいと思うので、よろしくお願いします。

ナナシ
「とか言いつつ、更新遅れたりすんなよ？」

た、多分大丈夫！

では、本編の方をどうぞ！

※

今回、俺ＴＵＥＥＥＥ！！ではなく神ＴＵＥＥＥＥ！？的な要素があります。

神が嫌いな方はご注意を。

第２６話「この魂に憐れみを」

ｓｉｄｅ　リリス

―最初はただのつまらない仕事だと思っていた。

仕事内容は『学園の調査』『英雄の息子ネギ・スプリングフィールド及び、カグラザカアスナが今後どの程度の脅威となるかの調査』そして、『ナナシ・クラートの実力の調査、それを確認次第、可能ならば対象の抹殺』。

…英雄の息子といってもまだ１０歳のガキだし、カグラザカアスナは魔法に関わっているとはいえただの女子中学生。

ナナシ・クラートに関しては魔法が使える以外情報がなかったけど、それでも私とヘルマンならつまらない仕事には変わりないと思った。

はっきりいって引き受ける気はなかったけど、依頼主から渡された対象の一人の顔写真が、私好みの顔だったから引き受けた。

その彼が少しでも私を楽しませてくれたらよかったし、それができなくても苦しむ姿を見せてくれればそれでよかった。

結果、彼は私を予想以上に楽しませてくれた。

…最後の一撃だけは楽しむ余裕はなく、ギリギリだったけど。

ただ、私に一撃を与えた彼を許すつもりはなかった。
彼は殺さず、石にして永遠の苦しみを与えてやろうと思った。
彼はもう立ち上がれないみたいだったから、これで終わり。

そう思っていたのに―

「命を懸けてかかってこい悪魔よ。
あるいはこの身に届くかもしれんぞ？」

なんなのよコレは……？

なんであの傷で立ち上がれるのよ…？

なんで貴方がそんなに余裕そうなのよ…？

なんで―

「どうした？
さっきまでの威勢はどこにいったんだよ？
まさか怖気づいたわけじゃねえよな？」

―なんでこんなにも震えが止まらないのよ！？

「来ないのなら…こっちから行かせてもらうぜ？」

「！」

…っ、何馬鹿なコトを…！
あの傷で立ち上がれたのも何らかしらの方法で回復したのにすぎない…！

余裕そうに見えるのも今までと同じ虚勢に決まっている…！

傷が回復したところで、私が有利なのは変わらないし、先程と同じ手はもう無駄で彼に打つ手はない…。

…なによ、私の負ける要素なんてドコにもないじゃない。

なら今度は彼が回復できないよう一瞬で終らせれば―

「『魔法の射手　連弾・光の５０１矢』」

「！？」

無詠唱魔法！？

無詠唱でこの数…いえ、それより今魔法を…！

私は放たれた魔法の矢を大きく後ろに跳ぶことで回避する。

「なによ！
ようやく魔法を使う気になったわけ！？
でもその程度の魔法じゃ私を倒すことは「影の地　統ぶる者　スカサハの　我が手に授けん　三十の棘もつ　霊しき槍を『雷の投擲』」なっ！？」

帯電された魔法の槍が、彼の両手に幾つも現れる。

彼はその幾つもの槍を後ろに跳んでいる私に向かって放つ。

空中じゃ身動きがとれないため、身をよじることで槍を避ける。

だけど、完全には避けきれなかったみたいで―

「あぐっ…！？」

一本の槍が私の肩を掠めていった。
それにより槍を掠めた場所から血が流れる。

「いいわよ…！
ゾクゾクしてきたわ…！
やっぱり戦いはこうじゃないと…！」

でも、まさか魔法が使えるだけでここまで実力が変わるなんてね…！
雰囲気が変わったのは気になるけど、そんなのどうでもいいわ！

「さあ！
もっともっと楽しみましょう！！
どちらかが倒れるまで戦い続けるの「おお　地の底に眠る　死者の宮殿よ　我らの下に　姿を現せ
『冥府の石柱』」…よ？」

彼が呪文を詠唱しながら飛んだことは驚いた。

だけど、それ以上に驚いたのは―

「なんなのよ…その馬鹿みたいな数は…？」

彼の頭上に新たに現れた巨大な柱状の岩が…１０本以上はあるだろうか？

何にしても、一人相手に放つ数じゃない。

しかも先程からの流れるような呪文の数々…。

その呪文一つ一つの質量が並みの魔法使いじゃありえない…！

高位の魔法使いでもできるかどうか…！

それをいとも簡単にやってのけて、どうして魔力が底をつかないの！？

「さて…今度は上手く避けろよ？」

「っ！？

ちょ、ちょっと待ちなさいよ…！

ソレをこの街中で放つつもり…？

そんなの放ったら周りの人間に被害が…」

「何馬鹿言ってんだよ？

この辺り一帯にはお前が張った人払いの結界があるっていうのに被

害が出るわけないだろ？
…ああ、心配すんな。
街に被害が出ても、再建費ならこの学園のジジイがなんとかするだろ」

「そんな心配していな……キャアアアア！？」

そうして、私に向かって幾つもの石柱が放たれた―

ｓｉｄｅ　リリス　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　小太郎

あのオッチャン、人間とちゃうとは思うてたけど、まさか悪魔やったとはな…！
どうりで強いわけや。

けどオッチャンの正体を知ったネギは身動き一つせえへん。
どうしたんや？

「ネギ！大丈夫か！？
おいネギ！
しっかりせえ！！」

ここまで近くで呼んどるんやから返事しろや！

「ネ…」

―トン

「！？」

名前を呼び終わる前に、ネギは俺の前から消える。

「ぐおっ！？」

消えたネギを探すと、いつの間にかオッサンと共に空中にいた。

そのネギは空中で先程とは比べ物にならない動きでオッサンに攻撃

を叩き込んでいる。

なっ…！？

「何やあの動きは！？」

いきなりあんな動きになるなんて！

「魔力の暴走（オーバードライブ）だ！」

俺の疑問に答えるように、小動物が叫ぶ。

魔力の暴走（オーバードライブ）やと！？

「まだ修行不足で使いこなせちゃいねーが、兄貴の最大魔力は膨大だ！
それが何かのきっかけで一気に解放されれば…！」

そう説明してる間にも、ネギはオッサンに攻撃を与え続ける。

「ふ……ふふはははは！

いいね！すばらしい！！
これだよ、これが見たかったのだよ！！
それでこそサウザンドマスターの息子だ！！！」

オッサンは一方的にやられてる状況だというのに嬉しそうに笑みを浮かべ、叫ぶ。

ネギ……

「スゲェ……」

けど、けどな……ネギ！

その戦い方じゃアカン！！

俺は空中にいる二人に向かって駆け出す。

オッサンは悪魔の姿に変わり、口にエネルギーを溜めてネギを迎え撃とうとしている。

「ネギ！？」

間に合うか！？

―ドンッ！

なんとか間に合った俺は、ネギを抱えたまま勢いに任せて落下する。

「ネギ！？」

「！？」

「兄貴！？」

急だったせいで、受け身がとれず、叩きつけられるように地面に着地するが仕方ない。
避けれただけマシや。

「あ……う…」

ネギは自分の手を呆然とした表情で見つめる。

「ぼ…僕……今……？」

「っつつ……ったく」

あっ…今ので頭から血出てもうた…。

「こ、小太郎く…！？」

「この―」

「え？」

俺はゆっくりと拳を振り上げる。

そして、目の前にいる馬鹿に向かって―

「アホかーーっ！！」

「へぷ！？」

「……む？」

―拳を叩きつけた。

「こっ、こここここ小太郎君!?」

何回『こ』言うんや!?

「アホ!!
いくら力があっても、あんな闇雲に突っ込んでったら返り討ち喰らうんは当たり前や!!」

冷静に戦っとったらわかるハズやろ!!

「確かにお前の魔力の底力がスゴイのはわかったわ!わかったけどな、今の戦いは最低や!!
周り見えてへんし、結局決め手も入れてへん!!
あんな力押し俺でも勝てるわ!!」

お前は野生の獣とちゃうんやぞ!!

「ったく、頭良さそうな顔しとるくせに!
仇か知らんけど、オッサンの挑発に簡単にキレよってからに!!ガ

キ！！」

俺は手を伸ばして、ネギのほっぺを引っ張る。

…やわらか。

「ふむぐっ！？」

「アホ」

「むぐぐーーっ！？」

それにコイツ、俺が最初に言うたコト忘れたんか？

「おら」

「む」

ほっぺから手を離し、今度はネギの胸に拳を押しあてる。

「共同戦線ゆーたやろ。

二人であのオッサン、ブッ倒すで」

「う…うん。
…そうだね、小太郎君」

ネギの顔に先程までの戸惑いはない。
ようやくいつもの調子に戻ったかいな。

「ふん…もう終わりかねネギ君。
今のは大変良かったのだがねぇ…」

いかにも落胆したように話かけてくるオッサン。
何が良かったや！

「ははは。
それにしても、いい仲間が出来たようだ。
だが、どうするかね？
君達二人で私に勝てるのかな？」

勝てるかとやなくて、勝つんや！

「ネギ！今の最強モードみたいのまたいけるか？」

「い、今の自分でもどうなったのか…」

ま、せやろな。

「ぬ…！」

すると、オッサンが俺らから視線を外し、ステージにいる姉ちゃん達に向ける。

何や…？

「「「『『『火よ灯れ』』』！！！」」」

おおっ！？

水ん中にいる姉ちゃん達が杖（？）から巨大な火を発生させた。

それにスライム達が反応するが―

「!?」

「しまッタ!?」

「止めレ!」

「間に合わないデスっ!」

―パァァン!

火力に耐えきれず、水の牢が弾ける。

「みんな!!
言ったとおりに!!」

「オケ!」

「瓶は!?」

「ゆえ、あそこ!」

小動物が姉ちゃん達に指示を出す。

その指示に従い、皆それぞれ動く。

何する気や？

「せっちゃん！」

「崩拳（ポンチュワン）！」

このか姉ちゃんと褐色肌の姉ちゃんは、まだ水ん中に囚われてた神鳴流の姉ちゃんを助ける。

「お待たせアスナ！」

「朝倉！！」

朝倉って呼ばれた姉ちゃんは、アスナ姉ちゃんの胸にあるペンダントを取った。

…あのペンダントが魔法を打ち消してたトリックの正体か！

「何と！？」

「させねェゼ！」

「のどか！」

「う、うん、えーと…」

のどか姉ちゃんと…誰や？

…とにかく！

のどか姉ちゃんと名前のわからんチビは、さっき不発だった瓶を二人で構える。

「『封魔の瓶』！！」

「いやあーん！！」

「また瓶の中カヨーッ！」

「まあ悪役デスシ…」

今度はちゃんと発動した瓶の中に、スライムが三体全部封印される。

「今だ！ネギ君！！」

「みんな！！」

「やるやないかねーちゃん達！！」

何もできん一般人の連中かと思っとったのに、スライムを片付けてくれるなんてな！

こりゃあ俺らも負けてられんわ！！

「へへへっ…もういくしかないな！！」

「とっておきのがある！
小太郎君前衛頼める！？」

「へっ！ナメンなや！
お前こそ大丈夫かいな！？」

しゃあないから、お前のとっておきに賭けたるけど、失敗すんなよ！？

「ふふふ…やるじゃあないか。
いいぞ！！
もっと来たまえ！！」

「オッサン、何笑っとんや！！
もう魔法は…」

俺はネギに後衛を任せ、前に出る。

「防げへんのやで！！」

そして影分身と本体を含め、合計６体で襲い掛かる。

「どきたまえ小太郎君！！私の狙いは―」

オッサンの凄まじいラッシュが俺の身体を捕える。

「がっ…！？」

「ネギ君唯一人だよ！！」

オッサンは俺を倒したと思って、ネギの方に行こうとする。

けどなぁ―

「こっちが本体や……オッサン！！」

今までのダメージを全部返すかのように、俺は下から思いっきりオッサンにアッパーを喰らわす。

「ご……お…！？」

「ネギ！」

ネギは俺と入れ代わるように、前に出てくる。

「『魔法の射手　雷の一矢』！！

攫打頂肘！！！」

雷を纏った一撃がオッサンにヒットする。

ネギはそのまま呪文詠唱を行い―

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル
来たれ　虚空の雷　薙ぎ払え！」

「ぬううっ！！」

「うわあああっ！！」

―決めろ！ネギっ！！

「『雷の斧』！！！」

ネギの渾身の一撃がオッサンに叩き込まれた。

「が…ぐっ……」

その一撃でオッサンは倒れて―

「「「やったー！！」」」

俺らの勝利が決まった。

…ふん、二人がかりでギリギリとかまだまだやな。

けど―

「よくやったで…ネギ」

ｓｉｄｅ　小太郎　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

「…君達の勝ちだ。

…トドメを刺さなくていいのかね？」

僕の一撃を受け、この人…悪魔は身体が消え初めていた。

「このままにすれば、私は唯召喚を解かれ、自分の国へと帰るだけだ…。
しばしの休眠を経て復活してしまうかも知れんぞ？」

「……僕は」

「君のコトは少し調べさせてもらった。
君が日本に来る前に覚えた9つの戦闘用呪文のウチ、最後に覚えた上位古代魔法……。そのための呪文のハズだぞ？」

そんなとこまで調べていたなんて…！

「本来、封印することでしか対処できない我々のような高位の魔物を完全に打ち滅ぼし、消滅させる超高等呪文。
君が復讐のために血の滲む思いで覚えた呪文だよ」

「……僕は」

僕が彼の問いに答えようとした時―

「がはっ！？」

「なっ！？」

「えっ？」

もの凄いスピードでステージに落ちてきたものがあった。

それは―

「悪魔！？」

まだ敵がいたのか！？

「はあ…はあ…はあ…。

あら…？ヘルマン…じゃない…。

フフ…お互いボロボロみたいね…」

「リリス！？」

リリスと呼ばれた悪魔は、その場から立ち上がりはしたけど、ヘルマンと同様、その身体は消えかかっていた。

「あの力の差…。
あれじゃあ、どっちが化け物か分からないわ…」

「まさかやられたのか!?彼一人に!?」

彼？

悪魔をここまでボロボロにできる人って…

「へえ…。逃げて此処に辿り着いたのは偶然か？
それとも、まさか仲間に助けを求めようとしたわけじゃあるまいな？」

空から聞こえるこの声。

その発生源の方を見てみると、そこには僕がよく知っている人がいて―

「よお。久しいな主人公」

「ナナシ先せ…!?」

いや…あの雰囲気…
それにこの呼び方は…

「神…様…？」

「おっ？今回はお前でも一発で気付いたか？」

じゃあやっぱり…！
これは修学旅行の時と同じ状態…！

「悪いけど話は後でな。
生憎俺には先客がいるもんでね」

「くっ…！」

そう言って、リリスという悪魔に視線を向ける。

「俺に手を出したんだ。
それ相当の罰は受けてもらうぜ？」

「っ！？」

空にいた神様は一瞬であの悪魔の背後に回る。

―は、速いっ！？

「『魔法の射手　戒めの風矢』」

「なっ！？」

零距離からの捕縛用魔法！

「お前…確か石化が得意なんだよな？」

「ぐっ…動けないっ…！」

「得意な技にやられる気分って、いったいどんな感じだろうなあ？」

「ま、まさか…」

神様が悪戯を考えた子供のような表情を浮かべると、身体から尋常じゃない魔力が溢れ出る。

「小さき王　八つ足の蜥蜴邪眼の主よ」

この呪文は…！

白髪の子が使っていた…！

「時を奪う　毒の吐息を」

詠唱が完成した。

後はもう発動するだけだ。

「た、助け…！？」

「…おいおい。

悪魔（お前）が神（俺）に命乞いすんなよ？」

呆れたようで、どこか楽しそうな声を出す神様。

そして―

「『石の息吹』」

「あっ！あぁっ…！？
あああああぁっ！！！」

魔法が発動し、悪魔の身体が下半身から徐々に石化していく。

「覚えとけ。
俺はお前の魂なんかに憐れみを、慈悲を、ましてや救いはやらん」

神様は少しずつ石化していく悪魔に近づいていく。

「だが……そんなお前に一つだけ俺からプレゼントをやるよ」

「な…に……を！？」

完全に石化が完了しそうな瞬間、神様が悪魔の目の前で止まり、顔を寄せる。

そこで、彼が最後に悪魔に贈った言葉は―

「―永遠を」

「あっ――」

そして、彼女は石になり永遠を手にした…

彼女の最後の表情は、絶望に染まりきった悲痛な表情だった…

「…く、くくく…」

「な、ナッシー…？」

「兄ちゃん…？」

場が静まりかえると、神様から声が漏れだす。

「フフフ…ハハハハ……ハハハハハハ…！
アハハハ、アーハッハッハッハッハッ！！
はははハははハはハはハはははははは！！」

笑い声がステージ全体に響きわたる。

「いいぞぉ！その顔だっ！絶望に染まったその顔！
その顔が見たかったんだ！オブジェとしてはいささか美しさが足りないが、俺を楽しませるには充分だ！！よかったなあ！？
悪魔ごときが俺を楽しませたんだ！
誇っていいぞ！！」

そう言って、また笑いだす神様…

この人は……！

「馬鹿な…！？
リリスを完全に石化するほどの力だと…！？」

「はーはっは…は？
…ああ、まだいたのか」

ヘルマンに声をかけられ、急に冷めた表情になった神様。

「君はいったい…！？」

彼はもう顔以外は消えてしまったというのに、それでも話続ける。

「俺の正体ならそこの主人公がずっと呼んでたじゃねえか？」

「なに…？」

「神だよ」

「君は――」

彼は何か言い終わる前に消えてしまった。

終わった…のか？

「さて、ようやく落ち着いて話せるな。
そんじゃあ「待て」……あン？」

「私も入れてもらうぞ」

神様の言葉を遮って、新たに現れた人は―

「ま、師匠（マスター）!?それに茶々丸さんも!?」

どうやってこの場所が!?

「私がいても構わないな?」

「ああ問題ないぜ」

でも話っていったい…?

「それじゃあ、センセを呼ぶか」

センセ?

ナナシ先生のことか?

「そっ。その先生のこと」

「…待て。今のナナシの意識はお前が表に出ているせいで眠っているのではないか?

それに肉体が一つしかないのにナナシを呼んで表に出したら、貴様の話が聞けないだろうが」

「そんなのわかってるっての。

だから、こうすんだよ」

―パチン…

「うわっ！？」

「キャッ！？」

神様はそう言うと、指を鳴らす。
すると、目が開けられない程の眩しい光が発生する。

「ぬぅわぁ！？」

「「「えっ！？」」」

そして光がおさまると、目の前には―

「「「「「ナッシー（ナナシ）が二人！？」」」」」

先程と変わらぬ場所には、楽しそうに立つナナシ先生と、尻餅をつ

いて唖然としているナナシ先生がいた……って、はいっ！？

「え？は？何コレ？
どういう状況？」

こ、コレっていったい…？

そう思っていると、片方のナナシ先生が両腕を広げ―

「―さあセンセ。
ゲームの時間だ」

そう宣言した。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第２６話「この魂に憐れみを」（後書き）

ナナシ
「…おい」

ん？

ナナシ
「リリスって誰だよ？」

いやあ、そういえば女悪魔に名前つけてなかったから適当に名前考えたんだよ。

ナナシ
「冒頭からいきなり知らない名前出てビックリするだろ！？
そういうのは最初から説明しとけよ！！」

でも、リリスは使い捨てのキャラだから説明はいいかなーって。

ナナシ
「あ…使い捨てなんだ…」

うん。もう登場しない（笑）

ナナシ

「マジか…」

というより、神がお前より主人公らしい気がすんだけど…

ナナシ
「馬鹿!?
あれはどう見ても悪役だったじゃん!!
敵殺して笑う主人公とか物騒だわ!!」

確かに…!

第27話「汝の真名を問う」（前書き）

……。

ナナシ
「…で？
何か言うことは？」

ナ、ナニモナイヨ？

ナナシ
「嘘つけ！！
前回更新早めるとか言ったのに、いつも通りの更新速度じゃねえか！？
しかもいつもより文量少ねえし！」

し、仕方ないんだ！
今回内容がまったく思いつかなくて…！

おかげで今回、自分でも
「は？何言ってんの？
意味わかんないだけど…」みたいな部分もあるし！

ナナシ
「駄目じゃん！？」

でも自分の力じゃこれが限界なんだ！

なので皆様、今回意味がわからず納得できない部分があるかもしれませんが、どうか見逃してください…！

「…駄目だこの作者」

第27話「汝の真名を問う」

side　アスナ

「ナナシ先生が…二人？」

誰かがこの状況を見てそう呟いた。
状況を知らなければ私は、ありえない、と馬鹿にしていただろう。
けど、今私の目の前にはその光景が広がっていて―

「さあセンセ。
　ゲームの時間だ」

そこには見間違いなんかではなく、ナッシーが二人いた…！

「ちょっ、ちょっと！？
何でナッシーが二人いんのよ！？
てかどっちが本物！？」

「……わかりません。
あそこまでソックリですと私には…」

先程目覚めた刹那さんが答える。

確かに見た目じゃソックリすぎて、どっちが本物か判断できない…！
いったいどうやって判断すればいいのよ…！？

でも、そんな心配はいらなかったようで―

「うおい！？
誰だこのイケメン！？」

「「「お前だよ！！」」」

片方のナッシーが、もう片方のナッシーの顔を見て驚く。

「……あっちが本物ね」

「……はい。間違いなく」

自分の顔を見て、躊躇いなくイケメンと叫べるのはナッシーだけだ

ろう。

…本物が判断できたのはよかったけど、なんかやるせないわね。

少しでも悩んだ私が馬鹿みたい。

というか、よく見たら瞳の色も違うし。
本物は翡翠色してるけど、神様？の方は紅色だ。

「じゃあコイツはどこのどいつだ？
俺に化けるとか、いいセンスしてるのは認めるが…」

「何がいいセンスだ。
一人でも扱いに困ってるんだ。
それが二人もいるとか……ただの悪夢じゃないか」

「悪夢とか言うなよ！？
てか俺って扱いに困るような奴なの！？」

容赦ないわねエヴァちゃん……否定はしないけど。

「おいおいセンセ、俺のことがわからねえのかよ？
悲しいねえ…。

俺は十年以上センセのことを想い続けてきたっていうのに」

「……は？」

……えっと、今のは―

「……告白？」

「気持ち悪いこと言わないでくれ！？」

「ナッシー…、やっぱそっちなん…？」

「そっちって何！？」

必死で否定するナッシー。

…まあ肯定されても困るんだけど。

「どうやらコイツは俺のコト知ってるみてえだけど、俺は知らねえ！結局何者なんだよ！？」

「神……だ、そうだ」

ナッシーの問いに答えたのはエヴァちゃん。
その答えを聞いたナッシーは―

「神……だと？」

今まで見たことのない……憎悪に満ちた顔をしていた

ｓｉｄｅ　アスナ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「二度目の生は楽しんでるか、センセ？」

まるで親しい友人のような雰囲気で話しかけてくる俺―いや、神。

神が今俺の目の前にいる―その事実に、俺の身体が熱くなっていく。

「…一つだけ教えといてやる」

「あン？」

「お前は俺のことを十年以上想い続けてきたらしいが、俺は…、俺は…！
俺はお前以上にずっとお前を想い続けてきた…！！
会いたかったぜぇ…！！
神ッ！！！」

自分の声が震えているのがわかる。
けれど叫ばずにはいられなかった。

ようやく会えたんだ。

それぐらい許してくれよ。

「へぇ…、嬉しいねぇ。
だったら俺らは両想いってことだ」

「ちげぇねえ」

俺は奴と正面から対峙し、構える。

あの時とは違い、力を付けた今だからこそわかる。

奴の…神の底知れぬ力が。

…はっきり言って勝てる気はしない。

けど、こんな機会を黙って見逃すワケにはいかねえんだよ…！！

「ま、待ってください！

この世界に来てっていったい！？

それに二度目の生って「黙ってろ！！」っ！？」

近くにいたネギが俺を止めようとしたが、無駄だ。

今の俺は止められん。

「…ったく、そんなにピリピリすんなよセンセ？

俺はセンセと戦うつもりなんてないぜ？」

「……なに？」

その言葉に思わず構えが甘くなる。

俺なんて戦うまでもないってか…！

「それもあるが…、今回は目的が別だからな」

「……目的だと？」

どうせろくでもない目的なんだろうが、訊かなければどうしようもない。

「その前に一つ。
センセには知ってもらわなきゃいけないコトがある」

「勿体ぶらずさっさと言えよ！」

「……はぁ、成長したのは身体だけかよ。
精神的にはあの時からまるで成長してねえんだな」

「…なっ…んだとぉ！」

奴の些細な言動や行動は俺を簡単に苛立たせる。
…俺はこんなにもキレやすい奴だったのか？

「わかったわかった。
さっさと話すから少しは落ち着け」

「……ちっ」

「俺はな―」

そうして、ようやく奴が告げた話は―

「俺は神であって、神じゃないんだよ」

……は？神じゃない？

「ちょっ、ちょっと待て！じゃあお前はいったい誰だっていうんだよ！？」

今さら神じゃないって言われても信じられるかよ！

「俺は神……ここにはいない本体から切り離された存在。分身みたいなもんだ」

「分…身？」

どういうことだ…？

「あの時センセをこの世界に送るとき、本体は力の一部をセンセに移した」

「なっ！？」

「その力と共に、神の魂の一部もセンセの身体に流れこんだんだ。意図的なのか偶然なのかはわからないけどな。ちなみにその魂の一部ってのが俺」

そう言うと、何が面白いのか、奴はククと笑い出した。

アイツの魂が…俺の中に？

「俺は神本体の力と共にセンセの中で眠っていた。本来なら、その時が来るまでは目覚めるハズはなく、表に出てくることもなかったんだが…」

「だが？」

「センセの魂の存在が弱まった時、力と共に俺は目覚めた。
そして、俺が表に出たことで最初に俺とセンセの間で回路（パス）が生まれ、
二度目にはソレが完全に繋がった。
俺が今こうして実体化できるほどにな」

魂が弱まった時…、つまりそれは死にかけた時…

俺が死にかけたのは、今回と…修学旅行の……！？

「じゃあ旅行の時、俺の意識がなくなったのは…！」

「俺が表に出てきたからだよ」

ってことはなんだよ…！

つまり俺は旅行の時も…

今回も…

奴に…

神に助けられたってことなのかよ…！

「はっ…なんだよ？
命の恩人に向かってなんて顔してんだよ？」

「誰もテメエなんかに助けは頼んじゃいねぇ！！」

「おいおい…、とても他人を勝手に庇って死んだ奴のセリフとは思えねえな」

「ぐっ…！」

悔しいが、反論できん…！

「話を戻すぜ？
それで、このままセンセが同じように死にかけるようなコトを繰り返すと、センセにとってマズいコトになるんだよ」

「マズいコト…？」

なんだよマズいコトって？

「俺が表に出るたびに、センセの中で俺という存在が大きくなってるんだ。神の力が完全に目覚めようとしてるせいでな。このままほっとけばセンセ…俺に取り込まれるぞ？」

それって！？

「つまりセンセの魂は消え、俺の魂だけが残る。今俺とセンセの存在は同じぐらいだが、これ以上俺の存在が大きくなると…」

俺の魂が
消えるってことか…

「……」

「だが消えない方法は一つだけある」

「っ！な、なんだよ！？」

消える原因であるコイツに方法を訊くのはオカシイとは思うが、それでも訊かずにはいられない！

「まだ俺の存在と対等な段階のうちにセンセが逆に俺のことを取り込めばいい」

「……？
どういうことだ？」

意味わからんぞ。

「今神の力、そしてセンセの力を制御しているのは俺だ。
つまりはその俺を取り込めば、自然と力はセンセのモノとなる。
もっとも取り込まれた俺の魂は消えるがな。
まあセンセにとっては一石二鳥どころか三鳥な方法なんだよ。
…どうだ？理解できたか？」

「その方法を選べばメリットが大きいのはわかったが…
でもどうやって…」

まるでが思いつかん。

「そこで本題だセンセ」

「あ？」

「俺は黙って素直にセンセに取り込まれる気はねえ。たとえこの身体が分身だとしてもな。
それはセンセもだろ？」

当たり前だ。
黙って消えるなんて俺の性に合わねえ。

「だからセンセ。
俺とゲームしようぜ」

ゲーム？

なんだ？

ＥＳか？ＰＨＰか？
それともＭｉｉか？

「ちげえよ！！
ゲームと聞いて、すぐに携帯ゲームやテレビゲームに結びつけんじゃねえ！！
ったく、これだから近代っ子は！！」

「…ご、ごめんなさい」

なんか急に怒られたから
思わず謝ってしまった。

「これからやるのは道具なんて必要ない、単純なゲームだよ」

道具が必要ない？

じゃんけんとか鬼ごっことかの昔遊びか？

「そのゲームで俺が勝てば、センセの肉体は俺のモンだ。
そして、もしセンセが勝てば、俺は自分からセンセに取り込まれてやるよ」

「！？」

つまりゲームでどっちが生きるか死ぬか決めるってことかよ…！

「どうだい？
このゲーム、受けるか？」

だが受けなければ、どっちにしろ俺の魂は…！

なら―

「…いいぜ。受けてやるよそのゲーム…！」

やってやろうじゃねえか……！

「それでこそセンセだ」

神は俺のその答えに満足したのか、嬉しそうな表情を浮かべた。

「で？そのゲームの内容は何なんだよ？」

「単純なゲームって言ったろ？
ルールは簡単で、制限時間までにセンセは俺が出す問題に正解するだけでいい」

「問題？」

ってことは、ゲームの内容はクイズってコトか？

確かに単純だが、クイズの内容次第で難易度がかなり変わっちまうな…

「じゃあ早速始めるぜ？
制限時間は…そうだな。
日の出までだ」

日の出？

今から日の出まで5時間ぐらいあるぞ？

そんな難しい問題なのか？

「準備はいいな？
では問題だ」

「……」

……どんな問題なんだ？

そして奴の口から出た問題は―

「我、汝の真名を問う」

―俺にとって、どんな問題よりも難しい問題だった

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第27話「汝の真名を問う」（後書き）

……。

ナナシ
「…で？さっきと同じような状況だが、何か言うことはないのか？」

ナ、ナニモナイヨ？

ナナシ
「また嘘ついてんじゃねえよ！！
てめえシリアス展開に耐えれなくなってギャグ入れただろうがっ！！
なんだＥＳって！？」

しょうがないんだ！
もうギャグを書かない内容に耐えれなくなったんだもん！
それにこの作品はギャグメインだからいいんだよ！！
…ちなみにＥＳって、ＤＳのパクりｗ

ナナシ
「開き直った！？」

自分は少しだけど久々にギャグを書けて満足だ！

ナナシ
「そのわりにはギャグのレベルが酷かったけどな…」

ぐはっ！？（吐血）

ナナシ
「それに本当に意味が伝わりにくい部分もあったし」

もう言わないで！？
俺のライフは０なのよ！？

ナナシ
「…ったく、こんなんじゃ次回が心配だぜ…」

次回はきっと大丈夫！

ナナシ
「…本当かよ？」

第２８話「その男の名は」（前書き）

前書きで書くことがない件

ナナシ
「……なら書くなよ」

でも書かないと寂しいじゃん。

ナナシ
「読者からしたら、とっとと本文読みたいと思ってるぞ」

マジ！？

ナナシ
「当たり前だろ」

ならば本文をどうぞ！

ナナシ
「……調子いい奴」

第２８話「その男の名は」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「俺の……真名だと？」

神から告げられた内容は、俺を驚かすのに充分な内容だった。

―真名―

すなわち真なる名。
己の魂に刻まれた神聖なモノだ。

普通の奴なら簡単に答えられるだろう。

だが、俺は―

「ふざけんなよ…！
俺の真名はお前が俺から奪ってたんだろうが…！」

俺には…答えることができない…！

「日の出まで俺はここにいる。
せいぜい足掻くんだな」

神は俺の叫びなんて無視して話を終わらせる。

話すことがなくなったのか、奴は俺に背を向ける。

「（答えを見つけるか時間が来るまでは話をするつもりはないってことか…）」

ならば俺はゲームを始めなければならない。

それがどんな無茶な内容だとしても、時間は刻一刻と迫っているのだから…

・〜・〜・〜・〜・〜

あの後、俺達はあの場所をあとにしてエヴァの別荘に来ていた。
貴重な時間を使ってまで別荘に来たのには勿論理由がある。
ここなら中で一日過ごしても外では一時間しか経たない。
この中ならあの場所に戻る時間を含めても、まだ3日以上余裕がある。
つまりは時間稼ぎにはうってつけの場所ってわけだ。

「「「……」」」

今この別荘の中にいるのは俺達先程のメンバーと、エヴァファミリー。
それと途中で合流したさよだ。
…なんでさよがいんの？

「ひどっ！？
心配した人に向かってその態度はないんじゃないですか！？」

「当然の疑問だろ」

てか心配ってなんだ？
事情知ってんのかコイツ？

「まあまあ、気にすんなや姉ちゃん」

「うぅ…ありがとうございます泥棒さん…」

「泥棒やなくて小太郎な」

それで何でお前らは仲良さそうなんだよ？
俺が部屋にいない間に何があったんだよ？

「……」

俺は改めて周りの皆の顔を見渡す。
皆その表情は暗く、その空気はどこか重い。

その空気の中、口を開いたのは―

「……そろそろいい加減話したらどうなんだ？」

エヴァだった。

「……何のことだ？」

「とぼけるな。
お前とあの神の関係に決まってるだろうが。
コイツらもお前が話すのを待っているようだしな」

そう言われ、コクコクと頷く他のメンバー。

…いきなり核心に触れてきやがったな。

「……長くなるぞ？」

「構わん。まだ時間はあるし、事情を知らないままでは手伝いようがない」

これは…何があっても聞くつもりだな。

なら―

「いいぜ。
じゃあお前らに最初に知ってもらわなきゃならないコトがある」

話してやるよ。

「俺は一度死んでるんだ」

俺と奴との関係…ってのをな。

・・・・・・・・

「―ってワケだ」

俺は前世で死んでから麻帆良に来るまでの話を一通り話した。

といっても、この世界が前の世界では漫画だったことは話してないが。

「あとはエヴァは知ってると思うが、教会に引き取られて学園に通い、卒業してからは神父として生きていた。
そしたら学園長に頼まれ、ネギと同時期に学園で教師することになって今にいたる」

奴との関係の話だけをするつもりだったが、結局俺がこの世界に来てから今にいたるとこまで話しちまったな…

「「「……」」」

……皆リアクションがないんですけど。

人に話を訊いといて無反応ってのはヒドくないか？

「……ナッシーは」

「ナッシー言うな」

そんな中ようやく反応してくれたのはこのかだった。

「この世界に来て……後悔しとる？
前の世界に戻りたいと思っとる？」

…なんちゅー質問してんだよ。
他の奴らもその質問の時だけ顔を上げんなよ。

「……奴のことは恨んではいる。憎くも思ってる。
はっきり言って殺したいとも思ってる」

けどな―

「この世界に来たコトに関しては一度も後悔したことはない。
そのおかげで…あ～…なんだ、お前らと出会うことが出来たんだ。
そのコトにだけは、不本意だが奴に感謝してもいいかもしれん」

「「「ナッシー…」」」

「「「ナナシ先生…」」」

な、なんだか妙に恥ずかしいぞ!?
お前らその視線止めろ!?

「だ、だから、あの世界のコトを懐かしいと思う時はあるけど、戻りたいとは思わない。
今の俺の居場所はこの世界だけだと思うからな」

これが偽りのない俺の正直な気持ちだ。

「ナナシ……」

「兄ちゃん…」

「旦那……」

「ケケケ」

だからその視線止めろ！？エヴァまでなんだよ！？

ていうかチャチャゼロは何か喋れ！

「はい以上！
以上で話は終了！
もう話すことはなんもないからな！」

「…ならさっさとナッシーの名前を思い出す方法を考えましょ」

「そやね」

……およ？

「私も微力ながら力になります」

「ぼ、僕も！」

「兄ちゃんには飯の礼があるからな。
俺も力になったるわ」

刹那、ネギ、それに小太郎まで…

「もちろん私も、他の皆さんも力になりますよ！」

さよの言葉に、他の皆は黙って俺を見つめる。

お前ら……

「……ったく、ガキが何バカ言ってんだか」

「ちょっ！？
力になるって言ってんのにバカ扱いはないんじゃないかしら！？」

「うっせよーバカ筆頭のバカレッドが」

「ひどっ！？」

さっきまでの空気が軽くなった気がした。

自然と不安もなくなった気がする。

「バカだけど、これ以上なく心強い。
頼りにさせてもらうぜ？」

…今回のゲーム、俺に負ける要素は最初からなかったのかもな。

「よーし！
なら早速方法考えよ！」

「記憶をなくされたと考えるなら、ショック療法とかどうでしょうか？」

「「それだぁ！！」」

えっ？ちょっお前ら？

「いやいやもっとよく考えようぜ？
ショック療法ぐらいで奴から奪われた名前を思い出すなんてことは―」

「なら私がやります！」

「…スイマセンさよさん。そのやる気は嬉しいんですが、ショック療法は無駄だと思うので、その浮かびあげた岩を降ろしてはくれま

せんか…？」

ていうかどっからそんな岩見つけてきたんだよ！？

「無駄かどうかなんてやってみないとわからないじゃないですか！！」

「今そんな熱血なセリフは聞きたくな…あーっ！？」

・　・　・　・

「…んっ…？」

「あっ、目が覚めましたか？」

「ここは……」

いつの間に俺は寝てたんだろう？
確か神とゲームをすることになって、そんで時間を稼ぐために別荘に…別荘に？
そうだ、ここは別荘で…

「なあ？
俺別荘に入ってから何してたんだ？
それと後頭部がやけにズキズキするんだが……」

「……マズいですよさよさん。
思い出すどころか、逆に記憶忘れさせてるじゃないですか」

「だ、黙ってれば大丈夫ですよ」

二人でボソボソとこっち見て何話してんだ？

「…どうかしたのか？」

「「なんでもないです！」」

「そ、そっか」

なんか気になるが、そう言うなら仕方ないだろう。

「あれ？目覚めたんだ？」

すると他の部屋からゾロゾロと残りのメンバーが入ってきた。

「ああ、悪いな。
なんか疲れたせいか、いつの間にか寝ちまったみたいだ」

「…？何言ってんのよ？
ナッシーは寝てたんじゃなくて気ぜｔ「わあああ！！そうです疲れてたんで寝てたんですよ！！」……なんなの？」

さよが挙動不審すぎる。

……これはアレか？
気にしたら負けってやつなのか？

「…まあいいわ。
私達、ナッシーが寝てる間に２つ目の方法を考えたのよ」

「おおっ！」

……ん？２つ目？

「さっきは肉体的なショックだったんだから、今度は精神的なショックを与えればいいんじゃないかしら」

「……え゛っ？」

さっきの肉体的ショックって言葉も気になるけど、精神的ショックを与えるって何！？

「はい、じゃあ縄用～意」

「縄！？」

何に使うの！？

「むふふ…一度こういうのやってみたかったアルよ」

イエローが用意された縄をカウボーイのように頭上で回転させる。

その縄を俺に向かって投げて…って！？

「うおっ！？」

「捕獲完了！」

「ナイス古ちゃん！」

イモムシ状態になった俺をレッドが持ち上げて屋外の端まで運びだす。

「あの…レッド、いや神楽坂さん…」

「何よ？」

「俺の目が確かならこの先はヤバいんですけど？この高さから落ちたら軽く死ねるんですけど？」

「そのための縄よ」

「ちょっ！？」

この縄ってまさかのバンジー用なの！？
そのわりには縄が細すぎじゃない！？

「大丈夫だって。
安全は保証するから」

「この縄のどこに安全が保証されてると!?
ていうか縄だったら途中で宙ぶらりんになるんですけど!?
間違いなくその衝撃で死ぬと思うんですけど!?」

せめてゴム性のモノにしてくれ!

縛ってる箇所が違うだけで処刑方法と変わらないんだけど!?

「これも名前を思い出すためよ。
男なら黙って飛び降りなさい」

「結果見えてるじゃん!
絶対無駄だって!」

「無駄かどうかなんてやってみないとわからないじゃない!」

「そのセリフなんかデジャブ…って、あーーっ!?」

・・・・・・・

「……走馬灯が見えた」

途中で縄を切って、身体を強化して海に飛び込まなかったら死んでたと思う。

咄嗟の状態だったが、我ながらナイスな判断だったと思う。

「うーん……上手くいくと思ったんだけどな」

「本当にそう思ってたなら一度頭の中身を取り替えてこい！」

だからバカレッドって呼ばれるんだよ！

「しかしショック療法が駄目となると…」

「他に方法が…」

「こんだけ人数集まって、わずか2つでネタ切れってどういうこと!?

何!?頼りにしてた俺が間違ってた!?」

急に不安になってきたんですけど!

「なあ旦那?」

「ん?どしたカモ?」

「仮契約(パクティオー)すればいいんじゃね?」

……仮契約?

「……あっ」

「カードが出てくりば、それに名前も書いてあるんだしよ……って、まさか旦那忘れてのか?」

「すっかりと…」

そうかその手があったか。
カードに書かれる名前は偽名ではなく本名だからな。カードが出れば俺が思い出す必要はないんだ。

「ならさっさと仮契約しちまおう」

「それはいいが…ナナシ」

「なんだよ？」

「誰とキスするんだ？」

…キス？

キスってつまりマウストゥマウス？

日本語だと接吻と呼ばれるアレ？

「……はあっ！？」

き、キス！？
確かに仮契約にはキスの方法もあるけど、俺は血で契約するつもりだったんだけど！？

「無理だ。
血での契約は手順を踏む必要があり時間がかかる。
なにより、その契約陣を発動出来る奴がいない」

「え、エヴァは発動できないのかよ？」

「私に出来るのは人形（ドール）契約だけだ。
何しろ人形以外の従者は必要なかったしな」

「俺っちはキスでの陣しか発動できねえし」

ええい役立たず共め！
…と叫びたかったが、叫んだ瞬間エヴァに殺られる気がしたんで止めておく。

「つまりは仮契約するなら方法はキスでの方法しかないってことだ」

ま、マジかよ……

「現在ここにいるメンバーでマスターに相応しいのはぼーやに、近衛木乃香、それと私ぐらいだ」

「マスターがロリバアだけはマジ勘弁」

「……」

「当たってる！？
物騒なモンが首に当たってるんだけど！？」

「当ててるんだよ」

「そのセリフは別の場面で聞たかった！！」

いくら怒ったからって首に『断罪の剣』を当てるのは駄目だろ！？
冗談なんだから軽く受け流せよ！

「…じゃあどうする？
私を除くのなら、残りはぼーやか、近衛木乃香の二人だぞ」

…何その究極の選択肢？
どっち選んでもＢＡＤＥＮＤな気がするんだけど…

―くいくい

そんな考えをしていると、不意に袖を引っ張られた。
嫌な予感がしつつ、後ろに振り返ってみると―

「えへへへ…」

「……何か俺に用か？」

ほんのりと頬を紅く染めたこのかがいた。

……何この展開？
俺にいったいどうしろと？

「近衛木乃香で決定だな」

「まだ何も言ってないんですけど！？」

つーかなんでお前が勝手に決定してんの!?

「覚悟を決めろナナシ」

「何の覚悟!?」

俺が慌てている間にも、カモが勝手に魔方陣を地面に書いていく。

「待てっ!
てめえカモ!
俺を裏切んのか!?」

「旦那……俺っちは旦那に幸せになってもらいたいだけなんでさ…」

「裏切り者ぉぉぉ!!」

俺に味方はいないのか!?

そう思ってるとネギが俺の方に近づいてきて―

「ナナシ先生！
僕だって仮契約してるんだから大丈夫ですよ！」

「大丈夫じゃねえ！！
てかお前と一緒にすんじゃねえぇぇぇぇ！！！」

慰めになってねえし！
そのセリフで俺が安心するとでも思ったか！？

「出来たぜ！」

俺の抵抗もむなしく、ついにカモが陣を完成させてしまった。
その陣を挟んで、俺とこのかは向き合う。

「「「きーす！きーす！
きーす！」」」

「お前ら小学生か！？」

しかしどうすればいい！？

名前を知るためには仮契約をしなければならない。
それをやる方法がキスだってことも仕方ない！
けど、相手が自分の生徒ってのはマズいだろ！？
まだこのかは中学生なんだぞ！？
それを２３の男が唇奪うのは犯罪だろ！？

「んっ……」

そしてこのかは黙って目を閉じるんじゃねぇぇぇ！
嫌なら嫌って言っていいんだぞ！？

「さあ旦那！ＧＯ！！」

ええい覚悟を決めるしかないのかナナシ！？
今が漢を見せる時か！？

「くっ…！」

俺はヤケクソ気味に相手の腕を取り、引き寄せる。

そして―

「んっ…！」

「むぐぅっ！？」

「あっ…」

「「「なっ！？」」」

「『ぱ、仮契約ーッ』！」

瞬間、俺達の下に書かれた魔方陣が光を放つ。

……おい？

これどれくらいやったらいいんだ？

もういいのか？

それともまだなのか？

「も、もういいぜ旦那…」

おお、そうか！

「「ぷはっ！」」

はい、それじゃあ皆さんカウントダウンお願いしまーす。

3

2

1

「「おえええええ！！」」

やっちまった！

やっちまったよ俺！

でもノーカンだノーカン！今回は緊急事態だからノーカンなんだ！

「い、いいイキナリ何するんですかナナシ先生!?」

「うるせぇ!
俺だってしたくてしたかったワケじゃねえ!!」

そう、俺はキスをしてしまった―

「もう僕お嫁に行けません!」

「元から行けねえよ!」

―ネギと。

あの時俺の隣にいたネギの腕を取り、このかを魔方陣の外に押し出して、ネギとキスした。

だって仕方ないだろ!?

自分の生徒にキスするわけにはいかないじゃん!?

「誰か殺菌してくれ!」

「僕のセリフですよ！？」

色々と俺の中で失ったモノがあるような気がする…

「…むぅー。ナッシー、そんなウチとキスするんの嫌だったん？」

不満げな表情をしたこのかが話かけてくる。

「…ばーろー。そういう大事なものは好きな人のためにとっとけ」

俺みたいなオッサンがファーストキスだったら後々後悔するだろうしな。

「…まあナッシーらしいっちゃらしいわね」

「…ですね」

人を駄目な奴を見る目で見るのは止めろや！

「それでカードは？」

っと、そうだ！
そっちが大事なんだ！

「おう。出たぜ旦那」

カモから一枚のカードを受け取る。
そしてそのカードに書かれた名前を俺は見て―

「これは……！」

・～・～・～・～・～

俺達は再び世界樹前のステージにやって来た。

……約束の時間だ。

「…時間ギリギリだな。答えは手に入れたか？」

「……ああ」

「ならば訊こう！汝の真名は！？」

「俺の……」

カードに書かれた真名…

「俺の真名は……」

それは―

「名無し（ナナシ）。
それが俺の真名だ」

to be continue ？

第２８話「その男の名は」（後書き）

はあ～満足満足。

ナナシ
「お前前回に続きシリアスが嫌だからって無理矢理ギャグ入れてんじゃねえ！」

書きたいことを書く！
これが一番！

ナナシ
「名言っぽく言ってんじゃねえよ！」

実際そうじゃない？

ナナシ
「いやまあ…そうかもしれんが」

それはともかく……しちゃったねキス。

ナナシ
「…何も言うな。
てか最後の真名って…」

次回ちゃんと説明するよ。
…納得できるかどうかはわからないけど。

ナナシ
「おいっ！？」

では。

第２９話「ナナシ」（前書き）

更新遅れてすいません。

ナナシ
「ダメ作者だな」

…返す言葉もありません。

今回の展開、そして説明が納得いかない可能性があるかもしれませんが、そこは私の力不足ということでご了承ください。

そして今回、前半シリアス、後半ギャグとなっております。

では。

第２９話「ナナシ」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「名無し（ナナシ）。
それが俺の真名だ」

それが俺が仮契約によって得た答え。

「……本当にその回答でいいのか？
何度も言うが回答権は一度のみなんだぜ？」

神が俺に最終確認をとる。

いつもの俺ならここで迷いが生まれたかもしれないが、不思議と今の俺に迷いはない。

「ああ。
これが俺の答えだ」

「…理由を聞かせろ。
なぜそこまで自信を持って答えられる？
お前のその答えに根拠はあるのか？」

根拠か。
それならあるさ。

「…俺はずっと勘違いをしていた」

「……なに？」

「俺の真名ってのは、前の世界…この世界に来る前の名前かと思っていた」

「……」

「けど―」

俺はそこでいったん言葉を区切り、懐からある物を取り出す。

「それは……」

「仮契約（パクティオー）カード…。
契約の精霊が、その者の魂を書き写したモノだ」

俺はカードの表面を神に見えるよう裏返す。

「……空白」

そう、俺のカードには名前の箇所だけ何も書かれていなかった―

「よく考えてみれば当然だよな。
俺の真名はお前が奪ったんだから、今の俺に真名があるわけない」

名前というなら、俺には
ナナシというナギに付けられた名前があるが、それは真名とは違う。

だからこそ俺の真名は名無し。
ナナシではなく、名無し。

「これが俺の答えだ」

「……」

神が沈黙する。

その沈黙ははたして正解故の沈黙なのか、それとも―

「……マスターは誰だ？
お嬢様か？それともまさか闇の福音か？」

「お、お前には教える必要はない！」

もはや黒歴史になっている内容をこれ以上他人に、ましてや神に教えてたまるかよ！

「……主人公か？」

「ナ、ナンノコト？」

「なるほど主人公がマスターか」

「バレた！？」

まさか一瞬でバレるだなんて！
腐ってもやはり神は神だということなのか！？

「くっくっく。まさかファーストキスが男、しかも１０歳の少年とはな」

「うっさい！あんなんノーカウントだ！」

「あっはっはっは！」

くそぅ……人の黒歴史もんの出来事を嘲笑いやがって…！
やっぱコイツ性格が歪んでやがる！

……いや、まあ俺も逆の立場なら確実に笑ってたけどな？

「……本当にセンセは俺を楽しませてくれるな」

「……あン？」

一人で勝手に笑いだしたと思ったら、今度はいきなりなんだよ？

「なに、改めてセンセの良さを実感しただけさ。
もしセンセが女性だったら俺は今すぐにでもディナーに誘ってたね」

「気持ち悪いコト言うんじゃねえよ。
もし俺が女性だとしてもお前なんてお断りだ」

「それは残念」

…その顔は全然残念そうに見えないんだが。

てか、何で俺は自分の存在が賭けたゲーム相手と世間話してんだよ？

いいから正解発表しろや。

「ああ、それ？
心配すんな。正解だから」

「……は？」

「センセの真名はない。
まさに名無しってのが正解だよ」

「お、おう？」

せ、正解したのか？

正解したなら嬉しいんだが、もう少しシリアスな空気で発表すると思ってたから、あっさり発表されたのはちょっと…なあ？

「…なら俺の勝ちってコトでいいのか？」

「ああ、センセの勝ちで、俺の敗北だ。
センセは見事俺とのゲームに勝利した。
約束だ。
俺は力と共にセンセに取り込まれてやるよ」

そう言うと、奴の身体が足下から粒子のように消えていき、その粒子は俺の身体に流れてきた。

こ、これは！？

「これでセンセは本来の力と、俺の力を手に入れる。…まあ俺の力といってもせいぜい魔力量が上がり身体が頑丈になるぐらいだけどな」

……え？それだけ？
もっとチートになることを期待してたんだけど…

「贅沢言うな。
これだけでもセンセには充分なハズだぜ？
そもそもその力でさえも本来なら人間の手には余るシロモノなんだからよ」

そんなもんなのか。

まあ、確かにそれだけでも充分ありがたいけどな。

すると、奴は俺から視線を外し、空を仰ぎ見る。

「……ふぅ。
これで俺の役目も終了か。もともと分身なんだから、消える覚悟はいつでもあったんだが……」

神の話してる最中、ようやく太陽が昇りだしたのか、俺達のいるステージに光が射し込む。

その光を浴びる神は、その名に相応しく神々しい雰囲気を纏っており、俺は不覚にもそんな神に見惚れてしまった。

「もう少し…もう少しだけでいいからセンセを見ていたかった」

「神……」

なんで消える直前でそんな顔すんだよ…

そんな顔したら、勝ったっていうのに喜べないじゃねえか…

「そしたらもっとセンセのおもしろ恥ずかしい姿を見れたっていうのにな！」

「消えろ！今すぐ！！」

そうだ…コイツはこういう奴だった…！

消えるからって少しでも感傷的になった俺が馬鹿だった！

……ん？消える？

「っ！？待て！
お前に！お前の本体はどこにいるんだ！？
どうすれば会える！？」

「いづれその時が来る。
今はただ力を蓄えてな」

その時っていつだよ！？
と、俺がさらに問い詰めようとするが、奴の身体は消えかかろうとしていて―

「じゃあなセンセ。
この調子で本体を楽しませてくれ」

「待っ―！？」

俺が叫び、手を伸ばした時には、もう目の前には誰もいなかった…

そして―

「……終わったか」

「……ああ」

今まで黙っていた皆がようやく口を開いた。

「……あの先生？」

「ん？どした、さよ？」

「先生には真名はないってことなんですよね？」

「そういうことだな」

「だったらこれから何て呼べばいいんでしょうか？」

「あっ、それ私も気になってた」

「ウチも」

他のメンバーも同じように頷いていく。

…なんだよ、そんなことかよ。

俺の呼び方なんて決まってるじゃねえか。

「今までどおりナナシって呼んでくれ。
これでも結構気に入ってる名前なんでね」

「わかったナッシー！」

「その呼び方は気に入ってないから！！」

なんでナナシって呼んでくれって頼んだ瞬間違う呼び方するんだよ！？
その呼び方は俺が嫌ってるってわかってるだろうが！

「…で？例の力ってのはちゃんと取り込めたのか？」

「ああ。身体の中に確かに今までとは違う力が……力が……」

あ、あれ…なんだ…？

身体が熱くて…なんだかダルいような…

「……きゅう」

「ナナシ！？」

「「「ナナシ先生！？」」」

「「「ナッシー！？」」」

だからその呼び方は止めろって…

・～・～・～・～・～

「…シー！ナッ……！」

…なんだか声が聞こえる。
重たく感じる目蓋を無理矢理開いてみると―

「ナッシー!?
気がついたん!?」

「…ナッシー言うな」

目の前に顔がドアップのこのかがいた。

……近いんですけど?

「それじゃあ私は皆さん呼んできますね」

「お願い」

そう言い残し、部屋から出ていくさよ。

…お前もいたんだな。

「……ここは?」

「別荘やよ」

「別荘？」

言われてみればそうだな。
てか、最近俺別荘の使用頻度高くね？
もういい歳なんだから少しは使用すんのを控えなきゃいけないんだが…

だって老けちゃうじゃん？

「ほんまよかったわナッシー！」

「おっと」

目に涙を浮かべたこのかが抱きつこうとしてきた。

……もちろん避けたが。

「……何で避けるん？」

「……なんとなく？」

避けた時にベッドから出たから気付いたけど、今俺上半身裸じゃん……

何で裸なの俺？

てかこのかは裸の状態の俺に抱きつこうとしたの？

下手したら間違い起きちゃいますよ？

「ふふふ……。ウチから逃げられるとは思わん方がいいで？」

「君そんなキャラじゃなかったよね！？

俺が寝ている間に何があったの！？」

成長（？）したのは嬉しいけど、教師としては色々と複雑なんですけど！

「「……！」」

俺とこのかは睨み合い、距離を詰めては離すというやり取りが続き、両者の間に緊迫した空気が流れていたが―

「…何してるんですか二人とも？」

「「……さあ？」」

皆を呼びに出ていってたさよが戻ってきたことで何とか妙な対決が終了した。

…ホント何してたんだ俺？

「身体の調子はどうだナナシ？」

「エヴァか。身体はそうだな…」

身体を曲げたり捻ったりしてストレッチして調子を確認してみるけど―

「いつも通りだな。むしろ絶好調だ」

身体が軽く感じる。

こんなに調子がいいのは今まで初めてじゃないか？

「そうか。ならお前が倒れてからの状況を説明してやる」

「頼む」

確かあの時、急に身体がダルくなって意識が遠くなって……

「まずお前は三日間ずっと眠っていた」

「三日間!?」

そりゃあこのかが抱きつこうとするわけだわ…

「でも何でそんなに…」

「兄さんは４０℃以上の熱を出して倒れたんです」

「４０℃以上!?」

茶々丸がそう補足してくれたが、４０℃以上って……よく生きてたな俺。

ていうか、俺さっきから驚いてばっかだな。

「原因は兄さんの体内魔力が暴走したからです」

体内魔力って…

「神の力のせいだろう。
奴は力を取り込めば魔力量が上がると言っていた。
おそらく、その急に上がった魔力に身体が耐えられなかったんだ」

「…身体が耐えられなかったって、そんな魔力上がったの俺？」

まるでそんな気配ないんだが…

「ああ。量だけでいえば、ぼーやや近衛木乃香を上回っただろう」

「マジで！？」

英雄の息子と東洋一の二人の魔力を上回ったって、もやはチートじゃんそれ！

……耐えられなかったみたいだけど。

……ん？

「じゃあ何で今大丈夫なの俺？
お前の説明が正しいなら、俺まだ倒れてると思うんだけど…」

なのに身体は今なんともないどころか、絶好調なんだが…

「……ふん。左耳に触れてみろ」

「左耳？」

よくわからないが、言われた通りに左耳に触れてみると―

―シャラン

「おろ？」

そこに何か違和感というかコレは…？

「兄さん、鏡です」

「サンキュ」

手渡された鏡を覗き込んでみると、俺の左耳には―

「……ピアス？いやイヤリングか？」

紫の宝石のようなイヤリングが付いていた。

「これは……」

「魔力封じのイヤリングだ。
それを身に付けていれば持ち主の魔力を封じることができる。
…もっともそれでも完全に封じることは出来なかったがな」

確かに今の俺の身体からにはある程度の魔力が感じられる。

ある程度っていっても、今までの俺以上、一般の魔法使いレベルの魔力があるけど。

……何この微妙なレベルアップ？

「いづれ魔力が身体に馴染むだろう。
その時までは外さず付けとけ。
安易に外したりしてたら……死ぬぞ」

「怖っ！？
な、馴染むまでどんくらいかかるんだよ！？」

「さあな。明日には馴染んでるかもしれんし、一週間、一ヶ月、一年経っても馴染まないかもしれん。
まさにそれは神のみぞ知るってわけだ」

何上手いコト言ったぜ、みたいな顔してんだよ…
別に上手くねーよ。

「じゃあ今の俺って……」

「魔力量は一般レベルで、普通の奴よりは頑丈ってだけだな」

「ＮＯＯＯＯＯ！！
俺の夢のチート生活かあああああ！！！」

命賭けて手に入れた力がこれかよ！？
もっと俺ｔｕｅｅｅｅ！的な展開を期待してたのに！
これじゃあ宝の持ち腐れもいいとこだ！

「……地道に強くなっていくしかないってことか」

「それが一番だ」

……はあ。
期待して損した。

「……俺帰るわ」

「そうか。ならさっさと出てけ」

「…少しは励まそうとか思わないわけ？」

「ざまあｗ」

「薄情だねお前！」

まだバ〇ァリンの方が優しいわ！

人の落ち込んでる姿見てざまあはないだろ！

「まあまあ！元気だして帰りましょうよ先生！」

「姉ちゃんの言うとおり早く帰ろうや。
俺もう腹ペコペコやし」

「そうだな。なら帰りに何か買って帰るか」

何買おうか考えつつ、さよと小太郎と共に部屋を出ていく。

……。

……。

「―って、おかしいだろうが！？」

何当たり前のように人ん家に帰ろうとしてんの！？

俺何も許可してないんですけど！

「まあまあまあ些細なことは気にしないでください」

「勝手に人ん家に帰ろうとしていることは些細なことじゃないからね！？」

「兄ちゃん！今こそ漢をみせる時や！」

「お前は黙ってろ！」

あーっ！もうホント最悪だな俺！

そんなコト思ってると、不意に頭の中で神の奴がほくそ笑む姿が思い浮かんだ。

なんだか奴の思い通りに楽しませてしまっている気がするが、やっぱ俺にはこんな雰囲気が一番かもな。

おまけ

「……何コレ？」

家に帰った俺が最初に見た光景は、荒らされた部屋の光景だった。

窓は割れ、家具は倒れ、所々破損している。

「あー…すまん兄ちゃん。あの悪魔のオッチャンと戦った時に色々壊してもうたわ」

「し、仕方ないんですよ！なにせ緊急事態だったんですから！」

……。

「……部屋間違えたな。
俺の部屋はきっと隣だったハズだ」

「「いやいやいや！」」

「目を背けたくなるのはわかりますけど、現実逃避はやめましょうよ！
辛くなるだけですよ！？」

「それに玄関前に思いっきし『管理人室』って書いとったで！」

「うっさーい！！
現実逃避でもしないと精神保たないんだよ！
もう俺のライフは０なんだよ！！」

てか寝る場所もないぐらい散らかってるとか、どんだけ！？

……ったく、最後も本当にシマらねえなおい。

まあ、それも俺らしいっちゃ俺らしいか。

「……しゃあねえ！
なら頑張って片付けるとしますか！」

「ここは兄ちゃんの部屋なんやから片付けは兄ちゃんがするべきやろ」

「私は触れることが出来ないんで無理です」

「おいっ！？」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第２９話「ナナシ」（後書き）

ようやく悪魔・神編が終了した…

ナナシ
「長かったな…。
てか今回俺のアーティファクトが登場すると思ってたんだが…」

まだそれは出番なし。

じ、実はアーティファクトの案を何も考えてなかったとかはないからね！？
ギャグ用にするかガチ用にするか悩んだりしてるわけじゃないからね！？

ナナシ
「…悩んでやがるな」

じ、次回は！待ちに待った（↑誰が？）番外編です！
これはもう執筆してあるので、三日以内には投稿したいと思います！

ナナシ
「…番外編なんて皆忘れてたんじゃねえか？」

そ、そんなことない！
きっと一人ぐらい期待していてくれた人がいる……ハズだといいな…

ナナシ
「自信ないのかよ！？」

では。

季節外れなんて関係ない！春特別番外編「花見」（前書き）

番外編投稿！
やっと投稿できました！

ナナシ
「もう花見って時期じゃないんだけど…」

そして今回久々のギャグオンリー！！

ナナシ
「なんかお前イキイキしてんな…」

※では番外編を読む前の注意事項を。

・この話は本編の内容とは関係なく、時系列（てか時期）がズレています。

・番外編なんでカオスな内容です。

では、どうぞ。

季節外れなんて関係ない！春特別番外編「花見」

―季節は春。

日本では春の訪れを告げるかのように、景色はあたり一面桜色に染まっていた。

それはもちろん麻帆良でも変わらない。

そして此処は麻帆良でも有数の花見スポットである。

そんな場所に今日、ひときわ賑やか集団が花見に来ていた―

ｓｉｄｅ　ナナシ

「花　見　だぁーっ！」

「「「いえーいっ！」」」

麻帆良に咲く桜の花も満開になったという知らせを聞き、俺たち3－Aとその他の連中達と一緒に花見に来ていた。

「おらぁ！
今日は全員無礼講で構わねえ！
遠慮した奴はブッ飛ばすからな！」

「ナッシーはいつも無礼講で遠慮ないじゃない」

「ヒーハーッ！！」

「……聞いてないわね」

あん？
仕事はどうしたって？

はっ！そんな野暮なこと訊くんじゃねえよ！

今日はちゃんとジジイに休みを申請してきてっから、誰にも咎めら

れることもなく楽しめるんだ！

つまり今の俺は自由の翼を手に入れている！
自由のない籠の中の鳥とは違うんだよ！

「ナッシー…、なんかいつも以上にイキイキしとるなあ…」

「やはり久々に丸一日休めるからじゃないですか？」

「ナッシーはいつでも休んでる気が……いや、もう何も言わないわ…」

外野が色々とうるさいが、今日は見逃してやる。
なぜなら今日は花見だからな！

「さあ野郎ども！
好きなだけ飲めええええ！」

「「「おおーっ！！」」」

「ちょっ！？
私達まだ未成年…！？」

「そんなん関係ねえよ！
だいたい飲んだからってバレなきゃいいんだよバレなきゃ」

「教師としてあるまじきセリフ！？
あんたそれでも教師か！？」

失礼な。
これも一種の社会勉強だというのに。

「だ、駄目ですよナナシ先生！
未成年の皆にはジュースじゃないと…！」

ネギが優等生ぶって俺に注意してくる。
なに馬鹿言ってんだかコイツは。

「いいからいいから！
固いこと言わずお前も飲めって！」

俺は近くに置いてあった酒ビンを直接ネギの口の中にぶちこむ。

「うっぷ！？」

「ネギーッ！？」

「どうだぁ？
コレが大人の味だ」

「……きゅう」

「ネ、ネギ！？
ちょっと大丈夫！？」

はっはっはっは！
この程度で倒れるなんて天才少年も情けないな！
それともまだ大人の味は早かったか！

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　アスナ

花見を開始してから、もうどれくらい経ったかしら？
詳しくはわからないけど、それなりに時間は経ってると思う。

それなのに―

「あーはっはっはっは！」

…あのテンションの高さはいったい何なんだろう？

「ナッシー…もう完璧にデキあがってもうたな…」

「……あんなに酒癖な悪いとは思いませんでした」

自分の生徒に絡んでは酒を飲ませ、また別の生徒にも絡んでは酒を飲ませる。
さらにまた別の生徒に……っていう無限ループが続いている。
…てか未成年に飲酒させるってバリバリ法律違反じゃない。
もうそれ犯罪よ？
他の先生達も好き勝手飲んでないで止めなさいよ…
（周りから見えてないけど）必死に止めてるのさよちゃんだけじゃない…
「ああ……どうやらリミッターが外れてしまったようだね…」
私達の後ろから、なにやら困ったような声が聞こえたので、振り返ってみると―
「た、高畑先生!?」
「やあアスナ君。それにこのか君に刹那君も」
私の憧れの人がいた。

「高畑先生、リミッターとはいったい…？」

私達全員が思ってる疑問を刹那さんが代表して訊いてくれた。
その問いかけに高畑先生は少し間をおいて答えてくれた。

「……彼はね、本来なら酒に強いし、滅多に酔うことはないんだ」

「ほえ？でも今は…」

うん。今の状態のナッシーを見るかぎり、とても酒に強いとは思えないんですけど？

「それとね、意外かもしれないけど彼は普段自分を抑えて生活してるんだ」

「「「あれで！？」」」

三人共驚いてハモってしまったけど仕方ないと思う。
だって、あのナッシーが自分を抑えてるなんて…

「彼が君達と同じくらいの年齢の時…学生時代の時は酷かったね。

よく新田先生のお世話になっていたのを覚えてるよ」

お世話になってるのは今も変わらない気がするけどね、と笑いながら付け足す先生。

「それでも高校卒業して、本格的に神父の道を目指し始めてからはだいぶ落ち着いてきて、自分を抑えられるようになったんだよ」

「はあ～…、ナッシーも若かったってコトかしらね」

精神年齢が子供の頃から成長してないって思ってたのに、アレでもちゃんと成長してたのね…

「……でもね、苦難から解放され、テンションが高い時に飲んだりすると―」

の、飲んだりすると？

「自分を抑えることができなくなり、簡単に酔っぱってしまう。酒癖も悪くなるというオマケ付きでね」

だからあんな状態に…

「でも酔っぱらってテンションが高くなるぐらいなら問題ないのでは？
泣いたり怒りだしたりするよりは、まだマシかと思うんですけど…」

確かにそれはそうね。

「…君達は何もわかってない。
確かに今はまだマシだが、これ以上彼に酒を飲ませると―」

「「「飲ませると？」」」

「……」

……？

何も答えない高畑先生の顔を覗き込んで見ると、高畑先生の頬には綺麗な雫が流れており……って！？

「な、何があったんですか高畑先生！？」

何で泣いてるんですか！？

「……さて、僕は被害に巻き込まれたくないからね。そろそろ行くよ」

「えっ!?……ちょっ、先生!?」

そう言い残して私達の場所から立ち去る先生…。

被害ってなんですか!?

「……行っちゃった」

「…行っちゃいましたね」

……高畑先生に対してあんまりこんなコト言いたくないんですけど、何しに来たんですか…?

「それにしても高畑先生の身にいったい何が…?」

「それよりナッシーにこれ以上酒を飲ませたどうなるのよ…」

「とにかくもう飲ませなければいいんやろ？」

「それもそうね」

これ以上飲ませたり身体にも悪いと思うし。

そう思いナッシーの方を見てみると―

「せ、先生！
いくらなんでも飲み過ぎですよ！
もうベロンベロンに酔っぱらってるのに、これ以上飲んだりしたら
死んじゃいますよ！？」

「酔ってねぇーし！！
お前はいちいち大袈裟なんだって！
俺はまだまだ全然余裕だから大丈夫……って、あれ？さよ、お前い
つの間に分身の術なんて覚えたんだ？
六体も分身出すなんてスゲェじゃねえか……」

「出してませんよ！？
私には無理ですよ分身の術なんて！
てか完全に酔っぱらってるじゃないですか！！」

「だから大丈夫だって」

そのままナッシーは新たに近くにあった酒ビンを掴んで……って、
ヤバッ!?

「ナッシーその酒待っ――!」

「……ぷはぁ」

の、飲んじゃった…

でも見た感じ大した変化はないような…?

「……きゅううう」

「「ナッシー!?」」

「ナナシ先生!?」

ナッシーは先程のネギと同じようにその場に倒れた。
な、何!?
限界超えちゃった!?

私達は慌ててナッシーに駆け寄る。

「大丈夫ナッシー!?」

「やっぱり飲み過ぎたんですよ!」

「う…ん…?」

気がついた?

そう思った瞬間、ナッシーは刹那さんの顔を見つめ―

「……好きだ」

「「「……はい?」」」

「刹那の顔、声、性格、全て好きに……いや、愛しく思う」

「はい!?

えっ……あっ、あの！？」

ナッシーは刹那さんの身体を抱き寄せ、お互いの顔を近すぎるんじゃないか？と思う距離まで近付けた。

その状態のままドラマでしか聞かないような甘いセリフを吐く。

「ああ…何で刹那はこんなにも美しいんだ？
刹那の前では美の女神でさえ色褪せて見えるだろう」

うっわ！？
何この鳥肌立つようなクサいセリフは！？

「こんなスラスラと口説き文句が言えるナッシーなんてナッシーやあらへん…！」

「まさかこれが高畑先生が恐れていた事態…！？」

「二人とも話してないで助けてくださいよ！？」

そんなコト言われても……ねえ？

「まんざらでもないんじゃないの？」

「なぁっ!?」

「せっちゃん、しばらくしたらウチと交代してな?」

「なななな何を言ってるんですか二人とも!?」

…顔真っ赤ね刹那さん。

「さあ、このまま俺との愛を確かめよばらっ!?」

「「ナッシー!?」」

ナッシーが少年誌的にマズい行動をしようとした時、ナッシーの顔に向かってどこからともなくタンスが……タンス!?

「毎度毎度先生がスイマセン…」

「さよちゃん?」

えっ?何?今のさよちゃんがやったの?

どうやったかも気になるけど、それよりいったいどこからタンスを…？

「先生が正気に戻ったら、しっかり叱っておくので」

そう言って頭をさげてくるさよちゃん。

これを見るとさよちゃんってー

「……駄目亭主を支える良妻よね本当」

「もしくは手のかかる子供の母親やない？」

「はうぅ……」

確かにそうかもね…。

てか刹那さんは何放心してんのよ？

「さっ、これ以上犠牲者を増やさないためにナッシーが正気に戻るまでどこかに閉じ込めておきましょ」

「犠牲者って…」

「間違っちゃないでしょ」

刹那さんだからよかったものを、他の人だったら即通報もんよ。

けど、私達が少しナッシーから目を離していたら―

「……む？まったく…またこの男は…！
おい！起きんかナナシ！
こんな場所で寝てるんじゃない！
生徒も見てるんだぞ！！」

倒れているナッシーを注意している……新田先生！？

ちょっ！？
今のナッシーに近づいりしたら…！

「ん……あっ…新田…？」

「…ようやく起きたか。
起きたならさっさと「……好きだ」……何？」

「何故今まで気がつかなかったんだろう？
どんな馬鹿をしても最後まで俺を見放さず、ずっと気にかけてくれたのは新田だけだったということに…」

「ぬぅお!?」

するとナッシーは先程の刹那さん同様、新田先生を抱き寄せる……
って!?
その光景はダメ!?

「今まで叱ってくれたのも全て愛ゆえの行為だったんだな。
ありがとう新田…。
そして今度は俺がその愛を返す番だ」

「ち、違う!!
愛なぞなかった!!
だから頬ずりをするんじゃなあああああい!!!」

……おぇ。
見てたら何だか吐き気が…

「ナッシー×新田……いや、新田×ナッシーか?」

「うわ!?パ、パル!?
いきなり現れないでよ!
てか気持ち悪いこと言うなっ!」

「いやあ~何だか新作のネタになりそうな面白そうなニオイがしてたもんだからさ」

「あうう……」

「私は嫌な予感しかしないのですか……」

あっ…本屋ちゃんに夕映ちゃんもいたのね。

「で？何でナッシーはあんな状態に？」

「実は…」

私は今までの出来事をパル達に説明する。
まあ、見た通り酔っぱらってるだけなんだけどね。

「なるほどね…」

パルは顎に手を当てて、何やら思案顔。

……どうせろくでもないことしか考えてないんだろうけど。

「でもアレはアレでいいんじゃない？」

「はっ？何がよ？」

「だから酔ってる状態のナッシーが」

「はあ！？どこが！？」

そんな馬鹿なコト言うなんてアンタ、その触覚のせいで頭がおかしくなったんじゃない！？

「触覚言うなっ！！
…でもさ考えてもみなさいよ？」

「……何をよ？」

「だってナッシー、ルックスだけは無駄に人一倍なのよ？
なら普段みたいに馬鹿なコト言ってるよりも、ああしてスラスラ口説き文句言ってた方がモテるわよ」

「パル……それ褒めてるのか馬鹿にしてるのかわからないわよ？」

「そう？」

…しかしパルの言うコトも一理あるわね。

でも性別関係なく口説くのはちょっと……

「だあああああっ！！
いい加減にせんかっ！？」

私達が新田先生のことを放っておいて喋ってたら、新田先生はついに耐えきれなくなったのか―

「新田先生がキレた！？」

「鬼が目覚めた！？」

「せいっ！！」

「ぶべらっ！？」

「「「一本背負い！？」」」

新田先生は瞬時にナッシーの腕を掴み取り、勢いに任せて地面に叩きつけた。

「……新田先生って意外と肉体派なのね」

「私…絶対指導員の世話になるようなことしない」

ていうか地面が土とはいえ頭から叩きつけられたのはヤバいんじゃない？

ナッシー、死んでないわよね？

「はあ……はあ…！

きょ、今日はここまでにしておくが、くれぐれも自分が教師だという自覚を忘れないように！

わかったな！？」

そう言い残して、高畑先生と同じように去っていく新田先生……。

よっぽど嫌だったのね…

「にしても新田先生に感謝ね。

アレならナッシーもしばらくは起き―」

「……（ムクッ）」

「―た！？」

何でアレ喰らってそんな簡単に起き上がれるの！？

そういう頑丈っぷりは敵との戦いで発揮しなさいよ！

「うー……ヒック！」

「ナッシー…なんか症状悪化しとらん…？」

「……そうみたい」

本当にどうやって止めようかしら…？

「ウフフフ……」

ナッシーはそんな不気味な笑い方をしながら、他の人の下に向かう。

「って、待ちなさい！」

そろそろ止めないとマジで通報されるわよ！？

「俺の愛は止まらなあああああああい！！」

「意味わかんないわよ！」

フラフラと歩いていたナッシーは私の声を聞くと、急に意味不明なコトを叫び、走りだした。

「ああもう！！
自制のきかないナッシーがここまで面倒だなんて！」

普段も面倒だろ？
みたいなツッコミは無しで頼むわ！

けど、私の努力もむなしくナッシーの進行上に一つな影が現れた。

「危ない！逃げて！！」

「うん？どうしたんだい？……って、ナナシ先生？」

「ナッシーは今酔っぱらってて何言っても無駄なの！だから早く逃げないと抱きつかれて大変なコトに！」

「何だって！？…くっ！」

その人は私の言葉を聞いても、その場に留まる。

それどころか、ナッシーと正面から向きあって―

「何してるの！？
早く逃げて！
何度も言うけど、逃げないと大変なコトに！！」

主に世間体とかが！

「彼相手に僕は背を向けて逃げることなんてできないよ！
だから僕は、彼の全てを受け止めてみせる！！」

私はそんな自信に満ちたセリフをその人から聞くのは初めてだった。

普段は頼りないのに、今だけは凄く頼りになり気がした。

でもどうするの！？

瀬流彦先生！？

―バッ！（瀬流彦が上着を脱いで、両腕を広げて待ち構える音）

―ザッ！（それを見たナナシが全力でブレーキをかける音）

―ダッ！（そしてそのまま進行方向を１８０度変え、走り去る音。）

―ガクッ…（それを見た瀬流彦が地面に膝から崩れ落ちる音）

「な、なぜ……？」

……えっと……今のは…？

「本能的にあのまま抱きついたらマズいと察したんじゃないですか？」

「そんな瀬流彦先生が嫌やったんやね……」

…瀬流彦先生が少しかわいそうな気もするわね。

「あれ？
そういえばナッシーは？」

「「……あっ！」」

わ、忘れるとこだった！

ナッシーは……

「……いた！」

「また誰か襲いそうやで！」

くっ！また犠牲者が！

―パァン

「……へっ？」

今の音は……？

「……自分の生徒に手を出そうなんていい度胸じゃないか先生？」

あ、あなたは…！？

「「龍宮さん！？」

「真名！？」

「やあ刹那。それに神楽坂に近衛も」

龍宮さんも花見に来てたのね…。

いや、クラスで来てるからいるのは別におかしくはないんだけど……

「まったく……いい大人が酒に呑まれるほど情けない話はないね」

そう呆れたように言い放つ龍宮さん。
その手には銃が……銃!?

「さ、さっきの音ってソレだったの!?
ま、まさか撃ったの!?」

「心配いらない。
ただのゴム弾さ」

……ああ、なんだ。
実弾じゃないのなら大丈夫ね。

「ゴム弾でも直撃なら充分危ないと思うんやけど…」

「……ナナシ先生なら心配ないって意味じゃないですか?」

ナッシーは……よかった。完全に気絶してるわね。

「さて先生、聞いちゃいないと思うが一応伝えておくよ？
今回の分は先生の口座から勝手に引き落とさせてもらうからね」

「「「自分で撃ったくせに！？」」」

「ただの迷惑料さ。
もちろん弾代は別でもらうが」

「「「弾代も請求するの！？」」」

…龍宮さんって、もしかしてドケチ？

口に出した瞬間に撃たれそうだから言わないでおくけど。

「じゃあ私はそろそろ帰らせてもらうよ」

「ちょっ……って、行っちゃった…」

龍宮さんが去った後に残るこのなんともいえない空気はどうすれば…？

「「「……」」」

周りにはまだ酔っぱらってる人達、ツブれて眠ってしまっている人達。
他には落ち込んでる人や、気絶してる人もいる……。

……花見なのに何このカオス？

「…私達も帰りましょう」

「……そやね」

「……それがいいです」

もうついていけないわ…

おまけ

―翌日、学園では頭痛に耐えながら授業をする教師と生徒がいたとか。

「「「「「頭痛い…」」」」」

「自業自得よ」

そして―

「金が減ってる!?」

麻帆良のＡＴＭでそんな叫びが聞こえたとか聞こえなかったとか。

to be continue ?

季節外れなんて関係ない！春特別番外編「花見」（後書き）

番外編終了！

ナナシ
「お前は俺をどうしたいんだ！？
ただでさえ感想とかでホ〇扱いされてんのに、今回の話でまた誤解されちゃうじゃん！？」

まあ番外編だから気にしなくていいよ。

ナナシ
「気にするわ！」

番外編でのオチはバレンタインの話でもそうでしたけど、今回も真名がつけましたねｗ

ナナシ
「また撃たれた…」

ていうかね、番外編考えてたら、どうでもいいＩＦストーリーが思

い浮かんだんだよね。

ナナシ
「……どんなんだよ？」

こんなの←

【ナナシを拾ったのはナギではなくフェイト】

ナナシ
「……は？」

神に魔法世界に送られたナナシは最初に出会ったフェイトに拾われて、一緒に行動する。
で後々増えてくフェイトガールズの紅一点てか、黒一点的な役として頑張る話。

ナナシ
「……カオスだな」

まあ妄想ネタだからねｗ

では。

第３０話「学園祭に向けてその１」（前書き）

はい、というわけで題名でもわかるように学園祭編に突入しましたー。

ナナシ
「ここまで約３０話……長かったな」

ホントだよね。

で、しばらくはギャグ多めが続くと思います。
…ネタが尽きなきゃいいけど。

ナナシ
「嫌なこと言うな！」

第３０話「学園祭に向けてその１」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「学校に通わないか？」

「……はあ？」

日曜の夜、俺はさよと小太郎を集めて第一回家族（？）会議を開いていた。

ん？なんで小太郎がいるのかって？

コイツ、あの神との出来事があってからなんやかんやで俺の部屋に居候してんだよ。

まあ、もともと２～３人は住める広さがあるから、もう一人ぐらい居候が増えてもいいんだけどさ。

「わあ～小太郎君、学校に転入するんですか？」

ちなみにコイツが居候第一号な。

「いやいや！ちょっと待ってやさよ姉ちゃん！
俺は一言も学校に行くなんて言っとらんで！？」

むう……、あんまり乗り気じゃないみたいだな。

「だってお前まだ１０歳だろ？
本来なら学校に通って義務教育を受けてる年齢じゃねぇか」

「せやかて今さら学校なんて行ってもしょうがないやん」

「でも行ったコトないんだろ？
なら、いい経験になるさ」

「経験……」

「それに俺は別に学問を学んでこいって言ってるわけじゃない。むしろそこで学問以外の色々なコトを学んでほしいと思ってんだ」

「兄ちゃん……」

あれ？
今なんだか俺いいこと言ってね？
久々に教師らしいことをしてる気がする。

「……で？
本音は何ですか？」

「俺が仕事してるのにコイツだけ学校も行かず自由なんてズリィ！！……はっ！？」

し、しまった……！

「先生……」

「兄ちゃん……」

み、見るなっ！
俺が悪かったから、そんな目で見ないでくれっ！

「……コホン！
とまあ、小太郎に行くか行かないか訊いてるけど、実はもう手続きは済ましてあるんだよね」

「はあ！？」

「明日からもう通えるからな」

「……先生、手続き済ましたって、書類とかどうしたんですか？」

ああそれ？
そんなん決まってんじゃん

「……初めてジジイが学園長でよかったと思ったよ」

「職権乱用ですか！？」

職権乱用とは失礼な。

ただちょっとジジイに頼んで、学園長としての権利を利用して裏から色々手回ししてもらっただけだし。

「裏口入学させたんですか！？
てかそれを職権乱用っていうんですよ！！」

いいんだよ。
俺が教師になった方法も裏口からみたいなもんだし。

「まさかのカミングアウト！？
初耳ですよソレ！？」

言ってなかったっけか？
まあ別に言うほどのことでもないけど。

「―っと、書類で思い出したわ。
俺書類上の関係でお前の親代わりになったから」

「はあ！？」

今日、はあ！？って驚いてばっかだな小太郎。
まあ、いきなりこんな説明したら驚くのは当たり前だとは思うけど。

「だから、これから公式の場では犬上・K・小太郎って名乗るように」

ちなみにKはクラートのKな。

「名乗るんは構わないんやけど、マジで学校通うんやな……」

いい加減諦めろ。

義務教育は中学までしかないんだから、後たった五年程度じゃねえか。

「ところで訊きたいんやけど……」

「ん？どした？
明日のことか？」

「いや、そうやないんやけど…、兄ちゃんは俺の親代わりになったんよな…？」

「そうだな」

それがどうしたんだ？

「なら兄ちゃんのことは、パパって呼んだ方がいいんか？」

「その呼び方は色々と誤解を招くからやめろ！！」

「小太郎君、これから私のことはママって呼んでいいですよ」

「お前は黙ってろ！！」

・〜・〜・〜・〜・〜

そんなこんなで次の日―

「……なあ？やっぱ行かないと駄目？」

「往生際が悪いぞ」

学生服に身を包んだ小太郎は、寮を出てからずっとこんな調子。

……登校拒否の息子を持つ父親ってこんな感じなんだろうか？

「ナッシー！」

「ナッシー言うな」

反射的に返事をしたが、背後から俺を呼び、走り寄ってきたのは―

「おはよナッシー、さよちゃん」

「おはようございますナナシ先生、さよさん」

「おはようございます」

「よおネギにレッドにこのかに刹那……って、朝からやたら元気だな」

とまあ、いつものメンバーと合流したわけだ。

「……俺もいるんやけど」

「あっ、小太郎君おはよう…って、どうしたのその制服？」

「……いや、今日から学校に通うことになってな」

「えっ、ホント？」

「不本意ながらな」

不本意とか言うな。

2人が話していると、横から…あ、危ない。

「わぷっ……うおっ！？」

「な、何！？」

「妖怪！？」

ぶつかった亀？もどきやら鳥もどきに驚く2人。

そういや初めてだもんな2人は。

「はい、ごめんよ坊や達」

「「へっ？」」

くくっ、亀？もどきが喋ったから呆気にとられてやがんな。

「あれれれ？

よく見ると変なのがゴロゴロ登校風景の中に……」

「な、何やコレは!?」

亀?もどきを筆頭にズラズラと他の連中も現れ出す。
クマにロボットに侍に……何だかよくわからない奴もいる。
…着ぐるみってレベルじゃねーぞアレ。

「さすが大学部の人達は気合い入ってますねえ」

「何のイベントの出し物なんだろうね?」

「……いきなり会話に入るのは止めないか?」

「おはようございますナナシ先生」

「おはよナッシー」

「ナッシー言うな」

いきなり現れたのは那波にジミーこと村上。
本来なら小太郎の同居人となる2人だ。

何でいるんだ2人共?

…通学路だからか。

「あれ?そっちの子は?」

「俺ん家の居候」

「へえ、そうなんだ」

およ?
えらい淡白な反応だな。

原作ではジミーは小太郎に対して好意があったハズなのに……あ

れ？

もしかしなくとも俺、小太郎のジミーフラグ折っちまった？

小太郎が俺の家に住んだことによって、２人の接点はなくなるわけだから……うん、知らね。

別に俺は悪くないし。

悪いとしたら俺の部屋を選んだ小太郎だ。

「おおっ！

ネギ、すげぇぞアレ！！」

今度は何だ？

「麻帆良曲芸部『ナイトメア・サーカス』。

開催は全日程全日午後６時半より！！

チケットは大人千五百円！学生割引は千円です！

よろしくお願いしまーす」

「あれは……」

ザジ・レイニーデイか？

「！」

向こうもこちらに気付いたようで、空中ブランコから勢いよくこちらに回転しながら飛んで……飛っ！？

「ネギ先生も……、よろしければ我がサーカスへどうぞ……」

「あ、これはどうも」

そう言いチケットを渡すザジ。

「…俺にはないのかよ？」

「……どうぞ」

「そんな嫌そうな顔するなら渡さなくていいから！」

俺、ザジに何かしたか！？

副担なのに何でこんな嫌われてんの！？

チケットを渡すと、再びブランコに飛び乗るザジ。

…一応チケットは貰いましたよ。

「な、なんなんやこの騒ぎは？」

「学園祭だ」

「「学園祭？」」

「ほら、アレ見てみな」

俺は前方にある巨大な門を指差す。

そこの門の看板には大きく『麻帆良祭』と書かれていた。

「麻帆良祭かあ」

「ちょっとおっちゃん、

このデカイ門なんや？」

「何って学祭門だよ。
ハハハ、スゴいだろう。
……木製だけどね」

木製でも充分スゴいと思うんだが…

「はあー…、門でこれか。どんな学園やねんここは」

それをツッコんだら負けだぞ。

俺達は門をくぐり、再び歩き出す。
門をくぐると周りは余計学園祭の活気で満ちていた。

「１５日も前から、えらい活気あるんやなー」

「全学園合同の学園祭よ。中・高の中間テストが終わってからが本格的な準備期間なの。
大学の人達は部費のほとんどを学園祭で稼ぐサークルばかりだから気合いが入ってるわー。
開催期間中は色んな出店やイベントが目白押しの大騒ぎという訳」

那波さん、わざわざ長い説明ご苦労様です。

「へー、楽しそやな」

「そうでもないのよ？
学園の人達、人数多い上にお祭り好きでしょう？
歯止めが効かないから、去年のクライマックスには
『学園全体鬼ごっこ』が行われたのよ」

懐かしいなあ…そういえばやったな鬼ごっこ。

「確かナナシ先生は鬼として参加してましたよね？」

「おう。よく知ってんな」

「先生は学園祭では有名人ですから」

……そうなの？

「ええ。なんでも鬼役として先生が捕まえた参加者の数は二万人とか」

「「二万人！？」」

「コラコラ嘘教えない！」

「事実だぞ？」

「マジで！？」

あん時は全力でバレないように魔法使ったからな。
身体強化したり、目眩ましししたり…ｅｔｃ。

……まあ、その後シスターシャークティーに説教されたんだけどな。

「……で、どうだ？
学校に通うのも、なかなか面白そうだろ？」

「……そやな。何やわからんけど面白そうや。
ワクワクしてきたわ」

それはよかった。
ジジイに頼んだ甲斐があったよ。

「おっ！格闘大会もあるんか！
出ようやネギ、兄ちゃん！」

「ええっ！？
いいよ僕！
てゆーか遅刻ーっ！」

「ヤバッ！？」

これ以上遅刻したら減俸なんですけど！？

「じゃあな小太郎！
初日から恥かかないようにな！」

「兄ちゃんやないから大丈夫や」

その調子なら大丈夫そうだな。

しっかりやれよ小太郎？

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

ＨＲが始まる前にギリギリ学園に着けた。

にしても、学園祭かあ…

「兄貴の学校には、こんなのなかったから楽しいんじゃねえか？」

「そうだね。
ウチのクラスも何かやるのかな？」

３－Ａの皆のことだから、何もやらないってことはないと思うんだ

けど。

ところで―

「……何ソワソワしてるんですかナナシ先生？」

「ああ……小太郎、大丈夫かな？イジメられたりしないよな？」

「…小太郎君なら心配ないと思いますよ」

小学生相手に彼がイジメられる姿なんか想像できないし。

「馬鹿野郎！！
今どきの小学生は陰険なんだぞ！
悪質なイジメとか、精神的にイジメるとか日常茶飯事なんだ！
教室入ったら
「お前の席ねえから！」
とか言われて、席がなかったりするんだぞ！？
他にも廊下に立たされて両手にバケツ持たされたり、黒板の前に立たされて問題を解かされるという羞恥プレイがあんだぞ！？」

「初日からソレはないと思うんですけど…。

てか最後のは2つはイジメじゃないですよ」

「旦那って意外と過保護なんだな……」

……過保護すぎると思うけどね。

まあナナシ先生は放っておいて教室に入ろう。

「おはようございまーす」

「「「いらっしゃいませ！ようこそ！
3ーAメイドカフェ
『アルビオーニス』へ！！！」」」

……へっ？

「……わあああっ！？
なな何ですかコレは！？」

何で皆メイド服なの！？

「３－Ａの出し物がメイドカフェに決りましたの」

「ウチの学校お金儲けしていいからね。
小遣い稼ぐならこれだよ！」

だ、だからってコレは…

しかも、どうやって用意したんだろ…？

「私、メイドカフェがどういうものかよくわかりませんが、皆さんたっての願いで衣装を御用意させて頂きましたわ！」

いいんちょさんが用意したんだ。

……納得。

「そうだ！ネギ君お客様第二号になってよ！」

「えっ…ちょっ……ん？

二号？

あの一号は…？」

「んー？アレー」

そう言う桜子さんが示した方向には―

「どうぞナナシ先生」

「こっちもどう？」

「はっはっはっは！
よきにつくせー！」

「ナナシ先生!?」

いつの間に!?

「―って!?
さっきまでソワソワしてた人が何してるんですか!?小太郎君心配してたんじゃないんですか!?」

「ああ小太郎？
アイツなら大丈夫じゃね？多少イジメられて現実知る方がアイツのためになるって」

こ、この人は…！

「先生ぇ。私このカクテル飲んでいい？」

「いいって、いいって！
好きなだけ飲め！」

「ああ～ん。
胸の谷間に栓抜きが落ちちゃった。
ナッシー取ってー」

「よぉし、どれどれ？
ここかな……ぐはっ！？」

谷間に手を入れようとしたナナシ先生の顔面に、どこからともなくトンカチが……トンカチ？

「セクハラやえナッシー」

ナイスですこのかさん。
あれ以上は社会的にマズかったですから。

「ハイ、じゃあお会計！
三万七千六百円でーす！」

「えええええええ！？」

今ので！？

「コラコラーッ！！」

「何のお店なんですの！」

「払おうじゃないか」

「「「払うの！？」」」

って、復活早っ！？

「見て見て！
まだ色々衣装用意してあるよー！」

すると今度は、チャイナ服やら和服やらネコ耳メイドやらバニーガールが…

これもいいんちょさんが用意したんだろうか……？

「四万五千円になります」

「嘘おおおお！？
見ただけでですかっ！？」

「五万円払おう。
釣りはいらん」

「払うの！？
しかも多く！？」

そのペースでいったら今日だけで貯金なくなりますよ！？

「全然趣旨違ってるじゃない！
もうメイドじゃないし！」

「えーー？だって色んな服着たいし。
お金儲かってネギ君は大人の世界学べて、ナッシーは満足できて一石四鳥…」

「アホかーッ！！」

こ、これが大人の世界なんだろうか？

「うーん…しかし、いまいちグッと来ないな…、
もっとこう客を引ける何かを…」

「確かにね」

「脱げ。とりあえずそれだけで客は来る」

「自分の生徒になんてこと言ってんですか！？」

「いやいや、実際このクラスはレベル高いんだから脱がした方が「ナッシー、少し黙ってような？」……ハイ」

……うん。これからナナシ先生の対応はこのかさんに任せよう。

「ふふふ…ナッシーも甘いわね。
このクラスのレベルが高いのは同意するけど、脱がしたら意味ないのよ。
脱がさずに素材の味を引き立てるには…これよ！！」

そう言うパルさんが披露したのは、普通の喫茶店のウェイトレスのような格好をしたのどかさんだった。

「おおっ！？」

「普通に可愛い！！」

確かに可愛い。

その可愛さに、時間も気にせず盛り上がってると―

「テメェら、よく聞け！！今から、このちう様がメイドカフェの真髄ってやつをだな……」

―バンッ

「あ……」

勢いよく開かれた扉から新田先生が現れて―

「お前ら朝っぱらから何をやっとるかーッ！！」

「「「ひいいっ！？」」」

「もうＨＲは終わっとる！ネギ先生もネギ先生です！！」

「はううっ！？」

「ナナシは正座ーッ！！」

「何で俺だけっ！？」

あうぅ……何でこんなことに……。

結局出し物は決らなかったし…。

というか、ちうさんは何を言おうとしたんだろ？

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

おまけ

「ただいまー。っと、帰ってたか小太郎。
で、どうだった学校は？」

「なんや番長って奴と戦ってきた」

「……え゛っ？」

「もちろん俺が勝ったんやけど、いきなり
「この…学校は、任せたぜ……犬上番長……ガクッ」って言われて、
ようわからんけど番長ってのになったわ」

「そ、そうか。
た、楽しそう？でよかったじゃねえか」

「おう」

「……小学校に番長っているんだな。
てか番長って絶滅してなかったんだ…」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３０話「学園祭に向けてその１」（後書き）

というわけで今回は
小太郎家族化＆出し物決めの内容でした。

ナナシ
「……財布の中が氷河期」

自業自得だろ。

で、実は今週学校でテストがあるんで次回の更新は遅れそうです。

ナナシ
「どうせ勉強しないだろ」

するわっ！
さすがに受験生なんだから勉強ぐらいするから！！

ナナシ
「だといいがな」

ではまた次回。

第３１話「学園祭に向けてその２」（前書き）

はい、３２話投稿でーす。

ナナシ
「……なあ？」

ん？

ナナシ
「お前題名考えんの面倒くさくなっただろ」

！？

な、なにを馬鹿なことを言いだしますかこの子は！？

ナナシ
「じゃあなんだよ「その１」・「その２」って。
明らか手抜きじゃん」

うぐっ！？

で、では本文をどうぞ！

ナナシ
「逃げた！？」

第３１話「学園祭に向けてその２」

ｓｉｄｅ　ナナシ

すぅ～はあ～。

俺は呼吸を整えてリラックスする。

……よし！

「蛙ぴょこぴょこ三ぴょこぴょこ合わせてぴょこぴょこ六ぴょぴょぴょぴょぴょ！」

「言えとらんぞ」

どうも、ナナシです。

今日は泊まり込みでエヴァの別荘にいます。

……え？

最初のは何かって？

いやいや、これれっきとした修行なんだよ。

別に俺がおかしくなったとかじゃなくて。

実はさ、神との出来事があった後エヴァに頼んだよ。

『なあエヴァ、俺って魔力量増えたじゃん？』

『人並み程度だがな』

『うぐっ……！？
い、いいんだよ！それでも増えたことには変わりないんだから！』

『…で、用件はなんだ？』

『もっと強い魔法が使いたいんだ』

……と、そんなこと頼んだら、エヴァから一冊の本を渡されて―

「なまむぎなまごめなまたまぎょーッ！！」

「……ホントに滑舌悪いなお前」

「うっさい！」

……これだよ。

てっきり魔法書とかかと思ってたのに、早口言葉辞典って何だよ？
てか何でこんなの持ってんの？

「……なあ？
これに意味あんのか？」

「お前は詠唱が苦手だろうが。
発音下手なのはまだいいとして、詠唱の途中でかむとかありえん。
いくら魔力量が増えたとこで、呪文を詠唱出来なければ意味がないんだ。
これはお前の滑舌の悪さをどうにかするための修行なんだよ」

「は、発音下手……」

し、しかも滑舌悪い……

でも、よく考えると今までの俺って、魔力量は少ないは、詠唱下手くそって、魔法使いとしては致命的に駄目だったんだな…

……いまさらか。

「……あーー！
もう今日はやめだやめ！
さすがに半日以上早口言葉を言い続けんのはキツい」
おかげで舌痛いし。

「あと時間はどんくらいある？」

「ん？そうだな…。
学校が始まるまであと五日ぐらいはあるだろう」

五日か。
なら充分だな。

「よし、じゃあアレの練習するか」

「アレか？
なんだ、まだ諦めてなかったのか？
無理だ時間の無駄だ才能ないから諦めろいいから早く帰れ邪魔だ馬鹿」

「ずいぶんボロクソ言いますね！？」

一応俺お前の弟子だぞ！？
なのになんでそんな容赦ないの！？

「……はんっ。今にみてろよ？
俺があっという間にアレを完成してやっからな！」

「がんば」

「素っ気な！？」

結果を言えば、この後の五日間修行に進展はまるでありませんでした。

「ほらな？」

……ちくしょう。

・～・～・～・～・～

肉体、精神ともに疲労しきった俺だが、教師としての自分の職務を果たすために学校へ。

で、まずは朝のＨＲに参加

……ん？

別に副担は参加しなくてもよくね？

他のクラスは担任しかＨＲに参加してないのに…。

……ま、いっか。

職員室で仕事押し付けられるよりはマシだろ。

「えー、それでは皆さん。学園祭の出し物を何にするかですが……」

そういや、まだ決まってなかったな。

「いや、しかしそいつは難しい問題ですぜ、ネギの親分」

「え？」

「ああ。メイドカフェを越える集客力となるとねぇ……」

「はぁ？」

「だから脱げば「ナッシーは黙ってような？」……サーセン」

…最近このかが怖いんですけど？
俺が何をしたっていうんだよ！？

「セクハラ」

「否定はしない！」

でも半分冗談みたいなもんだから問題ないだろ。

……誰かが訴えたりしないかぎり。

「ハイハーイ！」

「さ、桜子さん」

「『ドキッ！女だらけの水着大会・カフェ！』がいいと思いまーす

！」

「？」

ぶほぅ！？
そ、それは！？

「何なのよソレ！？
意味わかんないわよっ！」

「えーー？
フツーに楽しそくない？」

「楽しそー！！」

「ナッシーは黙ってなさい！！」

はい、ついに「黙ってろ」と言ってきたのが二人目になりましたー。

……泣くぞ？

「じゃあじゃあ『女だらけの泥んこレスリング大会喫茶』！！」

「イエイ！」

「えっ！？」

「負けねーぞ！『ネコミミラゾクバー』！！」

「イエエイ！！」

「ちょっ…！？」

「もう素直に『ノーパン喫茶』でいいんじゃないかしら？」

「「「それだあああああああああ！！！！」」」

「イエエエエエイ！
フィーバアアアア！！」

さすが３－Ａの生徒達！
わかってやがる！

「それだああ！、じゃないわよ！！
どんな喫茶なのか訳わかんないじゃない！！
てか、ナッシーは興奮しすぎて、おかしくなってるわよ！？」

「馬鹿野郎！！これは男として正しい反応なんだよ！今ので興奮しない奴がいたらソイツは男じゃないか、もしくは枯れてるかのどっちかだ！」

「それほど！？」

「それにノーパンについてだったらレッドが一番経験値高いじゃねえか！」

「だあああああ！？
言わないで！頼むからそれ以上言わないで！！」

……見事にノーパンがトラウマになってんな。

「あ、あの龍宮さん…、オンナダラケとかノーパンキッサとか全然イミがわからいんですが……」

「うむ。君達は生涯知らなくていいことだ。
そして良い子は意味がわからなくても決してお父さんお母さんに尋ねてはいけないよ？
さもなくばナナシ先生のようになるからね」

「「「ひぃぃぃ！？」」」

「オイこら」

何失礼なこと教えてやがんだよ。

「しかし……よくよく考えてみると、カワイイ女の子を見せ物にするというのはいささか単純かも知れないわね」

わかってないな。
単純だからこそいいんじゃないか。

「逆ならいいんじゃ？」

「「「おおっ」」」

「えぇー……」

そんなん需要ないじゃん。

「じゃネギ君をノーパンにー！」

「キャアアアア！？」

そう言ってネギを脱がしにかかる女子生徒達。

……わーお。

しかし、１０歳とはいえ、男がキャアアアア！？はキモいな。

「じゃあナッシーもノーパンに…」

「待て！？
俺がそれをしたらただの変態だから！？」

それこそ需要ないわ！！

「「「えーい！！」」」

「あっ！？ちょっコラ！？脱がしていいのは脱がされる覚悟がある奴だけって……キャアアアア！？」

俺の純潔が！？

「コラあああああ！！
３－Ａ！お前ら朝っぱらから何を……」

「「「「「あ…」」」」」

「！？」

突如現れた新田が俺達を見て驚く。

……まあ、女子生徒に教師2人が服を脱がされてる光景を見たら誰でも驚くだろうな。

つーか、この状況もはや逆レイ○じゃね？

「全員正座ーーッ！！」

……またか。

・～・～・～・～・～・～

「……はあ」

今日も仕事終わりには長々とお説教＋反省文だったな…

最近説教が恒例化してきてないか？

新田も飽きずによく毎日説教できるよな。

しかも反省文を書いてる俺を置いて先に帰りやがって…！

……まあ、一方的に俺が悪いんだが。

「げっ……もう夜じゃん」

もうさよと小太郎は別荘にいるんだろうしな…

飯どうしよ？

「おーい、ナナシ君」

ん？

俺を君付けで呼ぶ奴は限られてるからな。

振り向かなくとも誰だかわかるが、一応振り向いてやるか。

「よおタカミチ。
お前も仕事終わりか？」

「うん。
それで他の先生達と『超包子』に晩飯に誘われたんだけど、よかったらナナシ君もどうだい？」

「おっ『超包子』か。

いいね。ちょうど晩飯どうしようか悩んでたんだ」

「ならよかった。
他の先生達は先に向かったから、僕達も行こう」

「おーう」

タカミチにドバドバ酒飲まて、機嫌よくして奢ってもらおうかな？

「……わかってるとは思うけど自腹だからね？」

「なぜ気付いた！？」

「長い付き合いだからね」

くそう……。
自腹なら少し遠慮して食わないとな…

・・・・・・・・・

「おっ、いたいた」

歩いて数十分、『超包子』に着いた俺達。

相変わらず客多くて繁盛してるみたいだな。

「あれ？ネギに……げっ、新田もいんじゃん…」

あと瀬流彦も。

他の先生ってアイツらのことかよ。

なんつー異色メンツ。

「てか、ネギの奴泣いてないか…？
酔ったのか？」

「まさか。新田先生もいるんだから、ネギ君に飲ませるわけないだろう」

それもそうか。

「俺あっちの席で一人で食べてるわ」

「……相変わらず新田先生が苦手なんだね」

「まあな」

食事中まで新田に説教されちゃかなわんからな。

「一人で食べるんなら誘った意味がないような…」

……確かに。

「……僕は先生達と食べるからね」

「へーい。じゃあなー」

俺はタカミチと別れて、離れた席に座る。

…さて、何食べようかな？

そう思い、俺がメニューを開くと―

「いらっしゃいネ。
ナッシー先生」

麻帆良の最高頭脳こと、この店のオーナー、超鈴音が現れた。

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　超鈴音

「その呼び方やめろや」

「あや？これは失礼した。…コホン、ではナッシー」

「言い直した意味！？」

私は今日たまたま店に来たナッシーに話かけた。

もちろん何の意味もなく話かけた訳ではないヨ？

「実はナッシーに話がアルネ」

「話？お前が俺に？
なんだ？人生相談か？
それとも恋愛相談か？」

「ハハハ、そんなことナッシーに相談しても解決しないとわかてるヨ」

「……そろそろ俺のライフが０になりかけてきた」

そういえば、こうしてナッシーと二人きりで話すのは初めてかもしれないネ。

いつもは古なりハカセが一緒にいたしネ。

「……じゃあ何だよ相談って？」

「ウム。ではナッシー…」

ようやく本題に入る。

結果がどうなるかわからなが、訊かなければ始まらない。

「―私の計画に協力しないか?」

私がナッシーを誘う理由はもちろんある。

私のいた未来……あ、言い忘れてたけど、何とこの超鈴音は未来の火星から来た未来火星人ネ!

いやいや妄想とかじゃなくてマジアルヨ?

当然、未来から来たと言うことは、これから起きるであろう大まかな出来事も既に知てるネ。

けど……私のいた未来に、彼は何処にもいなかった。

考えれる理由はただ一つ…

―イレギュラー

なんらかの歪みにより発生した不安定要素。

彼がいることで、私の知る歴史とは今まで微妙に異なった結末を迎えてる。

そんな彼をこのまま放っておいたら、彼の行動一つで私の計画が狂ってしまうかもしれない。

それなら自分の手元に置いている方が、いざというときの被害も最小限に抑えられる。

そんな訳だから、彼には協力という名の束縛をしておきたいのだ。

けど彼は知っての通り自由気ままな性格。

果たしてどうなるか…！

「いいよ別に」

……やはりか。

「さすがに何も説明しないで協力してくれるとは思てないネ。だからまずは……ん？」

ちょっ、ちょっと待つネ。
今彼は何と言った？

「いいよ別に」ってことはつまり…？

「す、すまないがナッシー…、もう一度言うてくれないか？」

「だから協力するって」

「何と！？」

こ、これはさすがに予想外ネ……

ｓｉｄｅ　超鈴音　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「……人が素直に協力するって言ってんのに、その反応はどうかと

思うぞ？」

「い、いや、だがそんな簡単に頷かれては、こちらとしても段取りが…」

いや、知らねーし。

「……何故、何故理由も訊かず協力してくれる？」

「副担だから？」

「冗談はなしで答えて欲しいネ」

……冗談じゃないんだが。

それに理由訊かないのは、俺が既に超の正体から計画の内容まで原作から知ってるってからだしな。

「お前が魔法先生、生徒、ていうか学園から目を付けられてる不良生徒だってことは知ってる」

「不良生徒て……」

「けど一人ぐらいその不良生徒の味方になる先生がいてもいいだろ」

「…それだけアルか？」

「そもそも自分の生徒の味方になるのに理由なんていらねーよ。それに俺は生徒の考えを重んじる先生なんだぜ？」

俺の理想は金〇先生ですから！

…ゴメン嘘です。

……は？

魔法バラそうとしてんのに手伝っていいのかって？

そもそも俺魔法の隠匿性について重要視してねえし。

これガンドルフィーニ先生が知ったら怒られと思うけど…。

だって、もし魔法を隠匿する必要がなければ、さよとか小太郎とかが堂々と生きていけるってことじゃねえの？

まあ、その辺は俺馬鹿だからよくわかんねえけどな。

「……私を手伝えばネギ坊主達と敵対する可能性もあるアルヨ？」

「そん時はそん時だ」

まちがいなく敵対するんだろうけどな。

「……」

「……まだ納得てか、信用できないみたいだな。
よし、なら俺が協力する条件を出す」

「条件？」

「ああ。俺はその条件をのんでもらう代わりに、代償としてお前に協力する。
それでどうだ？」

「ギブアンドテイクの関係てことネ。
いいヨ。それなら納得できるアル」

うし。なら―

「じゃあ今日の晩飯はお前の奢りな？」

「……は？」

また呆けてんな…。

「……そんなのでいいアルか？」

「そんなのって失礼な。
俺にとって食事代は死活問題なんだぞ？
それを一食分減らせることがどれほど嬉しいことかお前にはわかるまい！」

安月給ナメんなよ！？

しかも小太郎が家に来てから食費増えたし！

おかげでタバコも節約して吸ってんだ！

「あはは……ははは！
あーっはっはっはは！！」

おおう！？

今どきの中学生が何いきなり魔王みたいな笑い方してんだよ？

「やっ、やはりナッシーは面白いネ！」

褒めてんのかソレ？

「いいヨ。それぐらいの条件だたら喜んで受けるね。むしろ学園祭までの期間中はいつでも無料でいいネ」

「マジ！？」

さすがオーナー！

「なら契約成立だな」

「ウム。よろしく頼むネ？ナッシー？」

そうして握手を交わす。

いやあ条件出してみるもんだな。

……そういや、これってアンチってことになんのか？

いや、でも別に否定してるわけじゃないしな。

まあ、俺はいつも通り気ままにやらせてもらうか。

おまけ

「うぃーす。
四葉、朝食ランチ二人前頼む」

「兄ちゃん、ここか？
メッチャ美味いって店は」

「ああ。好きなだけ食べていいからな」

「ホンマ！？」

―超さん…、またナナシ先生がいらっしゃっいましたよ？―

「……またアルか。
まさか毎日毎食食べに来るとは思てなかたネ…」

「「うんめぇー！！」」

「……はあ。
少し早またか？」

to be continue ？

第３１話「学園祭に向けてその２」（後書き）

ナナシ
「なんだよ滑舌の悪い主人公って……」

最悪だろうね。

ナナシ
「ところでアレって何？」

んー伏線っぽいもの？

ナナシ
「ぽいって…」

そして今回でナナシの学際での立場が決定！？
まさかの超？ルート！

ナナシ
「原作主人公達を相手にって……終わったな」

情けないこと言うなよ！？

ナナシ
「いやいやマジで無理だって。
超側ってことは主人公達＋魔法先生＋麻帆良生徒を相手にすんだろ？
そんなん俺がどうにかできるわけないじゃん」

……確かに。

次回もお楽しみに！

第３２話「メ〇モちゃん?メル〇ちゃんなのか?」（前書き）

はい、３３話投稿です。

今回前書きで語ることは特にないので、さっさと本文をどうぞー。

ナナシ

「……いいのかコレで?」

第３２話「メ〇モちゃん？メル〇ちゃんなのか？」

ｓｉｄｅ　ナナシ

学園祭まで後数日とまで迫った今日、昼休み。

本来ならば最近常連となってきた『超包子』に昼飯を食べに行く時間なのだが…

「昼休み返上で学園祭準備なんて私達も殊勝だねぇ」

頭にネコ耳を付けた明石がそんなコト言ってるが―

「……俺は昼休み返上っていうか奪われたんだけど」

「まあまあまあ」

なぜか３－Ａの奴らに混じって学園祭の準備をしていた。

……何で俺まで？

こういうのは普通生徒達だけでどうにかするもんじゃないのか？

疑問を感じながらも黙々と作業を続けてると―

「ねーねー！コレ見た！？麻帆良スポーツ！

世界樹伝説ホントに効果アリだって！！」

佐々木ことバカピンクが一冊の記事を見せてきた。

世界樹伝説？

……ってアレか。

世界樹の近くで告白すると必ず成功するってやつ。

「えー？ホントかなぁ？」

……今年はマジなんだよなソレ。

「何々？
『世界樹の魔力！？あらゆる障害、困難を突破！！
周囲からはあり得ないと言われる程の年齢差、外見アンバランス、
セレブ度を乗り越えたカップル成立が多数報告……。
追跡調査ではその後の安定度もかなり高く……』
ほーう……」

「ね？スゴいでしょ？」

「どーせ成功した奴らは元から世界樹に頼らなくてOKされるような奴らだったんだよ。
ちくしょう…、どこもかしこも学園祭だからって浮かれやがって…！
羨ましいぞおおおお！！」

「羨ましいのかよ」

学園祭なんて男友達とか、一人とかでしか楽しんだことないわ！
そこ！
寂しい奴とか言うなっ！

「ウチも先輩に告白するなら世界樹の下でしたら良かったわ」

多分結果は変わんなかったと思うぞ。

「んー。なーんか私も告白したくなってきちゃったかな？」

「告白って、ゆーな相手はいるの……？」

「どうせ父親だろ」

「ちょっと!?
どうせって何よ、どうせって!?」

父親相手ってのを否定しろよお前。
だからファザコンとか言われるんだよ。

「えーい黙っらっしゃい!ナッシーはただ黙って作業してればいいの!」

「それが手伝ってあげてる奴に言うセリフか!?」

手伝ってやんねえぞコンチクショウ!

side　ナナシ　end

side　アスナ

「あっちはなんか盛り上がってるわねー」

みんな毎年毎年よく飽きずに同じ話題で盛り上がれるわよね。

「なぁ？せっちゃんは今好きな人いーひんの？」

このかが他のみんなに影響されて、そんな話を刹那さんに振ったけど―

「えっ！？
い、いえ私は特にそういう男性は……」

「えー？いーひんの？」

顔真っ赤にして言っても、いるって言ってるようなもんよ？

「そ、そうですね。
し、強いて言えばナナシ先せ「呼んだかー？」にゃあああああ！？」

「ぶばらっ！？」

刹那さんの後ろにいきなり現れたナッシーに、振り返りながら顔面に裏拳を叩きこんだ刹那さん。

……いくら慌ててたからって、やりすぎじゃないかしら？

「ネコ耳姿でにゃあああとは、しっかり萌えポイントを押さえてんじゃねえか……ガクッ」

「キモいから鼻血だしながら満足そうな笑顔はやめて…って、倒れちゃった」

てか、今自分でガクッって言ったわよね？

「でも、このかだけじゃなく刹那さんもナッシーとはね…。どこがいいのかしら？」

「あっ、いや、その！
あ、アスナさんはどうなんですか？
ほら、高畑先生とか…」

「わ、私!?」

刹那さん、話そらすのが露骨すぎない!?

「アスナは駄目なんよ。
去年も一昨年も学祭で告白しようとしたけど緊張して声もかけれず終まいで」

「ええっ!?
アスナさんが!?」

「ちょっ、ちょっと、このかーっ!?」

何刹那さんに余計なコト教えてんのよ!?

「レッドが奥手になるとか意外だな」

「うっさい！……って、復活早っ！？」

もう立ち直ったとか…

ナッシー、最近頑丈さが化け物じみてきたわね…

「しっかし中学生のくせに好きな相手がタカミチとか…。
マニアックな趣味してんなお前」

「この2人よりはマシな趣味してるわよ！」

「は？」

「ちょっ、ちょっとアスナさん！？」

慌てる刹那さんに何がなんだかわからないといった顔をしたナッシー。

このかは……なぜか笑顔。

「それよりアスナ、告白はともかく「一緒に学祭回りませんか？」くらいゆーてみたら？」

「うっ……」

それを簡単に言えたら今まで苦労してないわよ…

「あ、ほらほら。
『中学生の諸君は「いきなり呼び出して告白」とゆーパターンが多いが、それでは相手の男の子も困ってしまうぞ。まずはさりげなく学祭見学に誘ってお互いに雰囲気がほぐれて来た所で本題に入るのが王道成功パターンだ』やてアスナ」

「もう私のことは放っといてよーっ！！」

ｓｉｄｅ　アスナ　ｅｎｄ

side　ナナシ

仕事も終わり、寮の部屋に戻ろうとした所、途中でカモに捕まってネギ達の部屋に連行されて―

「はあ？レッドとデートしろって？」

「ちょっと！？何で私がナッシーなんかとデートしないといけないのよ！？」

そりゃあこっちのセリフだよ。
何で俺がレッドなんかと…

「だからぁ、予行演習だっつーの」

予行演習？

まさか昼間の話のか？

本場（タカミチ）のためにデートの予行演習するって訳か？

「嫌だよ面倒くさい。
そんなもん俺じゃなくネギに任せとけよ」

「ネギと街歩いたってデートの予行演習になんないでしょっ！」

「あうう」

「確かになー。
ナッシーならともかく、ネギ君に高畑先生の代役は無理あるかな」

「でもネギ先生以外に手近な男性はいませんし…」

いくら女子校だからって、女子3人が集まって思い浮かべた手近な男性が2人だけってのはどうなんだ？

「ふふ、ならしゃあねえ。こんなこともあろうかと、まほネットで夢の秘密アイテムを購入しといたぜ」

そう言ってゴソゴソしだすカモ。

……何買ったんだ？

「じゃーん！

『赤いあめ玉・青いあめ玉年齢詐称薬』！」

そ、それは！？

「イキナリ犯罪ぽい名前のアイテムね…」

「その名のとおり外見年齢を調整できる魔法薬だ。
もっとも実際に肉体が変化するわけじゃねえ。
一種の幻術だな」

「くうう！
これを学生の頃に手に入れとけば堂々と18禁コーナーに入れたものを…！」

「ナッシー……」

「……ある意味コレも健全な男性の反応なのかしらね？」

「……それはナナシ先生だけじゃないでしょうか」

全部聞こえてんからなテメエら。

「とにかくこれで兄貴を大人にすれば完璧な予行演習だろ？」

「おおー、なるほど！」

こういうことに関しては相変わらず手際いいな。

「でもホンマに大人になれるん？」

「試してみろよ。
赤で大人になれるぜ」

そう言われて赤玉を一つ口に入れるこのか。

瞬間ボンッと音と同時に煙が発生した。

そしてその煙から現れたのは―

「ひゃー？」

「ぶはっ！？」

外見二十歳ぐらいになったこのかがいた。

そ、その姿はヤバい…！

今の身体に服のサイズがあわなくなって、そこから肌が見えてヤバい…！

ぶっちゃけエロい。

「見て見てナッシー。
セクシーダイナマイツ！」

「お、おう…」

「ナナシ先生、鼻の下が伸びてますが」

「男の性だ」

うん、仕方ないんだ。

美少女から美女になったこのかの姿を見たら、みんな同じ反応すると思う。

「こらおもろいわ。
ウチこーゆー魔法の方が好きやな。
はい、ナッシーもあーん」

「……あむ？」

反射的に思わず口を開けてしまったが、コレは…

「なっ…！？」

再びボンッと音と煙が発生し、煙が晴れてから自分の姿を確認してみると―

「ち、縮んでやがる…」

ネギより少し幼いぐらいの―8歳ぐらいの姿の俺がいた。

「「「「か…」」」」

か？

「「「「可愛いー！」」」」

「うおっ？」

なんだよ全員そろって？

「うっそ！？
これが子供の頃のナッシーなの！？めっちゃ可愛いじゃない！？」

「い、今と変わりすぎじゃないでしょうか？」

うっせ。
昔はこんなんだったんだよ

中学生ぐらいから急に身体が大人びてきて、可愛いからカッコいいに変わったんだ。

「あーん可愛ええ！」

「頬擦りやめろ」

今の体格じゃ簡単に持ち上げられてしまう。

てか、レッドの予行演習の話はどうなったんだよ…

・〜・〜・〜・〜・〜・〜

―次の日

昨日話したとおり、レッドのデート予行演習が決行された。
結局相手は詐称薬を使ったネギ。

そんでもって俺らはそんな2人のデートを尾行…もとい、見守ろうとしてたんだが―

「……なあ？」

「んー？」

「…2人は放っておいていいのか？」

「大丈夫やって。
2人のことはちゃんと、せっちゃんとカモくんが見張っといてくれとるから」

どういう訳かアイツらとは別行動でこのかと2人でプレ公演などを見回ることになった。

……なんで？

「…しかも昨日と同じ子供の姿で」

「えーやん、可愛いんやから」

……そういう問題なのだろうか？

てか、もしかしてこの姿気に入ったの？

「ほなナッくん、まず何処から回る？」

「そうだな……って、ナッくんって何！？」

「ナッシーのショタバージョンやから、ナッくん。どやろ？」

「ショタ言うなっ！？」

ううう……また変な呼び方が増えてしまった…

……イジメか？

「あれー？
このかじゃん？」

「あっ、ゆーな」

その後ろにはピンクに大河内も。

3人共運動着ってことは、それぞれ部活の途中かな？

「ねえねえ、聞いてよ！
さっきスゴいイケメンがいてさ！」

「なんかネギ君に似てたよねー？」

「うん…スゴく似てた」

それ本人（ネギ）です。

「あー、それネギ君の従兄弟さんなんよ」

「あっ、そうなんだ。
どおりで似てるわけだ……って、ん？その子は？」

ようやく隣にいた俺に気付いたみたいだ。

さて、どう誤魔化すか？

「この子ナッシーの親戚なんよ。
ほら、髪色が同じやろ？」

「そうなんだ。
確かに同じ金髪だね」

……髪色が同じだからってすぐ信じるのはどうかと思うんだが。

「ねえねえこのか！
抱っこしてもいい？」

「あっ、ずるーい！
私も！」

「できれば私も……」

「ええよ」

ちょっ！？
お前になんの権限があって許可出してんだよ！？
そういうのは普通本人に訊くべきだろうが！！

「ひゃー！肌スベスベでプニプニー！可愛いなあ！」

そんな俺の心の叫びも無視され、自分の生徒に簡単に持ち上げられ、頬擦りされる。

ええい！頬擦りやめい！

なんだ！？

昨日といい今日といい頬擦りが流行ってんのか！？

「名前は何ていうの？」

「ナッくんやよ。」

あっ、コラ！？

「ナッくん、君はナッシーみたく汚れた残念な大人になっちゃ駄目だからね？」

「そのまま純粋なままでいてね？」

「……（なでなで）」

こ、コイツら……！
人が聞いてないと思って好き放題言いやがって…！

学校が始まったら、コイツらだけ宿題倍にしてやる。

「ナッくんモテモテやな」

……あれ？
確かにこの姿の方がモテてるような…？

いっそ、ずっとこの姿でいた方がいい……わけないな。

ん？
なんでかって？

だってこの姿じゃ１８禁コーナー無理じゃん？

・　・
・

・・・・・・・

―あの後、明石達と別れた俺らは順調（？）に下見をしていた。

屋台も色々と見ていたら、いつの間にか夕方になっており、そろそろ帰ろうかと思ってたところ―

「なんか歩いとったら暑くなってきたなぁ」

これが最後になるかな？

「ならあそこで、ちょうどよくアイス売ってるから買ってきてやるよ。
ちょい待ってな」

身体は子供だからって、中身は大人だからな。
さすがにアイス代ぐらいは奢るさ。

「おう坊主。
偉いなあ、お使いかい？」

「……ソンナトコデス」

本来なら自分より年下の相手に坊主扱いされるって、なんか複雑だな…

「まあ、いいや。
おっちゃん、オススメの味は？」

「そりゃもちろん学園祭限定『ハルマゲドン味』に決まってんじゃねえか」

……はい？

「これを食べればお口の中がハルマゲドン！」

い、意味わからん…

けどまあ―

「じゃ、じゃあそれを2つ頼む…」

「毎度！」

限定なら買うしかないな。

「ただいまー」

「おかえりナッくん……って、なんなんそのアイス…？」

「ハルマゲドン味だそうです」

「……はい？」

まあ当然の反応だな。

「とにかく溶ける前に座って食べようぜ？」

「う、うん…」

そんで、近くのベンチに座っていざ食べようとしたんだが―

「……レディファーストだ。
先に食べていいぜ？」

「……ここは買ってきたナッくんが責任持って先陣を行くべきやと思う」

もたもたしてたら溶けちまうしな…
仕方ない、食べるか。

「……あむ」

「ど、どう？」

ふむ……これは…

「んんっ！？」

「どうしたん！？」

「……ドンパチだ」

中にドンパチが入ってやがる…

「ドンパチ？」

「アレだよ。口の中で弾けるキャンディー」

「ああ、アレ」

ハルマゲドンの正体がわかって安心したのか、このかもアイスを食べ始める。

「んー、パチパチー」

……にしても、もう少しネーミングはどうにかならなかったのだろうか？

まあ、名前はともかく味は普通に美味いからいいか。

そう思いながら、食べ進めていると―

「そ、そっちのアイスはどんな味？」

「…は？いや、お前と同じハルマゲドンだけど…」

「どんな味？」

「ハル「どんな味？」…」

ＲＰＧのキャラかなんかかお前は！？

何回同じセリフ言うつもりなんだよ！？

「……食べてみるか？」

「うん！」

俺は自分のアイスをこのかの口元に寄せる。

「ほら、あーん」

「あーん。
……んー、パチうまや」

パチうま＝パチパチ美味い
……なんか変な単語生まれたな。

「はい、じゃあお返しにウチのもあーん」

「……いや、同じ味だからお返しはいらないってか意味ないんだけど…」

「あーん」

「……あーん」

……もうこの子を説得するのは諦めました。

「……間接キスやね？」

俺がこのかのアイスを食べると、頬を赤く染めて恥ずかしそうに、そんなことを言ってきた。

恥ずかしいんなら言うんじゃねえよ……

「バーカ。
ガキとのなんかノーカンだよノーカン」

「むー……。
今はナッくんの方がガキやんか」

「うっせ」

ただ―

「ほら、そろそろ帰んぞ」

「あ、待ってなナッくん」

「ナッくん言うな」

このかから貰ったアイスが俺のアイスより甘く感じたのは気のせいだったと思う

side　ナナシ　end

おまけ

寮に帰ると刹那がなんだか不機嫌だった。

心配しなくともお前の大事なお嬢様を奪ったりなんかしねーよ、と言ったら何故か斬られそうになった。

……何故だ？

to be continue ?

第32話「メ〇モちゃん?メル〇ちゃんなのか?」（後書き）

はい、新キャラ（笑）登場。ナッくんでーす！

ナッくん
「おおい！？
これ以上変な呼び方増やしてどうする！？」

いいじゃん別に。
ナナシ自体もともと変な名前なんだし。

ナッくん
「へ、変な名前…」

そして、今回のテーマは
『甘い』でしたが、どうでしたでしょうか！
今回少しでも甘いとかナッくんが憎いとか思った人は負けですよ！

ナッくん

「何に負けるんだよ…」

では、また次回。

第３３話「学園祭に向けてその３」（前書き）

今回特にこれといったオチもなく進展もないただの日常の話です。

ナナシ
「なら書く必要あったのかよ…」

では。

第３３話「学園祭に向けてその３」

ｓｉｄｅ　ナナシ

今日もいつもと変わらずにネギ達と学園に走って向かう俺。

小太郎は場所が初等科にあるため既に別れた。

……いつも思うんだが走る必要あんのか？

遅刻した日ならまだわかるが、間に合いそうな時間でも走るのは何故だ？

……若さか？

「ところでアスナさん、タカミチは学祭に誘えたんですか？」

「う〝……」

そういやまだ結果聞いてなかったな。

まあアスナ相手ならタカミチは一緒に回るぐらいするだろうけど。

……恋愛感情とは別で。

「何度か電話かけようとしたんだけど…その…ね？」

「えーー！？
まだ誘ってへんの！？」

「マジかよ姐さん！？」

「う、うるさいわねっ！」

「いいからとっとと当たって砕けろよ」

「砕けちゃダメなのよ！
頼むから今はそんな不吉なこと言わないで！」

「ダメえやナッシー。
今アスナは砕けるとか振られるとかいう言葉に敏感なんやから」

「ナッシー言うな」

なんでそんな受験生みたいな気の使い方しなきゃいけないんだ？

「でもアスナさん、こないだ告白するって言ってから何日も経つの

に…」

「もう学祭もすぐですからマズいですよアスナさん」

「わかってる！
わかってるけど携帯持つとどうしても手が震えて心臓バクバクして息もできなくなってダメなの！！」

なんで電話しようとするだけで、そんな死にかけるような状態になんだよ……。

「情けねえなー。
てか旦那なら高畑と仲いいみたいだから話してセッティングとかできんじゃねえか？」

「ん？まあできないことはないけど……」

「いい！やめて！
自分でするからもうちょっとだけ放っといて！！」

本人がこう言ってるしな。

「でもいよいよ明明後日から学園祭かー。
楽しみだなー」

「ま、姐さんと違ってこっちにゃ何も用事はねーからな。
ゆっくり祭りを楽しませてもらうぜ。な、兄貴？」

「そうだね」

……ゆっくりできればいいけどな。

「アンタ達は気楽でいいわね……。
他人事だと思って……」

実際他人事だしな。

・〜・〜・〜・〜・〜

「あれじゃあレッドは無理そうだな…」

「ははは…」

昼の会議を終え、職員室を出た俺とネギは３－Ａのクラスに向かう。

もちろん準備のためだ。

学園祭間近ということで、今日から学祭まで授業を中止して、どのクラスも出し物の準備をしている。

「さて、俺らのクラスは順調だといいんだが」

「皆さん頑張ってますから大丈夫ですよ、きっと」

そうだといいがな。

不安8割、期待2割ぐらいだな、と考えつつクラスの扉を開く。

「うぃーす」

「こんにちはー。
皆さんどうですか？」

「ヤバイよネギくん！
ナッシー！！」

俺の当たってほしくなかった予感が的中したのか、教室内はいまだ何を作ってるかもわからない状態であった。

……間に合うのかコレ？

「ネギ君お願い！
手伝って！」

「は、はい」

ついにネギにまで頼むか。
どんだけ作業進んでないんだよ。

「ナッシーはサボッてないで、さっさと作業に戻ってよ！」

「ほら金具！」

「それ終わったら、今度はこっちね！」

「なんだこのネギとの扱いの差は!?」

なんでネギにはお願いしてるに、俺にはお願いどころか命令口調なんだよ!?

ばっくれるぞ!?

「あなた達!ネギ先生に手伝わせるなんてとんでもないですわよ!」

ショたａ…じゃなくて、雪広は相変わらずネギに甘いな。

「ネギ先生は先生一年目ですし、ゆっくりしてらっしゃってくださいね?」

「は、はい」

「すいませーん。
俺もまだ先生一年目なんですけどー？」

「いいからナナシ先生は作業に戻ってください」

「なんでっ！？」

なんでネギにはデレデレのくせに、俺にはツンツンなの！？
多少俺にもデレてくれてもいいじゃないか！

「あ、そうだネギ君！」

椎名が何か思い出したのか、ネギに近づく。

「私達、学祭でライブイベントに出るんだよ！」

「そうなんですか？」

「そうそう。ネギ君見に来てよ」

「……」

そのままチア三人組からチケットをもらうネギ。

「ああっ！
ソコずるいですー！」

「さんぽ部の学園一周さんぽイベントにも来てよ！」

「……」

今度は双子がネギを誘う。

ネギを誘い出したことに反応したのか、他の奴らもネギを誘おうと動き出した。

「そうだ弟子よ。
お主の套路（中国拳法における型）を新入部員に見せたいから、中武研の演武会に出るアルよ。
師匠命令ネ」

「はい、くー老師！」

……まあ師匠命令なら仕方ないが。

「どいてクーフェ！
ネギ君！新体操部のエキシビションも見に来て！」

「ネギ先生！
馬術部の乗馬イベントにも是非！！」

「は、はい」

「……」

この数分だけで、一気に学祭での予定が決まってきたネギ。

「……いいよなーネギは。俺には誰からも誘いがないっていうのにさー。
やっぱ担任と副担じゃ、こうも差が出るもんなんですかねー？」

「それだけじゃないと思うんですけど…」

うっさい！

「大丈夫！ナッシーのことも忘れてないよ！
ほら、バスケ部で屋台やるから来て！」

「水泳部のたこ焼き屋もぜひ……」

「サッカー部もー！」

他にも私の所もー！という声がたくさん出てきた。

お、お前ら…！

「「「「絶対に財布は忘れないでね！」」」」

「やっぱりそんなオチなのか！？」

ちくしょう！！

所詮皆売り上げ目当てか！

「もーいいよー…。

金目当てだろうが何だろうが、全部一人で回ってやるよー…」

「あっ、拗ねた」

「まあまあ、ウチが一緒に回ってあげるから元気出してえな？」

「好きにしろよー…」

「ん、約束やで」

……あれ？

今無意識に何か約束しちまったような……？

「このか、アンタなにどさくさに紛れて約束してんのよ…」

「えへへ」

「私はまだ高畑先生を誘えていないっていうのに…」

まあ大事な約束だったらそのうち思い出すか。

てか何でこのかは上機嫌ぽいのに、レッドは落ち込んでるんだ？

・〜・〜・〜・〜・〜

放課後になり、作業からも解放された。

…全然作業進んでないくせに、放課後残らないでいいのか？

解放された俺は、ネギとカモとレッド、それと自称ネギのマネージャーである朝倉のメンバーで広場に集まり、スケジュールの調整をしていた。

「のんびりできるかと思ってたけど、結構行くところが多くなってきたな。
これ全部回るのは大変だぜ兄貴？」

「まあ三日間もあるから大丈夫だよ」

原作通りなら予定はまだ増えるんだけどな…。

「もともとクラスのみんながやってる出し物には全部行くつもりだったよ。
何て言っても僕はみんなの担任だからね」

「おっ、偉いネギ君」

「ナッシーも少しはネギを見習ったらどう？」

「オ、俺モ、モトモトソノツモリダッタヨ？」

「ならちゃんと目を合わせて答えなさいよ！」

「本当だって！
クラスの奴らの出し物は行かないで２－Ｃのメイド喫茶とか、１－Ｓのコスプレ喫茶行こうだなんて誰も思ってなかったから！」

「行く気だったでしょ！？何ちゃっかりめぼしい出し物チェックしてんの！？」

「どんだけお茶飲むつもりなんですか…」

「兄貴、そのツッコミは違うと思うぜ」

くそう。

俺の完璧な予定が…！

そもそもウチのクラスがメイド喫茶にしてれば他のクラスを回る必要はなかったというのに…！

「おーーい、兄ちゃん！
ネギー！」

「小太郎？」

大声で叫びながら、こちらに駆け寄る小太郎。

その手には、なにやら紙らしきのを持ってるが…。

「格闘大会もう締め切るらしいで！
申し込み行こーや！」

話に脈絡がなさすぎるぞ小太郎。

てかその手にある紙は大会申し込み書か。

「ええっ！？
出ないよ僕！？」

ちなみに俺も。

「何言っとんや二人共！？せっかく勝負できるチャンスなんやで！？」

「勝負って体術だけだと僕勝ち目ないんだけど！？」

これも原作通りなら、この後に色々と裏の関係者が参加してくるからな。
相手が一般人だけなら参加してもよかったんだが、そんな人間やめた連中が参加する大会に出るとかマジ勘弁。

「でもな、実は問題があんねん」

問題？

「俺ら12歳以下は子供の部になってまうんや。
俺らが子供相手にしたら弱い者イジメやろ？」

……お前らなら相手が大人でも充分イジメになると思うんだが。

「ふふん。
それなら丁度いい手があるぜ」

「何？ホンマか？」

「いい手って……あ！
まさかカモ君！？」

……またアレ使うのか。

「よっしゃ！
行こうぜコタロー！」

「おおっ！なかなか頼りなるやんか！」

「ちょっと勝手に決めないでよーっ！」

……行っちまった。

「あははは、女の子に男の子にとモテモテだねーネギ君」

「……羨ましい」

「何言ってんのよ？
ナッシーだって男にはモテモテじゃない」

「嬉しくねーよ！？」

俺は女の子にモテたいんだよ！

「あ、いたいた。
アスナー！」

「ん？……あれ？どうしたの二人して？」

「ちょっと聞きたいことあって……」

今度は和泉と釘宮がやってきた。
なんか珍しい組合わせな気がする。

「アスナ、こないだ美形と一緒にいたじゃん。
アレ知り合い？」

「え、こないだって…？」

「美形？俺のことか？」

「いや違うから。
そもそもナッシーならアスナに聞きかなくてもわかるし」

確かに。

じゃあ誰だ？

麻帆良で俺以外の美形は？

「ほら、ネギ君になんか似た人だよ」

「あっ、アレ！？」

「…ああ」

ネギ大人バージョンのことね。
確かにあのネギは俺にも劣らない美形だわ。

「ラッキーだなお前ら。
その美形の奴なら、今ここに来るぞ」

「えっ、ホンマ!?」

「ホンマホンマ」

そろそろ戻って来ると思うんだけど…

「もー。二人とも強引なんだから」

「あはは。
でもこの薬すごいな」

「よおー色男」

「うわっ？」

俺は戻ってきたネギ大人バージョンを肩を組み合うことで捕まえる。

そのまま顔を近付けてこっそり耳打ち。

「いいか？お前は今からネギじゃなく、ネギの親戚のナギだ。Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」

「はい？なんで父さんの名前を……」

「いいから話合わせろ」

そう言い、俺らは和泉と釘宮の方に向き直す。

「ほい、お待たせ」

「どうしたん？」

「なあに。ちょっと再会を喜んでただけさ。なっ？」

「は、はい」

「ほら、つっ立ってないで自己紹介しろよ」

俺はネギの背中を押す。

「え、えっと…、ナ、ナギ・スプリングフィールドっていいます…」

「あ、は、はい。
あの……その……」

顔を真っ赤にさせ釘宮の背中に隠れながらも、何か言おうとする和泉。

そして―

「こ、これ！
つまらないものですが、よかったら来てやってくださいーっ！！」

偽ナギに自分のライブチケットを渡す。

つまらないものって……。
ほら、釘宮がなんだか微妙な顔してるぞ…。

てか、偽ナギ、ネギの分も合わせたら二枚目じゃね？

「し、失礼しますっ！！」

「よろしくお願いします。そっちの彼もよければ」

「え……あ……」

そのまま走り去る二人。

そっちの彼って……

「俺もか？」

多分お前だよ。

「あのーこれって……」

「一目惚れってやつ……かな？」

「ぺっ！！」

「こらこら！悔しいからって教師が道端で唾吐かないの！！」

この天然色男共は……！
実年齢１０歳のくせに色気づきやがって…！

と、俺が二人に嫉妬していると―

「うおおおい！？ナギ！？お前どうして！？」

「あっ、師匠（マスター）」

「が…ぐ…？
何だ幻術か……」

あの二人が去った途端、今度はエヴァがやってきた。

…何この場所？
どうしてこうも知り合いが次々やって来んの？

つーか、エヴァは実年齢ババアだからって、女が大声で、うおおおい！？はないだろう……。

「成る程。格闘大会に出るためか。紛らわしい…」

「は、はい」

「……さーせん」

…コイツが本気ならマジで潰されるから笑えない。

「ふふ……ただし、ぼーやがこの最弱状態の私に勝てなければ、学祭最終日はその姿で私に一日付き合ってもらおう」

「えっ、えええええ！？」

「師匠命令だ。
拒否は許さんぞ」

「偽ナギと学祭回りたいなら、素直にそう言えばいいのに…」

「何か言ったか…！」

「……何でもねーです」

聞こえてやがったか。
この地獄耳め。

「じゃあな。
楽しみにしてるぞ」

「あわ、あわわわ…！？
ど、どどどうしよう！！
何だか大変なことになってきたよ！？
師匠に負けたら最終日丸つぶれで……」

「うぬぬぬ…。のどか嬢ちゃんと回る時間を考えると……マズいかな、こりゃ」

いつの間に宮崎と回る約束してたんだコイツは。

「どうすればいいんでしょうかナナシ先生!?」

「負けちまえ!」

「そんな笑顔でサムズアップしないでください!?」

「まっ、心配すんなや。
……最終日はどっちにしろ潰れるんだからな」

「えっ……今なんて……」

「「ひいいいいっ!?」」

うおっ！？
今度は何だ！？

「あっ、ナナシ先生。
やっと見つけましたよ！」

「おお、さよ。
そういやいなかったな」

てっきりいると思ってたんだが。

「いないと思われるよりはマシですけど、なんだか複雑です…」

「悪い悪い。
で、何の用だ？」

「はい。先生さえよかったら一緒に学祭回ろうかと思って」

なんだ、そんなことか。

「いいよ別に。
もとからそのつもりだし」

「ホントですか！？」

「ああ。お互い回る相手がいない同士で仲良く回ろうぜ」

「なんだか嫌な表現ですねソレ……」

間違っちゃいないけどな。

「小太郎はどうする？
お前も一緒に回るか？」

「ん？いや、俺はクラスの連中と回る約束してもうたから」

「……女とか？」

「確か女もおったけど…」

「はんっ！お前なんて二度と誘わねーよバーカ！！」

「なんでっ！？」

ん？自分だってさよと回るだろ、だって？

いいんだよ、さよは。
家族みたいなもんなんだから。

「ナッシー…、アンタこのかとの約束はどうするつもりよ？」

「へっ？約束？」

なにソレ？

・～・～・～・～・～

なんやかんやで俺の学祭のスケジュールもそこそこ忙しいもんになった。

初日はさよと回り、二日目はこのかと回る。

……ホント、いつこのかと約束したんだ？

まあ一人で回るよりはいいんだけどさ。

そして三日目は……ここで言う必要はないだろ？
言うなれば、せいぜい楽しみにしていてくれってコトだけだ。

おまけ

レッドがどうやらタカミチを誘うことに成功したようだ。

なぜ知ってるかだって？

だって朝、タカミチが職員室で―

「ははは、アスナ君に学祭誘われてしまったよ。
僕なんかと回っても楽しくないだろうに…」

とか言ってきやかだったので殴っといた。

このニブチンめ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３３話「学園祭に向けてその３」（後書き）

んー…、なんか最近思ったようにギャグが書けない。

ナナシ
「もとからクオリティが低いんだから仕方ないだろ」

うっ……！
それを言われるとどうしようもないんだけどさ…。

それよりさ、重大なコトが判明したんだよ。

ナナシ
「何だよ？」

実はアイン様からのご指摘でわかったんだけど、なんとこの物語、１９話が抜けてましたー（笑）

ナナシ
「えええええええ!?
（笑）じゃねえよ（笑）じゃ！３４話終わったとこで何そのカミングアウト!?
じゃあ何!?本来なら今回は３３話なの!?」

うん。
直そうと思ったんだけど、どうすればいいかわからないから、このままスルーしようかと……

ナナシ
「ダメだろ!?
直せよ今すぐ!!」

だからどうやって直していいかわからないんだって。

なので、他にも気付いていた方がいるかもしれませんが、直し方がわかるまでこのまま見逃してください。

では。

ナナシ
「ダメだこの作者…」

第３４話「前夜祭」（前書き）

はい、今回後半から若干シリアス（笑）なるのでご注意をー。

ナナシ
「（笑）ってなんだ、（笑）って……」

そして今回おまけはありませんので。

ナナシ
「毎回思うんだが需要あんのかソレ…？」

さあ？

第３４話「前夜祭」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「……眠い」

日付が変わる時間が近づいてきた頃、俺は３－Ａの教室にいた。

もちろん一人でいるわけじゃない。

クラス内には３－Ａの生徒達もいる。

なぜかって？

「トンカチ音たてないよう気をつけてー…」

「無理！」

気付いた方もいるのではないだろうか？

そう、学園祭の準備のためだ。

学園祭まであと二日もないというのに、ウチのクラスは俺の予想通り準備が遅かったため、泊まり込みで作業をしていた。

「うふふふ、忍び込んで泊まり込みってなんかワクワクするねー」

「ナッシー、嬉しいからって興奮して狼になったりしちゃダメだからね？」

「なるかっ！」

「しー！静かに！！」

別に嬉しくもねえし、お前ら相手に狼になるかよ！
てか意味わかって言ってんの！？

「うう…、泊まり込みは前日以外禁止ですのに…。
委員長ともあろう私がこんな規則破りを……」

てか教師である俺とネギも規則破ってるんだが…

「仕方ないじゃん。
間に合わないんだから」

「わかってますわよ」

はあーあ…、徹夜労働とかもう身体がキツいんだけどな……。
しかも肌荒れの原因になるし。

「でも嬉しいですねー。
皆さんがこうして夜に教室に集まってくれるなんて」

「…お前は楽でいいよな」

ちょっと前までは一人で教室にいたさよには、こうして夜中に誰かがいるのは嬉しいんだろう。
そのため周りの奴見てニヤニヤしてる。

はっきり言って気持ち悪い

「来たよ！！新田！！」

作業を続けてると、隣の３－Ｂの生徒が見回りをしている新田が近づいて来たことを教えてくれた。

……３－Ｂ、お前らもか。
どうりで隣からも何やら音がすると思った。

「サンキュー！
皆隠れて！！」

皆、明石の一言によって段ボールやら、作りかけの壁などに隠れる。

「ちょっ！？
俺入れてない！？
入れてないってば！？」

俺も皆と同じように隠れようとしたけど、無駄に身体がデカいためか隠れる場所からはみ出してしまう。

「こっちもう無理！
他のトコに隠れて！」

そんなこと言ったって、もう新田が足音が聞こえるぐらい近づいてんだぞ！？

くそっ！
こうなったら―

「な、ナッシー！？
それ隠れてるつもり！？」

「私はただの床…私はただの床…私はただの床…」

―とりあえず床と同化してみた。

「いやさすがに自己暗示じゃ無理だって！？」

うるせぇ！
もう隠れるトコないんだから仕方ないだろ！！

――カッ

そして次の瞬間、教室内がライトで照らされた。

「……」

そして無情にもライトは俺の伏している床を照らす。

―ば、バレたかっ！？

「……ふむ、どうやら気のせいのようだな」

「いや、気付けよっ！！なんで照らしたのに気付かないんだよ！！……あっ」

「かかったな」

そうして口元をニヤリとさせる新田。

し、しまったあああ！！思わずツッコんじまったあああ！！

ちくしょう！
これが孔明の罠か！？

「さて、お前はいったいこんな時間に何をしてる？」

「えっ…と、ちょっと忘れ物を取りに…」

言い訳が苦しい！

そんな俺がどうにかこの状況を打破できそうな言い訳を考えてると―

「……ふん、まあいい。３－Ａは他より準備が遅れてるようだし、担任、副担とも新任だから色々不都合が重なったのだろう。
今日だけは見逃してやる」

「ま、マジかっ！？」

今だけはあの新田が輝いて見える！

「ただしー」

「へっ？」

「お前は別だ」

「なんでっ！？」

今日は見逃すんじゃなかったの！？

「見逃すのは生徒だけだ。お前は今から朝まで指導室で説教だ。

……まったく、教師という者が自ら率先して規則を破ってどうする…」

「理不尽だ！？」

俺は手伝っていただけだというのに！？

そんな俺の抵抗もむなしく新田は俺の首根っこを掴んで引きずりだす。

俺はなんとか逃れるためにいまだに隠れている生徒達にアイコンタクトでＳＯＳを求める。

「（だ、誰か助けて！？
このままじゃＢＡＤＥＮＤに！！）」

「（……みんな、ナッシーのことは忘れなさい。
ナッシーは私達のために尊い犠牲になってくれたんだから）」

「（…うん、じゃあ新田先生からの許可も得たし、作業に戻ろうか）」

「（は、薄情者共めえええええええ！！）」

俺のＳＯＳ信号はどうやら生徒達は受信出来なかったようで、無視される。

その間にも新田は既に廊下まで俺を引きずっていた。

「いやあああああああああああ！！」

「黙っとれ」

「……さーせん」

side　ナナシ　end

side　ネギ

「何の話でしょうね？」

「さあ……？」

午後になってようやく作業が一段落した頃、アスナさんやこのかさんといった文化部メンバーは、部活の方の出し物の準備に向かった

僕は僕で校長室に用事があったんだけど、しずな先生から校長室ではなく、世界樹広場に刹那さんと一緒に来てほしいと言われたんだけど……。

……本当何の話なんだろ？

「あれ？おかしいな…？」

「どうかしました？」

刹那さんが何か違和感を感じたのか辺りを見回す。

「学祭前日なのに広場に人が一人もいないなんて…」

ほ、ホントだ…。

刹那さんの言う通り、人が一人もいない。

と思っていると、広場の中央にいくつもの人影が見えて―

「ふぉっ、待っとったぞネギ君」

「へ？」

近づいてみたら、そこには学園長が。
それにタカミチや瀬流彦先生。

少し離れたトコには煙草を吹かしているナナシ先生にさよさん、小太郎君までいる。

…あれ？なんで他の人達から離れてるんだろ？

煙草吸ってるからかな？

「あ、あの、この方達は……？」

ナナシ先生に対する疑問よりも、ここにいる人達に対する疑問の方が大きいためそっちを優先する。

それにしても、ずいぶん統一性のない集団だと思うんだけど…

「うむ。ネギ君にはまだ紹介していなかったの。
ここに集まっとるのは学園都市の各地に散らばる小・中・高・大学に常時勤務する魔法先生……、及び魔法生徒達じゃよ。
全員ではないがの」

……それはつまり？

……。

「えええええええっ！？」

ま、魔法先生と魔法生徒ってこんなにいたの！？

てっきり先生は学園長とタカミチとナナシ先生ぐらいかと思ってたのに…！

「君がネギ君か。
話はよく聞いているよ。
よろしく」

「は、はい、どうも」

この人は確か明石教授だったよね…？

「いやー黙っててゴメンねネギ君」

「せ、瀬流彦先生も魔法先生…？」

全然気づかなかった…。

……ん？
でもなんで今日はそんな魔法関係者が集まってるんだろ？

まさか僕に紹介するためだけに集まったわけじゃないだろうし…。

「うむ、説明しよう。
今日わざわざ皆に集まってもらったのは他でもない。実は問題が起きてての、解決のために諸君の力を貸してもらいたい」

「敵か！？」

「ま、また何か大変なことが！？」

「いや、修学旅行のような深刻なことはないぞい」

……ほっ、それならよかった。

「まあ別の意味で深刻じゃがな。
ときにネギ君、『世界樹伝説』を知っとるかの？」

『世界樹伝説』？

それってクラスで話題になってた奴かな？

「あー、俺のクラスのガキの間でも有名やで？
くだらんわ。学祭最終日に世界樹にお願いすると願い叶うんやってな」

「あれ？恋人になれるんじゃないの？」

「まあ、大体そんなとこじゃな」

でも、そんな噂がどうしたんだろう？

「それがのぅ……、事実なんじゃ」

「「「へっ？」」」

事実？

「マジで願いが叶ってしまうんじゃよ。
２２年に一度の」

「「「はっ？」」」

刹那さんと小太郎君と共にポカンとしてしまうけど仕方ないと思う。

いきなりそんな話をされても…

「そこでじゃ。
諸君達には学祭期間中、特に最終日の日没以降生徒による世界樹伝説の実行―
つまり、告白を阻止してもらいたい」

「ええっ!?叶ってしまうんじゃって……」

迷信じゃないの!?

「ふぉふぉふぉふぉ。
生徒達に世界樹と呼ばれとるこの樹じゃがな、正式名称は『神木(しんぼく)・蟠桃(ばんとう)』といって強力な魔力をその内に秘めておる。
つまりは『魔法の木』なのじゃよ」

そ、そうだったんだ…。

そりゃあ、あんな大きいんだから普通の樹ではないとは思ってたけど…

「22年に一度の周期でその魔力は極大に達し、樹の外へと溢れ出し、世界樹を中心として六か所の地点に強力な魔力溜まりを形成する。
ここの広場もそのひとつじゃ。
この膨大な魔力が人の心に作用する」

「俺にハーレムを形成してくれえええええええっ！！」

「……と、あのような即物的な願いは叶わん」

「先に言えっ！」

な、ナナシ先生…。
珍しく大人しくしてたと思ってたのに…

「……ちっ」

ん？
今どこからか舌打ちが聞こえたような……？
気のせいかな？

「しかしの、こと告白に関する限りその成就率はなんと１２０％！！

まさに呪い級の威力なんじゃよ！！」

「はぁー…？」

ひゃ、１２０％って…。

「ホントは来年のハズだったんじゃが、異常気象の影響か１年早まってしまった。
そこで今回の緊急召集となった訳じゃ」

「で、でも恋人になれちゃうならいいんじゃないですか？」

「とんでもないぞい。
人の心を永久に操ってしまうなどとは魔法使いの本義に反する。
好きでもない奴と恋人になってしもうたらイヤじゃろう？」

そ、そうなの？

僕ホレ薬作ってたけど…？

「（一時的だしいーんじゃねーか？
てーゆか兄貴、ホレ薬って一応違反なんだぜ？）」

「（ええっ！？嘘！？）」

じゃあ、つまり僕犯罪者……？

い、いや大丈夫だよっ。
バレなきゃいいんだよバレなきゃ。

「（なんだか兄貴、考え方が旦那に似てきたな…）」

カモ君がなにやら複雑な顔してるがスルーしておく。

「既にこの噂は生徒の間にかなり広まっとる。
……刀子君」

「はい。
『学園七不思議研究会』
『学園史編纂室』の研究や『オカルト研究会』『世界樹をこよなく

愛する会』の世界樹発光現象の観測によりかなり真実に近づかれています。
麻帆良スポーツの記事やネットの書き込み等により、現在学園生徒への噂の浸透率は男子３４％女子７９％……本気で信じている人は少ないと思いますが」

それでも噂はそんなに広がってるんだ……。

「占いや迷信が好きな女生徒を中心に実行したがる人は少なくはないと思われますね」

「そういうことじゃ。
マジでマズいのは学祭最終日じゃが、今の段階からそれなりに影響は出始める。生徒には悪いが、この六か所で告白が起きないよう見張っていてほしい」

これは……大変な仕事になりそうだな…。

「えー…、面倒くさい。
俺学祭期間中は色々と用事あんだけど…」

やっぱナナシ先生は渋るんですね…。

「皆用事あるのは一緒なんじゃ。
そう言わず協力してくれんかの？」

「いや、でも俺一人いてもいなかろうが大して変わらないと思う「
……いい加減にしないか」…あン？」

ナナシ先生の言葉を遮ったのは……ガンドルフィーニ先生？

「いつもヘラヘラヘラヘラと不真面目に…。
君の行動は普段から目に余る。
君には魔法使いとしての自覚が足りなさすぎる」

「はっ、すいませんね。不真面目なのは性分でね。
いまさら直しようがないんだよ。
それに魔法使いとして半人前な俺に自覚持てって言われてもな」

険悪な空気が流れ始めたのにも関わらず、ナナシ先生はガンドルフィーニ先生が言ってたように、ヘラヘラしながら煙草を吸い続けている。

「君みたいな者が魔法使い…、そして教師とはな。
ふん、周りに悪影響が出てなければいいが」

「いいんですー。俺のことを反面教師として見れば生徒は自然といい子になるんだから……あっ、やべぇ。自分で言ってて悲しくなった…」

なら言わなきゃいいじゃないですか…

「それにそこの狗族の少年の保護責任者になったそうじゃないか」

「……それが何か？」

「なに、類は友を呼ぶというか、素行の悪い者同士慰めあいでもしてるのかと思ってね」

「……」

なっ！？

「…ガンドルフィーニ先生、言い過ぎじゃよ」

「そうですよ。
少し落ちついて―」

「事実ではありませんか。現にあの『闇の福音』と懇意にしている上に、保護しているそこの少年は立派な犯罪――」

――チッ

「……者？」

瞬間、ガンドルフィーニ先生の頬を何かが掠める。
一瞬感じた魔力からして、おそらく『魔法の矢』だとは思うけど…

「……口を閉じろよガンドルフィーニ。
さもなくば次は当てる」

「な、ナナシ君！
君も落ちついてっ！」

普段のナナシ先生を知っている僕達からは考えられない程鋭い目をして、ガンドルフィーニ先生を睨むナナシ先生。

あそこまで激昂しているのは神様と話していた時ぐらいしか見たことがない。

「ふん…。図星をつかれたらすぐに暴力か。
なるほど、反面教師に相応しいわけだ」

「てめっ……！」

ナナシ先生はくわえていた煙草を噛み切り、ガンドルフィーニ先生に近づく。

ガンドルフィーニ先生もどこからかサバイバルナイフと拳銃を取出して―

「やめんかっ！！」

「！？」

「……ちっ」

学園長がそんな両者を一喝する。

ナナシ先生は渋々ガンドルフィーニ先生から離れていく。

「これから一致団結して問題に取りかからんといかん時に内輪揉めなどやっとる場合か！」

「も、申し訳ありません……」

「……俺は悪くねー」

と、言いつつも、やはりナナシ先生も反省するとこがあるのか、大人しくなる。

「……学園長、誰かに見られてます」

「何？」

そんな気まずい空気が流れてる中、一人の魔法生徒が何かを発見したみたい。

それをグラサンをした魔法先生が指を弾いて、破壊する。

む、無詠唱呪文!?

「魔法の力は感じませんでしたね……。機械だな」

「生徒か…。やるな、人払いの魔法を抜いてくるなんて」

「追います」

「深追いはせんでいいよ。こんなことができる生徒は限られとる」

そう女子高等部の服装に身を包んだ人が言うと、先ほど機械に気付いた女子中等部の生徒、それにガンドルフィーニ先生が動きだす。

ガンドルフィーニ先生はナナシ先生を一瞥するけど―

「……どうした?

俺なんか睨んでる暇あんのかよ?

追うんだろ?ならさっさと追いかけろよ、正義の魔法使いさんよぉ」

「……ふんっ」

ナナシ先生は皮肉じみたセリフを投げつける。

……ナナシ先生にも険悪の相手っているんだな。

あの人のことだから、なんやかんやで皆と仲がいいと思ってたのに……。

「さて……、たかが告白と思うなかれ。

コトは生徒達の青春に関わる大問題じゃ。

但し魔法の使用にあたってはくれぐれも慎重に！

よろしく頼むぞ！！」

なんだか一波乱ありそうな予感がするけど、頑張らないとね。

「まずは先ほど配ったシフト表を見てパトロールにあたってくれ。

以上、解散！！」

「「「ハイ！！」」」

side　ネギ　end

・～・～・～・～・～

side　ナナシ

あれから日も暮れて、前夜祭が始まろうとしている。
俺はクラスの連中の誘いを断って、ある飛行船の上に来ていた。

「よう超。
どうだったネギ達は？」

「おや、ナッシーか。
意外と早かたアルね」

「ナッシー言うな」

その飛行船の上には、俺以外にも、超、茶々丸、ハカセもいる。

「茶々丸のデータや、ナッシーの話で知っていたが、思たよりも良い奴だたヨ。気にいたネ」

「はは、惚れたか？」

「まさか」

俺の冗談に超は笑いながら否定する。

……やっぱいいね。

俺にはこういう緩い空気の方が似合ってる。

「にしても、俺がいるのにわざわざリスクを犯してまで召集を覗くなんてな。

おかげで学園側からのマークがキツくなったんじゃないか？」

「ネギ坊主にアレを渡すためには必要だたことネ。

それに、面白いものも見れたからオッケーネ」

「……むっ」

……嫌なとこ見られちまったなオイ。

「まあナッシーが一部の魔法関係者からよく思われてないのは知っ

ていたが、まさかあそこまでとは…」

「うっせーよ。
仕方ないだろ？
真面目なのは俺には似合わないんだから」

「違いない」

そう言ってクスクスと笑う超。

……笑われるのはなんか複雑なんだが。

―ドドーンッ

そうこう話している内に、前夜祭の花火がいくつも打ち上がる。

「……さて、この花火は計画成功の前祝いとなるか、あるいは―」

「絶対に成功させるヨ。
そのために私は過去に戻て来たのだから」

「……」

花火を見つめる超の決意に満ちた顔は光に照らされてるためか、輝いて見える。

…そんな顔されたら、頑張らないわけにはいかねえじやねえか。

俺というイレギュラーが超に味方したことによって、どう結果が変わるかは誰にもわからん。

けど、結果がどうなろうとも、少しでもいい方向に傾けられたいい。

そう思う俺であった。

to be continue ?

第３４話「前夜祭」（後書き）

最初に言っておきます。

作者はガンドルフィーニ先生は好きですからっ！！

ナナシ
「えー…、あんな印象悪くしたくせにか？」

意外と家庭的なとこが好きです！
それにまだ子供なネギを何かと気遣ってくれる優しさが好きです！
ただ少し堅物なトコがあるかもしれませんが…

ナナシ
「まあな」

今回は、人気のあるナナシでも、良く思わない人はいるということを伝えたくて書いてみました。
まあナナシも魔法使いといっても、しょせんはただの人間ですから、皆から好かれるってことはあり得ないんですけどねー。

ちなみに学園での魔法関係者で、ナナシのことを良く思ってるのは、学園長・タカミチ・教会組・瀬流彦

逆に良く思ってないのが、ガンドルフィーニ・高音・佐倉・刀子・一部の魔法関係者。

中立なのが、明石教授・弐集院・グラヒゲ・一部の魔法関係者

って、トコでしょうか。

ナナシ

「良く思ってる人達が一番少ないじゃねえか…」

まあ日頃の行いが悪いからね。

それと余談ですが、そろそろ総合評価ポイントが２０００を超えそうなんですよねー。

ナナシ

「……ようやくか」

うっさい！

それで記念といってはなんですか、何かやりたいなーと考えております。

候補としては

1：番外編
2：他の作者様とのコラボ3：その他

なんです。

まあ2を選ぶ場合は、誰か他の作者様に協力と許可を得ないといけませんが。

ナナシ
「……無理じゃね？」

……うん。

ま、まあ、それは突破してから考えます（笑）

ナナシ
「オイッ」

では。

第３５話「学園祭開催」（前書き）

ようやく学園祭開催です。

ナナシ
「長かったな……」

ホントだよね…。

第３５話「学園祭開催」

ｓｉｄｅ　ナナシ

『それでは只今より！
第７８回麻帆良祭を開催します！！』

学園全体に放送部による開催宣言が響き渡る。

それと同時に航空部による飛行パレードやら来場する一般人の声で一気に賑わいだす。

「始まったな」

「始まりましたね」

俺は学園祭はもう何回も経験しているが、この規模の祭りの光景には毎回圧倒される。

そんな賑わいの中、俺は約束を果たすためにさよ（人形スタイル）と一緒に学祭門の下にいた。

「先生、それクラスのお化け屋敷用の衣装ですか？」

「んー、まあな」

学園内は仮装ＯＫということになっているので、俺もせっかくなんでお化け屋敷用の衣装を来ている。

ちなみに俺の衣装だが、フード付きの黒いローブを来ているだけ。本来はコレに髑髏の仮面をつけて死神の格好をするんだが、いささか目立ち過ぎる気がしたので仮面は外した。

「…それでも充分目立ってると思います」

「かもな」

俺の身長が人より高いってのもあるけど、真っ黒なローブに金髪、しかもイケメンだから目立ってしまうのは仕方ないと思う。

……ふっ、俺の美しさは隠しきれないってことか。

「キモいです」

「……」

……自分でもそう思ったけど、そんなバッサリ一刀両断しなくてもいいじゃん。

さよさん、まだ始まったばかりなのにツッコミがキツいっス…。

「でも私と回っても大丈夫なんですか？昨日パトロールしろとか言われてましたけど……」

「あー、大丈夫大丈夫。俺のシフトは最終日に集中してな。1日目と2日目はあっても一・二時間程度だから」

シフトが最終日に集中してるとこは、それとなくジジイからの悪意を感じるが……まあ、昨日揉めた罰のつもりなんだろう。

「よし、じゃあ行くか？」

「はいっ！」

そう元気よく返事したさよは、もはや定位置となった俺の肩の上に乗る。

「えへへ、ちゃんとエスコートしてくださいね？」

「任せろって」

俺を誰だと思ってんだよ？

さて、じゃあまず最初に回る場所は―

「メイド喫茶だな」

「えええええっ！？
まだ諦めてなかったんですか！？
というより女の子を一番最初にエスコートする場所がメイド喫茶ってどういうことですかっ！？」

「いや聞けって。
ここのクラスの女子はやたら可愛い娘が多いんだよ。そんな可愛い娘達がメイド服着るんだぞ？

なら見に行かないと失礼だろうが」

「いったい誰に対して失礼なんですか！？」

むぅ…、やはり女に男のロマンは理解できないか…。

「はあ……、じゃあいいですよソコで…」

「マジでっ！？
サンキューッ！！」

さすがはさよだ！
話のわかる女は俺大好きだぞ！

「ちょ、調子いいこと言わないでくださいっ！
ただし次はちゃんとした場所に連れてってもらいますからね！？」

人形の身体だというのに、頬を赤く染めるという器用なコトをした

さよ。

……どうやってんだ？

「安心しろって。
メイド喫茶を回った後はコスプレ喫茶に行く予定だから」

「もう秋葉行けばいいじゃないですかっ！！」

いや、プロがやるメイド喫茶と素人がやるメイド喫茶とでは萌えるポイントが色々違うんだよ。

そう言ったら、さよが
「じゃあ私がメイド服着てあげますから、それで満足してくださいっ！」って言ってきた。

人形にメイド服着させてもなあ……。
それじゃあただの着せ替え人形になるだけだし。

うーむ…普通に着れたら似合うと思うんだが、幽霊だから着替えら

んねえんだよなコイツ。

……今度エヴァとかに相談してみようかな？

・～・～・～・～・～

さて、無事（？）に喫茶店巡りを終えた俺達は、今度はクラスの連中の出し物を回ることにした。

「まずは那波さんの天文部のプラネタリウムからですか。私、プラネタリウムって初めてなんですよ」

「……ヨカッタネー」

……ん？
何でそんなテンション低いかだって？
だって―
「ママー、あのオジチャンお人形さんとお話してるよー？」
「しっ！見ちゃダメっ！」
「……ぐすん」
な、泣いてない！
泣いてなんかないからな！
でも仕方ないんだ。
ただでさえ先程説明したように俺は目立つんだ。
そんな俺がファンシーな人形と会話なんかしてるとこを他の奴らから見て俺は……うん、間違いなく危ない奴だな。

「あら先生？
わざわざ来てくださったんですか？」

「おー那波。
まあ副担だし、せっかく誘われたんだからな」

俺が天文部の出し物の列に並んでいると、中から那波が出てきた。
どうやらちょうどいい時に来たようだ。

「それクラスの衣装ですよね？
ふふ、似合ってますよ」

「俺に似合わない服なんてねえ」

さすがに女物とかは似合わないが。

「あら？その肩の可愛らしいお人形は……？」

やっぱ気になるか。

正直に話しても俺が危ない目で見られるだけだしな…

よし―

「これはただの人形ではないのだよワトソン君」

「ワトソンじゃなくて那波です」

「これは工学部が技術の粋を尽くして開発した『ＳＡＹＯ．ＧＩ－ＭＩ』なのだよ！！」

「そうなんですか？」

「違いますよっ！？
何ですか『ＳＡＹＯ・ＧＩ－ＭＩ』って！？
ローマ字にしてますけど、普通に地味って言ってますよねっ！？」

「―と、このようなツッコミ機能も搭載している」

「はー……。最近の技術はスゴいですねえ…」

こんな適当な理由でも、学園全体に張られている認識阻害の結界で誤魔化せる！
そう、それが麻帆良クオリティ！！

「ていうか、お前こんなとこで俺と話してていいのかよ？
仕事は……」

「あっ、そうでした。
ではご案内いたします」

「はっ？ちょっ……」

そう言うと那波は俺の手を取り列から引き抜いて、関係者用の通路に導く。

だけど、そんなコトをしたら当然列に並んでいる一般客からブーイングがあるわけで―

「えー？なんでその人だけ優先してるんスか？ズルいっスよ」

「彼氏ですかー？」

「ふふ、ごめんなさいね？先生は私の“特別”なお客さんなので」

なんだか上機嫌な那波はそのまま俺を連れて中に入っていく。

……いいのか？

「いいんですよ。
先生は副担で私の“特別”なんですから、それぐらいの権利があって当然です」

……当然なのか？

「はい。
さっ、こちらにどうぞ」

「お、おう、サンキュー」

よくわからん理由で並ぶ手間がなくなった俺は案内された席に座る。

その案内された席はちょうど部屋の中央でなかなか見やすい場所なんで、かなりいい席なんじゃないだろうか？

「もう始まるので、楽しんでいってくださいね？」

「ああ」

そうして那波が立ち去ると部屋の照明が消える。

そして―

『皆さん、大変お待たせしました。
今日はお忙しいところ、天文部のプラネタリウムに来ていただき、
ありがとうございます』

「あっ、那波さんの声ですね」

へー、進行役とかもやってんだな。

なかなか様になってんじゃん。

『それではさっそく上映したいと思います。
皆さん上をご覧ください。最初に見えますのが―』

那波の説明とともに、天井には次々と星が写し出されていく。

「うわあ……。
綺麗ですねえ……」

「俺の方が綺麗だよ…」

「そこは『お前の方が綺麗だよ』って言うトコじゃないんですかっ!?
なのによくそんなナルシスト発言が出来ますね!?」

「オマエノホウガ、キレイダヨ」

「そんな感情のこもってないカタコトなセリフで言ってほしくないですっ!!」

我が儘な奴だなあ…。

第一、自分の生徒相手にそんなクサいセリフが言えっかよ。

『上映中は静かにしてくださいねー！』

……おっと。

・～・～・～・～・～

さて―

「じゃあ次はここだな」

プラネタリウムを見え終えた俺達は、今度は占い研究会の出し物に来ていた。

「……すいません先生。ここは何だか嫌な予感しかしないのでやめませんか……？」

「はあ？
わざわざここまで来たのに何で何もしないで戻らないといけないんだよ？
ホラ、入んぞ」

「あっ、ちょっ…！
まだ心の準備が……！」

何だよ心の準備って？
そんな準備が必要な所でもないだろうが。

てか、誘われたくせに顔出さないとか失礼なことできっかよ。

俺は抵抗するさよを連れて紫色をしたテントの中に入る（抵抗っても人形の姿だから意味ないんだけどな）

中はロウソクやら鏡やら水晶玉やら藁人形などで、なかなか不気味な雰囲気となっていた。

……ここってオカルト研究会の間違いじゃないのか？

鏡や水晶玉はともかく、なんで藁人形が……

そんな疑問が浮かびつつも俺はここに招待してくれた人物に話しかける。

「よお、お疲れさん」

「あっ、ナッシー！
来てくれた……ん」

「ナッシー言うな。
……って、うん？」

俺の顔を見た瞬間、パアッと花が咲いたかのような笑顔をみせてくれたが、俺の肩に視線が移った瞬間、一気にその笑顔が枯れてしまった。

……なんだ？

俺の肩にいるのはさよぐらいだが、他に何か気になるトコでも見つけたのか？

このかは事情を知っているから、今さら俺の肩にさよが乗っかっていても別に違和感を感じないとは思うんだが……

「お、お疲れさまです、このかさん…」

「ああ、さよちゃん。
わざわざ来てくれて嬉しいわあ。
それに随分二人で楽しんで回っとるみたいやな…」

「まあ、それなりに楽しんでるよ。なっ？」

「……へえ」

「な、ナナシ先生っ！
お願いですから空気読んでくださいっ！」

「はっ？」

空気読め？
コイツさっきから意味わからんぞ？

「つーかさ、せっかく来たんだから占ってくれよ」

「ええよ。
オススメは藁人形を使った占いとか、藁人形を使った占いとか、藁人形を使った占いなんやけど……」

「それとなく悪意を感じるんだけどっ！？

てかオススメは藁人形だけなのっ！？」

やっぱ使うんだソレ！！

「まあ、今のは可愛い冗談だとして……」

……可愛くねえよ。

このかはテーブルの下から何か取り出して―

「じゃん！おみくじー！」

「おみくじなの！？
なに！？その水晶玉とか使わないの！？」

「うん、使わんよ。
こんなんただ気分出すための飾りやし」

「飾りだったの！？」

てか、おみくじなら別に引くだけだし、君必要ないよね！？
そんなんただの運任せじゃん！！

「むっ、失礼な。
コレは占い研究会のメンバーが一枚一枚丁寧に作りあげた神聖なおみくじなんやで？」

し、神聖なのか…？

「ま、まあいいや。
なら引かせてもらうぜ？」

おみくじの箱の中に手を突っ込んで、中身をあさる。
そして、手にしたのは―

「末吉(すえきち)？」

「うわあ……、なんかコメントしづらいの引きましたね…。
そこは大吉とか大凶とか、もっとコメントしやすいの引いてくださいよ…」

「何でおみくじでダメ出しされんの！？」

俺だってこんな微妙なの引きたくなかったわ！！

「ナッシー、ちょいソレ見せてくれへん？」

「ん？別にいいけど…」

俺は紙をこのかに渡す。

「ああー…、これ末吉ちゃうよ」

はい？
どう読んでも末吉なんだけど…

「これは占い研のメンバーが面白半ぶｎ……じゃなくて、より神聖さを出すために書いた末吉なんよ」

「「末吉って何だよ（ですか）っ！？」」

てか今面白半分って言おうとしたよな！？

「末吉ってのははるか昔におみくじを考えたかもしれないかもとも言われてる人物の隣の家に住んでいたかもしれない家族の親戚の友人のクラスで隣の席だったかもしれないと言われとった神聖な偉人なんよ」

「かも、ばっかじゃねえかよ！！

ソレまったく関係ない人物じゃん！？
それのどこが神聖な偉人なんだよ！？
もう素直に面白半分で入れちゃいましたって認めようよっ！！
てか末吉（すえよし）って人物名だったの！？」

「……テヘッ？」

「テヘッ？じゃねえよ！」

はあ…はあ…はあ……！
この俺をツッコミ疲れさせるとは…！

このか、恐ろしい子っ！！

「……じゃあ、もう行くわ。
残りも頑張れよ」

無駄に疲れた俺は、まだ予定の半分も回っていないことに気づいた

ので、テントから出て行こうとする。

「あっ、ナッシー。
明日忘れんといてな？」

「心配すんなって。
ちゃんと財布にお金は入れてきてやるから」

この学園祭期間のために貯金の半分以上をおろしたんだから。

おかげで俺の懐がエターナルブリザード。

「そういう意味やないんやけど…。
まあ、約束やで？」

「おうよ」

そうこのかに言い残し、俺達はテントから出ていった

・〜・〜・〜・〜・〜

あの後、クラスの連中の出し物を色々と回り終えるころには、既に空は茜色に染まろうとしていた。

「早いもんだな…」

もう夕方かよ…。

そんなことをしんみりと思いながら、喫茶店（普通の）で休憩していると―

「どうやら楽しんでいるようネ？」

「お前は……」

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　さよ

「よお大将。
こんなトコで油売っててていいのか？」

「計画は予想以上に順調アル。
ここで多少息抜きをしても支障はないネ」

私と先生が喫茶店で休憩していると、そこにいきなり超さんがやってきました。
超さんは先生の正面に座り頼んだ珈琲を飲んでます。

……なんだか悪の組織の密談みたいですね。

いや、まあ実際学園側からすれば悪いことしようとしてるみたいなんですけど…

「……で、何の用だ？
まさか何の用事もなく俺に会いに来たわけじゃないだろ？」

「イヤイヤ、私だて用事がなくてもナッシーに会いに行くぐらいはするヨ？
ただ、今回は別だが」

お互いに軽い雰囲気で話してますけど、コレ私が聞いててもいいんでしょうか？

「実はネ、ナッシーには今日の夜に私が主催する武闘大会に出場して欲しいネ」

「武闘大会？」

小太郎君やネギ先生が出る大会のことですかね？

「うむ。そこで会場を盛り上げてもらいたいネ。
得意分野であろう？」

「いや…、まあ盛り上げんのは確かに得意だけど…」

ネギ先生達にきっぱり出ないって宣言しちゃいましたもんね。
今さら出るのはどうかと思ってるんでしょうね。

「頼むネ」

「……はあ。
一度協力するって言ったんだ。
なら断るわけにはいかないよな」

超さんの上目遣いのお願いに簡単に陥落した先生。

ホント女性のお願いに弱いですよね……

「フフ、助かるヨ。
会場は龍宮神社でやるから遅れずにネ？」

「ああ」

そうして机の上に先生の分までの代金を置いて立ち去る超さん。

……太っ腹ですね。

「引き受けたのはいいけどどうすっかなあ……。
普通に出てネギ達に色々言われんのも嫌だしな…」

そうしてナナシ先生が一人で悩んでいると―

「「「「「麻帆良戦隊!!まほレンジャー!!!」」」」」

「およっ？」

喫茶店の前のステージで、ヒーローショーが上演されてました。

それを見た先生は―

「……はっはーん」

口元をニヤリとさせて、ヒーローショーのステージに近づいて行きました。

……なんかイタズラでも思いついたみたいですね。
ああいう顔をした時の先生はろくなコト考えませんし

「はあ……。
面倒なコトにならなければいいんですけど…」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないですー」

というより、先生が関わって面倒なコトにならないなんてありえないんで、こんなこと思っても意味ないんですけどねー。

まあ、楽しくなればそれでいいですかね……って、アレ？
なんだか考え方が先生に似てきた気が……

き、気のせいですよねっ！

……たぶん。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３５話「学園祭開催」（後書き）

ナナシとさよの二人だけだと、甘い雰囲気にはならずどうしてもギャグになってしまう……なぜだ？

ナナシ
「まあ、今さらさよと甘い雰囲気を出せって言われてもな……」

くそぅ…！
こうなったら、このかとのデートでは甘さ１２０％の話を……！

ナナシ
「書けんのか？」

……無理だな。

それと前回自分の気まぐれで後書きに

「番外編かコラボしたいなあ」と言ってみたら、何と数名の作者様が協力してもいいと言ってくださいました！！

ナナシ
「光栄すぎんな」

なのでコラボをやってみたいと思います！
まだどの作者様とコラボさせていただくかは未定ですが、学園祭編が終了した後に投稿したいと思っているので、学園祭編の終盤で改めてコラボの応募というかお願いをすると思います！

あっ、今のうちに言っておきますが、コラボ内容はどの作者様でもギャグになります。
ウチの子にボケられたり、ツッコまれたくないという方はご遠慮ください w

では。

第３６話「武道大会予選」（前書き）

ＮＯＳよ！
私は帰ってきたあああああああああああっ！！

ナナシ
「久しぶりのセリフがそれかよ……」

お久しぶりです。
無事（？）にテストを終えて戻ってきました。
久しぶりだからか、ナナシの書き方は忘れるはギャグは思いつかないはで、今回いろいろと難産でした…

まあ
とにかく本文をどうぞ

第３６話「武道大会予選」

ｓｉｄｅ　ナナシ

「はぁー……。
こりゃまた、めっちゃ人数集まってんじゃねえか」

大会の時間になり、俺は龍宮神社の本殿の柱の陰から集まってきた他の参加者達を見回す。

なんでも１６０人近い参加者が集まったらしい。

……これもはや天〇一武道大会レベルじゃね？

「まあ複数の大会をＭ＆Ａしたからネ。
それにここまで大きな大会にしたら自然と人数は集まるものアル」

「Ｍ＆Ａして、さらに優勝賞金一千万円ってどんだけ金使ってんだよ……」

ちなみにＭ＆Ａってのは、Ｍｅｒｇｅｒｓ　ａｎｄ　Ａｃｑｕｉｓｉｔｉｏｎｓの略で、企業の合併と買収って意味だ。

……誰に説明してんだ俺？

「大人気料理店『超包子』のオーナーである私の経済力を舐めないで欲しいネ」

…オーナーっても、お前まだ中学生だろうが。
中学生がどうやれば俺の年収より高い金額を出費できんだよ…？

「ふふ、ナッシーがもし無職になたら、私が養てもいいアルよ？」

「馬鹿野郎っ！
二十歳過ぎのいい大人が中学生に養ってもらうとか情けなすぎるわっ！！

俺にだってプライドってもんが―」

「あるアルか？」

「その時は頼りにさせてもらいますっ！！」

うん。
もし教師クビにされたりしたら超んトコに永久就職しよう。

仕事は手伝えないと思うから、せめて家事ぐらいは俺がやって……
…って、まだ俺教会の仕事残ってたわ。

いや、でも玉の輿（この場合は逆玉っていうのか？）には憧れるしなあ…。

「……本気で悩まないで欲しいネ」

あっ、やっぱ冗談なの？

『ようこそ！
麻帆良生徒及び、学生及び部外者の皆様！！
復活したまほら武道会へ！突然の告知にも関わらず、これ程の人数が集まってくれたことを感謝します！』

「およ？」

俺が超と談話していたら、会場全体に進行&解説役である朝倉の放送が響き渡る

『優勝賞金一千万円！！
伝統ある大会優勝の栄誉とこの賞金を見事その手に掴んでください

っ！！』

さすがは報道部だな。
はっきりとした声で聞こえやすい。

「やはり朝倉に頼んだのは正解だたネ。
見事な進行ヨ」

だな。

『では今大会の主催者より開催の挨拶を！』

「そろそろ出番ネ」

そう言うと超は柱の陰から出ていく。

『学園人気Ｎｏ．１！
屋台『超包子』オーナー
超　鈴音ですっ！！』

「ニーハオ」

「「「えええええっ！？
ちゃ、超さんっ！？」」」

……ん？

馬鹿みたいに驚いた声をあげたのは……ネギ達か。

やっぱ予定通り参加してるみたいだな。

レッド（神楽坂）や刹那もいるがアイツらも参加すんのか？

「私が……この大会を買収して復活させた理由はただひとつネ」

他には……少し離れた場所にブルー（長瀬）にイエロー（古）に龍

宮。

それまた違う場所にはエヴァに……げっ、タカミチまでいやがる。

「表の世界、裏の世界を問わずこの学園の最強を見たい。
それだけネ」

「裏の世界って何だ？」

「さあ？マフィアとか？」

俺が参加者を確認しながらも超は順調に演説を続ける
ただその演説の内容に参加者の多くの一般人は疑問を抱いたようだが。

「この大会は元々裏の世界の者達が力を競う伝統的大会だたヨ。
しかし主に個人用ビデオカメラなど記録機材の発達と普及により、
使い手達は技の使用を自粛。
大会自体も形骸化。規模は縮小の一途をたどた……」

へーー。
そんな伝統ある大会だったたんだコレ。

「だが私はここに最盛期の『まほら武道会』を復活させるネ！
飛び道具及び刃物の使用禁止。
そして―」

演説で上手いこと参加者の興味を集めた超は簡単なルール説明をする。

だが、裏の人間にとって今からの超の発言が爆弾発言になることを誰が予測できただろうか。

「―呪文詠唱の禁止！！
この2点を守ればいかなる技を使用してもＯＫネ！」

「「「なっ…！？」」」

ネギ達は超の発言に度肝を抜かされたのだろう。
いい感じに動揺している。

「ははは、俺らの大将は随分大胆なことで」

この場には学園側の人間もいるって知ってるくせに。
ただでさえキツいマークをさらにキツくしてどうすんだか…。

「まっ、それでこそ俺の大将に相応しいわけなんだけどな」

そう呟き、俺は笑う。

「案ずることはないヨ。
今のこの時代映像記録がなければ誰も何も信じない。大会中この龍宮神社では完全な電子的措置により携帯カメラを含む一切の記録機器は使用できなくするネ」

……逆に言えば映像記録さえあれば、完全とはいかないが多少人を信じこますことができるわけだ。

「裏の世界の者はその力を存分に奮うがヨロシ！
表の世界の者は真の力を目撃して見物を広めてもらえれば、これ幸いネ！
以上！！」

『では詳細の説明に移らせて頂きます！！』

さて、そろそろ俺は準備に取り掛かるとしますかね。

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ネギ

「ふぅ……、なんとか予選は突破できたね」

「いやいや、終始余裕だったぜ兄貴。
この調子なら本戦も余裕なんじゃねえか？」

「無理だよ。本戦にはタカミチに師匠（マスター）達までいるんだから。
それに今回は一般人ばかりだったし、修行しているならアレぐらいはね」

でも豪徳寺さんのように、『気』が使える一般人がいたのは驚いたな…。

「おーーいっ。ネギ」

舞台からおりて、他のグループの戦いを観ようとしたら、同じように試合が終わった小太郎君達が近づいてきた。

「どうだった？」

「はんっ、楽勝やわ。
やっぱ俺らの知り合い以外大した奴らはいいひんみたいやな」

そう言ってまた油断しなければいいんけど…。
本戦にも『気』を使える一般人がいるかもしれないんだから。

「マスターもお疲れ様でした」

「ふん。
無駄な手間だったな」

「ほとんど僕に戦わせてたくせに何言ってるんだい」

そう言って苦笑するタカミチ。
ほとんど一人であの人数を相手にするなんて、やっぱタカミチはスゴいな…。

「残す組も後一組のようですね」

「んー…Hグループには知り合いはいないみたいね」

でも本戦選出人数が各組二名っていっても、よくここまで皆バラけたよね。

下手したら予選で知り合い同士で戦うことになるかもって思ったんだけど…。

『さあ！残す組は後Hグループのみと後一組になりましたが、ここでルールの再確認といきましょう！

予選会は２０名一組のバトルロイヤル形式！
AからHまでの各組より二名ずつが選出！
つまり合計１６名の選手が明日の本戦に出場となります！！』

ここで再び朝倉さんの放送が流れる。

……さっきも思ったんだけど、なんで朝倉さんが進行役してるんだろ？

超さんに頼まれたのかな？

そんな他愛ないことを考えていたら―

――ドドンッ！！

「な、何っ！？」

「爆発っ！？」

「あ、あそこですっ！」

突然爆発音が会場全体に響き渡る。

爆発の出所を探してみると、それはHグループの舞台からだったようで、皆一斉にそちらを見ると―

「「「麻帆良戦隊！
まほレンジャーッ！！」」」

「「「……はいっ？」」」

全身タイツ姿の人が6人いて……って、えっ？

「燃える情熱！
まほレッドッ！！」

「荒らぶる大波！
まほブルーッ！！」

「轟く雷！
まほイエローッ！！」

「自然は大事に！
まほグリーンッ！！」

「お色気担当！
まほピンクッ！！」

自己紹介しながらそれぞれポーズを決める。
ていうかグリーンからキャッチフレーズがおかしくないですか？
けど一番気になるのは、その5人の中央にいる真っ白なタイツの人で―

「穢れなき身体！
まほチェリィィィィィィィィィッ！！」

「「「そこはホワイトじゃないのかよ！？」」」

瞬間、会場にいる人全員が一つになってツッコんだ。

『こ、これはああ！？

まほら武道会にまさかあの大活躍中のまほレンジャーが来てくれたのかっ！？
ていうかチェリーってメンバーじゃなくね！？』

確実に違いますよ！？

そもそも名前からして違うじゃないですか！？

「というより、チェリーってことは……」

どうやら変声魔法使ってるみたいだけど、間違いなくあの人だよね……。
ついに自虐ネタまでするようになりましたか。

「……あの中央の白い奴、一般人ではないな」

「だね。一人だけ雰囲気が別物だ」

「マスター!?
タカミチッ!?
わからないの!?」

この中で一番あの人と付き合い長い2人が何で気付かないの!?

「ふむ、本戦に選出される一人は決まりでゴザルな」

「しかし、学園にあのような人物がまだいたとは…」

「えっ、まさか気づいてるの僕だけ?
皆バカなんですか?」

それとも僕がおかしいの?なんだか自信がなくなるんだけど……

『ちょ、ちょっとしたサプライズがありましたが、準備はよろしいですか?』

「あっ、すいません。
僕達は参加しないんで、この辺で失礼します」

「「「出ないの！？」」」

試合を開始しようとしたらまほチェリー以外のメンバーがゾロゾロと舞台からおりていく。

「いや、僕達そこの白い奴に「まほチェリィィィィィィィ！！」……まほチェリーに依頼されて演出手伝っただけですから」

「ご苦労様。
はい、これバイト代」

「ありがとうございます。それじゃあ頑張ってくださいね？」

「ああ。ありがとう朋友達よ」

「「「……」」」

今まで高まっていた会場の空気が、なんともいえない空気に……

『……それではHグループ、最後の組の試合を始めます。開始』

「あのふざけた野郎を潰せえええええええっ！」

「死ねえええええっ！！」

最悪な空気で始まった試合
あんな事をしたまほチェリーは、当然他の参加者から目をつけられたわけで、ほとんど全員で彼に襲いかかった。

けど―

「……へっ！」

「ぐはらっ！？」

「ぷべっ！？」

彼は逃げることなく、逆にあの人数相手に臆すことなく突撃した。

「はっ！！」

「がはっ！？」

それでもやみくもに突撃するわけではなく、相手の攻撃を最小限の動きで避け、自分の攻撃はコンパクトに急所を一撃で貫く。

『つ…つ、強いぞまほチェリー！？
まほレンジャーの名はやはり伊達じゃないのか！？』

次々と相手を倒していくと5分もしないうちに舞台の上の人数は残り3人となっていた。

「やばいぞたっちゃん…！アイツ強い…！」

「へっ！
ビビってんじゃねえよ！」

他の2人はたっちゃんと呼ばれていた胴着を着ている人と、中華服を着た人の2人だった。

「……（くいくい）」

そんな2人にたいして、まほチェリーは人差し指をくいくい曲げて挑発する。

「ちっ！
あんまり俺を舐めんじゃねえぞっ！！」

独特な構えをしたたっちゃんさんは腕を下からすくい上げるようにして―

「くらえっ！
烈空掌っ！！」

「！」

気弾！？
やっぱり他にも使える人がいたのかっ！

不意をつかれたのか、気弾はまほチェリーに直撃した

「どんなもんだっ！！」

けど彼は腕を×印に交差させることで防いでいた。

「……なかなかの威力だ」

「驚くのはまだ早いぜっ！覚悟っ！烈空双しょ……」

そして再び気弾を放とうと構えた瞬間―

「……『気』の練度はなかなかだが、放つまでのモーションが遅すぎる。
それじゃあ攻撃してくださいって言ってるようなもんだぜ？」

まほチェリーはいつの間にか相手の懐に潜り込んでおり、その腹に拳を打ち据えていた。

「ぐふっ……」

「悪いな。
また出直してきてくれ」

「た、たっちゃあああああああん!?」

そのままたっちゃんさんはまほチェリーにもたれかかるように倒れた。

『決まったあああ!!
Hグループの本戦出場者はこの2人だああ!!
まほチェリー!
圧倒的な実力で予選を突破しました!!』

「デュワッ!」

試合が終了した瞬間、奇妙な声を出して走り去ったまほチェリー。

……ウル〇ラマン？

「最後のは瞬動か……。
まだまだ粗いが一応形にはなっていたな……」

「学園の人間じゃないのかもしれない。
もしかしたら余所からの刺客って可能性も……」

「ないよっ！！」

なに無駄に話を大きくしようとしてるの！？

いい加減気付こうよ！

『皆様お疲れ様です！
本戦出場者１６名が決定しました。
本戦は明朝８時より。
龍宮神社特別会場にて！

では大会委員会の厳正な抽選の結果決定したトーナメント表を発表しましょう』

もう発表？
だ、誰と最初に戦うんだろう？

『こちらです！！』

「えっ……」

「なっ……！？」

一回戦

佐倉愛衣
ＶＳ
犬上・Ｋ・小太郎

二回戦

大豪院ポチ
ＶＳ
クウネル・サンダース

三回戦

長瀬楓
ＶＳ
まほチェリー

四回戦

龍宮真名
ＶＳ
クーフェイ

五回戦

田中
ＶＳ
高音・Ｄ・グッドマン

六回戦

ネギ・スプリングフィールド
ＶＳ
タカミチ・Ｔ・高畑

七回戦

神楽坂明日菜
ＶＳ
桜咲刹那

八回戦

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル
ＶＳ
山下慶一

……ってことはつまり？

「……ええええええっ！？タカミチーっ！？
む、むむむ無理だよ！？」

「時間ないけど修行のおさらいでもするかネギ？」

おさらいしたとこでタカミチに勝てる気がしないんだけど！？

「なにやら騒がしいな」

あれ、この声は…

「あっ、ナッシー」

「ナッシー言うな」

やっぱりナナシ先生か。

ナナシ先生はいつもの神父服を着ていて…って、もう着替えたんですか…。

「よお。なんか超カッコよくて超強いまほチェリーって奴が本戦出場決定したんだろ？
まっ、俺はまほチェリーなんて奴はまったく知らないんだけどなー」

「し、白々しい……」

だから何ですかそのウル◯ラマンみたいな誤魔化し方は…？

「で？
その超大人気のまほチェリーの初戦の相手はいったい誰だ……って、
げっ…！」

「あん？なんで兄ちゃんが嫌そうな顔しとるん？」

「……なんとなくだ」

小太郎君、君は一緒に住んでるんだから気付こうよ…

「……っと、そうだ。
お前らそろそろクラスの1日目の打ち上げがあるから帰ってこいってよ。
多分メールされてるとは思うけど……」

打ち上げ？

携帯のメールを確認してみると……本当だ。

「タカミチ、せっかくだからお前も来いよ。
それとエヴァ、３－Ａ生徒は全員強制参加だからな。帰んじゃねえぞ」

「おっ、いいのかい？」

「……くだらん」

ううう……打ち上げに参加したら明日の体力が……。
やっぱりここはカシオペアに頼るしか…

「なあにシケた顔してんだよネギ。
とりあえず今は楽しんで、明日は明日で頑張ればいいだろうが」

「あっ、はい…」

……そうだよね。

とりあえず今は、学園祭を楽しもう。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３６話「武道大会予選」（後書き）

さあ
新キャラ（？）登場
まほチェリー！！

ナナシ
「いやー、カッコいいなあまほチェリー」

そんなナナｓ……ゴホンゴホン！
まほチェリーの相手はバカブルー
いったいどんな戦いになるんでしょうか？

他の対戦は原作通り。
他の対戦までオリジナル展開なんて私には無理です！

ナナシ
「威張って言うなよ…」

さて、とりあえず今はテスト期間中に更新された他の作者様の作品をチェックしないといけないので、今日はこの辺で。
デュワッ！

第37話「第一試合」（前書き）

タイトルでわかるとおり、第一試合です。

つまりこれがどういうことかおわかりでしょうか？

ナナシ
「どういうことだよ？」

戦闘描写という
苦手分野突入！！

ナナシ
「そういえば苦手だったねお前……」

そんなわけで今回いつもより短いです。

ナナシ
「オイッ！？」

第37話「第一試合」

side　千雨

「へえ……結構人きてんじゃねえか」

私は辺りを見渡してそう呟やく。

今私がどこに来ているかというと、武道大会なんか開かれてる龍宮神社だ。

あの担任のガキがお詫びにって寄越したチケットが格闘大会のチケットで、まあ学祭はどーせ暇だから観にきたんだが……

「……どーやってあのガキが予選通過したんだ？」

ネットの話じゃ相当レベルの高い大会みたいらしいんだが……

それに―

「だから『気』だって！」

「はあ？何言ってんだ？」

「お前昨日の『遠当て』見なかったのかよ！」

「ばーか、あんなんイカサマに決まってんじゃん」

「いやいや！
一部の達人の間じゃ―」

……なんなんだ『遠当て』って

気になってパソコンで調べてみたら『気』とか非現実的な単語が出てきやがった

それにこの本戦でも『気』の使い手が出場するとかいう噂まで流れてやがる。

「……ふん、いったいどんなイカサマショーになるんだか」

イカサマならあのガキが本戦出場できたってのも納得できる。

「まあ、マジな格闘技の試合観るよりは笑えて楽しめるかな」

『ご来場の皆様！
お待たせ致しました！！』

「おっ」

ようやく始まるか、と舞台の方に視線を移せば―

「……朝倉？」

なんでアイツが……。
いや、この大会を主催した奴があの超らしいし、超に頼まれたって思えば不思議ではないが……

『このたび司会&進行役を務めさせていただく朝倉和美です。そして解説の―』

「絡繰茶々丸です」

「豪徳寺薫です」

「ナナシ・クラートです」

「「「うおおおおっ！ナナシさあああんっ！！」」」

ちょっ！？
なんでウチのクラスのロボ子と副担が解説なんだ！？
出場する選手もガキや神楽坂とか３－Ａの連中この大会に関係しすぎだろっ！！
てか私の隣が解説席なのかよっ！

『なんてことでしょう！
解説者だというのにこの歓声！！
会場の男性陣のテンションは大盛り上がり！！
女性陣はそんな男性陣を見てドン引きだああっ！！』

「「「「ナ　ナ　シッ　！
ナ　ナ　シッ　！
ナ　ナ　シッ　！」」」」

「あ、あのナナシさんっ！さ、サイン貰ってもいいっスか！？」

「いいぜ」

「マジっスか！？」

「薫くんへ……と、ほら」

そのまま副担はスラスラと色紙にサインを書く。

…なんでスラスラ書けんだよ？
練習でもしたのか？

「うおおおおっ！！
ありがとうございます！」

「「「羨ましいいいいいいいいっ！！！」」」

「「「……」」」

あ、頭痛くなってきた……これだから学園の奴らは…

『それでは只今よりまほら武道会第一試合に入らせて頂きます！』

ようやく始まると思ったら、舞台に出てきたのは小学生ぐらいのガキと女子中等部の女。

……あのガキは確かウチの副担と一緒に住んでるんだよな？

で、女の方は知らねえが、私より一つ下ぐらいか？

なんにしても―

「……どっちもガキじゃねえか」

……ったく、いったい初戦からどんなイカサマショーになるんだか。

side　千雨　end

side　ネギ

さっそく小太郎君の試合が始まったんだけど、その相手が―

『かたや謎の少年忍者
犬上・K・小太郎選手！

かたや中2の少女
佐倉愛衣選手！
その実力は予選会で証明されています！！』

「あ、あれ？
あんた確かこないだの……？」

「先日はどうも……」

あ、あの人ってこないだの魔法生徒の……！？

どーゆーこと！？

相手の顔を知っているメンバーが困惑していると、僕の隣にいた全身を黒ローブで身を包んだ人が、ローブのフードを外す。

そこには―

「ふふふ……。

おはようございます、ネギ先生」

「ええっ！？
あ、あなたは！？」

確か高音さん！

その高音さんと佐倉さんがなんでこの大会に！？

「驚きましたか。
私がここにいるのは―」

いるのは？

「あなたを懲らしめるためですネギ先生っ！！」

「ええっ！？」

こ、懲らしめる！？
なんでっ！？

「私達は目撃したのです。あなたが世界樹の力の件で失敗し、「反省します」と言ったその直後！！
わずか数十分後に賞金一千万円などという怪しげな格闘大会に軽率にも出場し、あまつさえヘラヘラと予選まで突破するのを！！
これはお仕置きしなければわかってもらえないと思い私達も飛び入りで参加した次第です！！」

「えええええええっ！？」

でも僕パトロールとかちゃんとしたのに！！

「（…あれだよ兄貴。
タイムマシン使ったから、この姉ちゃん達には直後にみえたんだ）」

まずったなー、と呟きくカモ君。

そんな他人事みたく言わないでよっ！

「昨日、一昨日は遅れをとりましたが、ルールのあるリングの上ではそうはいきませんよ」

そう言って高音さんは不敵な笑みを浮かべる。

「愛衣は大人しそうに見えますが、ああ見えてアメリカのジョンソン魔法学校に留学中、魔法演習でオールＡを取った秀才です。さらにあの歳で無詠唱呪文もこなします」

「ええっ！？」

オールＡ！？
さらに無詠唱呪文も！？

僕でさえまだ少ししか使えないのに！？

あわわわわっ！

こ、小太郎君、相手が女の子だから油断しなきゃいいんだけど！

そもそも前に女は殴らない主義とか言ってたし！

『第一試合Ｆｉｇｈｔ！』

ま、まさか負けたりしないよね！？

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　――

「私……やりたくはないんですが、お姉様の命令ですので。倒させて頂きます小太郎さん」

「へっ……カワイイ顔して大口叩くやないか。やってみいや」

両者は舞台の中央で向かい合い、お互い挑発するようなセリフを投げつける。

そして―

『第一試合Ｆｉｇｈｔ！』

「『来たれ（アデアット）！！』」

開始の宣言と同時に佐倉の手にあるカードが箒に変化した。

魔法関係者ならば、それがアーティファクトだと気付けるが、何も

知らない一般人からは手品のようにしか見えない。

佐倉はその箒を慣れた手つきで構える。

佐倉のアーティファクトの能力を知らない小太郎は後手に回ることだけは避けたいのだが―

「お先にどーぞ。
レディファーストや」

「「「なっ！？」」」

小太郎は構えることもせずそう告げる。

「こ、小太郎君っ！？
何余裕ぶっこいてんの！？馬鹿なのっ！？」

選手席から小太郎の行動を非難するような声があがるが、彼は特に気にすることなくスルーする。

「…舐めてるんですか？」

「アホ、誰が敵を舐めたりするかいな。これは男として当たり前の行動や」

さすがにその小太郎の行動に怒りを感じたのだろう。私怒ってます、といった感じに小太郎に尋ねるが、小太郎はその行動は当然の行動だと答える。

その答えをさらに不満に思ったのだろう。

佐倉はもう黙り、改めて小太郎に向かって構える。

そして―

「『魔法の射手　炎の三矢』！！」

「うおっ！」

佐倉によって無詠唱の魔法矢が放たれた。

小太郎は魔法の矢を横っ飛びすることで回避するが―

「おおっ！？」

「フッ！」

小太郎が着地した地点に瞬時に瞬動術（クイック・ムーブ）で近づき、箒を槍のようにして突く。

「はあああああっ！」

佐倉はさらに連続して突きを繰り出す。

小太郎は佐倉が予想以上にデキることが嬉しいのだろう。
その連撃を笑顔で躱し続ける。

「ほっ……とっ……おっ、おおっ！
やるやないか姉ちゃん！
接近戦がここまでデキるなんて思わんかったわ！」

「減らず口を……！」

「けど―」

「！？」

戦況は小太郎の防戦一方だった。
けれど佐倉が小太郎の雰囲気が変わったと気づいた時には―

「ごふっ…！？」

「まだまだ隙だらけや」

小太郎の拳が佐倉の鳩尾に打ち込まれていた。
その一撃に耐えきれず、佐倉はゆっくりと倒れこんでいく。

『き、決まったあああああああああっ！
犬上選手の強烈な一撃が佐倉選手にクリーンヒット！さっそくカウントを！
1…2…3…4…！』

「兄さん、今のは……」

「今のは単純に犬上選手のカウンターだ。
高速での一撃だったからわかりにくいが、ただ箒の突きをタイミングをよく躱し拳を打ち込んだだけだ」

「なるほど。解説ありがとうございます」

「……あの、全部解説されたら自分がいる意味が」

解説されている間もカウントは続く。

佐倉は意識があるようだがもう立ち上がれる様子ではない。

「あっ……うっ…！」

『7…8…9…！』

小太郎はそんな彼女を見て勝利を確信したのだろう。

佐倉に背を向けて、黙って舞台から降りていく。

『１０！！

第一試合！犬上選手、なんと一撃でが勝利を手にしましたあああああっ！！！』

小太郎は最後に顔だけ彼女に向けて告げる。

「安心せい。
なんかあったら責任ぐらいとったるわ」

こうして第一試合の幕は閉じた。

ｓｉｄｅ　――　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

……あっれぇー？

なんか小太郎君、原作と違いませんか？

そりゃあ家ではレディは大切にしろとか、なんかあったら責任だけはとれとか、相手が女でも戦場で敵として現れた奴を女だから殴らないのは相手を侮辱するだけだとかは教えたかもしんないけど……

「……兄さんに似てきましたね」

「……教育間違えたかもしれん」

ほら、なんか舞台に残った佐倉が小太郎の後ろ姿見て顔を赤くしてんじゃねえか

そりゃあ年下とはいえ、小太郎みたいなイケメンに（まあ俺には負けるが）あんなこと言われたら、たいていの女の子はドキッとするわ。

あれか？
これはフラグ建設成功とかいうやつか？

ネギは敵だとわかっていたがお前もかブルータス。

ちくせう…！

フラグ建設者は全員もげればいいんだ…！
もしくは爆死。

……って、そろそろ準備しないとな。

「兄さん？どこに？」

「トイレだよトイレ。
しかもデカイの。
俺のは長いから二試合分ぐらいかかるから」

「……ソウデスカ」

……妹分の視線が冷たい気もするが、気のせいだと信じたい。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第37話「第一試合」（後書き）

そういえば千雨初登場じゃね？と書いた後に気付く自分。
千雨は好きなキャラなんでこれからきっと出番が増える……ハズ。

ナナシ
「そこは断言しろよ」

コタ君いい意味でも悪い意味でも原作より成長…
…どうしてああなった？

ナナシ
「俺が聞きたいわ……」

そして皆さん、気づかれたでしょうか？

私が珍しく三人称を途中に挟んだことを！

ナナシ
「そういやそうだな」

まあ結果を言えば、戦闘描写と三人称は私には無理でしたということです。

ナナシ
「結局それかっ！？」

書き終わった後に戦闘描写の内容の薄さに泣きたくなりましたよ。
次回はもっと内容濃くしたいですいやマジで。

次回はお待ちかねの
（↑誰が）
スーパーヒーロータイムですっ！！

まほチェリー
「画面の前の君！
龍宮神社で俺と握手！！」

いつの間に！？

第３８話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）前編」（前書き）

今回長くなりそうだったので、前編と後編と分けさせてもらいました。

しかし戦闘描写が毎回同じような流れのようがして、皆さんが飽きていらっしゃらないか心配です……。

やはり戦闘描写の多い格闘大会は無視すればよかったです…！

ナナシ
「オイこら」

そしたら今頃、ナナシとこのかの甘い（？）学園祭デートだったのに…！
まあ格闘大会が終わってからの楽しみにしときましょう。

※今回あとがきにこの作品とはまったく関係ない妄想ネタがあります。
よかったら暇潰しに読んでみてください。

※7月30日誤字修正

第３８話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）前編」

ｓｉｄｅ　ネギ

『ラッシュラッシュ！
凄まじい連続攻撃！
大豪院選手攻める手を休めないっ！！』

「やったね小太郎君」

「へへっ、楽勝や」

第一試合、小太郎君の勝利で試合が終わり、第二試合の最中に小太郎君が戻ってきた。

舞台から一度小太郎君の方に顔を向けて、無事に一回戦を突破した彼に親指を立ててその勝利を祝福する。

「ん？」

少し目を離した隙に、舞台の方からドンッという鈍い音が聞こえた。気になって舞台に顔を向け直してみると、僕と同じような格好をした人の前に中華服を来た男性が倒れていて―

『いっ……一閃！！
カウンターぎみの右掌底がクリーンヒット！！』

い、いつの間に！？
さっきまであんな防戦一方だったのに！

『終始押されぎみに見えたクウネル・サンダース選手まさかの大逆転！大豪院選手無念！
顔をすっぽりと隠した仮装が謎を呼ぶクウネル選手が一回戦突破です！
にしてもふざけた名前だクウネル・サンダース！！』

確かにふざけた名前だとは思いますけど、さすがに相手の目の前で言うのは失礼なんじゃ……。

と思って、そのふざけた名前の人を見てみると……あれ？

「……お前のこと見てへんかアイツ？知り合い？」

「ううん」

顔までローブで隠しちゃってるから確かなことは言えないけど、知り合いではないと思う。

向こうが一方的に僕のこと知ってるだけなのかな？

ｓｉｄｅ　ネギ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　千雨

今の試合は別にいい。

少しデタラメな動きもあったが、まだ許容できる試合だったからな。

けど、けどな……！

「今回は盛り上がりに欠けたなあ」

「いやいや、第一試合が凄すぎだったんだって」

「ああ。なんたってあんな女の子が遠当てを使ったんだしな」

第一試合は絶対おかしいだろうがっ！！！

なんで皆ツッコまねぇんだよ！？

火の玉だぞ火の玉！？

ＣＧでもねえし、実際あの火の玉が当たった場所は黒焦げてんだぞ！？

しかもあれは『気』っていうよりも、どっちかって言えば魔法のような……いやいや、私まで何非現実的なことを。

魔法とかそんなファンタジーなのはゲームの世界だけで充分だっつーの。

『それでは続いて第三試合を開始いたします！』

願わくば、この試合も普通であってほしいんだが……

『さんぽ部の最終兵器（ラスト・ウェポン）！
謎の忍者少女！
長瀬楓選手！！』

「はて？忍者とはなんのことでござるかな？」

……無理だな。
嫌な予感しかしねえ。

『対するは学園の平和を守る童貞（ヒーロー）！
まほチェリー！！』

……ん？
出て来ねえぞ？

『あれ？まほチェリーさーん？試合ですよー？
いらっしゃいませんか？』

「なんだ棄権か？」

「いや、まほチェリーに限ってそんなはハズは……」

「おいっ！上見てみろっ」

なかなか現れないチェリー（今更ながらそのネーミングはどうなんだ？）に観客達は動揺していたが一人が何か気づいたようで同じように上を向いてみると―

「……ヘリ？」

ちょうど会場の真上になるようにヘリが飛行している

そしてそのヘリのドアは開かれており、逆光でよく見えないが黒い影がいるように思える。

黒い影はそのまま倒れこむように飛び降り……飛び降りっ！？

「アレはなんだ！？」

「鳥かっ！？」

「超人かっ！？」

「いやー」

そして舞台の中央に――

「俺だあああああっ！！」

「「「まほチェリーだっ！！！」」」

「お前かよっ！？」

全身白いタイツに身を包んだ変態が現れた。

ちょっ！？

なんでパラシュートもなしで無事なんだよっ！？

今の高さはトマトみたいにクシャッと潰れちまう勢いだったじゃねえか！？

『おおっと、まほチェリード派手な登場だっ！！
さすがはまほレンジャーというところか！』

いや意味わかんねえよ！？

『それでは両選手も揃ったところで試合を開始させていただきましょう！
第三試合Ｆｉｇｈｔ！！』

ｓｉｄｅ　千雨　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　まほチェリー

『第三試合Ｆｉｇｈｔ！』

俺は試合開始宣言と同時に腰を低くし構える。

既に試合前に身体強化魔法『戦いの旋律　加速二倍拳』は発動しており
いつでも攻撃に移れる態勢だ。

「…その仮面は外さなくて邪魔ではござらんか？」

「心配すんな。
戦闘に支障はねえよ」

「ふむ。だが拙者としては戦う相手の素顔ぐらい知っておきたいのだが……」

「悪いな。
ヒーローの正体は秘密なんだ。
けど、どうしても仮面の下が気になるってんなら―」

「むっ」

俺は瞬時に両足に魔力を込める。
その魔力を込めた足で地面を思い切り踏み込み―

「外させてみろよっ！！」

――瞬動

狙った着地地点とは多少の誤差があるが、気にするほどの誤差ではない。

俺は着地と同時にブルーの腹に向けて蹴り―
ミドルキックを放つ。

「ほっ」

だが、それは少し後ろに下がられることであっけなく躱される。

もちろん俺もそう簡単に一撃が決まるとは思っていない。
休む間もなくブルーに追撃を加える。

「オラオラオラオラアアアアッ！！」

「ほっ…よっ、ほっ」

しかし、それらも全て余裕の表情で躱される。
これ以上の追撃は無駄だと思い、試合前と同じように一度距離を離し構え直す。

「ちぃ……」

「危なかったでござるな」

「ぬかせ」

わかってたことだがブルーは俺より速い。
いかに威力が上でも速度で追いつかなきゃ意味がない

……さて、どうするか？

「では次はこちらから」

「うおっ！」

そう言った瞬間、先ほどの俺とは比べものにならない完成度の瞬動で俺に接近する。

「ぐっ……」

攻撃を防いだと思ったら、また次の攻撃が放たれる。

確かに速い。

けど―

「ふっ……はっ！」

捌ききれないレベルじゃない。

「ほう…今のを全て捌ききるとは……」

「はんっ、ヒーロー舐めんなよ」

実際は精一杯だけどなっ！

ブルーは何か策を考えるかのように顎に手を当てている。

そして―

「それなら……忍っ！」

「げっ……！」

忍者らしいセリフを発した瞬間、ブルーが俺の目の前で二人に増える。

その二人は真っ直ぐ俺に向かってきて……って！？

「ちょ、ちょい待て！
いくら片方が分身体だからって2対1は卑怯なんじゃねえか！？」

俺は慌ててブルー二人から距離をとるために、後方に大きく跳ぼうとする。

「「いやいやー」」

けれど背中を誰かに押さえられているような感触があり、嫌な予感がしつつもゆっくり顔だけ振り返ってみると―

「……うそーん」

「「「3対1でござるよ」」」

3人目のブルーがいた。

「ぐわっ!?」

その3人目のブルーが俺の背中に『気』で強化された掌底を叩きこむ。

その衝撃で俺は正面にいたブルー2人組の方に吹き飛ばされる。

ブルー2人組は俺を迎え撃つかのように、それぞれ腕を振り上げて――

「がっ!?」

俺の身体を容赦なく地面に叩きつけた。

『きょ……強烈っ!!
2人の長瀬選手による強烈な一撃がまほチェリーにクリーンヒットッ!!
まほチェリー、舞台に叩きつけられました!!
こ、これはもう立ち上がれないのでは!?
てかどうやって分身してんのアンタ!?』

「「「禁則事項でござるよ」」」

『とにかくカウントをとりたいと思います!
1……って!?』

「ああー……痛っ。
くそっ、思い切り殴りつけやがって。
一緒意識がとぶとこだったぞ」

まだ痛む背中や首を回してストレッチをする。
その状態から周りを見渡すと、皆驚いた表情をしており―

「なんだ？そんなに立ち上がれたのが意外か？
あんな一撃で俺が…」

『……あの、顔、顔』

朝倉が俺の顔を指差すが……なんだ？
とりあえず顔に触れてみるが……

―ポロッ

「……あっ」

儚い音を立てて、俺の顔から何か落ちた。

それは見間違えるハズなく俺が今まで被っていた仮面であって……。

……耐えきれなかったか。

いや、まあ顔面から地面に叩きつけられたから仕方ないんだけどさ…。

『ああーっと!?

まあチェリーの仮面が壊されてしまった!

さあ皆さんご覧ください!これがまほチェリーの正体……ナッシー?』

「「「ナッシー!?」」」

「「ナナシ（君）!?」」

観客席からも驚きの声がいくつもあがる。
けど、ここまで正体を隠し通したんだ！
いまさらバレてたまるか！

「ち、ちがうっ！？
俺はナナシという超ルックスの高い人間国宝に認定されてもおかしくないイケメン教師とは別人だっ！！」

「「「いや……どう見ても本人でござろう……」」」
3人全員で喋んな！
鬱陶しい！！

『……じゃあ誰だって言うの？』

「えっ…それは、その、アレだよアレ」

ナナシじゃないから
えっと……

「ご……権兵衛(ごんべい)！！」

『……はい、それでは第三試合、長瀬選手ＶＳナナシ選手。試合を再開しましょう』

「だから違っ―」

「「「「ナナシさあああああああんっ！！」」」」

俺の抗議の声は虚しくも観客達の声援で遮られる。

しかも何故かナナシコールまでされている。

『「「「「ナ　ナ　シ　！
ナ　ナ　シ　！
ナ　ナ　シ　！」」」」』

そのコールに解説である豪徳寺の声まで混ざっている

……仕事しろよテメエ。

「……まさか正体がナナシ殿だったとは」

「不服か？」

「いやいや、貴殿とは一度戦ってみたかったでござる。それを不服なんて思うハズなかろう」

「そりゃあ光栄だな」

そうやり取りしながら
改めて距離をとり構える。

お互い試合開始と同じよう向かい合う。

……ただし向こうは3人だが。

「よっしゃ！
そんじゃあ改めて気を取り直して―」

「いざ尋常に―」

「「―勝負っ！！！」」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３８話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）前編」（後書き）

ナナシ
「皆さんに重要な発表をしなければなりません……」

どした？

ナナシ
「なんと！まほチェリーの正体は俺だったんです！」

うん、知ってた。

ナナシ
「（´・ω・）反応薄い…」

はい、今のやり取りがしたかっただけです（↑オイ）

後編はなるべく早く投稿したいと思ってるのでお楽しみに。

※まえがきで予告した通りここからは妄想ネタです。この作品とま

ったく関係ないのでナナシも出てきません。
作者が更新の息抜きとして考えただけのものなんで、期待しないで読んでもらえるとありがたいです。

設定
オリ主人公（男）
原作知識なしの一般人

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――突然だが俺の姉貴は異常だと思う。

ん？

いやいや、別に異常っても超能力が使えたり魔法が使えたりするなんてわけじゃないぞ？
ていうか使えたらビックリだわ。

じゃあ何が異常かだって？

それは―

「あっ、また当たった！」

「あらあらまたかい桜子ちゃん？」

「うんっ。ほら、おばちゃんもう一本」

「はいはい」

―コレだ。

この状況だけを見たら普通の……せいぜい運のいい女の子だな、ぐらいしか思わないだろう。

けど、これが四連続目だと言ったらどうする？

このよく見かけるアイスのあたりクジを引く確率が仮に一箱に一つとしよう。
３２／１、それを四連続ってコトは……ダメだ計算できねえ。

と、とにかくとんでもない確率になるだろう。

しかし普通ならそんなことはあり得ない。

他にも姉は毎回金のエ〇ゼル、銀のエ〇ゼル必ずどちかは当てるし、町内のクジ引きでも3等以上しか引き当てたことがない。

言うならば超超超超ラッキーガールなのだ。

その幸運ぷりは生まれつきのようで、俺らの両親が姉貴がまだ赤ん坊の頃に適当に姉貴が指差した会社の株を気まぐれで購入したところ、まさかの大成功。

翌日には株価はグングン上がり、一般庶民じゃ手が出せない値段まで上がったらしい。

その株のおかげで自慢というわけじゃないが、俺の家庭は比較的裕福だ。

ん？

それなら姉が異常だろうが構わないだろだって？

……ああ、確かに姉が異常なだけなら俺は何の文句もないよ。

だが…だが……！

――ビチャ

「ああーー！？

俺のアイスがっ！？」

「んー？

何？落としちゃったの？」

「……うん」

「ならお姉ちゃんのあげよっか？」

「い、いいっ。
まだ一本ぐらい買えるお金持ってる……あれ？」

「どしたの？」

「……お金、落としたみたい」

「えええーっ！？」

俺も異常なんだよ……！

超超超超ラッキーガールである姉と違って、何故か俺は超超超超アンラッキーボーイなのだ。

今の通りお金は落とすは、すぐ迷子になるは、おみくじでは逆に珍しい大凶しか引かないは、頭に鳥の糞は落とされるは、誘拐されるは……ｅｔｃ。

最初は俺の不注意だとは思ったよ。
けど落とし物対策のために財布に紐をつけても、いつの間にか切れてるし、迷子対策としては両親から携帯を渡されても、いつも電池が切れてるし……。

とにかく俺の不幸を対策しようってのは無駄なんだ。

俺の不幸ぷりはきっと姉貴が母親の中で俺の幸運を奪い尽くしてしまったからに違いない。俺の分の幸運もあるから姉貴はあんなにラッキーなんだ。

だから姉貴はそのことをよく理解し、俺に感謝するべきだと思う。

いや感謝しなくてもいいから俺の幸運返せ今すぐ。

「はい、じゃあコレお姉ちゃんのあげる」

「えっ…でもそれじゃあ……」

「いいのいいの。まだまだアイスのあたりクジはたくさんあるし。それにこれ以上食べたら太っちゃうもん」

「……ソウデスカ」

だから言わせてくれ。

弟である俺がこんな不幸だというのに

俺の姉がこんな幸運であっていいハズがないってな。

……ちなみに言えば、俺に渡したアイスはあたりではなかった。

……不幸だ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

……と、まあ主人公が不幸というよくある設定ですよね。
主人公の立ち位置は読んでわかる通り、麻帆良のラッキー仮面　椎名桜子の弟です。

題名は
「俺の姉貴がこんな幸運であっていいハズがない」
ですねｗ

えっ？パクり？
はっはっ、何のことやら。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ～」が完結したらいづれ書いてみたいですねー。
あっ、でもフェイトの仲間って設定でも書いてみたいな……。

ナナシ
「いいから本編を執筆しろよ」

……ソウシマス。

このあとがきの妄想ネタについても評価・感想待ってますｗ
では。

第３９話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）後編」（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。

原因はわかってるんです…

ナナシ
「なんだよ？」

戦闘描写だと筆がまるで進まない！！

ナナシ
「やっぱそれか…」

今回ナナシＶＳ楓
決着です。

第３９話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）後編」

ｓｉｄｅ　ネギ

まほチェリーの正体がようやくナナシ先生だと判明し改めて試合が再開された。

ナナシ先生と楓さんはお互い構えたまま、相手を睨み続けた状態で動こうとしない。

「楓はともかく、ナナシ先生が動こうとしないのは珍しいですね……」

「そう…ですね。

確かにナナシ先生は自分から動き出すイメージしかありませんし」

隣にいた刹那さんがこの状況を不思議に思ったのか、そう呟く。

僕もそれはそう思う。

それにナナシ先生がその場に黙って構えてるコト事態珍しいというのに。

「ほう……。
ナナシの奴、よほど長瀬楓に負けたくないようだな」

「どういうことですか？」

そんなナナシ先生の行動を不思議に思っていたら、今まで黙って試合を観戦していた師匠（マスター）が口を開いた。

「見ろ、奴の構えを」

「構え……？」

言われた通り、ナナシ先生の構えを見てみる。

その構えはいつもと違う。

いつもは適当な喧嘩スタイルのような構え方だけど、今は違う。

今は身体を真っ直ぐにして上体を起こした状態。

そして両拳を軽く握り、左手はこめかみに。

右手は顎のところに持っていっている。

あれって―

「……ボクシング？」

その構えはＴＶでよく見かけるボクシングの構えと酷似していた。

「ほう、よくわかったな」

「でもナナシ先生はほとんど我流っていっても、基盤はムエタイで

すよね？
なのになんでボクシングの構えを……？」

「奴は一応ながらボクシングも経験してる。
それにムエタイはタイ式ボクシングとも呼ばれてるからボクシングとも共通点が多いし、それなりに使えて当然だろ」

……当然なのかな？

僕は中国拳法しか習ったことないからわからないけど師匠がそう言うならそうなのだろう。

でも、その構えがナナシ先生が動かないのとどう関係が…？

「最後まで話は聞け。
それでナナシの構えはアップライトスタイルと呼ばれていて、ボクシングでいうアウトボクサーに多い構えだ」

「あの……だからそれがなんなんですか？」

「説明するより見た方が早い。ほれ」

そう言って舞台を指す。

僕は黙って言われた通りに舞台に顔を向けると―

「……なっ!?」

全く自分から動く気配のないナナシ先生に痺れを切らしたのか、楓さんと分身2人、合計3人がナナシ先生に襲いかかる。

けれど両者がすれ違い、何も起きなかったのかと思った瞬間―

「「「ぐっ……!」」」

3人の楓さんがほぼ同時に舞台に膝をついた。

「なっ！？
い、今のは……！？」

「カウンターだ」

「カウンター？」

「ああ……とは言っても3人とも顎先に擦っただけだが。
おそらく膝をついたのも、軽い脳震盪が起きただけだろう」

で、でも、楓さんにスピードで負けてるのに、どうやって当てたの！？

「あほ。カウンターなんだからスピードで追いつく必要はないんだよ。
ただ相手の攻撃を予測し、タイミングをあわせることさえできればな」

「だ、だけどナナシ先生にそんな技術があるとは―」

「いや、実はそれがあるんだよネギ君」

「タカミチ？」

舞台に視線を向けながらもタカミチは僕に話しかけてきた。

「僕とナナシ君がエヴァの別荘で一緒に修行していたことは知ってるね？」

「う、うん……」

「その修行の一環として、彼とはよく模擬戦をしたんだよ」

タカミチとナナシ先生で？

タカミチ相手じゃ実力的に勝負にならないと思うんだけど……

「はは……ネギ君もキツイこと言うね。
でも、そうだね。
確かに最初はまったく勝負にならなかったよ」

「最初は？」

「うん、最初は。
でも彼は何度も何度も僕との模擬戦をしていくうちにね、僕の十八番ともいえる技を攻略する方法を生み出したんだ」

タカミチの十八番？

「おっと、悪いけど技の詳細までは説明できないよ。今説明したら試合での楽しみが減っちゃうからね」

あう……、そりゃあそうだよね。

でもあれがタカミチに対抗するために生み出されたスタイル―

「……カウンター」

「ああ。猪で攻撃的な性格のせいで滅多に自分から後手に回ることはないが、あのスタイルこそが、ナナシの持ち味を限界まで引き出せる形なんだよ」

「それにあの驚異的な頑丈さのおかげで、カウンターのリスクも軽減されるからね」

……確かにあの頑丈さならカウンターを失敗しても恐れる必要はないもんね。

けど本当に性格とあわないスタイルなんだな……。

side　ネギ　end

side　ナナシ

――集中しろ。

己の全神経を研ぎ澄ませ。

――――視ろ

相手の動きを。

――予測しろ

奴の次の動きを。

速度で適わないのはわかっている。
ならば相手の動きを先読みするしかない。

そのために魔力で限界まで目と反応速度を強化。

出来ないことはない。

俺はもっと速い拳を相手にしてきたのだから。

そのためだけに、このスタイルを生み出したのだから

「「「「忍」」」」

脳震盪から速攻回復したブルーは、今度は４体で俺の前後左右に襲い掛かる。

いくら人数が増えようが関係ない。

俺の取るべき行動は決まっているのだから。

前後から顔と背中に向かって拳が放たれる。

―上体をスウェーさせ回避

左右からは蹴りが繰り出される。

―左からの蹴りは左膝をあげ防ぐ。

右は回避、防御不可能と判断。

当たるであろう箇所に魔力を部分的に込め強化し、その一撃に備える。

回避するのにあわせて、正面のブルーに右のストレートを放つ。

確率は４分の１。

「がっ…！」

「ぷべらっ」

手応えがない。

分身（ハズレ）だ。

分身（ハズレ）とわかった瞬間、身体に痛みが走る。

だが怯んでいる暇はない。

左膝で防いだ状態のままであるブルーの足を左手で掴み、力任せに持ち上げる。

そして身体を回し、掴んだブルーをラケットのように横薙ぎに振る。

それを右のブルーに向かって思い切りぶつける。

今度は3分の2。

「「のぺらっ」」

また分身（ハズレ）のようだ。
つくづく自分の運の低さが嫌になる。

残りは本体の1体のみ……っと、振り返った瞬間ブルーが再び俺から距離をとる。

「……どうやらナッシー殿のことを過小評価し過ぎていたようでござるな」

「惚れんなよ？」

「ふふ……、ナッシー殿が勝てば惚れてしまうかもしれないでござ

るな」

「……俺はガキには興味ないんだけどな」

「そういうセリフは―」

「ぬっ？」

喋っているのと同時に、ブルーが全身に力を込めたのがわかった。

そして真上に跳び―

「「「「「「勝ってから言うでござるよ」」」」」」

視界いっぱいにブルーが増えた。

「マジッ！？」

その数は１６。

もはやカウンターで対応できる人数ではない。

そりゃあさっき人数が増えようが関係ないとか言ったけどさ！

さすがにこの人数は無理だっつーの！！

そうこう狼狽えてる間に、１６体のブルー全員が、手のひらに気を集める。

集めた気を１６体全員で俺に投げつけ……って！？

「ぬぅおおおお！？」

どう考えてもあの数の気弾は防げない。

しかも気弾は舞台全体に降り注がれているため、避けるためには―

『おおっと、ナナシ選手！なんと自分から舞台周りの水の中にに飛び込んでいった！？
しかしそこは場外のためカウントをとらせてもらいます！
ていうかナッシー情けないよっ！？』

「ぐばぶばばぶべ！ぶべばべべば！！
（訳：うっせーよ朝倉！聞こえてんぞ！！）」

……しかしどうすっかね？
水の中にいられんのも少しの間だけだし、なんとか今のうちに作戦を練らなければならない。

「……ぐべばぶべべば。
（訳：これはまだ使いたくなかったんだけどな）」

少し躊躇いながらも俺は切り札（ジョーカー）を切ることにした。

観客、しかもタカミチもいるから大会中は隠し通したかったんだが……ガキに、しかも教え子にやられっぱなしじゃいられねえしな。

それに、なにより俺は―

「ぶべばぶぶ―（訳：左腕に『気』―）」

男の子だからな。

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

side　楓

『4…5…6…』

残りカウントが半分を過ぎた。
あの御仁はまだ水中から姿を現さない。
このまま場外で負けということはなかろう。

あの御仁のことだ。
おそらく作戦を練ってるのでござろう。
そのためにまだ拙者の15体の分身は消していない。

『7…8…9……っとぉ！ナナシ選手、ついに水中から姿を現したあああああ！』

残り僅かっといったところで、ついに水中から飛び出し、静かに舞台に着地した

「……」

「っ！？」

それは先程までの人物とは別人のだった。

―雰囲気が違う。

先程までのナッシー殿も、極限まで集中しており、普段の雰囲気とは違ったが、今はなんと言えばよかろうか……、静かというか―

「……『無』」

まさにその表現がピッタリだと思った。
感情豊かなあの御仁からはまるで想像のつかない表現だが。

「ん……？」

そんな変化に戸惑っていると、うっすらと視界が曇っていく。

「霧……？」

突然発生した霧のようなものはどんどん濃さを増し、視界を奪っていく。

これはいったい……？

「『眠りの霧』」

「っ！？」

その声が聞こえた瞬間、呼吸を止める。

しかし間に合わなかった分身３体が倒れた。

「くっ…！」

不覚……！

あの御仁も魔法使いだということを失念していた…！

詠唱魔法は禁止という制限があったが、無詠唱魔法は制限されてはいない。

これならルールには何の問題はない。

「『魔法の射手　雷の１０矢』」

「ぬっ…！？」

まだ霧が晴れず迂濶に動けない状態の中、今度は無詠唱の魔法の矢が分身を襲う

咄嗟に2体は躱すことができたが、8体は躱すことが出来ず消失する。

残りは拙者、本体を含めて5体。
本体である拙者を舞台の中心に置き、分身4体を拙者を囲むように四方に配置する。

これならば―

「っ！」

と思った瞬間、ナッシー殿は霧の中を一陣の風のように突き進んできた。
そのスピードは先程より断然速い。

迎撃しようと分身2体が前に出て、首下に向け同時に蹴りを放つが、突撃してきた勢いのままスライディングで躱される。

ナッシー殿はすぐさま立ち上がり、分身2体には見向きもせず真っ直ぐ拙者（本体）に向かってくる。

もはや後のことを考えてる場合ではない。

残りの分身2体で両腕を抑え、動きを止める。

拙者は彼の正面に立ち、拳に己の力を全て込め、必殺の一撃を放とうとする。

「―馬鹿なお前に一つ教えといてやる」

「は？」

だが、その前にナッシー殿は両腕を抑えられている状態のままゆっくり頭を振りかぶって―

「たまには……頭使えってなっ！！」

「がっ！？」

勢いよく、拙者の頭にぶつけてきた。

「あ、頭使うの…意味が違うで…ござろう……」

その衝撃に耐えきれず、フラフラと後ろに尻餅をつく

『ダ、ダウンッ！
カウントを取ります！
1…2…3…4……』

和美殿のカウントが聞こえてくるが、身体に力が入らず、立つことができない。

これは―

「……負け、でござるな」

拙者は開き直り、舞台に大の字に倒れる。

『8…9…10！
き、決まったあああ！！
まほチェリー…いや、ナナシ選手の勝利です！！』

ナッシー殿の勝利と同時に、拙者の負けが確定した。
拙者が負けたハズなのに、何故か気分は清々しい。

「ほら、立てっか？」

「……乙女相手に頭突きとは、やることがエグいでござるなあ」

自分の額を真っ赤にさせたナッシー殿が手を差し出してきた。
拙者はその行為に素直に甘えて手を取る。

「あっ、そうだ。
もう一度だけ言うぜ？」

「ん？」

身体を引き寄せられた瞬間何か思い出したかのように呟やき、いつもの人当たりのいい笑顔で、拙者を見つめてきた。

そして―

「惚れんなよ？」

「っ！？」

次の瞬間、何故か頬が熱くなった気がした。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第３９話「忍者ＶＳ童貞（ヒーロー）後編」（後書き）

皆さんが思ってることは一つだと思います。

それは―

ナナシ
「それは？」

ま さ か ナ ナ シ が 勝 つ と は！！

ナナシ
「失礼だなオイ！？」

最初に言っておきます！
試合だから勝てたんです！実戦じゃ間違いなくナナシは負けます！！
制限のある試合だからこそ勝てたんです！！

ナナシ
「…なんだろう？
勝ったのに嬉しくない…」

色々と納得いかない箇所や気になった部分もあるとは思いますが、
詳しくは次話で説明させていただきます

そしてもう1つ。
自分は格闘についてはド素人です。
何かおかしな部分がありましたら、容赦なく指摘を……あっ、やっぱ嘘です。多少容赦していただけると助かります（笑）

ナナシ
「情けなっ！？」

では。

第４０話「俺の頭には十万三千人のアイドルの詳細が記憶されてる」「……それ

ついに４０話突入！

いやあ、長かったなあ…。

ナナシ

「単にお前の更新速度が遅過ぎただけだろ」

……さーせん。

第４０話「俺の頭には十万三千人のアイドルの詳細が記憶されてる」「……それ

ｓｉｄｅ　ナナシ

試合を終えた俺は、解説席にはまだ戻らず、ひとまず怪我の治療をするために救護室にやってきた。

怪我っても、次の試合に響くような怪我はしてないんだけどな。
痛いとこに湿布貼って、包帯巻いて……まあ、気休めみたいなもんだ。

ちなみにブルーは隣の部屋のベッドで休んでいる。
あっちも大したことないみたいだが、頭を強く打ったんだから念のために休んでるらしい。

「はい、お大事に」

「ほいほい、ありがとござした……って、おろ？」

救護の先生にお礼を言って部屋から出ると、すぐそばにタバコを吹かしながら壁に寄りかかっているタカミチを発見。
向こうもどうやら俺に気付いたようだ。

「……さすがの俺も救護室の前でタバコを吸うのはどうかと思うんだが？」

「……って言いつつ、自分も吸おうとしてるじゃないか」

「バレたか」

そんな軽いやり取りをしながら、俺は懐からタバコを一本取り出し、吸う。

「怪我は大丈夫かい？」

「大した怪我じゃねえよ。それより―」

「ん？」

「聞きたいことがあるんだろ？」

俺がそう言うと、タカミチは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「はは……、よくわかったね？」

「長ぇ付き合いだからな」

そう定番の受け答えをして俺たちはお互いにニヤリと笑う。

「じゃあ遠慮なく聞かせてもらおうよ。
さっきの試合のアレは…」

「ああ、お前の予想通りだと思うぜ？」

やっぱりタカミチは気付きやがったか。

「……驚いたよ。
まさか君がアレを習得していたなんて……」

「まだ未完成だけどな」

「未完成？
……なるほど。だから出力が低かったのか」

「そゆこと」

あの技法でもっとも大切なことは己を『無』にすること。

だけど欲望の塊……じゃなくて、煩悩の塊……でもなくて、と、とにかく色々と考えている俺に頭ん中を『無』にするってのは非常に難しいことだ。

だが、俺は厳しい修行の中ついに己を『無』にすることができた…！

それが『賢者モード』！！

……発動制限時間が2分32秒ってのが傷だが。

カップラーメンより短いんだぜっ！

それに集中力を乱されたらすぐに解けるし。

「……はあ、同じ技法を使う自分が恥ずかしくなってきたよ」

「照れんなって」

俺が肩を軽く叩くと、タカミチはまた「…はあ」と溜め息を吐く。

……何でだ？

「てかお前は超を放っておいて、こんな所で油売っててていいのかよ？監視しろってジジイから言われてんだろ？」

「知ってたのかい？」

「まあ一応俺も頼まれてるしな」

……俺が超側ってことを知らずにな。

「そっか。
ナナシ君も監視してくれてるなら安心……だね？」

「何故に疑問系！？」

「なら僕の試合の時はよろしく頼むよ。
ネギ君との試合は集中して戦いたいからね」

「ああ、俺様にドーンと任せときな」

タカミチにここまで信頼されていると思うと嬉しいが、同時に胸がチクリと痛む。
だが俺はそれを顔に出すことなく、いつものように軽いノリで対応する。

「……なあ、タカミチ」

「ん？
どうかしたかい？」

だからこの時の俺は普段と違って、らしくなかったのかもしれない。

「もし……、もしも世間から見て悪い行動だとしても、その行動によって救われる命があるとしたら……お前はどうする？」

「……？

いきなりどうしたんだい、そんな質問をして？」

「……悪い、やっぱなんでもねえや。忘れてくれ」

「でも―」

『―１０！

クーフェイ選手勝利！！

龍宮選手を下し２回戦に進出です！！』

「おっ？」

タカミチの言葉を遮るように、朝倉のアナウンスが響き渡る。

どうやら第４試合が終了したようだ。

「ほれ、そろそろ試合が近いんだから準備するなりしとけ。
俺も吸い終わったら解説席に戻らねえといけねえし」

「う、うん」

俺は急かすようにタカミチの背中を押す。
タカミチは吸い終えたタバコをきちんと携帯灰皿に入れて、会場に戻る。

「タカミチー」

「今度は何だい？」

「……いや、とにかくテキトーに頑張ってこい」

「……うん、頑張るよ」

その言葉を最後にタカミチはもう振り返ることなく会場に戻っていった。

「……さて、俺も戻るとしますか」

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

side　千雨

舞台には聖ウルスラの制服を着ている高音っつう先輩と、サングラスにライダージャケットでいかにもターミ〇ーターっぽい服装した、やたらデカイ男が試合をしている。

「きゃあああああっ！？」

「うおおおっ！？
何だアレ！？」

「田中さんの口からビームが！？」

「ただいまー……って、なんだ、もう五試合目始まってたのか」

「お帰りなさい、兄さん」

第四試合の間はいなかった副担が、第五試合が始まった直後に解説席に戻ってきた。

「さて、戻ってきたことだし仕事しますか。
アレは機体番号Ｔ‐ＡＮＫ‐ａ３
愛称『田中さん』。
工学部で実験中の新型ロボット兵器……だそうだ」

「ちなみに私の弟になります」

副担がポッケから出した紙を見てあのロボットについて説明するが、無理あるだろっ！？

こんなんで納得する奴なんかいるわけ―

「なるほどー。
ロボットなら納得だ」

「「うん、うん」」

「―って、待てテメエらあああああああ!!
どう考えてもおかしだろうがアレは!?」

思わず名前も知らない観客共にツッコんでしまったが仕方がない。

ていうか何がロボット兵器だよ!?
日本であんなもん作っていいのかよ!?

そもそもビームってありえないだろうが……!?
テレビとかで出てるホ○ダのロボットとか○ＩＢＯとかと明らかに
技術力が違うじゃねえか!?
変だろオイ!!

「ん?今の声は……って、お前は―」

「げっ……!」

大声でツッコんでしまったせいで、近くにいた副担に気付かれてしまった。

……くそっ、コイツとあんま話したことねえし、変態だから関わりたくないんだが。

「よう、ちうっち。
こんな所で奇遇だな。
ネギの応援にでも来たか？それとも俺の応援に……って、うおっ？」

私は返事をする前に急いで副担に迫り胸ぐらを掴む。
そして出来るだけ小声で叫ぶ。

「てめえが何でその名前を知ってやがる！？」

「いやいや、なんのことだよちうっち？」

「だあああああっ！！
それ以上私をその名前で呼ぶんじゃねえ！！」

何故だ！？
何故コイツが私の……いや、ちうの正体を知ってやがる！？

ま、まさかあのガキが…！

「ふふふ…、俺はネットアイドルランキング１００以内は全員記憶してるぜ。
ちなみに１０位以内の娘についてはファンクラブにも入っている」

「んなっ！？」

し、しまった…！
変態（コイツ）がいかに女好きとはいって、まさかそこまでネットアイドルに精通していたとは…！！

……ん？待てよ。

っつうことは当然ネットアイドルランキング１位である私の……

「……ふっ」

そんな私を前に、変態が懐から一枚のカードを取り出し、見せてきた。

それは私のファンクラブの会員証だった。
この時点でも充分驚くべきことだが、まだデカイ爆弾が残っていた。

「あん？
ちうファンクラブ会員ナンバー４……４！？」

馬鹿なっ！？
今やネットを通して日本中……いや世界中にまで拡大し続けている我が会員数の中でナンバー４、シングルナンバーだと！？

そんなん私が活動を始めた当初からにでも入ってないと手に入れられないナンバーだぞ！？

「んだよ。
気づいてなかったのかよ？つれねえなあ、よく今でも掲示板でやり取りした仲じゃねえか」

「掲示板？」

掲示板っつうと、私がよく愚痴やら不満に思ってる事や、ある事ない事書いている掲示板のことか？

「……一応聞いておくがお前のネットの名前は？」

「通りすがりB」

アレは
お前か！！

私が書き込みしたり、画像をアップした時に必ず反応してきて、や

けに私に熱心なファンだなと思っていたら…！

「教師としては、ああいうネットでの活動を、まだ中学生であるお前にやらせておくのは抵抗があるが、可愛いから許すっ！！」

「ホント駄目な教師だなお前っ！？」

いや、まあそっちの方が助かるんだが…。

「それに心配すんな。
ちうっちの正体を知ってるのは、俺の知ってる限り俺とネギだけだから」

「むしろお前ら2人にバレてんのが一番致命的だと思うんだが……」

「はっはっはっは！」

「笑って誤魔化すなっ！」

そうこう話していたうちにいつの間にか試合が終わっていた。

勝ったのは高音って先輩だったが……まあ、アレは同じ女として同情する。

だからそこの変態は解説席から身を乗り出して凝視すんじゃねえ。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　？

第４０話「俺の頭には十万三千人のアイドルの詳細が記憶されてる」「……それ

今回、一瞬だけナナシシリアス（笑）モードに。

ナナシ
「シリアス（笑）ってなんだ（笑）って」

というより今回予定ではネギｖｓタカミチの試合開始まで書く予定だったのに……あれ？

ナナシ
「……相変わらず計画性ないな」

あっ、ちなみに
「通りすがりＢ」に関して興味がある方はネギま！原作２巻１２時間目「ｅＧｉｒｌ　Ｌｉｆｅ☆」を読んでみてください（笑）

では。

第４１話「お前の席ねえからっ！！」※誤字修正版（前書き）

うーん……。

ナナシ
「どうした？」

最近全然思うように描きすすめることが出来なくて……はっ！？
これがスランプというヤツか！？

ナナシ
「生意気にもスランプか」

んー、皆様はスランプの時はどうしてるんでしょうかね？

私は気分転換に本編とは全く関係ない妄想ネタを考えて、それが詰まったらまた違う妄想ネタを……って、これってデフレ？

ナナシ

「ダメダメだな」

※9／3誤字修正しました

第４１話「お前の席ねえからっ！！」※誤字修正版

ｓｉｄｅ　ナナシ

「いやあー、いいもん見せてもらったなあ」

俺は先程の光景を思い出し満足気に頷く。

会場はビデオカメラとか使えないようになってるから、後で超に頼んで映像をダビングしてもらおう。

べ、別に脱げた姿とかが見たいわけじゃないよ！？

俺は単に武道家として純粋に試合を見直したいだけななんだからね！？

……まあ、あえて言うならスタイル良くて金髪美女ってイイよね？

そう思ってるのは俺だけじゃないよね？

『さあ続いてはいよいよ第六試合です！』

おっ、ようやくタカミチとネギの試合か。

『一方は学園の不良にその名を知らぬ者なき恐怖の学園広域指導員
タカミチ・T・高畑！！
一方は昨年度麻帆中に赴任してきました噂の子供先生ネギ・スプリングフィールド！！』

朝倉の紹介と共に両者が並んで登場する。

タカミチは余裕のようだがネギはカッチカッチに緊張している。

……大丈夫かよアレ？

「あ、あの兄さん。
ネギせんせ…ネギ選手に勝算はあるのでしょうか？」

隣にいる茶々丸が不安そうな顔で尋ねてくる。

そうだなあ……。

「昨夜予選で使ったタカミチの技はネギにとっちゃ正体不明の技だからな。
正体不明の技には距離を保って対処するのが一番だ」

って言っても、この舞台じゃいくら距離を保ってもほとんどタカミチの射程範囲内なんだけどな。

けど技の正体を解説者である俺が言うのはマズいしなあ。

なんとかネギ自身が攻略法を見つけないと。

「さあ、やろうかネギ君」

ついにタカミチがポケットに両手を入れた。

いつ見ても、あの構えは戦闘する奴の構えには見えない。

その構えを見て、ネギは後ろに下がろうとしている。

……確かにソレは俺が言ったように正体不明の技に対しては一番の方法かもしれんが、ソレじゃあ駄目なんだよネギ。

『それでは第六試合―』

俺の考えが伝わったのか、ネギは後ろに下がるのをやめ、急に思い直したような顔をした。

「……茶々丸。格上相手に試合を挑むにはどうしたらいいと思う？」

突然の俺の質問に茶々丸は少し困ったような顔をするが、ちゃんと考えて答えてくれる。

「……策、でしょうか？」

「確かにソレも必要だな。けど負けて当たり前な格上相手に一番必要なのは―」

『Ｆｉｇｈｔ！！』

「当たって砕けろの玉砕魂だ！！」

「『戦いの歌』！
『風楯』！！」

試合開始宣言と同時に、ネギは身体強化魔法である『戦いの歌』（俺はその上級版が使えるがな）と、防御魔法である『風楯』を発動。

そしてそのまま俺よりも粗い瞬動を使い、タカミチに接近。

瞬間、『風楯』が割れつつも、ネギはタカミチの後ろに回ることに成功した。

確かにあの近距離ならタカミチの技は使えない。

そこからネギが怒涛の攻めを見せる。

……えっ？解説しろ？

俺もさすがに中国拳法までは手を出したことがないから、どういう技なのか解説出来ないっつーの！
ただなんかカクカクしたりクヌクネしてて気持ち悪い動きしてるってことだけ伝えておく！

「タカミチはやりにくくてしょうがないだろうな。
中国拳法の動きに慣れてないってのもあるが、ネギとの体格の差が何よりも大きいだろう」

そう言っている間にも、ネギは自分の拳に魔法の矢を乗せてタカミチに放つ。

たぶん効いちゃいないだろうが、衝撃には逆らえず後ろに殴り飛ばされる。

「うっはー……。にしてもかなりぶっ飛んだなあ。水の上を石ころみたいにバウンドしたぞオイ」

しっかしタカミチの野郎、余裕ぶっこきすぎじゃないのか？本気なら、慣れない拳法だろうが体格が違かろうがネギに接近されようとも遅れをとるはずないのに。

「……兄さん」

「ん？どした茶々丸？」

「超から直ぐにモニター室に来てほしいと連絡が」

2人の戦いに夢中になっていたのに、茶々丸…じゃなくて超に邪魔された。

「今いいとこなんだけどなあ……」

「緊急らしいですよ？」

学園側にバレないように、あんま超との接触は控えたかったんだが、緊急なら行くしかないか。

まっ、今なら学園側のタカミチも他の魔法関係者も試合に夢中だからバレることはないか。

それに試合の結果は俺にはわかってるし……な？

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

side　タカミチ

沈んでしまわないように、両足の裏に『気』を軽く纏わせる。

簡単に言えば水面歩行だ。

『な、なんと!?
高畑選手無事です!!
あの打撃を喰らって全くの無傷だーっ!?』

「無傷じゃないよー」

多少は痛かったさ。

今の攻撃は素晴らしかったしね。

『おおっと!?』

舞台に戻ろうと水の上を駆けるが、ネギ君はソレを迎え出てきた。

一度距離を離そうとしてみるが、ネギ君はぴったりとくっついてくる。

うん。エヴァの修行のおかげでスピードも申し分ないようだね。

けど―

「あっ!?」

まだまだ隙だらけだよ。

「しまった!」

僕は瞬時にネギ君の方に身体を向き直して、舞台に向けて蹴り飛ばす。

これでようやく距離を離すことができた。

離れたとこで、ネギ君に向けて五・六発ほどの拳を叩き込む。

「あぐうっ！？」

その連撃に耐えきれず、ネギ君は後ろに倒れこむ、

『やはりそうか……』

『何かお気づきに豪徳寺さん？』

どうやら解説の子達は気付いたようだね……って、あれ？ナナシ君の姿が見えないんだけど……？

……またサボりかな。

『高畑選手の使う技の正体は刀の居合い抜きならぬ拳の居合い抜き「居合い拳」と思われます』

『居合い拳……ですか？』

『ええ。おそらくポケットを刀の鞘の代わりにして、目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出しているんでしょう』

う……ん？

まあ正確には『無音拳』なんだけど、技の原理は一緒だからいいかな。

ネギ君は技の正体をパンチだと知ってか、動きを止めて僕の動きをよく見ようとしてるけど―

「がっ！？」

そう簡単には見切ることは出来ないよ。

彼でも僕の技を見切るのに別荘で数年かかったしね。

「くっ……！」

ネギ君はこの状況をなんとか打破しようと、先程と同じように瞬動で接近してくるけど、僕は少し身体を横にズラし足を引っ掛ける。

「瞬動は一度『入る』と方向転換が効かないのが弱点だよ」

「あうっ！？」

……同じ手をバカ正直に使っても二度は通用しない。

実戦でもそんな甘い考えだと命に関わるぞネギ君。

僕は転げているネギ君に追撃を加える。

が、それは咄嗟に回避される。

そのままネギ君は居合い拳の射程から離れようと、舞台の端まで移動するけど、この舞台のほとんどは居合い拳の射程範囲内だよ？

『これは先程とは攻守入れ替わって一方的な展開になりました。高畑選手、居合い拳でネギ選手を圧倒だーっ！！』

試合中だというのに、僕は動きを止めてネギ君に話しかける。

「ネギ君この技はね、ナギの仲間の一人の……」

「え……？」

「僕の師匠にあたる人から教わった技なんだよ」

「父さんの仲間から…？」

「ああ…いい人だったよ」

それはきっと戦う彼の姿をナギと重ねてしまったからなんだと思う。

「ネギ君、僕は今日嬉しいことばかりだよ。
さすが僕の憧れたナギの息子……。
こうでなくてはね」

「タカミチ……」

「今の手合わせでわかったよ。
君はもう立派に一人前の男の子だ。
だから今から僕の本気を少しだけ見せよう。
『男同士の戦い』……そうでなくては失礼だからね」

ナナシ君のは不完全だったから、まるで出力が出てなかったけど僕のはそうはいかないよ？

「左腕に『魔力』―」

左腕に世界を取り込み―

「右腕に『気』―」

右腕に自分を現す―

「『合成』」

瞬間、相反する二つの力が混じり合い一つとなる。

「一撃目はサービスだ。
避けろネギ君」

ｓｉｄｅ　タカミチ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「……やっぱり使いやがったかタカミチ」

モニターから試合の状況を確認する。

モニターではタカミチがネギに向けて『無音拳』を放っている姿が映しだされている。

ネギはあの攻撃を見て呆然としてるが……、まあ当たり前だな。
あのバカみたいな威力の攻撃を初めて見たら誰でも呆然とするだろう。

「にしても、やっぱ本場の『咸卦法』は違うな……」

俺とは出力から全て比べ物にならない。
あそこまでの練度までいくには、別荘であと何年修行しなければならないのだろうか……？

「ふむ……。高畑先生に本気を出されてはネギ坊主に勝ち目はないカ？」

俺がモニターに目を向けていると、背後から超が現れた。

確かに実力的にも経験から考えても、ネギが勝つ可能性は０だと思えるが―

「――ネギは勝つさ」

「む？」

俺はそう言い切る。

「……何故そう思うのかネ？」

「禁則事項です♪」

「……」

「……さーせん」

俺がそう答えた瞬間、俺と超の間に冷たい空気が流れた。
超の視線も俺を射殺せる程冷たかったため、思わず謝ってしまう。

「……普通なら友人である高畑先生の方を勝つと信じるべきじゃないカ？」

「そんなこと言ったらネギだって友人だしなあ……」

そう言って俺は苦笑する。
さすがにコレは協力している相手だろうと話すわけにはいかない。

「で？わざわざ俺を呼んだ理由は何だよ？」

「ウム、実は聞きたいことがあてネ」

「聞きたいこと？」

超が俺に聞きたいことって何だ？

「ナッシーはこの人物に心当たりはないカ？」

「コイツは……」

超が手元の機械を弄ると、モニターの画面が切り替わり、顔をフードで隠している人物が映しだされた。

「名前はクウネル・サンダース。
本戦出場者については全員調べてみたが、この人物だけ名前以外の情報はわからなかたネ」

「……ていうか偽名だしなソレ」

「むっ？知てるのカ？」

そりゃあ、また原作キャラですし。

「……大戦時の英雄って言えばわかるか？」

「っ！？
ということはネギ坊主の父親の……！」

「ああ。
『紅き翼』の一人だ」

っても、俺も大した事は知らないんだけどな。
別に原作全部読んだワケじゃないし。

「まあ、アイツはお前の計画の邪魔にはならないさ。用があるのは、この大会とネギだけだ」

「……ナッシーの情報網には私でさえ驚かせられるヨ」

未来の情報を知っている奴だけには言われたくないわな。

「ちなみに準決勝で俺と戦うけど、俺は歯が立たないから期待しないでね？」

「はなからナッシーが大戦の英雄に立ち向かえるとは思てないが……て、犬神・K・小太郎は負ける前提なのカ？」

「当然だろ？
小太郎は俺より弱い……とは言わないが、近い実力であるのは間違いないからな。
小太郎じゃまだアイツには勝てない」

そう……まだな。

「……ときどきナッシーは未来を知ているじゃないかと思うヨ」

「……まさか」

……恐っろしい程勘が鋭い奴だな。

何だ？コイツには直感Ａでも付いてんのか？

「「「「「うおおおおおおおおっ！！」」」」」

「「ん？」」

なにやら会場の方が騒がしいな？

試合のカタがついたか？

「今モニターを切り替えるネ」

超がそう言って、モニターを再び会場のモニターに切り替える。

そこには舞台に倒れ付すタカミチに、ボロボロになりながらも凛とした姿で立つネギの姿があった。

『１０！ネギ選手勝利！！１０歳の子供先生２回戦進出が決定しましたー！！』

「なっ？
ネギが勝っただろ？」

「……ナッシーはホント何者ヨ？」

超は目を丸くして、俺に尋ねてきた。

そうだな、俺は―

「神に反逆する名無しの異世界人さ」

「はあ……。
もう戻っていいネ。
わざわざすまなかたヨ」

「……むぅ」

俺の返答に超は呆れたように溜め息を吐いた。

この世界で初めて自分から正体を明かしたのに、信じてもらえないとは……。

これが人徳か…！

「……ていうか俺解説席にいる時間よりも、いない方が長い気がするんだけど、どう思う？」

「……」

「ノーコメント！？」

……案の定、この後解説席に戻った時の茶々丸の視線は冷たかった。

もう「今さら何しに？解説の仕事は兄さんがいなくとも問題ありませんよ？」みたいな目で見てきた。

妹分にあんな目で見られた上に、解説席の俺の席の椅子がなくなっていた。

もう一度茶々丸の方を見たら「兄さんの席はありませんから」みたいな目で見られた。

仕方ないから、正座して机の前に座る。

そしたら周りから可哀想な物をみる目で見られた。

……もうヤダ。

to be continue ？

第４１話「お前の席ねえからっ！！」※誤字修正版（後書き）

はい。
というわけでナナシのアレとは『咸卦法』でしたー。

ナナシ
「皆気づいてるっての」

次回までには何とか更新のペースを戻したいですね。
ただでさえ更新の遅い作品が更に遅くなったら……

ナナシ
「読者に忘れられるな」

いやあああああああっ！？

第４２話「守りたいモノ」（前書き）

皆様の励ましのおかげで、順調にスランプを脱出しております。

ナナシ
「心から感謝だな」

……にしても、武道大会編はいつまで続くんだろ？

ナナシ
「……てか終わるのか？」

第４２話「守りたいモノ」

ｓｉｄｅ　ナナシ

『皆様お待たせしています！！
あの大破壊をわずか十数分で迅速に修復する見事な手際をご覧ください！！
学園内のサークル活動、イベント施設等の設営建築は麻帆良大土木建築研までご連絡を！！』

タカミチの馬鹿みたいな攻撃のせいで舞台のあちらこちらが陥没してしまっているので、現在土木建築研の奴らが劇的ビフォーアフターしてくれている。

……なんてことでしょう。

あのボロボロだった舞台がみるみるうちに修復されていきます。
その様子は「我々の建築力は世界１ぃぃぃっ！」と言わんばかり。

……もう学生のレベルじゃないよねコレ？

ちなみに、試合が終わったネギは救護室で手当てを受けている。
まあ、あんだけタカミチの攻撃を喰らったら手当ては必要だわな。

後、ネギの試合中に３－Ａの連中も来たらしいが、今はネギのお見舞に行ってるらしい。

……俺の時は見舞いに来たのは髭面のメガネ１人だけだったのに。

俺だって頑張ったんだぞ？

なのになんだこの差は？

マジ今すぐ救護室爆発しろよ頼むから。

「さて、ナナシさん。
次の試合はどちらとも女性で、まだ中学生のようですが……」

次の試合はえっと……、レッド（神楽坂）と刹那か。

2人とも見た目通りただの女子中学生と思っているなら、この場にいるのは場違いだと思うだろうな。

「確かに2人ともまだ中学生だが、きっと良い意味で期待を裏切ってくれるさ」

「なるほど。兄さんとは違うということですね」

「……それは俺が普段悪い意味で期待を裏切ってるって言いたいのかな？」

「いえ。はなから兄さんには期待していませんので」

「言葉に猛毒が含まれてるんですけど！？」

……茶々丸さん、怒ってますよね？
だってさっきからお兄ちゃんと目をあわせてくれないんもん。

何コレ？反抗期？

妹分が2歳で反抗期を迎えるって早過ぎじゃね？

お兄ちゃんは妹分の早過ぎる成長に泣きそうです。

ここは解説の仕事をしっかりして、兄としての威厳を取り戻したいと思います。

「……こほん。
俺は次の試合が今日一番注目すべき試合だと思っている」

「と言いますと？」

「フフフ……。
実は主催者にあるコトを頼んでおいたからな」

さっき会った時に超に大会前に準備しておいたブツを渡しておいたからな。

今ごろは既に更衣室に運ばれているだろう。

「いやあ、楽しみだなあ」

「……はあ？」

そんな話をしているうちに舞台の修復作業が終了した

『皆様大変お待たせしました！！
今大会の華！神楽坂選手に桜咲選手の登場です！！』

「ちょっと待ちなさい朝倉ーッ！！」

レッドが叫んだのと同時に観客、主に男性陣がどよめく。

それもそのハズ。

２人の格好は―

「ふむ。やはり俺の見立てに間違いはなかったな」

メイド服だったのだから。

レッドのメイド服は胸元に小さなリボンが付いているもので、西洋人形をイメージした可愛いらしいデザインだ。

じゃじゃ馬なレッドとはまるで逆なイメージだが、そのギャップが実に萌え……似合っている。

刹那の方は、レッドと違い日本の侍女をイメージさせるシンプルな和風なデザイン＋個人的趣味で猫耳を付けさせている。

清純な刹那のイメージと見事マッチングしていて実に似合っている。
あと猫耳も。

……なんてことでしょう。

本日二度目のセリフだが気にしないでほしい。

だってその出来はキターーッ！！って叫びたくなる出来なんだもん。

「……ナナシさん。
もしかして頼んでいたコトって……」

「ああ。メイド服を2人に着用してもらうよう手配してもらうコトだな」

「「「「「うおおおおおおっ！！さすがはナナシさん！！」」」」」

「「「「「……」」」」」

そんな俺に、観客から尊敬の眼差しを向ける奴らと、ゴキブリを見るかのような蔑んだ視線を向ける奴らの2つの派閥に分かれた。

……言わなくてもわかるとは思うが前者の派閥は全員男性で、後者の派閥は全員女性だ。

……ふっ。いつの時代も幸福を手に入れるためには犠牲が付き物なんだな。

「誰かと思えばアンタの仕業か！！
てか何で下着から全てサイズがぴったりなのよ！？」

「馬鹿野郎っ！
そんなんいくらでも妄想力でカバーできるわ！！」

「出来るかっ！！」

どっかの赤い弓兵も言ってただろうが。
「常に最高の妄想をイメージするんだ」って！

……どことなく違う気もするが。

「おーい！兄ちゃーん！」

「おっ？」

「げっ……」

試合が始まろうとした瞬間、観客の中をくぐり抜けてフードをスッポリ被ったネギと帽子で耳を隠している小太郎がやってきた。

……ちうっちはネギの姿を見て露骨に嫌な顔をしていたが。

「よう。２人ともお疲れさん」

「ナナシ先生もお疲れ様です」

そのまま2人は俺とちうっちの間に入ってきた。

「いやあ、でも兄ちゃん勝ち進むとはな。
意外と強くて俺驚いたわ」

「意外って何だ意外って」

弟分まで俺の扱いが酷いとかどんだけ。

「仕方ないやんけ。
俺兄ちゃんが戦ってる姿初めて見たんやし」

そうだっけか？
言われてみればそういう気もするが……

「へへっ。そういや次の試合終わったら、次は兄ちゃんとやったな」

「おいおい。次の試合終わったらって、もうお前勝つ気でいんのかよ？」

いくらなんでも油断しすぎじゃないか？

というより、お前の勝つ可能性の方が思いきっし低いんだが。

「心配いらんて。油断はしてへんし、相手が誰だろうが全力で挑むわ」

ならいいけどな。

「ていうか頑張るとこ悪いけど、俺準決勝はそもそも棄権するつもりだしなあ」

「はあっ！？何でや！？
せっかくここまで勝ち進んでんのに！？」

「いやあ……だってさっきの試合で結構体力使っちゃったし、どうせ勝てないしなあ」

小太郎が相手ならまだしも、大戦の英雄が相手とかマジ勘弁。

「なあー、そんなコト言わんで出ようや。
せっかく兄ちゃんと戦える機会なんやから」

「だから勝つ気になんのは早いっつーの」

犬っコロのくせに猫なで声で頼んでくる小太郎。

……男にそんな声で頼まれても気分悪くなるだけなんだが。

「はあ……。わかったわかった。じゃあお前がもし準決勝に勝ち進んだなら、棄権しないで試合に出てやるよ」

「ホンマッ!?
約束やで!!」

「ああ」

どうせ無理だろうがな。

『それでは第七試合を開始いたしたします!!』

「ほら、試合始まったぞ」

始まった瞬間、2人は接近しあい、激しい剣撃が繰り出される。

……剣撃っても片方はデッキブラシで、もう片方はハリセンなんだけどな。

2人の戦いはどんどん白熱していき、次第に空中でも攻撃しあう。

「に、兄ちゃん……？
なんや目がギンギンしてて怖いんやけど……」

「そういう仕様だ」

非常に眼福な光景だ。

激しい動きの中一瞬見える理想郷が素晴らしい。

やはり下着の方も俺の見立ては完璧だったようだ。

あとは記憶機器さえ使えれば文句ないんだが……。

まあ心の中に永久保存するだけで我慢しよう。

『こ、これは意外！！
色モノかと思われたメイド女子中学生、予想以上の動き！！
先程までの試合にひけをとりません！
予想どおりのモノが見れた男性陣からも賞賛の拍手が！！！』

「す、凄いアスナさん！」

ネギが隣で驚いている。

ネギだけではなく、レッドのコトを知っている奴らは全員驚いているが。

そんなレッドは試合中にもかかわらず解説席側、ネギを指指す。

「ネギ！ちゃんとしっかり見てなさいよ！！
私がちゃんとパートナーとしてアンタを守ってやれる所を見せてやるわ！！」

「え……」

「……ひゅー」

こんな大勢のいる中でずいぶん大胆なコトを……。

『おおーっと！！
これは大胆！試合中に愛の告白か！？』

「ちがーうっ！！」

違わないだろうが。

「あ、アレ？」

レッドが自分の爆弾発言に頬を赤く染めていると、拍子抜けたような声を出す。

レッドを纏っていた力が弱くなっている。
どうやらガス欠したらしい

そこからレッドは左手に魔力を、右手に気を込めて合成する。

「ば、バカな!?
『気と魔力の合一』はタカミチですら別荘で数年かけて修得したんだぞ!?
それをそう簡単に……!」

選手席からも、さすがにエヴァも驚いている。

「に、兄ちゃん……?
何で今度は泣いてん…?」

「…わかってたけどさあ、ああも簡単に成功されると落ち込むよね。
しかも発動時間も、出力も俺より上だとか……」

……俺の別荘での修行がバカらしく思えてきた。

もうヤダまた泣きそう。

「行きます師匠！！」

「はいっ！！」

そこから力を取り戻したレッドが再び刹那と交戦。

刹那は余裕の表情で攻撃を受け流してきたが、次第にその表情に焦り……、というか驚きが見える。

レッドの動きが更に良くなったのに驚いているんだろう。

そのままレッドは達人から見ても素晴らしい動きで刹那を攻める。

あの刹那が一度仰向けのさせられた時は正直開いた口がふさがらなかった。

「……でもまあ、最強クラスが助言してるしな」

「ん？なんか言ったか兄ちゃん？」

「なんでもねえよ」

レッドの動きに、自分も本気で挑まなきゃ危ないと感じたのか、刹那もついに奥義を使う。

気弾を飛ばし、刹那はレッドにデッキブラシを上から振り下ろす。

必殺の一撃である奥義がレッドに襲おうとした瞬間、ハリセンが大剣に変わってデッキブラシを真っ二つに……って！？

「やばっ……！？」

レッドは大剣を背中に担ぎそのまま振り下ろす。

その姿はまるでモ○ハンの溜め技のようでって、バカ言ってる場合じゃねえな。

レッドの異様な雰囲気を感じ関係者一同レッドを止めようと飛び出そうとするが刹那は紙一重で横に躱し、そのままレッドを掴んで空中をグルングルン……って

「……あれ？」

何？

心配する必要なかった？

レッドは刹那の空中三回転大車輪投げ（今命名）を受けダウン。

立ち上がる様子はない。

つーか刃物に変えた瞬間、反則負けが決定していたんだがな。

『桜咲選手の勝利っ！！』

刹那の勝利宣言が響き渡って、ようやくレッドが目を覚ましたみたいだ。

刹那はレッドの腕を引き寄せて立たせる。

レッドは先程のことを覚えているのか、物凄い勢いで謝っているようだが刹那にデコピンで弾かれる。

……なんで？

そしたら刹那は今度は会場全体を魅力するような笑顔を浮かべた。

その笑顔のまま俺の方を見て―

「……はあ」

溜め息を吐かれた。

……だから何で？

side　ナナシ　end

side　刹那

「せ、刹那さん……」

私は倒れていたアスナさんの腕を取り、立ち上がらせる。

立ち上がったアスナさんは何があったのか思いだしてから―

「ご、ごめん刹那さん！！わ、私……私、途中で訳わかんなくなっちゃって…！あ、あんなこと言っといて私刹那さんに大怪我させる所だった……！
こんなんじゃパートナーとして誰かを守るどころか……！」

アスナさんは目に涙を溜めながら私に謝ってきた。

さっきの覚えてるのか…。
意識が飛んでいたようにも見えたんだけど……。

まあ、ひとまずは一人で勘違いしてるアスナさんに―

「でっ！？」

デコピンをかました。

「えっ……刹那さん？」

「馬鹿ですねアスナさん。私があの程度の太刀筋でどうにかなるとでも？」

「いや、それは……」

「私をどうにかしようと思ったら、まだまだ修行が必要ですよ」

それは私も同じ。

「ネギ先生のことが心配なら、守ってあげればいいんです。
あの子がまた無茶をしそうになったら、例えどんなコトがあっても」

「う、うん……」

アスナさんは照れながらも頷く。

「ねえ、刹那さん…？
やっぱり刹那さんにとって守りたいと思う相手はこのかなの？」

「ええ。私もネギ先生を守りたいと思う気持ちはありますけど、お嬢様は特別なんです。それに―」

私はそのまま視線を移して解説席にいるであろう彼を見つめる。

そこには目を点にして、不思議そうな顔をしている彼がいて―

「……はあ」

「……？
どうしたの刹那さん？」

「いえ……。ただあの人は自分の力量もわきまえず、どんな無茶をしてでも私達を守ろうとするんだろうなと思っただけです」

「はあ……？」

本当に、たまには私にもアナタを守らせてくださいよ……先生。

ｓｉｄｅ　刹那　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

なんやかんやで楽しみにしていた続いての第八試合。エヴァＶＳ山下慶一という青年の試合だが、山下が使う『３Ｄ柔術』がどんな技か胸をドキドキしながら待ってたのに……

エヴァに瞬殺されてしまいました、ハイ。

山下を倒したエヴァは舞台上で何か決意したように上を見上げていたが、何かムカついたから「キティちゃーん。試合が終わったんだから早く退場しなさい」と言っといた。

……その瞬間、解説席の上の屋根に糸で吊し上げられたが。

もう泣いたわ。

to be continue ?

第４２話「守りたいモノ」（後書き）

ナナシ
「あれ？俺主人公だよね？なのに扱い酷すぎね？」

最近ナナシの不遇力がますます上がっていく件。

……まあ、いっか。

ナナシ
「おいっ！？」

第４３話「名無しＶＳ食う寝る」（前書き）

お久しぶりです。
プラムです。

更新が遅れた理由ですが、詳しくは活動報告で書いたんですが、ここでも簡単に

実は自分……。

事故っちゃっていました☆テヘッ（笑）

自転車乗ってたら車と激突してしまって……。

幸い大した怪我ではなかったんですけど、その際にポケットに入れていた携帯が壊れて……（泣）

ですが先日ようやく携帯を購入することができ、またこうして更新することができました！

何の連絡もなしに長い間放置してしまって本当に申し訳ありませんでした。

それではお待ちかね（？）の本文をどうぞ。

第４３話「名無しＶＳ食う寝る」

「―はい。というわけで大会は無事に一回戦が終わり、ようやく二回戦に突入するわけですが……

何で俺まだ縛られたままなんだよ！？
おかしいでしょ！？
前回のオチを今回まで引っ張るなよ！
久々で読者の皆様も忘れてるかもしれないだろ！？」

メタ発言なのは許して。

「でも似合ってますよ兄さん？」

「嬉しくねえよ！？
第一俺は縛られるよりも縛る方が好きだけど最近は相手が美少女なら縛られるのも悪くはないかなーって思い始めたこの夏の日！」

「……会場の皆様の中で、どなたかお医者様はいらっしゃいませんか？
ここに病人がいるんで」

「……」

茶々丸のＡＩも、ついに冗談を言えるほど成長したのか。
お兄ちゃんは嬉し……って、あれ？おかしいな？嬉しいのに何故か涙が…。

・〜・〜・〜・〜・〜

「ほれ。解けたで」

「おーさんきゅ小太郎。
マジお前が生まれてきてくれてよかった」

「糸解いただけで、そこまで感謝されんのも微妙なんやけど……」

ちくしょう、エヴァの野郎め。
人を縛ったまま放置しやがって……！

解くのがあと1分遅かったら新しい世界に飛び立ってたぞ。

「そのまま帰って来なかったらよかったのに」

「……にょろーん」

最近俺の扱いが悪化する一方なんですけど。

このままだとゴキブリとかより扱いが酷くなる気がする……。

「じゃあ俺は試合やからもう行くで。
約束、忘れんといてや？」

「ん？約束？」

約束なんかしてたっけ？

アレか？
この試合に勝ったら結婚してくれ、とかか？

「ちゃうわ！？
何で兄ちゃんとそんな約束せなあかんねん！？」

そんなの俺だって勘弁だ。

「言ったやろ。
試合に勝ったら準決勝は棄権せんで、ちゃんと出るって」

「あー……それね」

どうせ勝てないだろうからすっかり忘れてた。

「はいはい。約束通りお前が勝ったら、ちゃんと試合に出てあげますよーだ」

「返事が適当すぎるんやけど……」

気にすんな。

『では2回戦第一試合を始めさせていただきます！』

「―っし。いったるか！」

気合い充分といった感じに小太郎は舞台に上がっていく。

「……教えてやった方がよかったかなあ」

まあ教えたトコで納得するような奴じゃないけどな。

「ふぅ……若いねえ…」

ｓｉｄｅ　ナナシ　ｅｎｄ

side　小太郎

「フン。相手はあの怪しいフード男か」

見た感じ只者とちゃうとわかるけど、こんな奴に手間取っとる暇はあらへん。

一撃でぶっ飛ばして……って、アカン。

油断はアカンな。

油断して負けたりなんかしたら、準決勝で待っとる兄ちゃんに申し訳ないからな

『それでは2回戦第一試合開始っ！！』

うっし！
まずは先手必勝―

「！？」

俺は瞬動で一瞬で相手に接近するが、近づいたとこを狙われ弾かれる。

弾かれながらも、なんとか受け身をとって立ち上がるが、膝がガクンッと崩れ落ちる。

「ぐっ！？」

な、何！？足が…！？

開始直後の瞬動を完全に見切られた……！

けど顎と背中の一撃ずつたったそれだけで……！？

「こ、コタロー君！！」

観客席からネギの声が聞こえるが反応しとる余裕はない。

な、何やこのロープ男！？
達人は達人でも、ただの達人とちゃうで！？

何者やコイツ……！

「コタロー君といいましたか……」

「っ！」

「どうやらアナタは決勝でネギ君と戦いたいようですが……その願いは叶えてあげられないようです。
今のアナタでは私の足下にも及びません」

「……ハッキリ言うなー兄さん。
あんた友達少ないやろ」

余裕こいて軽口をたたくが、マズいでこれは……！！

「フン……俺が足下にも及ばへんて？」

んなもん―

「わからへんわっ！！」

俺は分身できる限界の数である七体で、一斉に奴に襲いかかる。

七体それぞれが同時に全方向から攻撃すれば、いくらアンタでも対応しきれへんやろ！！

『で、出ました！！
各所で今話題沸騰の分身の術！！』

もろた！右腕！！

七体での攻撃でようやく隙を見つけて、奴の身体に一撃決めた思ったのに、まるで手応えなくて―

「いいえ、わかりますよ。アナタも最初の一撃でそれを悟ったハズです」

いつの間にか真横に回り込まれとって、そのまま攻撃の直後で動け

ん俺の腹に向かって上に叩き上げるように殴る。

「がふっ!?」

そのままもう一方の手で、軽く浮かび上がった俺を掌底で水辺まで弾き飛ばす。

『ああーーーっ!!
噂の分身の術をものともせず、クウネル選手、掌底一閃!!
またもや人が吹き飛んだあああああっ!?』

「ハア……ハア……」

つ、強過ぎる……!

何なんやコイツ、圧倒的やないか!?

マズい！
マズいでこれは！！

確かにこれは勝てへんかも……って、何言ーてんねん俺は！！

弱気になんな！！

こんな所で諦める訳にはイカンのや！！

俺はネギと…！兄ちゃんと約束したんやから！！

「『狗神！！
疾空黒狼牙！！』」

「！」

俺は狗神を数体出現させ、相手に向かって放つ。

狗神に気をとられとるうちに、もう一度瞬動で接近して―

「『我流・犬上流！
狼牙双掌打！！！』」

両手に集めて狗神をそのまま相手に打ち込む。

コレが今の俺のとっておきの一撃！！

「……ふむ。
今のはなかなか良い攻めです。
……しかし」

フードの男は俺の一撃なんてものともせんような涼しげな表情のまま。

アホな!?
直撃のハズや!!
どーなっとんやコイツ!?

「がっ!?」

俺が困惑したまま動けんでいると、フードの男は上から肘を俺に向かって振り下ろし、俺は地面に叩きつけられる。

「あ……!ぐがっ……!」

強烈な一撃に俺は立ち上がることができない。

「まあ……あなたはまだ若い。
実力の差に気を落とさないでください」

「ぐっ……が。
くそっ……。あ…あいつかてタカミチさんに勝ったんや……！
こんな……トコで……！
こんなトコで負けられるかっ……！！」

言うことを聞かない身体を無理矢理動かそうとする。
それと同時に、普段は抑えている狗族の力を解放していく。

もう一般人にバレるとか関係あらへん……！
ここで負けるくらいなら俺は……！

「約束したんや……！
あいつと……兄ちゃんと……戦おうて……！
俺は……！」

そうして立ち上がろうとした瞬間、俺の意識は途絶えた。

ｓｉｄｅ　小太郎　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ナナシ

「……やれやれ。
驚きましたよ獣化とは…。こんな所でそんなことをされたらフォロ
ーの仕様がありません」

小太郎が獣化し終えそうになった時、クウネルが片腕を小太郎に向
けた。

その瞬間凄まじい圧力が小太郎を押し潰し、意識を奪った。

「重力魔法か……」

修得するのが難しい魔法だが、だからこそその威力は絶大。

直撃したら逃げることは出来ず、小太郎のように押し潰れて終わりだろう。

「小太郎……」

気を失った小太郎は担架で救護室に運ばれていく。

「あ、オイ!!どこ行くつもりだよ先生!!」

「あの、コタロー君の所に……！」

俺が黙って運ばれていく小太郎を見ていると、隣で励ましに行こうとしているネギをちうっちが引き止めていた。

「悪いなネギ。
今は慰めに行くのだけは遠慮してやってくれ」

「で、でも……ナナシ先生は心配じゃないんですか！？」

「……だから俺一人で行くさ」

原作とは違い、小太郎と強い関わりを持ってるのはネギと俺とさよ、後はブルーぐらいしかいないからな。

ネギは駄目で、さよはいないし、ブルーは今寝てんだから俺が行くしかないだろう。

「……悪い茶々丸。

俺また……」

「……」

また解説席を離れなきゃいけない事態を申し訳ないと思い、隣にいる茶々丸に顔を向ける。

「……はあ」

茶々丸は俺と数秒目を合わせると、何か諦めたかのように溜め息を吐いた。

……さすがにまた仕事を放棄するって言われたら、溜め息も吐かれるか。

「……実際問題、解説の仕事は私と豪徳寺さんがいれば問題ありません」

「うぐっ……」

それって最初から俺はいらなかったって意味だよね……。

「だから行って来てください。
今兄さんを必要としてるのは私達ではなく、きっと小太郎さんでしょうから」

「茶々丸……」

「それともう解説席には戻って来なくていいですよ。色々と準備が必要だと思いますし」

「……さんきゅ」

俺はそう言い残して解説席を離れる。

……ったく。
知らないうちにイイ女になったじゃないか。

～・～・～・～・～・～・

「はあっ!?いない!?」

「ええ。意識が戻った瞬間部屋を飛び出して行っちゃって……」

「……くそっ」

何処に行ったんだよアイツは？
怪我人は怪我人らしく大人しく寝てりゃいいものを…

「しっかし観客席に戻るわけないだろうし……何処だ？」

それとも会場の外か？
そしたら捜しようないんだが……。

「……とりあえず上から捜してみっか」

そこ。

やっぱり馬鹿と煙は高い所が好きなんだなーとか思った奴……。

その通りだ。

・〜・〜・〜・〜・〜

「……馬鹿でいるもんだな」

「……」

今あったことをありのままに話すぜ！

上から見て小太郎を捜そうとこの辺りで一番高い建物の屋根の上に登ってみたら、小太郎が体育座りして見るからに落ち込んでた！

「この子も馬鹿だったか……！」

「……」

……ツッコミ無し。

いつもならウガーッと犬のように反論してくるんだけど……って、ようにじゃなかったなコイツの場合。

「あー……なんだ。お前はよくやったと思うぜ？
相手は格上、しかもイカサマじみたコトまでしてたんだ。
負けんのは当たりま「うっさい！！」……最後まで言わせろよ」

人の話は最後まで聞くもんだぞ……。

「約束したのに……。ネギと……兄ちゃんと戦おうって約束したのに俺は……」

「……」

「ネギに負けて……、楓姉ちゃんにも負けて……、今日も負けて……俺、弱いんかな」

「……誰だって最初は弱いもんだろ。だからこそ人は強くなる「そんなこと言ーとるんちゃうわ！！」……だから最後まで言わせろって」

今良いこと言おうとしてたのに……！

「アイツはあんな頑張って足掻いてタカミチさんに勝ったのに俺はあんなあっさり負けてもうて……。
アイツがどんどん先に行ってもう俺のコト見てくれへんようになったら、どないしょう……」

「小太郎……」

そう言って涙を流す小太郎

そんな小太郎に俺は何て言葉をかければいい？
俺はどうすればいい？

俺は―

「おっ、よく伸びる」

―うにょーん

「む、むぶ!?
な、なにふんねんにいひゃん!?」

―とりあえず俯いていた小太郎の頬っぺたを引っ張ってみた。

うむ。モチモチだ。

「ったく。ネギといいお前といい、ガキのくせに色々と考えすぎなんだよ。
もっと気楽に物事を考えないと将来ハゲんぞ?」

「ぷはっ!?」

「しかもたかが2・3回負けたぐらいで何そんな落ち込んでんだよ。お前でそんな落ち込んでたら、勝った回数より負けた回数の方が多い俺はどんだけ落ち込まなきゃいけないんだよ？」

……てか俺原作始まってから勝ったのって、この大会だけじゃね？

……忘れよう。

「負けたんなら負けたで次の戦いにその反省を活かせばいいだろーが。
そう考えれば今日負けたのも無駄じゃないだろ？」

「なんか超ポジティブな考え方なんやけど……」

ネガティブ？
何それ美味しいの？

「まあ納得出来ねえんなら準決勝、よく見てな。
たとえ負け戦だろうが無駄じゃないってこと証明してやんよ」

「兄ちゃん……試合棄権しないんか……？」

俺のセリフに目をパチクリとさせて驚く小太郎。
俺はそれを確認すると、小太郎に背を向ける。

「ばーろー。大事な弟がやられたってのに、兄貴が黙って見過ごせるかよ」

そう言い残し、俺は屋根から飛び降りる。

「……さて。頑固な弟を納得させるためにも色々と準備させてもらいますか」

まあ、その前に―

「痛ったぁ……！！」

……足の痛みをどうにかしないとな。

ちくしょう。

カッコつけてあんな高い所から飛び降りなきゃよかった……！！

・～・～・～・～・～・～

『お待たせしました！
準決勝第十三試合　クウネル選手対ナナシ選手を開始します！！
お席の方へお急ぎを……』

「……始まるか」

準備は万全……。だけど相手は歴戦の英雄……。

俺ごときが何処まで粘れるか……。

……えっ？刹那対エヴァの試合やネギ対高音の試合はどうなったかって？

知らねえよ。
俺だって準備して観てないんだし。

まあ結果は刹那対エヴァは刹那が勝利して、ネギ対高音はネギが勝利している。

前者はわからんが、後者はおおかた高音が脱げて負けたんだろう。

後で超に頼んだビデオを確認するのが楽しみだ。

『さあ！常識を越えた白熱の試合が繰り広げられています今大会！！いよいよ準決勝です！！』

うっし、逝くか。

「『戦いの旋律』」

俺は試合が始まる前に、あらかじめ身体を強化させておく。

そんで舞台に上がっていくと、既にクウネルが立っていて……って、いつの間に……。

何？アイツには神出鬼没のライセンスでも備わってんのか？

……このネタ、前にも一回使った気がする。

『準決勝、底知れぬ強さを見せ付ける謎のフード男クウネル選手！！
対するは我らがチェッシーこと、麻帆良の童貞神父ナナシ選手！！
それにしてもふざけた名前同士の戦いだーっ！！』

「張り倒すぞテメエ」

どんな紹介の仕方だコラ。

しかもあんな適当につけたような名前と一緒にすんじゃねえよ。
何だ食う寝るって。

……まあ、そんなこと言ったら俺は名無しなんだが。

「フフフ……。貴方のことは学園長からよく聞いていますよ」

「あン？ジジイから？」

黙ってクウネルを見つめていると、性格の悪そうな笑みを浮かべたまま話しかけてきやがった。

「ええ。何でも短絡的でお調子者だと……」

「……かっちーん。
この知的端正かつ常にクールビューティーな俺様に対して短絡的なお調子者だって？」

ジジイ、次会ったら覚えとけよ……？

「……はん。んなん言ったら俺だってお前のコトはよく知ってるぜ。
大戦の英雄さんよお？」

「……これは驚きました。まさか私の正体を知っていたとは……」

全然驚いた様子もなく、そんなことを言うクウネル。

「しかし、ならばなぜ私の正体を知っておきながら勝負を挑むんでしょうか？
勝つ算段でも？
それとも自分の力量をわきまえないただの馬鹿でしたか？」

「ははっ。そりゃあ俺も最初は棄権する気満々だったさ」

「ほう……」

そう言いながら俺は右手で頭を掻く。

「でも弟分に納得させてやるって大言吐いちまったし、あんな頑張

ってる姿見せられて兄貴として黙って棄権するわけにはいかねえだろ？それに―」

「……それに？」

「俺もまだ若くて―」

俺はクウネルと正面から向き合い、構える。

「―ただの馬鹿だったってことだよっ！！」

『Ｆｉｇｈｔ！！』

「やはり貴方は聞いた通りの人物のようですね。
フフ、嫌いじゃないですよ貴方みたいな馬鹿は」

「そりゃあどーも」

男に好かれても全く嬉しくねえけどな。

「ですが―」

「―!?……がっ!?」

クウネルが俺に片腕を向けた瞬間、真上からとんでもない圧力がかかる。

コレが小太郎を倒した重力魔法か……!

俺は膝がガクガクになりながらも、なんとか全身の力を振り絞ってこらえる。

「貴方では小太郎君同様、私の足元にも及ばない」

「へ、へっ！そりゃあどうかな？
た、確かにアンタに勝つことは難しいが、アンタの重力魔法は俺なら充分耐えられる威力……」

「では2倍の重力で」

「んなっ！？」

クウネルがニコッとすると、身体にかかる圧力がさらに強まって…
……って、ヤバッ！？

『おおっと！？
クウネル選手の謎の一撃が舞台ごとナナシ選手を押し潰したーっ！？

てかこれナッシー大丈夫なの！？』

「……ふむ。少し強すぎましたかね……と、おや？」

『い、いない！？』

クウネルはその場からゆっくりと振り返り、俺を見据える。

「……なるほど、
押し潰される直前に咸卦法を発動し脱出しましたか」

「はあ…はあ……ふう」

クウネルの言う通り、俺は押し潰される直前に咸卦法を発動し、瞬動で奴の後ろに脱出した。

「さて。今の攻撃を受けても、まだ耐えられると言えますか？
それとも１５分間逃げ続けてメール投票に勝敗を任せますか？」

「お生憎様、俺は逃げ続けるつもりないし、メール投票に任せようだなんて毛頭も考えちゃいねえ。
それに、俺に１５分なんて必要ないね」

「むっ？」

俺に残された制限時間（タイムリミット）はごく僅か

だが！

「２分３２秒で決着をつけてやるっ！！」

to be continue ?

第４３話「名無しＶＳ食う寝る」（後書き）

さあ今回の最後のセリフ
「２分３２秒で決着をつけてやるっ！！」は夜様のアイディアを参考に書かせてもらいましたー。

ナナシ
「まさか本当に使われるとは思ってなかったろうな……」

夜様、アイディアありがとうございました。

さて、ようやく大会も準決勝……。
長い間更新遅れてしまいましたし、残りの大会編はパッパッと終わらせたいですね。

ナナシ
「だから今回２試合をはしょったのか……！」

次回はナナシ対クウネル。さあ、ナナシは宣言通りに決着つけられ

るのか！？

ナナシ
「この大会は俺にとってハードモードすぎる……！」

次回もお楽しみに。

第４４話「２分３２秒の戦い」　※誤字修正版（前書き）

今回で対クウネル戦決着です！

ナナシ
「決着って戦ってんの今回だけだろ……」

そして武道大会編も残すとこ、後１、２話で終了の予定です。
いやあ、長かったー……。

ナナシ
「確かに……」

※１０月４日誤字修正

第４４話「２分３２秒の戦い」　※誤字修正版

「２分３２秒……。
なるほど。それが貴方の咸卦法の限界時間というわけですか」

「……さて、それはどうかな？
どっちにしろ、チンタラやってる暇はないんでね。
さっそくイカせてもらう……ぜっ！」

俺はそう告げ、奴に接近する。
今回は先程の試合で見せたカウンタースタイルではなく、俺の普段の『ガンガン行こうぜ！』スタイルだ。

クウネル相手に後手に回ってたら、出始めみてーに押し潰されちまう。
それならほぼ零距離まで近づいての近接戦（インファイト）なら重力魔法も使えないだろ。

いかに英雄とまで謳われている魔法使いでも、接近しちまえばこっちのもんだろうがっ！

「それはどうでしょうか」

「んげっ……！？」

俺の連撃を受け流したり躱したりと防御に徹していたクウネルが、首元を狙っていた俺の片足を掴んだ。

そして空いているもう片方の手を俺の腹に当てて―

「えいっ」

「がっ！？」

手を当てられた箇所から背中にかけて、何かが貫いたかのような鈍

い痛みが俺を襲った。

しょ、衝撃波……！？

いや、今の攻撃に魔力は感じられなかった……。

ってことは純粋な体術……！？

「フフッ……」

た、体術まで化け物レベルなのかよ……。

最強ランクの英雄を甘く見過ぎてました、テヘッ（笑）

「って笑えねえよ……」

俺は攻撃の勢いで吹き飛ばされそうになったが、なんとか足で踏ん張った。
踏ん張ったっていっても勢いを殺し切れず、舞台の端まで押されちまったが…。

「おや？少し本気で打ち込んだんですが……思った以上に頑丈な身体のようですね」

「はっ！生憎、俺は頑丈さが売りなんでね。
そう簡単にくたばってたまるかよ」

メッチャクチャ痛かったけどな！

いわゆる痩せ我慢だぜ！

そうこう考えてる間にも、俺の頭上に六つほど黒い球体が現れる。

アレ一つ一つが重力の塊。

一つでも当たったら押し潰されること間違いない。

「ちっ！」

『ちょ、ちょっとナッシー！？
それは流石にカウント取るよ！？』

舞台上に逃げ場はないと判断した俺は、仕方なく後方の観客席側の屋根に向かって大きく跳ぶ。

が―

「待ってましたよ」

「……おーまいがー」

屋根に着地する瞬間、背中に嫌な感触があって振り返ってみると、そこには舞台にいたハズのクウネルがいて……って、これなんかデジェヴ。

「ぬぅおっ！？」

直後、上空に待機させていたグラビティボール（今、俺命名）を落とされた。

避けることが出来なかった俺は重力に逆らえず、そのまま水の中に―

「がぼべべぶべばっ！？」

ちょっ！？
本日水ポチャ二回目！？
何！？今日水難の相でも出てた！？

俺は今朝占いをチェックしなかったことを悔やみながらも、水面歩行と同じ原理で足で水を掴み、力を込め瞬動で脱出する。

「あ、あぶべえ……（訳：あ、あぶねえ……）」

にしても強過ぎんだろアイツ……。

近づいても駄目で離れても駄目。
かといって魔法を使うにしても生半可な威力の魔法は障壁で防がれるだろうし、もう時間もねえし、どうすっかな？

「ばっ、ぶべべばばぶべばば（訳：まっ、このために色々準備しておいたんだけどな）」

さあ―
反撃といきましょうか

side　ナナシ　end

side　――

「……ふむ。発動時間もそろそろ限界でしょうし、これで終わりですかね？」

水底を見つめて、クウネルがそう呟く。

「もう少し出来るかと期待していたんですが、所詮この程度……むっ？」

カウントを取り始めようとすると、舞台上が霧に包まれていく。

「これは『眠りの霧』…。残念ながら今の私には効きませんが……、これは先程と同じように奇襲でも狙ってるんでしょうかね」

クウネルがそう言ってる間にも霧はどんどん濃くなっていき、ついには周りを確認することすら出来なくなった。

―バチャン

「……来ましたか」

クウネルが周りを警戒し始めた、その時、水中から何か飛び出した音がした。

クウネルは慌てることなく冷静なまま、音の発生源の方へと身体を向けると、霧の中を一直線に向かってくるナナシがいた。

「格上相手に奇襲をするのは良い判断です。ですが―」

「ぐっ！？」

「既に一度切ったカードを再び使うのは愚策としか言い様がありません……？」

手応えがない……。そうクウネルが感じた瞬間、目の前で倒れてい

るナナシがニヤリと笑ったように見え―

―ボンッ

煙と共に消え去った。

「影分身……！」

ここで初めてクウネルの顔に驚きが見られた。
それと同時に背中にポンっと何か当たった。

「ご名答。小太郎直伝の影分身さ。
……っても密度は低いし、一体にしか分身出来ない、ぶっちゃけ見かけ倒しの分身だよ」

まあ囮には充分だけどな―と付け加えるナナシ。

クウネルがゆっくりと振り返ると、そこには全身ずぶ濡れになりながらも、イタズラが成功した悪ガキのような笑みを浮かべたナナシが、クウネルの背中に手を当てていた。

それは先程の状態をまるっきり逆にした光景だった。

「んで、これで宣言通り2分32秒キッチリだ」

「っ！」

クウネルは小さな声であったが、ナナシがこう言ったのが確かに聞いた。

解放（エーミッタム）と。

「遅延呪文（ディレイ・スペル）……！」

「――覚悟しな英雄さんよ。俺の魔法は、ちぃとばっかし痺れるぜ？」

そして――

「『雷の……投擲っ！』」

クウネルの身体を背中から雷を帯びた槍がゼロ距離で貫いた。

「……なるほど。
２分３２秒とは咸卦法の発動限界時間ではなく、遅延呪文の遅延できる時間のことでしたか。
咸卦法の発動時間が延びたのは、タカミチ君とアスナさんのを見てコツでも掴みましたか？」

身体を槍に貫かれた状態のまま話しかけるクウネル。

「……ああ。なんせ、ほぼ完璧な咸卦法を二度も生で見れたんだ。
そんだけ意識して見ればコツぐらい掴めるさ」

確かにナナシが纏っている咸卦の気は、当初自分で言っていた2分32秒を過ぎても衰えることなく―いや、むしろ時間が経つにつれ出力が上がっているように感じられる。

「強者との戦いの中で成長していく……。フフッ、貴方を見ていると昔の友人を思い出します。ナナシ君、私は貴方のこと気に入りました。貴方も学祭後の私のお茶会にご招待いたしましょう」

身体を貫かれている状態で何招待してんだ、と会場の皆が心の中でツッコんだのは言うまでもない。

「ですが、この試合は勝たせてもらいます」

そう言うと、クウネルは身体を貫いている槍を握り潰し、かき消す。

クウネルの身体には槍が貫いた跡も、服が焼け焦げた跡もない。

まったくの無傷だ。

「わかっちゃいたけど、ここまで圧倒的だと自信なくすぜ……」

「いえ、今の攻撃は本当に素晴らしかったですよ」

「そりゃどうも……」

ナナシは心底落ち込んだようで、はぁーと溜め息を吐くと、空を見上げる。

「正攻法も駄目で奇襲も駄目。
咸卦法もいつ切れるかわかんねえし、もうアレを使うしかないか……」

「アレ？」

ナナシはそう言うと、両手を何かに祈るかのように合わせる。

「……本来、魔力と気は反発しあい混ざりあうことのない対極の力。
咸卦法は、その相反する力を一つにする技法。
その一つとなった力は究極と呼ばれるほど強大だ」

一般人は何が起きているか分からないだろうが、魔法関係者は別だ。

今ナナシの魔力と気が極限にまで上がっているのが肌で感じられるだろう。

「これから使う技は、その強大の力を極限まで高め、暴走させる……！
魔力と気が反発しあう力はお前も知ってるだろう？」

「ま、まさか……！」

「『咸卦爆発』
未熟な俺だからこそ生み出せた必殺技……。
俺を中心に半径５００ｍを爆発させる……！」

『「「「なっ！？」」」』

「……」

会場中がナナシの発言にどよめく。

しかし―

「悪いな皆…！
俺はアイツに負けるぐらいなら、自ら死を選ぶ……！いくぜっ！！」

『「「「「う！？」」」」』

「……」

……。

……。

……。

『「「「…アレ？」」」』

目を閉じて、しばらく待っても何も起きないことを不思議に思い、恐る恐る舞台に目を向けると、頬を掻きながら恥ずかしそうにしているナナシがいて―

「まあ、そんな技使えないんだけどね」

『「「「使えないのかよっ！？」」」』

「でしょうねー」

「あっ、やっぱし気づいてた？」

「はい」

……この時、舞台上の二人を除いて全員ズッコケたのは言うまでもない。

side ――― end

side ナナシ

「てことで、まいった」

『……はい？』

「だから俺の負け。
降参でーす」

『えっ、えええええっ！？』

俺の宣言に盛大に驚く朝倉

……そんなに驚くことか？

「一応、戦闘続行した場合の作戦パターンを何種類か考えたけど、
これ以上どう足掻いても無理そうだ。
体力も魔力ももう限界寸前だしな」

流石に連戦はキツかったしな。

「……よろしいのですか？ここで棄権しては試合に出たことが無駄に―」

「無駄じゃないさ」

そう
けして無駄なんかじゃない

「この試合で俺はまた強くなれた。
それだけで出た価値はあるさ。それに―」

「……それに？」

「片鱗とはいえ、頂は見えた。
今は無理だが、いづれ登り着いてやるさ」

それは世界中のどんな山よりも高い山。

俺はまだその山の麓に立ったばかりだ。

頂まで登るには果てしない努力と時間が必要だろう。

けど俺の心はそんな現実を悲観することなく、むしろ歓喜している。

「ははっ。これだから人生は楽しいんだ」

『ナ、ナナシ選手ギブアップ！！
ここでクウネル選手の決勝進出が決定っ！！』

そのまま俺はクウネルと何故か一緒に舞台を下りる。

「にしても今更だけど、実体がないとかマジ鬼畜。
そんな反則じみたことしないでも、アンタなら勝ち残ることぐらい楽勝だろ？」

「気付いていましたか。
私もそうしたいのはやまやまなんですが、少し事情がありまして地上に出ることが出来ないんです」

「ふーん……」

まっ、もう俺には関係ない話だな。

「そういやアンタの趣味って他者の人生の収集だったけか？つーことは俺の人生も収集したのか？」

「いえ、してませんよ。年齢＝彼女いない暦＝童貞暦の貴方の人生は収集したくなかったので」

「失礼だなオイ！？」

俺だって収集されたくはなかったけど、なんだか釈然としないっ！！

・～・～・～・～・～

「流石に……そろそろ限界か……」

人目があったため、無理して余裕そうにしてたが、控え室に入った瞬間一気に疲れがやってきた。

俺はそのまま控え室の壁を背にドサッと座り込む。

「や、やべっ……。
気ぃ抜いたら急に眠くなってきやがった……」

まあ咸卦法は体力と精神力を同時に消費する技だからな。
それを限界まで使えば、当然眠くもなるわけで―

「な、ナナシさんが夢の中にログインしまーす……」

誰もいない中、一人ボケて俺の意識は落ちてった。

あっ、決勝戦観なきゃ……

「すぴーー……」

to be continue ?

第４４話「２分３２秒の戦い」　※誤字修正版（後書き）

はい、というわけで皆さんの予想通りナナシの負けでしたー（笑）

ナナシ
「よ、予想通り……」

でも咸卦法の発動時間が延びたりと成長はしました。

今のナナシならカップラーメン３個分ぐらいの時間はいけるはず！

ナナシ
「短っ！？３個分って結局９分ってことだよね！？」

実際はまだ本人も確かめてないので謎です。

前回の後書きで冗談半分に募集した『ナナシに言わせたいセリフ・やらせたいこと』ですが、なんと予想以上に応募がありました！

ナナシ
「てか半分冗談だったのかよ」

いやあ、感激で泣きそうでしたねマジで。

そして今回一部ですが、応募していただいたネタを参考にさせていただきました

『―覚悟しな英雄さんよ。俺の魔法は、ちぃとばっかし痺れるぜ？』
・提供者
駄猫様

今回の決めセリフになったと言っても過言ではありません（笑）

『咸卦爆発』
・提供者
サクラフブキ様

応募してくれたネタとだいぶ変わってしまった気もしますが……（

汗）

『いえ、してませんよ。
年齢＝彼女いない暦＝童貞暦の貴方の人生は収集したくなかったので』
提供者
ｃａｌｔｅｃｈ様

ナナシではなく、クウネルへのセリフでしたが（笑）
戦いのオチとして使わせていただきました。

今回はこの３つですね。
流石に応募していただいたネタを全部使うことは出来ないので……。
けど、応募していただいたネタは出来る限り本編で使いたいと思ってます。

……使うタイミングがわからないネタは無理ですけど。

もしかしたら次回は貴方のネタが使われるかも！？

では今回も応募待ってます（笑）

ナナシ

「また募集すんの！？」

第４５話「大会終了そして―」（前書き）

ようやく大会終ー了っ。

今回はライフポイント（萌えポイント）回復の話。

ナナシ
「なんだよ萌えポイントって……」

第４５話「大会終了そして―」

『クウネル選手の優勝ですっ！！』

「「「「うおおおおおおおおっ！！」」」」

「……んがっ？」

地鳴りでも起こしそうな観声で目が覚めた俺。

目が覚めたら美少女の膝枕……って展開はなく、普通に救護室のベッドで寝ていた。

「……あれ？誰が運んでくれたんだ？」

自分でベッドに入った記憶はないんだが……。

疑問に思った俺は部屋の中を見渡すと―

「目ガ覚メマシタカ？」

「うおっ！？」

扉の前に田中さんがいた。

……なんで？

「超　鈴音ニ貴方ヲ救護室マデ運ブヨウニ命令サレマシタノデ」

「あっ、そう……」

超に心の中で感謝しつつ、もう少し人選はどうにかならなかったのか？と不満に思う俺。

「よっと。んー……」

とりあえず俺はベッドから立ち上がり、身体を伸ばしたり曲げたりと調子を確認する。

「んー……やっぱり少し身体ダルいなあ……」

まあ明日には回復してるだろうが。

そんなことを考えながら俺は部屋から出ようとする。

……っと。

「……俺はもう出るけど、お前はどうすんの？」

「待機シテマス」

「あっ、そう……。
運んでくれてありがとな」

「後デ運賃請求シマスカラ問題アリマセン」

「金取んの！？」

タクシーかお前は！？

本気か冗談か判断出来ないコトを言った田中さんを残し、救護室を去る。

……冗談だとしたら田中さん、生まれたてなのにＡＩ成長し過ぎじゃないか？

最先端技術だから、とかの問題じゃないと思うんだけど……。

俺が田中さんの神秘について頭を悩ませていると、舞台上でネギ達の姿が目に入る。

舞台上では既に表彰式が行われており、クウネルが一千万円と書かれたカードを抱えて、相変わらず胡散臭い笑みを浮かべている。

「やっぱアイツが優勝か」

ネギは惜しかっただろうが、アイツは父親と戦えただけで満足だろ。

それに準優勝で2位も充分スゴい……って、アレ？

つまり準決勝まで勝ち残った俺は大会3位ってことだよな？

刹那と同位だけど、このレベルの高い大会で3位ってそーとースゴくね？

ふふ……。そう思うと何か自信出てきた。

俺が無駄に自信をつけてる間に表彰式はほどなく終了し、超が大会の閉会を宣言した。

それと同時に多くの記者達がクウネルとネギに向かって行った。

「……俺は今の内に撤退するとしますか」

なんせ俺は大会3位だ。

大切かつ重要で大事なコトだからもう一度言うが、俺は大会3位だ。

1・2位に逃げられたら次はこっちに来るだろう。

それにいつ記者達が俺の隠しきれない魅力を嗅ぎつけるかわからないからな。

普段ならインタビューは大歓迎なんだが、疲労感ＭＡＸの今は流石に勘弁してほしい。

んなわけで、俺はさっさと会場から去ろうとすると―

「ナッシー！」

「ナッシー言うな」

同じように会場から出ようとする人々の中から俺を呼ぶ声がした。

てか、なんかこのやり取りが懐かしく感じる。

声がした方向に振り返ると、人混みの中、片腕だけ伸ばしてピョンピョンしてる奴がいる。

……顔が見えねえ。

人が多すぎて埋もれちまってんじゃねえか。

まあ声で誰か判断出来たから問題ないんだけどさ。

「ほら。
大丈夫かよ、このか？」

「わわっ」

俺はピョンピョンしていた奴―このかに近づいて、飛び出していた腕を掴んで引き寄せた。

その際、少々力を入れ過ぎたせいか、このかは倒れこむようにボスンと俺の胸元におさまる。

しかも人が多過ぎるせいで、密着した状態から離れられない。

思わず「満員電車か！」とツッコみたくなったが、スベリそうなんで自重する。

幸い、俺とこのかは頭一つ分以上身長差があるから、顔が密着することはないんだが……。

「えー……悪い。
出口までこのまましばらく辛抱しててくれ」

「う、うん……」

……何このラブコメ展開は？
俺にこんなオイシイ展開があっていいの？

密着してるせいで（おかげで？）俺の身体に小さいながらも確かに女性だということを主張しているブツが２つ押し付けられてるし……。

「……将来性に期待」

「何か言うた？」

「あ痛たたたたっ！？謝るから足をグリグリしないで！！」

……ちなみにコレは不可抗力であってセクハラではないよ？

と、一応ここに弁解の言葉を述べておく。

「……ん？」

その時、近くで刀を抜くような音がしたのは、ただの気のせいだったと思う。

・～・～・～・～・～

「はあー……。
やっと出れた……」

「……」

あれから１０分ぐらい経って、ようやく会場から出られた。

よくもまあ、あそこまでの多人数が会場に入ってたなと、どーでもいいトコに感心する。

「……って、やっぱ暑かったか？
なんなら飲み物でも買ってくるけど……」

「だ、大丈夫やでっ！？」

このかの顔が赤くなっていたので心配したのだが……本人がそ

う言うなら大丈夫か。

……てかキミ方言変わってね？
なんだ「やで」って……。

「そ、それよりお疲れナッシー。
身体は大丈夫？」

「ああ。少しダリいけど、心配いらねえよ」

「だったら今からウチと―「んで疲れて腹減ったから今から飯でも食いに行こうと思ってな」……」

学祭中は安くて美味い屋台や出店がたくさんあるからな。
グルメ巡りには困らない……って、どした？
いきなり黙って……。

「……ナッシーもしかして忘れとる？」

「何を？
オススメのお店？」

それなら問題ナッシング。
既に学祭ＭＡＰにオススメのお店はだいたいチェックしてあるからな！
俺に抜かりはないぜ！

「アカン……。
完璧に忘れられとる……」

返事を聞いたこのかは片手を壁に付けてズーンと落ち込み出した。

……さっきからどしたの？

「あっ、そうだ。
なあ、このか。お前今から暇？」

「えっ？暇っていうか何というか……」

どっちだよ。

「暇だったら一緒に学祭回ろーぜ。
このかも一人で回るより二人の方がいいだろ？」

「そ、それって！」

「うおっ」

落ち込んでいたと思ったら、俺の提案を聞いた瞬間、今度は再び顔を赤らめて慌てた様子で俺に迫ってきた

……さっきから本当にどうしたのキミ？

「それって……デ、デートっちゅうことなん？」

「でーと？んんっ……？」

俺は思わず首を傾げる。

デートっても俺とこのかは教師と生徒だからな。

つまり俺は保護者的ポジションに近いから、付き添いって言った方が……。

いや、でも一応男と女が一緒に行動するからデートってことになるのか？

「そうなんのか……な？
まっ、どっちでもいいや。とにかくデートでもデッドでもいいから暇なら一緒に回ろうぜ」

「うん！……さすがにデッドは嫌やけど」

「そりゃそうだ」

そんなわけで、今日はこれからこのかと回ることになった。

ひとまずお互いに着替えてから―というわけで、９０分後に世界樹前広場に集合となった。

いったん別れるまで、このかが上機嫌だったのは、まあ男としては嬉しい反応だったね。

……てか、前に似たような約束をしてたような気がするのは、俺の気のせいか？

……。

……。

「……お嬢様」

・〜・〜・〜・〜・〜

着替えと言っても、俺は教会に服を幾つか置いてあったため、すぐに着替えられた。

んで約束の時間まで、まだ1時間以上あったため、近くのカフェで時間を潰そうと思い、入店すると―

「へー……。タカミチと学祭デートか」

「何よ！悪いっ！？」

「誰も悪いなンて言ってないだろうが」

―神楽坂（レッド）、グッドマンに佐倉、美そｒ……じゃなくて謎のシスター一号・二号がいた。

あとカモも。

「にしてもナッシー。何よそのサングラス？神父服にサングラスって、どういうセンスしてんのよ……」

「は？ナッシー？誰ですかそれは？私は見てのとおり、通りすがりのただの名も無き謎のイケメン神父ですけど？」

「……教会の人間は自分の正体を隠したい奴ばっかりなのかしら」

そう言って俺と謎のシスターを見るレッド。

ふう……。どうやらバレなかったようだな。

なんせ俺は武道大会で3位になって有名になっちまったからなあ（ドヤッ

変装の一つでもしないと、すぐに記者達に見つかっちまう。

それに敵を騙すにはまず味方からって言うしな。

「かっ、神楽坂さんっ！

教師と生徒の関係で、そんな不純異性交友はいけませんっ！！」

「い、いえっ。別にデートというわけじゃ……」

「しかも魔法使いと一般人などとは言語道断です！
歳も２０歳近く離れているなんて！」

タカミチとデート、と聞いてグッドマンが顔を真っ赤にして反論。
佐倉は近くでオロオロしてる。

「お固いねえ『Ｄを受け継ぐ者』は。
恋愛は何にも縛らない自由なモンなんだぜ？」

「人をワン○ースの登場キャラみたいに呼ばないでくださいっ！！」

……知ってるんだワン○ース。

「しっかしアスナもとうとう憧れの高畑先生とデートかぁ。長かったねぇ。
色々と準備はＯＫかな？
なんつーかその勝負下着とかは？」

「確かにそれは重要だな。いざっていう時に相手がクマパンとかマジ萎えるし」

「うるさいわよソコの謎の教会コンビっ！！」

いや、俺は全世界の男代表として当然の意見を言っただけなんだが。

「うぅ……でもどうしよ。この服で変じゃないかな？本当は今日色々とこのかに相談しようと思ってたのに……って！！」

「ん？」

自分の服を見て悩んでいたレッドが、いきなり何か思い出したかのように俺を見る。

「ナッシー今からこのかとデートなのよね！？」

「はっ？いえいえ。
だから私は通りすがりのただの―」

「それはもういいから！」

…ハイハイ、ソウデスカ。

「まさかこのかとのデートにそんな格好で行くつもりなの！？」

「そんな格好って……」

俺は自分の格好を確認する

いつもの某麻婆神父と同じデザインの神父服に、首には金色のクロスのネックレス。
で、腕には魔法発動体である金色の腕輪。
さらに耳には魔力を封印してる小さな紫の宝石をあしらったイヤリング。
最後には黒いサングラス。

……ああ、なるほど。

「アクセサリーが少し多かったか」

「違うっ！！」

違うの？
なら特に駄目なトコはないと思うんだが……。

「もう全部駄目っ！！
デートするのにその格好とか逆に相手が恥ずかしいわよ！！」

「そんなにっ！？」

俺は慌てて他の連中にも確認をとるが―

「うん、ありえない」

「……無理」

「センスを疑います」

「あ、あはは……」

「ブルータスっ！！」

お前らもかっ！！

ちなみに、わかってるとは思うが、上から謎のシスター一号、二号、D、佐倉という順番だ。

「わかったんならちゃんとオシャレしなさいっ！！」

「えー……でも俺、服はコレとスーツしか持ってないんだよね」

第一、普段私服なんて必要ないし。

それに服買う金があったら生活費に回すわ。

「ええい！これだからデートしたことのない童貞は！美空ちゃん、メイちゃん！行くわよっ！」

「えっ！あっ、はいっ！」

「いや、だから私は美空じゃ―「いいから！」……ハーイ」

「……何故今私は呼ばれなかったのですか？」

悲しいDの呟きは無視され俺はレッドに腕を引っ張られ店を出る。

……何処行くの？

「ナッシーの服選びよ！」

へー……。
俺の服選びねえ……。

……あれ？

「……はあっ！？いいって別にこのままで！つーかお前は自分の服選んでろよ！」

「駄目よ！そんなのこのかの友人として却下するわ！それに大丈夫

！ナッシーの服選びながら、私も自分の考えるから！」

「却下って、ちょっと待てって……！」

「ナッシー、ルックスだけは人一倍いいんだから、こういうトコでちゃんとオシャレしなきゃ！」

「馬鹿っ！俺は天然の美しさで勝負してんだからオシャレなんて……あーーっ！！」

その瞬間、学園に俺の叫びが木霊した。

・〜・〜・〜・〜・〜

「ちくしょう……。アイツら髪までガッチガッチにしやがって……」

なんだよ、この髪型……。
ほぼオールバックじゃねえか……。

アイツら、服を選んだだけでは飽き足らず次第には―

『ほら！せっかくオシャレしたんだから髪もちゃんとセットしないと！！』

『い、いや。これでも多少ワックス使ってるんだけど……あーーっ！！』

……思い出したら泣きたくなってきた。

ちなみに俺の今の服装は黒を主体とした大人向けな服装。

アイツら値段関係なく買いやがって……。
しばらくは超包子にお世話になる日が増えそうだ。

「っと、そろそろか」

俺は広場にある時計を確認する。
するとしばらく経たないうちに―

「ナッシー！」

着替えたこのかがやってきた。

このかの服装は全体的に白をイメージした服で……うん、女性物の服はよくわからん。

ともかくオシャンティであることは間違いない。

「うむ。
文句なしに可愛い」

「あ、ありがと……」

素直に褒めると、このかはすぐ顔を真っ赤にした。

初々しい奴だな。

「ナッシーも随分とオシャレしてきたんやな。
見惚れてもうたわ」

「まっ、お嬢様とのデートはこれぐらいしないとな」

「も、もう……」

真っ赤な顔をさらに赤くしたこのか。

……沸騰すんじゃないのか？

「さて。エスコートさせていただきますよお嬢様」

「うん！」

そう言って嬉しそうに俺の隣に並ぶこのか。

そんじゃあ行きますか。

そう思い、このかと一緒に歩き出すと―

「……んっ？」

「……？
どしたのナッシー？」

「いや……何か視線を感じたんだが……」

……まあ、おおかた俺の美貌に目を奪われた奴でもいたんだろ。

ただでさえ今はオシャンティなんだし。

……。

……。

「いったい何をしているんだろうな私は……」

to be continue ？

第４５話「大会終了そして―」（後書き）

……えっ？決勝戦なに省略してるんだって？

ハハハ、キコエナイナー。

ナナシ
「適当な作者でマジすいません……」

ちなみにナナシとこのかの服装はもっと詳しく書きたかったんですけど、私自身服に詳しくないんで妥協しました！

ナナシ
「オイっ！？」

そして！二人を監視する謎の人物の正体とは！？

正解者にはナナシから金一封が―

ナナシ
「ねーよっ！！」

第４６話（表）「それぞれの想い」（前書き）

ナナシ
「何だ（表）って？」

それは後書きまで秘密。

今回は甘さを意識して書いてみましたー

少しでも甘く思っていただければ嬉しいです。

第４６話（表）「それぞれの想い」

「まず何処から行くん？」

「んー…そうだなあ……」

とりあえず俺は確認がてらにＭＡＰを取り出して広げる。

ＭＡＰには事前に気になる箇所をマーカーでチェックしてあるが―

「……そういやクラスの連中に誘われてたっけか」

そのことを思い出して、俺は財布から割引券やらチケットやらを取り出す。

えっ……と、運動部の奴らがやってる食品販売の店に、ザジが嫌々そうに渡してきたナイトメアサーカスのチケット。
それに村かｍ……じゃなくて、ジミーの演劇部の公演チケットもあるな。

他にも３－Ａ以外にも授業を担当しているクラスの子から貰ったのもある。

……お札より割引券とかの方が多いって、どうなんだろう？

俺が財布の現状に軽く絶望していると、急に声を低くしてこのかが話しかけてきた。

「……ナッシーやっぱし女性関係広いんやな」

「ん？まあ、これでも一応女子校の教師だからな」

嫌でも自然と女性関係は増えてくっつーの。

しっかし、コレがせめて生徒が高校生以上なら最高で言う事ないんだが……。

「……」

……ところで何でこのかは目を細めてこっちを見てるんだ？

もしかして眠い？

「睨んでんのっ！」

何で？

「第一せっかくのデートなのに眠くなるわけないやんか……」

「あン？何だって？」

「何でもあらへんよーだ」

……変な奴。

「そういや運動部いうたら確かせっちゃんも剣道部の方で食品販売の店出しとるらしいで？」

刹那が？

「へぇ。ならソコは寄っとかないといけ『ガタンッ』……なんだ？」

俺が一つ予定を決定しようとした瞬間、後ろで何かが倒れた音がした。

気になって振り返ってみると、路地裏の方に設置されていたゴミ箱が倒れていた

「ったく……何やってんだよ？」

「はあ？俺じゃねえし」

それを見ず知らずの善良な一般人が立て直す。

ん、まあ人込みの多い学祭ならよくある光景だわな。

「そんじゃあ、まずは密集してる運動部らの店から行きますか。刹那に会えるかもしんねーし、なにより腹が限界だしな」

「……」

「……このか？」

気を取り直して俺が行き先を提案したが、このかは何か……ゴミ箱？をジッと見つめてるようで聞いていない。

俺は諦めず、もう一度このかに話しかける。

「どした？何かあった？」

「……ううん、大丈夫。気にせんでややよ」

「そう？」

ならいいんだが。

「ほな行こっ」

「あっ、ちょっ、コラ！
危ないから走んなって！」

そう言ってこのかは俺の腕を引っ張って走りだした。

……。

……。

「お嬢様気付いて……いや、まさかな……」

◆◆◆◆◆◆

「ちくしょう……アイツら覚えとけよ……ゲプッ」

「まあまあ。その分割引してもらったんやからいいやんか」

「……それでも頼み過ぎだっつーの……うぇっぷ」

はっきり言って食い過ぎた

でも悪いのは俺じゃなくて間違いなくアイツらだ。

俺が来た瞬間に問答無用で一番高い料理を大量に注目しやがって……。

大食いに挑戦してるわけじゃねえんだぞ俺は。

「ほら頑張って。後はせっちゃんの店だけやから」

「ま、まだ食わなきゃならんのか……」

が、頑張るんだ俺……。

ここが男の甲斐性の見せ所だ……って、こんなトコで見せてもしょうがない気がする……。

「下手したら武道大会よりキツいかもしれん……」

これ意外とマジな話で。

「あっ、ここや。
すいませーん、せっちゃ……桜咲さんおります？」

ふむ、剣道部はチョコバナナか。
がっつりしてないだけマシだな。

しかしコレはアレか？
剣道部っぽく、竹刀をバナナに例えたのか？

「桜咲さんですか？
確かこの時間帯は休みのハズですけど……」

マジで？

いないなら俺買わなくていいんじゃね？

俺がそんな淡い期待をしていると―

「ハア……ハア……。
い、いらっしゃいませ、ナナシ先生、お嬢様……」

「あれ、せっちゃん？」

……これで買うことが確定したな。

じゃなくて―

「……なんでお前そんな息切れしてんだよ？」

「ア、アレですよ……。
少し……店が、忙しくてちょっと……」

「そ、そうなんだ……」

客は俺らしかいないのに忙しいもクソもないと思うんだが……。

……多分ツッコんだら負けなんだろうな。

「桜咲さん？今は確かシフトは休みのハ「何を言ってるんですか鈴木さん？私は大会終わってからはずっとここで働いてましたよ？」えっ？えっ？今来たばっかり「ですよね？」……ハイ、ソウデス」

……屋台の奥で刹那が部員の子を脅しているように見えても、コレもツッコんではいけないんだろう。

「……」

「……このか？」

「……お嬢様？」

ん？なんかまた急にこのかが黙りだしたんだが……？

「……ん、せっちゃん。チョコバナナ貰える？」

「あっ、は、はいっ。
2本でいいでしょうか？」

「ううん。1本でええよ」

「よろしいのですか？」

「うん」

このかはそのままチョコバナナ一本分の代金を払う……って。

「ちょい、このか？
金がないなら俺が出すから2本買えば……」

「金ならあるから心配いらんよ。
それにこれまで全部おごってもらったのに、さらにおごられたら申し訳ないわ」

「それぐらい構わないんだけど……」

「それにナッシーもウチもお腹いっぱいやろ？
なら二人で半分こにしよ。なっ？」

「お前がいいなら別にいいけど……」

俺としては一本丸々食わなくてすむのは願ってもないんだが……。

「どうぞ」

「ありがと」

このかは渡されたチョコバナナを受け取る。

「はいナッシー、あーん」

「ん？あむっ」

受け取ったチョコバナナを俺に向けてきたので、少し身を屈め一口かじる。

うむ、美味い。

「……そこはもう少し照れたり、心の中で葛藤してから食べるも

んちゃう？」

「むぐっ？」

んなこと言われても中学生相手に、あーんしてもらって照れるほどウブじゃないしなあ。気分的には妹に食べさせてもらってる感じだし……あれ？
それはそれで萌えるシチュエーションじゃないか？

「……ナッシーって意外と枯れとるよね」

「枯れてねーわ！
……ったく、ほら。
お返しに、あーんしな」

そう言って、このかからチョコバナナを取り、先程とは立場が逆だが、同じようにチョコバナナを向ける。

「えっ、ちょ、ウチも？」

「俺にさせといて自分はやらないのはズルいだろ。
ほら、口開けな」

「う、うー……」

この展開は予想していなかったのか、このかは一瞬で顔を赤らめる。

そして交互に俺とバナナを見て―

「……はむっ」

躊躇いながらも、バナナに小さくかじりついた。

「どう？美味いか？」

「……おいひい」

「そりゃあよかった。
ほら、残りも食べな」

「……はむっ」

抵抗がなくなったのか、今度は素直にかじりついた。

……なんだか雛鳥にエサを与える親鳥のような気分だ。

そのままの調子でチョコバナナ完食。

「……ごちそうさま」

「はい、お粗末さま」

別に俺が作ったわけじゃないけど。

「んじゃあ食ったし行きますか。
じゃあ頑張ってな刹那」

「うん。じゃあ後でな、せっちゃん」

「あっ……」

刹那が名残惜しそうな声を出すが、仕事があるならしょうがないよな。

暇なら誘うなりできたんだけど……。

……。

……。

「……行っちゃいましたね。
今の人達とどういう関係だったんですか？」

「……」

「……桜咲さん？
聞いて「すいません鈴木さん。急用が出来たので失礼します」ええっ！？結局何しに来たの！？せっかくなら手伝ってよ桜咲さん……
……って、行っちゃった」

◆◆◆◆◆◆

刹那と別れた後、適当に学園内をブラブラしていた俺らは、『ナイトメアサーカス』の公演を見たり、『優勝商品は宇宙旅行!?銀河横断スーパー☆クイズ』に参加したりして楽しんだ。

回ってる途中でベストカップルコンテストに出場していたネギ（偽ナギＶｅｒ）と和泉を見かけたが、そこは空気を読んで全力で冷やかしといた。

……ん？当たり前だけど俺達は出場してないよ？

カップルでもないし、教師と生徒がそんなコンテストに出たら問題だしな。

ちなみにコンテストに無理矢理出場させようとしたイベント出させ隊の筋肉ダルマ共は適当にあしらっといた。

ただその後、残念そうなこのかの顔を見た時は失敗したと後悔した。

そんなに景品が欲しかったとは……。

んで、今は３－Ａのチア部３人と和泉の４人で結成されたバンド『でこぴんロケット』のライブを見終わったとこだ。

ライブ中、またもネギ（偽ナギＶｅｒ）が和泉とリア充していたので、今度も空気を読んで手に持っていた空き缶をわりと本気で投げといた。

魔力込めなかっただけ感謝してもらいたい。

「……もう夜になっちまったな」

「……早いなあ」

ライブ会場を出た俺達は、世界樹近くの広場でパレードを眺めながらベンチで休んでいた。

……そろそろ解散かな？

いくら学祭中だからといって、遅くなりすぎるのは悪いだろうし。

「……っと。悪い、ちょいトイレ行ってくる」

「あっ、うん」

行くついでに少し一服させてもらいますか。

……。

……。

「……出てきていいよ、せっちゃん」

「……お嬢様」

◆◆◆◆◆◆

「けっこう遅くなっちまったな……」

15分ぐらいは待たせてしまってるだろうか？

ったく。学祭中はトイレまで混むから嫌なんだ。

俺がそう心の中で愚痴りながら先程の場所に戻ると、そこにはベンチから立ち、背中を向けているこのかがいた。

なんとなく―

なんとなくその後ろ姿がいつもと違う雰囲気だと感じた俺は、少し距離が開いたまま話しかけた。

「……何かあったか？」

「……」

……返答なし。

そういや思い返せば今日、このかは今みたいな状態が多かった気がする。

「……ナッシーはさ」

「ん？」

その状態のまま黙っていたこのかが、しばらくしてポツリと呟いた。

「ナッシーはさ、優しい……優しすぎるよね。
ウチにも皆にも……せっちゃんにも」

「……」

このかは振り返ることなくそのまま喋り続ける。

「それがナッシーの良いとこなんやけど……時々、ウチだけが特別なんやないかと勘違いしてまう……」

「……」

俺は、まるで金縛りにあったかのように動けず、言葉を発することが出来ない。

「……なあ、ナッシー？」

「……ん？」

ようやく発することが出来た言葉は、ひどく短い言葉だった。

「ナッシーは、せっちゃんのことどう思ってる？」

刹那を？

「……？
大切な生徒だと思ってるけど？」

「……そっか。なら―」

そして、ようやくこのかが振り返った。

「ウチのことは……どう思っとる？」

「……」

それは教師として？
それは友達として？
一緒に戦った仲間として？それとも恋愛感情として？

そんな疑問が頭によぎったが、この時だけは、それがどういう意味

で聞いたのか理解出来た。

「……」

……俺は、俺はこのかのことをどう思ってるんだ？

好き？

確かに俺はこのかが好きだ

でもその好きはどんな意味での好き？

生徒として？

友達として？

仲間として？

それとも―

「ウチはね、ナッシーのことが――」

◆◆◆◆◆◆

「……ふぅ」

俺は何の考えもなく、ただタバコを吹かしながら夜の学園を歩く。

そのままテラスのような高台に着くと、同じようにタバコを吹かしている先客を見つけた。

「……ようタカミチ」

「……やあ」

お互い苦々しい笑みを浮かべながら挨拶をした。

俺はそのままタカミチの隣に立つ。

「神楽坂とのデートは……って、その様子じゃ訊くまでもなかったか」

「……僕に人に愛される資格はないからね」

愛されるのに資格は必要ないと思うが、タカミチにはタカミチで思うところがあるんだろう。
それは俺がとやかく言えることではない。

「君こそこのか君とのデートはどうだったんだい？」

「……」

その言葉で俺は先程の光景を思い出す。

『返事は…返事はええよ。ただウチが伝えたかっただけで……
…自己満足やから』

そう言ってこのかは振り返ることなく去っていった。

「……お互い贅沢な悩みを抱えたもンだな」

「……そうだね」

そう言って夜空を見上げるオッサン二人。

……客観的に見たら嫌な光景だろうな。

「……ふむ。私はてっきり貴方ならすぐにＯＫすると思ってたのですが……」

「……どこから見てたんだ、お前は」

いきなり俺とタカミチの背後に現れたクウネル。

もうツッコむ気にもなれねえよ……

「何か理由でも？
まさか貴方まで愛される資格がないとか言いださないですよね？」

「……俺とアイツは教師と生徒。
それだけだよ」

「おや？」

俺の返答に、さも意外そうな顔をするクウネル。

……ンだよ？

「いやいや。
意外と固い考えをお持ちなんだと知って少し驚きました。
貴方はその辺気にしない性格だと思っていたので」

「……ふんっ」

意外は余計だ、意外は。

「ということは生徒でなければＯＫだったってことですかね？」

「よーし、構えろ。
今からリベンジマッチさせてもらうから」

他人の恋愛事情に首を遠慮なく突っ込みすぎだろコイツ。

「ふふっ、怖い怖い」

そう言って姿を消したクウネル。

……何しに来たんだアイツは？

「はあ……ん？」

溜め息を吐くと、ポケットの携帯が振動した。

確認してみると電話がかかってきていた。

「……悪い。

俺もこの辺で失礼するわ」

「構わないよ。
僕もこれから仕事だしね」

俺は片手でタカミチに謝りながら、その場を急いで去る。

タカミチに声が届かなくなるまで離れてから、電話に出た。

「もしもし？」

『今夜はお楽しみだたようネ？』

「……切るぞ？」

『ハハハ、冗談ヨ冗談』

てか、クウネルといいコイツといい何で知ってんだ？

まさかどっかで見てやがったか？

……あり得そうで怖い。

『……計画の最後の打ち合わせがしたい。
今から来れないカ？』

「……了解」

計画と聞いて、俺は切り替える。

同時に時刻を確認すると、既に3日目に突入していた

もう時間は少ない。

今は悩んでる暇なんてない

そう

悩んでる暇なんて……。

「……」

―計画開始まで残り半日

to be continue ?

第４６話（表）「それぞれの想い」（後書き）

はい、というわけで後半若干シリアス（？）のまま終わりましたー。

……今回、批判が多そうで怖いです。

ナナシ
「……否めない」

次回は今回の４６話を刹那視点で書く予定です。

つまり「第４６話（裏）」ということになります。

ナナシ
「そういうことか」

うん。

では次回もお楽しみに。

ううう…皆様の反応が怖い…

ナナシ

「……自業自得だろ」

第４６話（裏）「それぞれの想い」（前書き）

お久しぶりです
プラムです。

ナナシ
「ホントに久々だな……」

何の報告もなしに更新が遅れて申し訳ありません。
ただ今まで学校のテストやら大学の試験やらとメンタルが不安定で、
とても執筆出来る状況ではなかったので……（泣）

ですが、ようやく一段落したので、こうして更新させていただきました！
第４６話（裏）大変お待たせしました！！

ナナシ
「……久々なのに出番がないような気がする」

……ノーコメントで。

P．S

大学受かりましたｗ

これで来年の４月から自分もＤＤ（男子大学生）となりますｗｗ

第４６話（裏）「それぞれの想い」

「……はあ」

―私はいったい何をしていろのだろう。

今日何度目か分からない自問に私は溜息を吐く。

……そんなもの答えは分かっている。

私はお嬢様の剣だ。
ならば私の役目はお嬢様を護衛する他ならない。

だからこそ今こうしてお嬢様と……　ナナシ先生を見守っている。

「……」

◆◆◆◆◆◆

最初は本当に偶然だった。
大会が終わり、会場を出る前に超鈴音について一応彼にも報告しようと捜していたら、見つけた。

見つけてしまった。

『えー……悪い。出口までこのまましばらく辛抱しててくれ』

『う、うん……』

会場を出る人混みの中、身体を寄せあう二人の姿を。

『っ……』

その光景を見た瞬間、私は柱の陰に隠れた。

今思えば、この時いつものように「何お嬢様にセクハラしているんですか」とか「通報しますよ」などと茶化しながら二人に近づけばよかったのかもしれない。

でも……でもあの時二人の間に入るのは、何故か嫌だった。

胸が張り裂けるような思いで二人を見ていると、一瞬顔をだらしなくニヤリとさせた先生。

その瞬間、刀を抜きかけた私は悪くないと思う。

……周りから思い切り驚かれたが。

その後、二人は学祭を一緒に回ることになった。

当然私は護衛のために二人の跡を離れて追う。

この距離には慣れている。少し前まではこれが当たり前の距離だったのだから。

……ちなみに今私は段ボールの中にいる。

龍宮から聞いたが、一流の傭兵が隠密活動をする際に必要な究極武器（アルティメットウエポン）は何か？と聞かれると、皆こう答えるらしい―

段ボールと。

「私も戦場ではコイツに何度も命を救われたよ……クックッ」

と、龍宮は私に背を向けて肩を振るわせながら言っていた。
あの龍宮がこう言うのだから、この段ボールの性能は間違いないのだろう。

現に周りの人は私に気付かないどころか離れていっている。

完璧だ。

『……にしても、お嬢様も先生も少々着飾り過ぎてないか？
お嬢様は確かあの服は大切にしていたお気に入りの服のハズだし……。
先生も先生で普段は神父服かスーツ姿だけなくせに、その上髪まで……』

二人とも私と一緒の時はあんなにオシャレしたことないのに……。

そう思うと先程とは違い腹が立ってきた。

またしても刀を抜きかけそうになった時―

『そういや運動部いうたら確かせっちゃんも剣道部の方で食品販売の店出しとるらしいで？』

『へぇ。ならソコは寄っとかないといけ―』

『っ……！？』

よ、寄る！？

他の皆の出し物は渋々だったくせに、なんで私の出し物にはノリノリで行くつもりなんですか！？

そもそも私はこの時間帯は当番じゃないし……いや、わざわざ私を訪ねて寄ってくれるのに私がいないのは失礼じゃないだろうか……

……だが、しかしっ！

『あっ……！』

予期せず状況に段ボールの中でテンパってしまっていると、近くにあったゴミ箱にぶつかり倒してしまった

ゴミ箱は盛大な音を出して倒れ周りの人々、お嬢様達も例外なくコチラを見ようと……

『くっ……』

私は瞬時に冷静さを取り戻し、段ボールの中で気配を完全に消す。おかげで周りの人々は段ボールのことは気にも止めず、何人かで倒れたゴミ箱を立て直してくれた。

心の中で彼らに感謝しつつ私はお嬢様達の姿を段ボールの小さな穴から確認する

『っ！？』

そこにはコチラをジッと見つめているお嬢様の姿があった。
お嬢様は先生に声をかけられれと、直ぐに正面に向きなおしたが―

『お嬢様気付いて……いや、まさかな……』

気配を消している上に、この距離だ。
先生が気付けていないのにお嬢様が気付けるハズが……。

◆◆◆◆◆◆

『くっ……！

見失った……！』

二人は予定通りにフードエリアに到着した。
そこまではよかった。

だが、あまりにの人の多さに段ボールでの追跡が限界になり、気付いた頃には二人の姿はもうなかった。

だいたいこの辺りは、いくらフードエリアだからといって人が多すぎるんだ。
もっと別の場所で食事を済ませばいいものを……。

『二人は私の店にも寄ると言っていた……。おそらくまだクラスの人の店を回っているハズだから先回りしておくか……』

そう考え、急いで剣道部の店に向かう。

だが、そこには既に二人がいて、同じ部の鈴木さんが対応していた。

『桜咲さんですか？
確かこの時間帯は休みのハズですけど……』

鈴木さあああああんっ！！何余計なコトを言ってくれてるんですかっ！？

私は心の中で鈴木さんの評価をドン底まで下げつつ、瞬時に足に気を込め瞬動。

一気に屋台裏に移動する。この時の私の瞬動の『入り』と『抜き』は、今までの中で最高の出来だったと思う。
楓レベルの縮地と言っても過言ではない。

もちろんエプロンを取り、装着することを忘れない。そのまま表のカウンター側に出る。

ちなみに二人を見つけてから、表に出るまでの所要時間はおよそ１，３秒。
今までの修行の成果だ。

『ハア……ハア……。
い、いらっしゃいませ、ナナシ先生、お嬢様……』

いきなり息を切らせて現れた私に驚く二人。
……間近で二人を見ると、普段より二人の距離が近い気がする。

『桜咲さん?今は確かシフトは休みのハ『何を言ってるんですか鈴木さん?私は大会終わってからはずっとここで働いていましたよ?』えっ?えっ?今来たばっかり『ですよね?』……ハイ、ソウデス』

私はまたしても余計なコトを言いそうになった鈴木さんに、二人から見えない位置で刀の峰を押しつける。

そうしているうちに二人はチョコバナナを一本購入。
私は次の部活では鈴木さんに集中的に突きを放とうと決意しながら、二人にチョコバナナを渡す。

二人なのに何故一本しか購入しないのだろう?という疑問は直ぐに消えた。

二人は私のことなんて忘れたかのように、一本のチョコバナナを食べさせあっている。

その光景を見て、私はまた胸が絞めつけられるような感覚になった。

ヤダ、ヤメテクレ。

コンナノミタクナイ。

ソンナノワタシニミセナイデ。

イタクナイ。
ココニイタクナイ

ナンデ？
ナンデソコニイルノガワタシジャナイノ？

ナンデ……オジョウサマバッカリ……。

アア、オジョウサマガ
イ　ナ　ケ　レ　バ……。

『っ……！』

今、私は何を考えていた？
お嬢様に対し、何を考えていた……？

私の中で一気に負の感情―醜い気持ちが溢れ出したような気がした。

『じゃあな刹那』

『あっ……』

私が今まで感じたことのない感情に襲われてる間に、二人はチョコバナナを完食していた。
二人は私に一言声をかけて去っていく。

『……行っちゃいましたね』

『……』

『今の人達とどういう関係だったんですか？』

『……』

『……桜咲さん？聞いて『すいません鈴木さん。急用を思い出したので失礼します』ええっ！？結局何しに来たの！？せっかくなら手伝ってよ桜咲さん……って、行っちゃった……』

鈴木さんの叫びが聞こえるが、無視して二人を追う。

知らないですよそんなの。第一、私今シフト入ってないですし。

◆◆◆◆◆◆

二人はあの後、『ナイトメアサーカス』や『優勝商品は宇宙旅行！

？銀河横断スーパー☆クイズ』などに参加していた。

途中でベストカップルコンテストに出場させられそうになっていたが、ナナシ先生がやんわりと断っていた

これにはホッとした。
もし出場なんかしていたらこのコンテストは学園祭から消えていただろう。

……何故かは訊かないでほしい。

そして夜にはクラスのチア三人組に和泉さんを加えたバンドが参加していたライブを観ていた。

ラストには、またもネギ先生（偽ナギＶｅｒ）が和泉さんとリア充していた。
先生はそんなネギ先生に空気を読んで空き缶を投げていた。

私も便乗して空き缶を入れた段ボールを投げといた。

不思議と気分がスッキリした。

ライブ会場を出た二人は世界樹近くの広場のでパレードを眺めていた。

……そろそろ解散か？

時間的にもそろそろ解散するべきだろう。

そう思っていると、ナナシ先生が1人で何処かに向かう。

トイレのようだ。

ふたたび視線をお嬢様に戻すと、お嬢様は隠れている私の方向をジッと見つめていた。

そして―

『……出てきてええよ、せっちゃん』

◆◆◆◆◆◆

「……お嬢様」

隠れていても無駄だとわかった私は、大人しくお嬢様の近くに姿を現す。

「……気付かれていたのですね」

「……うん」

やはり、あの時も偶然ではなかったというわけか…。

「…申し訳ございません。無粋な行為とはわかっていましたが、お嬢様の身に何か起きてからでは遅い「違う」っ……」

「せっちゃんは……違う理由でウチらを追ってたんやろ？」

お嬢様の視線が逃げることは許さないと告げているような気がした。

その視線のせいか、私は金縛りにあったかのように、その場から動けない。

「せっちゃんは……ううん、せっちゃん、も、好きなんやろ？」

「っ！？
わ、私は先生のことなんて何とも……！？」

「ウチは一言もナッシーのことって言っとらんよ？」

「っ……」

私はお嬢様に言葉を返すことが出来ず、顔を俯かせる

「……ウチ、ナッシーのこともせっちゃんのことも大好きや。
だから、せっちゃんがナッシーのことをどう思ってるか、ようわかる」

「……」

「……ナッシーのこと、好きなんやろ？」

お嬢様の声はまるで子供をあやすかのように優しく穏やかだった。

一歩、一歩とお嬢様が私に近いてくる。

「わ、私、私はっ！」

私はお嬢様から逃げるように後退した。

「お嬢様の剣ですっ…！

お嬢様が先生と幸せそうに話している姿を見るだけで私には充分なんですっ…！それに、私は先生のことなんて、き、嫌いですっ。先生のことなんて……」

言葉を発するたびに胸が絞めつけられる気がする。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイ。

「……嘘。
ならなんで、なんでせっちゃんは、そんな泣きそうな顔してるん？」

「っ！？」

「せっちゃん！？」

これ以上お嬢様と一緒にいるのが辛かった。
胸を絞める力がドンドン強くなってる気がした。

そんな状況に耐えきれず、私はお嬢様に背を向けて全速力で逃げ出した。

これ以上は
私の中の大切なモノが崩れてしまう気がした。

「せっちゃん……」

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ？

第４６話（裏）「それぞれの想い」（後書き）

なにやら刹那が病んできたようなー……（汗）

ナナシ
「……俺、いきなり後ろから刺されたりしないよな？」

そして、何かと不遇な鈴木さん（笑）
ごめんね。でもいづれ活躍する日が……来ねーな（笑）

ナナシ
「マジで扱いが不遇だ…」

次回からついに学園祭最終日！
計画開始です。
超側のナナシがどう動くか皆さん期待していてください！

……最終的にナナシはいてもいなくても変わらない気がしますが

（ボソッ

ナナシ

「えっ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0228n/

Welcome to Another world

2011年11月18日01時19分発行